

本田霊学：  
その思想の創造と行法の受容についての研究

The Spiritual Learning of Honda Chikaatsu: A Study of the Creation of Its  
Teachings and the Reception of Its Practice Methods

国際基督教大学 大学院  
アーツ・サイエンス研究科提出博士論文

A Dissertation Presented to  
the Graduate School of Arts and Sciences,  
International Christian University,  
for the Degree of Doctor of Philosophy

2020年12月7日

並木英子  
NAMIKI, Eiko

本田霊学：  
その思想の創造と行法の受容についての研究

The Spiritual Learning of Honda Chikaatsu: A Study of the Creation of Its  
Teachings and the Reception of Its Practice Methods

国際基督教大学 大学院  
アーツ・サイエンス研究科提出博士論文

A Dissertation Presented to  
the Graduate School of Arts and Sciences,  
International Christian University,  
for the Degree of Doctor of Philosophy

2020年12月7日

December 7, 2020

並木英子  
NAMIKI, Eiko

## 審査委員会メンバー

Members of Evaluation Committee

主査 / Chief Examiner

ALBERG, Jeremiah L. 教授

副査 / Examiner

津城 寛文 筑波大学 教授

副査 / Examiner

石生 義人 教授

副査 / Examiner

佐野 好則 教授

## 目次

序章 本田親徳と本田霊学	-----1
(一) 本田親徳と本田霊学	-----1
(二) 先行研究からみる問題の所在	-----7
第一章 平田篤胤と「死後の魂の行方」	-----19
第一節 本田親徳の霊学思想と行法の背景としての国学	-----19
第二節 『霊の真柱』	-----26
(一) 魂の回帰について	-----26
(二) 篤胤の世界観、冥府論	-----30
第三節 『勝五郎再生記聞』	-----35
(一) 魂の再生、生まれかわり	-----35
(二) 翁について、産土神としての認知	-----40
(三) 姉ふさの産土神との出会い	-----41
第四節 まとめ	-----45

第二章 六人部是香の「産須那神論」-----46

第一節 『産須那社古傳抄廣義』-----48

(一) 是香の世界観 -----48

(二) 幽政の主としての大国主大神と産須那神 -----50

(三) 産須那神について -----52

第二節 人間に宿る神魂 -----57

(一) 穢れ観念について -----57

(二) 上津大兄・下津大兄 -----58

(三) 産子の務め -----64

第三節 まとめ-----67

第三章 本田親徳の「産土神論」と「鎮魂法」-----69

第一節 本田霊学への国学の影響について -----69

(一) 国学者たちとの交流について -----69

(二) 本田親徳の宇宙論 -----73

第二節 『産土百首』と『産土神徳講義』 -----79

(一) 『産土百首』 -----79

(二) 『産土神徳講義』	81
(三) 産土神の定義	85
第三節 心魂の浄化	89
(一) 気海丹田に心を沈める瞑想法、人間からの心魂への積極的な関わり	89
(二) 鎮魂法との関係	99
(三) 佐藤卿彦による「鎮魂法」	101
第四節 肉体の死滅と靈魂の不滅	109
(一) 身の浄化と寿命について	109
(二) 死後の富貴、死後の魂の位階について	112
第五節 まとめ	118
第四章 本田親徳と門人の本田靈学の受容について	120
第一節 本田靈学受容の問題の所在	120
第二節 本田親徳の出自について	125
第三節 本田門人と秘伝行法の受容について	129
第四節 長澤雄楯と御穂神社	134

第五節	長澤雄楯の本田靈学の受容と「禁厭法」について-----	140
第六節	理想と現実 月見里神社の流行神化と逮捕事件-----	150
第七節	長澤雄楯の本田靈学の理解と「帰神法」の受容について-----	153
第八節	まとめ-----	164
第五章	宮城島史料にみる神道三穂教会と宮城島金作-----	166
第一節	宮城島金作 -----	166
第二節	宮城島史料-----	169
第三節	宮城島家について-----	171
第四節	御穂神社と宮城島金作-----	173
第五節	神道三穂教会の設立時期について-----	183
第六節	宮城島金作の本田靈学の受容-----	184
第七節	本田親徳の鎮魂法-----	185
第八節	『幽事神傳帰神法』における鎮魂法-----	187
第九節	宮城島金作の帰神法の習得について-----	192
第十節	神道三穂教会の静岡市街への移転-----	196
第十一節	神道三穂教会における行法術の伝授-----	199

第十二節　まとめ-----	201
結章-----	204
付録神道三穂教会資料-----	217
参考文献-----	241



## 序章 本田親徳と本田霊学

### (一) 本田親徳と本田霊学

神（々）からの啓示を受け、それを人々に開示するという宗教活動は、太古より宗教的人間がおこなってきた宗教活動である。本論文で考察をおこなう本田九郎親徳（号：瑞園）（文政五年－明治二十二年）（1822 年－1889 年）は、薩摩藩出身の神道家であり、自らを皇祖忍穗根命の子孫であり<sup>1</sup>、桓武天皇三十四世皇胤と称していた<sup>2</sup>。本田親徳は霊魂の清浄化をはかる「鎮魂法」、神憑りの行法である「帰神法」、占法である「太占」を「皇国固有の霊学」とし、門人に自らの「霊学」を教授していた<sup>3</sup>。本田親徳は、自らの霊学行法を中世以前の朝廷では実践されていたにもかかわらず、戦乱により、衰退してしまったものの、本田親徳は神霊からの神勅を頼りに実験実証をおこない、幾度となる失敗を重ねつつ、長い年月をかけて、実践実用可能な行法として確立したとした<sup>4</sup>。この霊学神道家、本田九郎親徳とは何者であり、本田霊学とはどのような思想であるのか？また本田霊学という神秘実践を誰が受容したのか？本論文ではこの問題への解答を目指していく。

---

<sup>1</sup> 本田親徳『難古事記（巻五）』、209 頁。

<sup>2</sup> 本田親徳「伝書」『本田親徳全集』、358 頁。

<sup>3</sup> 本田親徳『霊学抄』『本田親徳全集』、369 頁。

<sup>4</sup> 本田親徳「伝書」、同頁。

定説とされる本田九郎親徳の人物像に関する情報は以下のとおりである。

本田九郎親徳<sup>5</sup>は薩摩藩士、本田主造の長男として生まれ、天保十年(1839年)、十七、八歳の時に皇学の志を立て、水戸藩の会沢正志斎<sup>6</sup>に入門した。三年ほど会沢の下で学んでいた際には、国学者、平田篤胤の家にも出入りしていたといわれているが、平田家門人帳には、本田九郎、もしくは本田親徳の名はない。

本田親徳が神道家として、霊魂の学びへと進む契機となったのは天保十四年(1843年)、京都の薩摩藩邸にて、狐憑きの子供が憑依により、和歌を自由に詠む、という憑霊現象を実見したこととされる。

この憑依現象を目の当たりにした後、本田は岩窟に入り、古社に参籠し、神霊に感合する道を求めていくこととなった。そしてついに、安政三年(1856年)頃に、「此ノ神懸ノコト本居平田ヲ始メ名ダタル先生達モ諦メ得ラレザリシ故ニ、古事記、古史伝トモニ其ノ説々皆誤レリ。(中略)終ニ三拾五歳ニシテ神懸三十六法アルコトヲ覚悟リ、夫レニヨリ幽冥ニ正シ現事ニ徴シ、古事記日本書紀ノ真奥ヲ知り、古先達ノ説々悉ク皆謬解タルヲ知り弁ヘタリキ。<sup>7</sup>」という境地に達し

---

<sup>5</sup> 現在の鹿児島県加世田市に相当する旧川辺郡加世田郷武田村五十三番戸、士族、本田主蔵の長男、九郎として生まれる。本田親徳の略歴については鈴木重道氏の「霊学の継承」『本田親徳研究』423-547頁を参照した。

<sup>6</sup> 会沢正志斎(1782-1863)は水戸藩の儒学者で名は安。藤田幽谷に師事し、彰考館にて『大日本史』の編纂に従事。天保2年(1831)に彰考館総裁に就任。著書の『新論』は幕末の尊皇攘夷運動に多大なる影響を与えた。

<sup>7</sup> 本田親徳『難古事記』、鈴木重道『本田親徳全集』224頁。

たという。親徳は「神代ノ事実ハ多ク神理ヲ設ケテ説カレタレバ每章其ノ心ヲ以テ見ザレバ決シテ其ノ義ヲ得ル能ハズ。<sup>8</sup>」といい、『日本書記』や『古事記』などの文献をただ知識によって読むだけでは、十分な理解を得ることはできないとする。そして、神憑りや太占によって神々から直接的な啓示によって真理を追究するという独自の思想を展開していった<sup>9</sup>。

本田親徳は幕末期には、薩摩藩の尊王攘夷志士として、長州探索方を務め、明治維新後に鹿児島県国学局の国学掛を務めた。本田親徳は、薩摩藩の尊王攘夷グループである精忠組の人脈を介して、秘伝を教授する霊学神道家として、限られた人物達の輪の中では、重要人物とされた。本田は、薩摩藩出身者ではあるが、明治維新後には、政治的表舞台には登場せずにあくまでも、自らの信奉者である政治家や神社社家の門人達の間を遊行し、明治二十二年（1889 年）に没した。

本田親徳の人脈の一例を挙げるとするならば、明治六年（1873 年）ごろには西郷隆盛の紹介により、政府の要人であった旧佐賀藩士、副島種臣<sup>10</sup>と知遇し、

---

<sup>8</sup> 『古事記神理解巻一』255 頁。

<sup>9</sup> 同、258 頁-259 頁。

<sup>10</sup> 副島種臣は、征韓論により、西郷隆盛とともに下野したが、明治九年の春に本田の副島邸内における帰神により、「明年早々西郷は衆に擁せられて兵を挙げるにつき、未然に防ぐには種臣自ら赴いて説き東京に俱う外道なし。若し挙兵に至らば、必ず汝の身に及ぶ故、難を国外に避くべし。」という神慮をうけ副島は清国へと旅立ったとされる。西南の役を経た明治 11 年に副島は清国より帰国し、その後本格的に本田に師事し、道を問い、鎮魂の修行に入ったとされる。鈴木重道「霊学の継承」『本田親徳研究』432-423 頁。

後に本田と副島は、師弟関係を築いていくこととなる。そして明治十六年（1883年）には旧薩摩藩士であり、当時静岡県令であった奈良原繁（天保五年－大正七年）（1834年－1918年）の招きにより静岡県に移り、静岡の神社関係者を中心に布教をおこなった。

本田は門人達に、本田霊学を教授し、魂の清浄性を保つ「鎮魂法」、神憑りの法である「帰神法」、病氣癒しの方術行法である「禁厭法」等の口伝秘授をおこない、門人達に許可状を与え、生活していたと考えられる。先述の奈良原繁だけでなく、明治維新後、各地に政治家として赴任していた旧薩摩藩士の縁故により、本田は、会津、羽後、甲府、駿河、遠州、三河、伊豆、秩父、川越などを遊行し、各地で門人を集めた。

仏教哲学者、井上円了（安政五年－大正八年）（1858年－1919年）は本田親徳に実際に会合しており、その時の様子を『哲窓茶話』において、「神憑」という副題と共に記している<sup>11</sup>。

井上はまず、本田の弟子の訪問を受け、「いかなる神といえども、みなこれを人に乗り移らしめ得るものである云々と。」という言説に興味を抱き、後日、本田の家を自ら訪ねた。その際の本田の様子を井上は「その師は本多九郎といえる老

---

<sup>11</sup> 井上円了「神憑」『哲窓茶話』『井上円了選集、第二巻』184-185頁。

人であって、常に白衣を着けている。」としている。本田は十六歳から神憑のことを研究し、その祖は天鈿女命であるといい、『日本紀』『続日本紀』『文徳実録』等に神憑についての記載が散見できると井上に伝えた。井上がくわしい神憑の方法を尋ねると「神憑には三十六の法がある。すなわち、正神界に、有形界、無形界ありて、おのおの自感法、他感法、神感法等の十八法あり。妖魅界にも右と同じく十八法あり。」と本田は答え、実際に神が憑依する人とは別に神と祈る人の間に立ち、問答を取り次ぐ審神者さきにわの重要性について言及した。本田は「天地間に神は常に充満している。されどそれをみることができないのは、万物に宿りて作用をなすからであると」説明した。

『哲窓茶話』において、井上は近代啓蒙主義的視座から、いわゆる「拝み屋」と言われる神憑りをおこなう民間巫者を前近代的なものとして批判している。しかし、本田親徳の「神憑り」の言説に関しては、これを「巫言」のごときものとして一蹴しておらず、必ずしも本田に対する井上の眼差しは否定的なものではない。井上自身、後に『靈魂不滅論<sup>12</sup>』を記し、死後の魂の行方や死後の世界に学問的関心を有していた。ある意味、本田の言説が、井上の価値判断に耐えうるものであったことは、本田の弟子筋以外の第三者的立場からの本田親徳像を考える

---

<sup>12</sup> 井上円了『靈魂不滅論』南江堂書店、1899年。

うえで、注目するに値する。

本田親徳の著作として現在、知られているのは、1)『道之大原』全1巻、2)『真道問対』全1巻、3)『靈魂百首』全1巻、4)『産土百首』上・下、5)『産土神徳講義』上・下、6)『難古事記』全10巻内現存6巻、7)『古事記神理解』全3巻、8)『万葉集韻譜』(散逸)、9)『耶蘇教審判<sup>13</sup>』全1巻、10)『謹問平山大教正閣下<sup>14</sup>』、11)『靈学抄』、12)『祝詞文』、13)『口伝抄』14)『関係文書』、15)「書簡」、16)『幽顯大兆全書』である。先に挙げた文献のうち、散逸した『万葉集韻譜』と排耶書の『耶蘇教審判』以外の著作は鈴木重道編著の『本田親徳全集』に収録されている<sup>15</sup>。

---

<sup>13</sup> 本田瑞園『耶蘇教審判』

<sup>14</sup> 平山敬忠(1815-1890)号は省斎。幕府外国奉行。明治維新後は一時、徳川慶喜に従い静岡に移る。その後、神道家として活躍。明治五年に教導職。明治八年には日枝神社祠官、翌年、氷川神社大宮司となり、大教正を任ぜられる。明治十五年には敬神愛国を唱える神道大成教創立。神道大成教及び御岳教初代管長。

<sup>15</sup> 北海道余市郡余市町入船町の明治神社宮司である鈴木重道の祖父、鈴木廣道は、山形県あくみ飽海郡上田村の薬師神社の社家に生まれた。鈴木廣道は、国学を学ぶうちに本田親徳を知り、文通を重ね、明治十五年より、当時東京府下谷区練堀町に妻と娘とともに住んでいた本田親徳の内弟子となった。本田が亡くなる二年前の明治二十年五月に「皇法」「鎮魂」「帰神」の許可を受けた。同年、六月には、本田より「汝に鎮魂・神懸りの法術を授けたが、之のみを持ってすれば一介の祈祷師に墮する恐れがある。故にこの書を繰返しよく読みて道を失う勿れ」という言葉とともに直筆書を受け取ったという。鈴木重道によると、祖父、廣道以外の高弟たちもそれぞれ本田より、教書を授けられているものの、それらが散逸していることを鑑みて、自宅に秘蔵されていた書籍をもとに『本田親徳全集』の出版を決意した。この『本田親徳全集』には、本田と近い関係にあった国学者大畑春国の『亀卜雜記』と副島種臣と本田親徳による問答集である『滄海窓問答』が付録として収録

## (二) 先行研究からみる問題の所在

これまで、神道学、思想史学、宗教社会学、比較宗教学において神道家、本田親徳の宗教思想そのものに注目した研究はおこなわれていない。その理由としては、本田の著作類が、1) 密教秘術的要素を持ち、本田の思想の外の社会状況や本田が生きた時代の神道界の歴史的状況が著作内に反映されていないこと、2) 本田の思想の根拠となる神道系譜、あるいは学統が秘されていること、3) 国学の大家を軒並み批判し、自らの思想と行法の独自性を主張していることから、本田親徳を研究対象として、取り上げることは難しいとされてきたからである。

本田親徳についてのわずかな先行研究のうち、渡辺勝義の『古神道の秘儀―鎮魂と帰神のメカニズム』は神道学、そして本田親徳の孫弟子にあたる佐藤卿彦が起こした顕神本会における本田霊学の実践者としての立場から「鎮魂法」及び「帰神法」を体系化したものとして、大変興味深い。しかしながら渡辺は本田親

---

されている。また、鈴木重道の著作である『本田親徳研究』において、その前半部では本田の著作である『産土百首』『霊魂百首』『古事記神理解』について、鈴木重道による注釈がなされている。また本書の後半にあたる「霊学の継承」では本田親徳及びその直弟子たちの評伝が記されている。この『本田親徳研究』は、学術書ではないが、本田の内輪にいた弟子たちの系譜や人物像が詳しく記されており、史料としての重要性は高い。鈴木重道は、鈴木家伝来の『本田親徳全集』及び、自らの調査を踏まえた『本田親徳研究』を出版した本田霊学の信奉者であるが、自らを本田霊学の正統的継承者として自己主張するのではなく、静岡の月見里（やまなし）神社社司の長澤雄楯（ながさわかつたて）の流れを本田霊学の直系としている。

徳の流れを汲む「顕神本会」の佐藤卿彦の下で霊的实践をしている信仰者であるため、本書は「顕神本会」の教義と実践に基づいた解釈に傾斜しており、学術研究としての本田霊学の考察の側面に疑問が残る。

宗教社会学者であるバーギット・シュテムラー(Birgit Staemmler)は *Chinkon kishin: Mediated Sprit Possession in Japanese New Religions* において「鎮魂帰神法」を「近代日本において出現した“Mediator”(仲介者・審神者)を用いた憑依の実践」と定義する。そして大本教を中心として、鎮魂帰神法を実践する新宗教とその教祖の諸相を考察し、日本の民俗宗教におけるシャーマニズムや修験道における神憑り行法を研究の射程においている<sup>16</sup>。シュテムラーは後掲する津城寛文の研究を受けて、本田親徳を大本教系鎮魂帰神法の祖として取り上げている。シュテムラーは親徳の「帰神法」の中で特に審神者を用いた「他感法」に注目し、これを修験道の「憑祈祷」や御岳教における「御座」、あるいは中国密教に触発されたものとする<sup>17</sup>。親徳は「此ノ神ノ神法ノ今時ニ廃絶シタルヲ慨嘆シ、岩窟ニ求メ草庵ニ尋ネ終ニ三捨五歳ニシテ神憑三十六法アルコトヲ覚悟リ<sup>18</sup>」といい、神憑りが当時廃絶しているかのように語っているもののシュテムラーは「仲

---

<sup>16</sup> Birgit Staemmler, *Chinkon kishin: Mediated Sprit Possession in Japanese New Religions*, pp.4-5.

<sup>17</sup> *ibid.*, p.60.

<sup>18</sup> 『難古事記（巻五）』、224 頁。



介者・審神者」を伴う憑依の実践が当時の日本において、山岳信仰および民俗宗教において存在していたことから、親徳が聖山を巡り、修行をおこなっていた際に「憑祈祷」や「御座」もしくは他の憑依行法と接触があったとみる。確かに、シュテムラーが推測するように神道以外の憑依行法に親徳が接近していた可能性は高い。しかしながら親徳の思想およびその門人たちは「巫或は法華僧の行は此等外下々下等也<sup>19</sup>」というような皇学的エリート性を有しており、なおかつ苦行の否定を信条としている<sup>20</sup>。そのため、苦行を有する山岳信仰や民俗・民衆宗教である御岳講に親徳が行法を習得するほど関係を有していたかは、疑問が残る。小林健三の研究によれば、国学者の平田篤胤や平田門人たちは易学や玄学の習学をおこなっており<sup>21</sup>、このことより筆者は、『道法會元』に記載される方術書をもとに帰神法を構築していった可能性も考慮する必要があると考える。

安丸良夫は政治思想史学の立場より、『出口王仁三郎著作集』における解説の中で大本教の出口王仁三郎が本田親徳の直弟子である長澤雄楯より「霊学」と「鎮魂帰神法」を学び、その実践を「大本教」において活用したことから、本田

---

<sup>19</sup> 「帰神」『霊学抄』、369 頁。

<sup>20</sup> 『産土神徳講義（上）』、14-15 頁。

<sup>21</sup> 平田国学における道教学（玄学）の受容については『平田神道の研究』第一部「総論」第五「平田古道学の成立」から第八「結語」、第二部第六「玄学論」を参照。小林健三『平田神道の研究』33-89 頁および 258-338 頁。

親徳とその著作『道之大原』について、僅かに言及している。安丸によると、本田の『道之大原』は天地万有のなかに真神の霊・力・体をみるという一種の汎神論的神学を有しているが、完全に思弁的ではなく、「鎮魂帰神法」による神の実見と結びついたものであるという<sup>22</sup>。そして「鎮魂帰神法」について、安丸は、近世後期に国学者や神道家の間で定式化された神がかりの法と定義し、これを国学的神道説の立場から「土俗的神がかり」に対し、知的にも技術的にも優位に立つ天皇制国家主義の政治道德思想と結びついたものであるという<sup>23</sup>。この安丸による「鎮魂帰神法」の定義は「大本教」および「出口王仁三郎」研究がそもそも政治社会思想史における「エリート」対「民衆」の二項対立を機軸とする「民衆宗教論」の中で語られたものであることを前提とする。そのため、安丸は、国学的神道における「鎮魂帰神法」を「民衆」の「土俗的」神がかりと対抗する「知的」「天皇制国家主義の道德思想」を有するエリートの神がかりとして捉え、明治という新たな時代において、出口王仁三郎という新宗教家の「国家主義的神道思想」を創造した源泉であるとみる。そして安丸は、出口王仁三郎の神道思想を本田霊学を主軸とした篤胤学系の神道思想につらなるものである<sup>24</sup>という。しか

---

<sup>22</sup> 「出口王仁三郎の思想」『安丸良夫集3』、177頁。

<sup>23</sup> 「大本教と「立て替え立て直し」」同、165頁。

<sup>24</sup> 「出口王仁三郎の思想」、177頁。

しながら、安丸の論考において平田篤胤、本田親徳そして、出口王仁三郎という人物の間において、幕末から明治にかけての国学者と国学系神道家の思想がどのように連続するのか、詳しい考察はなされていない。ある意味、安丸良夫の着目は、重要である。本田親徳の門人達は、明治政府の要人や地方の戸長や神社社家などの亜流エリートであった。彼らは、本田霊学を受容し、これを自らの霊魂の神性の向上だけでなく、自らの管轄する範囲の民衆統治に利用していた。しかしながら、すでに津城寛文によって述べられているが、大本教において実践された「鎮魂帰神法」という一つの神人感合の行法は本田親徳の現存する著作類には存在しない。長澤雄楯が弟子達に教授した神憑りの行法を鎮魂帰神法と呼んでいたとみられる。

出口王仁三郎は、本田の駿河門人である御穂神社祠官長澤雄楯の門人となり、長澤雄楯を介して本田霊学を受容した。出口王仁三郎は、本田親徳を祖師的存在として、自らの宗教的担保としていたといえる。しかしながら出口王仁三郎の「鎮魂帰神法」や自らが神託によって受けたとされる『神伝秘書』は、本田霊学の行法書である『霊学抄』のコピーであり、これは長澤雄楯の弟子達の共通のテキストであった。そのため、本稿第五章において、出口王仁三郎の兄弟子にあたり、長澤雄楯が最初に見出した神主であり、後に、神道本局管轄下の神道三穂教

会・神主として静岡市街において、宗教活動をおこなった宮城島金作を考察する。このことにより、長澤雄楯を仲介してエリートの神がかりの思想と行法がいかに民衆の世界に接近していったのかを理解したい。

また、比較宗教学の立場より、近代における神道シャーマニズム行法論を大系的に考察した津城寛文の『鎮魂行法論―近代神道世界の靈魂論と身体論』は、

「鎮魂法帰神法」が、「大本教」を経て、「生長の家」「心霊科学協会」「世界救世教」「世界真光文明教団」「白光真宏会」などの大本教系新宗教に継承されていったことを明らかにした。本書において、本田親徳は、「大本教系鎮魂帰神法」の先駆的实践者として取り上げられている。津城によれば大本教および大本教系新宗教において「鎮魂帰神法」という一連の名称で呼ばれ、あたかも一つの实践であるかのように認識されていったこの行法は、そもそも、体内に内在する靈魂を行法によって定める「鎮魂法」と、神憑りの行法である「帰神法」という連続しつつも異なった二つの实践から成り立っていることを明らかにした。

しかしながら、津城は、本田の靈的修行がどこに端を発しているかという思想的問題に関して、本田の著書の各所に平田篤胤についての言及がみえるものの、

多くの場合それらは批判的文脈において語られており<sup>25</sup>、「靈魂論」の関心は篤胤に端を発するとしても、靈的实践において直接的影響はみられないとした<sup>26</sup>。

しかしながら、筆者の見るところ、たしかに津城の考察でも明らかなように本田親徳の著作群において、平田篤胤を、本田は、老莊思想と国学を混在させた人物として、あるいは、『古事記』の語義解釈において、批判の対象である。しかしながら本田親徳は、平田門人の六人部是香の神道思想、特に「産土神思想」に強く影響を受けている。さらに、本田親徳及び、本田親徳の門人達は、天保国学の読者でもあったため、本田靈学の思想を語る言説的背景として、平田篤胤とともに同時代の国学者が学問的考察対象とした「死後の靈魂の行方」問題、そして、その魂が回帰する「他界」、「幽冥界」の存在、及び、その「幽冥界」に帰った際に生ずる「神魂の位階」の問題により直接的・積極的な関係を有していると言える。つまり、本田の靈的实践は、国学によって提唱された諸問題をもとに、死後の世界、「幽界」を目標に見据え、いかに「顕世」に生きる人間が自らに内在する神性を高めていけるか、という問いから発生していったのではないかと筆者は考える。

---

<sup>25</sup> 『難古事記』巻一～巻六、『古事記神理解』巻一～巻三は篤胤の『古史伝』による『古事記』解釈の多くを批判している。また親徳は自らの学問的背景を皇学という。

<sup>26</sup> 津城寛文『鎮魂行法論—近代神道世界の靈魂論と身体論』、33頁-34頁。

このような問題関心のもと筆者は宗教思想史の立場から、本稿では、第一章から第三章までは、本田霊学における、死後の魂の行方と鎮魂法について考察を進めるため、平田篤胤、そして平田門人であり、篤胤の「顕幽論」を独自に発展させた向日神社祠官である六人部是香と、霊学神道家本田親徳に共通する考察の対象であった「産土神<sup>27</sup>」に着目する。そして三者の「産土神」に関する代表的著作を深く掘り下げていくことによって、平田篤胤から六人部是香を経てその思想的議題が、どのように霊学行法へと発展していったのかを考察する。

そのため、第一章では、平田篤胤の著作である『霊の真柱』『勝五郎再生記』を取り上げ、平田篤胤によって、人間の「死後の魂の行方」の問題とともに提唱された「顕幽論」と人間の生死に直接的に関わる「産土神」が、どのように自らの「産子」である人間と関わっていくと考えられたのかを明らかにする。

第二章では、平田篤胤の門人である六人部是香の『産須那社古傳抄廣義』に注目する。六人部是香は平田篤胤が提唱した「顕幽論」および「産土神」思想を発

---

<sup>27</sup> 『神道史大辞典』の「うぶすながみ（産土神）」の項によると、「自分の生まれた土地の神。その人が他所に移住しても、一生を通じ守護してくれると信じられている神」とある。産土神は血縁集団である氏族・一門の守護神である狭義の氏神、そして今現在の居住地及び、その土地の宮造物の守り神である鎮守の神と本来別だが、「産土神」「氏神」「鎮守の神」という、この三つの名称は中世以降、混同して使われるようになっていった。また「うぶこうぶすな（産子）」の項目では「産土の神の霊威により生命を受けて誕生した子の意で産土神を同じくする者の集団全体あるいはそれに所属する個人を指して称する名称。」とある。『神道史大辞典』、117頁。

展させた人物である。是香は、『産須那社古傳抄廣義』において、国学者、そして向日神社祠官としての視座から、人間の生死に関わる「産須那神」（是香の表記）を提起した。そして仏教、儒教などの教えの影響により、産須那神の働きを知らずに生きる人々を憂い、在世より教化し、「死後の靈魂の安心」を与えようとした。是香によれば、産須那神は、人間の誕生から死後までを保護し、人間の一挙手一投足までを見守り、なおかつ人間の心の中までも判断する神霊である。人間は死後、産須那神の社において、裁判を受ける。そして、生前の心魂の清浄性によって、人間死後の産須那神による裁判の結果が異なるとした。また、人間が死後、神霊となった際の身分にも影響があるとし、生前からの心のありようについて、注意を促している。

第三章では、本田親徳の著作のうち『産土神徳講義』と和歌集である『産土百首』を取り上げる。本章においては、平田篤胤を経て、六人部是香によって、提唱された「ウブスナ神」の思想が、本田親徳によって霊学行法としてどのように宗教的实践へと発展したのかを考える。『産土神徳講義』において本田は「気海丹田」に心魂を沈めることにより、魂が清浄化されると説く。そして、この「気海丹田」に心魂を沈める行法は、本田が他書において、記述する「鎮魂法」とどのような関係にあるのかを考察していく。

第四章では、本田霊学を現在に到るまで、普及させた人物として、本田の駿河門人である長澤雄楯に注目する。長澤雄楯は自社である月見里神社付属稲荷講社や、自らが奉職する御穂神社の社務所を本田霊学の道場とし、多くの門人をあつめた。長澤は本田霊学の神憑りの行法である「帰神法」において、神霊が憑依する「神主」の育成に勉め、霊能力者の開発をおこなっていた。そのため、長澤の門人の中からは、多くの新宗教教祖が誕生した。長澤雄楯は、国学の素養のある宮中官僚や、神社社家出身者の中で実践されていた本田霊学を神道系新宗教へと結びつけた人物であるといえる。本章では、長澤雄楯の宗教活動を踏まえつつ、特に本田親徳の霊学思想と実践のうち「禁厭法」と「帰神法」について注目する。

長澤雄楯は、神社経営の面において、本田霊学を活用し、神霊の霊威を地元住民に示すことに成功し、自らが管轄する神社の復興をおこなった。本章において、長澤雄楯の宗教活動を考察することにより、本田親徳の門人であった神社社家達がどのように本田霊学を受容していたのかを推測することが可能になるといえる。

第五章では、長澤雄楯が本田霊学を研究する中で最初に見出した「帰神法」の神主であった宮城島金作を考察の対象とする。宮城島金作の名は、長澤雄楯を審神者として神憑りをおこない、日清戦争の戦争状況の予言した人物として、長澤雄



楯の弟子筋では伝説化した人物であった。しかしながら、実際に宮城島金作がどのような人物であり、なおかつ宮城島金作が設立した御穂神社の崇敬教会であった神道三穂教会はどのような活動をおこなっていたのかは、史料上の制約もあり、これまで、実態の把握は不可能であった。しかしながら、2018年より、舞鶴工業専門学校教授、吉永進一を中心とした史料調査により、宮城島金作のひ孫にあたる宮城島光二氏宅より、神道三穂教会の資料が発見されることとなった。筆者もこの調査グループに参加し、「宮城島家史料」の目録の作成作業を担った。

本章では、「宮城島家史料」内の「神道三穂教会史料」をもとに、宮城島金作の本田霊学の受容の諸相を明らかにしていく。また、先行研究では、出口王仁三郎の本田霊学の受容の産物とされた『神伝秘書』が、長澤雄楯の弟子達共通の本田霊学のテキストであったことに注目しつつ、長澤雄楯を経た宮城島金作の宗教活動において、平田派国学からの課題であった死後の魂の位階の問題が如何に変容していったのかを明らかにし、第六章を終章とする。



図 1 本田九郎親徳<sup>28</sup>

---

<sup>28</sup> 『本田親徳全集』、写真 1 頁。

## 第一章 平田篤胤と「死後の魂の行方」について

### 第一節 本田親徳の霊学思想と行法の背景としての国学

神道家本田九郎親徳（文政五年－明治二十二年）（1822 年－1889 年）は、幕末期には、薩摩藩の脱藩志士として馬関探索方を勤め<sup>29</sup>、明治維新以後には鹿児島県国学局国学掛を務めた人物である<sup>30</sup>。本田九郎は明治維新後、「帰神法」、「鎮魂法」、「太占」を教授する霊学神道家として活動する中で、薩摩国鹿児島諏訪大明神社大宮司本田親徳（寛政十二年－元治二年二月二十九日）（1800 年－1865 年）の名前を継ぎ、本田親徳と名乗り始めた。（以下、本論文において、本田親徳とは本田九郎親徳をさす。）

明治二十年(1887 年)に刊行された排耶書『耶蘇教審判<sup>31</sup>』では、本田瑞園という号を用いていることから、江戸中期の薩摩藩の国学者白尾国柱（宝暦十二年－文政四年）（1762 年－1821 年）（本姓：本田親白、号瑞楓）の学派の下で国学を学んだと推測できる。しかしながら、現存する本田親徳が記した著作群には、自

---

<sup>29</sup> 立教大学日本史研究室編『大久保利通関係文書』第二巻、133 頁。

<sup>30</sup> 鹿児島県立図書館所蔵「母智丘神社由緒書御届申上候扣」。

<sup>31</sup> 本田瑞園『耶蘇教審判』。本書は明治憲法制定直前に執筆、出版されている。当時、伊藤博文政権下において、キリスト教が国教化するのでは無いかという噂に危機を抱いた本田親徳が、本書を読むことによって、キリスト教の倫理性に疑問を抱かせるべく執筆した。本書の内容としては、老子と釈迦牟尼が原告として大日本帝国下の法廷において、イエス・キリストと「神」を訴え、本田親徳と思われる検事が、「神」とされる男性とマリア、エリザベスの姦通罪を暴く内容である。本書は神道界だけでなく、明治十年代に反キリスト教運動を展開していた仏教関係の書店でも宣伝販売されていた。

らの国学思想の学統を記しておらず、本田親徳に関する先行研究では、国学との関係性は、解明されなかった<sup>32</sup>。わずかな考察として、安丸良夫によって、政治思想史の視座より、本田親徳の「霊学」とは「（平田）篤胤学系の国学的神道説」<sup>33</sup>と分類されている。その一方で、神道行法の研究を行ってきた津城寛文からは、「靈魂論」の関心は篤胤に端を発するとしても、霊的实践において直接的影響はみられないとされてきた<sup>34</sup>。

本田親徳の霊学思想と行法の国学との関係性を考えてみると、親徳は、特定の国学者の門弟として国学を修めたというよりは、むしろ広く国学者の著作を読破し、その中でも天保国学において、議論の対象となった神霊の实在論についての考察に興味を持ち、神典に記されている「神憑り」やト占などの実践に傾斜していったのではないだろうか。

親徳の著作類の題名から推測できることとして、親徳による『古事記』の注釈書

『難古事記』は、本居宣長（享保十五年－享和元年）（1730年－1801年）の

---

<sup>32</sup> 国学とは、江戸中期に成立した『古事記』『日本書紀』などの古記や古文献に対して、新たな解釈を目指す、方法論的、学問的立場と、それにもとづいた思想運動をさす。子安宣邦によれば、「記紀神話への新たなアプローチを通して国学は日本の自己同一性をめぐる言説を展開し、また記紀の神々とその事跡との新たな理解に立つ世界像を構成し、幕末にかけての政治世界や郷村社会に大きな影響を与えた」とされる。子安宣邦「国学」『日本思想史辞典』180－181頁。

<sup>33</sup> 安丸良夫「出口王仁三郎の思想」『安丸良夫集』、177頁。

<sup>34</sup> 津城寛文『鎮魂行法論－近代神道世界の靈魂論と身体論』、33頁-34頁。

『古事記傳』を批判した橘守部<sup>35</sup>（天明元年－嘉永二年）（1781年－1849年）の

『難古事記傳』の題名から影響を受け、つけられたものであると考えられる。橘

守部は独自の学問的法則「神秘五箇条」を唱え、第一条「旧辞・本義ノ差」を知

るべきこと、第二条「古伝説ノ本義」を弁えるべきこと、第三条「<sup>おきなごと</sup>稚言・<sup>かたりごと</sup>談辞

ノ弁」、第四条「<sup>はぶきごと</sup>略語・<sup>ふくめごと</sup>含言ノ大概」を知るべきこと、第五条「天・黄泉・

幽・現・顕露ノ大意」を心得るべきこととした<sup>36</sup>。橘守部は口承伝承を成立した

神典を伝説的部分と史実的部分を弁別し、その要素分類し神典解釈をおこなうこ

とを主張している。

---

<sup>35</sup> 江戸後期の国学者、神道家。伴信友、平田篤胤、香川景樹とともに天保四大家に数えられる。伊勢国朝明郡小向村にて飯田長十郎元親の長男として生まれた。幼名は旭敬のち吉弥。元服後は元輔名乗った。武蔵野国移住後に庭麻呂と改名し、蓬壺と号した。江戸に再移住後

に<sup>なぎきのや</sup>波瀲舎と改める。池庵・生薬園・椎本とも号す。文政九年（1826年）より橘姓を称し、守部を名乗る。寛政四年（1792年）父が一揆加担の嫌疑を受けて、一家破産。守部は大阪の親戚の許に身を寄せた後、寛政九年（1797年）に父の死を契機に江戸に移住。文化二年（1805年）儒学者葛西因是の講席に連なり、因是介して、国学者の村田春海や、清水浜臣などと親しく交わる。正式な入門経験はなく、父の影響より、谷川士清に私淑しつつ、独学で国学を学んだ。守部は人の世を存在せしめる不可視の領域としての「幽」を設定し、「天」と「黄泉」を「幽」の二側面として捉え、空間論的世界解釈を否定し、本居宣長や平田篤胤と問題関心を共有しつつ、方法論の領域では、緊張関係にある。『日本書紀』を重んじ、その注釈書である『稜威道別』（天保十五年）（1844年）刊、記紀歌謡の注釈書『稜威言別』全十巻（寛永三年－明治七年）刊。表智之「橘守部」『日本思想史辞典』346頁。

<sup>36</sup> 鈴木暎一「橘守部」『神道史大辞典』、654頁。

本田親徳は橘守部の神秘五箇条に影響を受けて、「素々削偽定実テ後葉ニ伝ヘシム大御慮ヨリ選録セラレタル此ノ古事記ナル故、勉励精勤シテ先代ノ旧辞ニ復シ、神代ノ正実ニ歸セシメムコト、吾ガ士民ノ義務ナラムト覚ユルナリ。<sup>37)</sup>」といい『古事記』が口承伝承を経て成立していく過程で多くの「虚偽説」が混在していると考えた。そのため、神代や古代において実践されていた神霊からの託宣や啓示を得ることにより、神典の真意を理解することを希求していったといえる。

『古事記』の「神代記」の天石戸隠れの段では、建速須佐之男命の暴挙により、天照大御神が天石戸に隠れてしまい、高天原も葦原中国も暗闇となり、よろずの禍が発生する。この事態を憂いて、神々が結集し、祭儀をおこなうが、このうち、天児屋命が布刀玉命を招いて、<sup>おじか</sup>雄<sup>あまのははか</sup>鹿と天之波々迦の木による太占をおこなう<sup>38)</sup>が、『難古事記』において、親徳は、和歌とともに以下のように解説している。

<sup>37)</sup> 本田親徳『難古事記』（巻一）、『本田親徳全集』、128 頁。

<sup>38)</sup> 「召天児屋命・布刀玉命（布刀二字以御。下效此。）而、内拔天香山之真男鹿之肩拔而、取天香山之天之波々迦（此三音。字以木名。）而、令占合麻迦那波而（自麻下四字以音。）」『古事記』、50 頁。「天<sup>あめ</sup>児<sup>こ</sup>屋<sup>やね</sup>命<sup>のみこと</sup>・布<sup>ふ</sup>刀<sup>と</sup>玉<sup>たま</sup>命<sup>のみこと</sup>を召し（布刀ノ二字は音を以ゐる。<sup>しも</sup>は此に效ふ。）而、天<sup>あめ</sup>ノ香<sup>かぐ</sup>山<sup>やま</sup>之真男鹿之肩を内拔きに拔き而、天<sup>あめ</sup>ノ香<sup>かぐ</sup>山<sup>やま</sup>之天<sup>あめ</sup>ノ波<sup>は</sup>々<sup>は</sup>迦<sup>か</sup>を（此ノ三字は音を以ゐる。木ノ名ソ。）取り而、占合ひ麻迦那波令メ而（麻自り下ノ四字は音を以ゐる。）」『古事記』、51 頁。

まおしかのかたのほねぬくらごとをいまのよひとのしるやしらずや  
真男鹿乃肩乃骨拔ト事乎今乃世人乃知也不知也

「召天児屋命布刀玉命而。内拔天香山之真男鹿之肩拔而。

取天香山之天之波々迦而。令占合麻迦那波而。」トアリ。

此ノト事ヨ、過去現在未来ヲ知ル為ニ神始玉ヒ、神武天皇  
ヨリ以来ノ歴世ノ歴史ニ記載セラレ、四国ノト部ト云フ其  
職掌ノ家々ヲ置カセラレ、大小事件ヲ勅門アリシニ、中世  
ヨリ世ハ刈菰ノ乱レニ乱レ行キツツ、其レニ乗ジテ儒仏ノ  
道法蔓延リツツ、古ノ法式モ有トモ竟ニ絶テ無キガ如キ世  
トハナレリ。（中略）東満、真淵、宣長、篤胤等其ノト法  
ヲ未ダ見ザリシ故ニ、諸ノ著書ニ僅々記録セリト雖モ皆空  
論ニテ実用ニ適セズ。故ニ百の百中ノ効ヲ奏スルコト能ハ  
ズ<sup>39</sup>。

---

<sup>39</sup> 本田親徳『難古事記』（巻六）『本田親徳全集』、222 頁。

雄鹿の肩の骨を用いたト占について、親徳は、神が過去現在未来を知るために始めたものであると説明しつつ、神武天皇（庚午年一月一日－神武天皇七十六年三月十一日）の時代から太占について歴史書に記載はされているものの、中世の戦乱や儒教および仏教の行法が日本において、蔓延したため、神代の時代に実践されていた古のト法がわからなくなってしまったと嘆いている。そして、荷田春満（寛文九年－元文元年）（1669年－1736年）、賀茂真淵（元禄十年－明和六年）、本居宣長、平田篤胤（安永五年－天保十四年）（1776年－1843年）の名前を挙げて、これらの国学者は実際に雄鹿の骨を使用したト占を見たことがないため、それぞれの国学者の著作におけるト占についての記述は、皆空論であり、ト占実践には適していないという。

神霊からの直接的な啓示により、「神代ノ正実ニ帰ス」事を目指していた親徳にとって、「国学の四大人」である荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の解釈は机上の学問であり、そのまま受容することは、困難であったといえる。

特に親徳は、「平田ガ古史伝ノ説ハ老莊ノ説ヲ拠所トシ<sup>40</sup>」ていると主張し、平田篤胤の古事記解釈を老莊思想と国学を混在させたものとして、また、『古事記』の諸々の語義解釈において、親徳の著作の中で常に批判の対象である。この

---

<sup>40</sup> 本田親徳『難古事記』（巻一）『本田親徳全集』、97 頁。



ように親徳は、平田篤胤の国学思想を強く批判しながらも、本論文第二章で考察をおこなう平田門人の国学者である六人部是香（寛政十年もしくは文化三年－文久三年）（1798年もしくは、1806年－1863年）の神道思想、特に「産土神思想」に強く影響を受けるという思想的影響のねじれが生じている。本田親徳は平田篤胤の国学を強く批判しながらも、平田篤胤の思想を発展させた平田派国学者六人部是香の国学思想に強い影響を受け、自らの霊学思想を構築していった。本田霊学において、平田篤胤の国学は批判対象でありながらも、本田親徳の思想の言説的背景として、平田篤胤が学問的考察対象とした「死後の靈魂の行方」問題、そして、その魂が回帰する「他界」、「幽冥界」の存在、及び、その「幽冥界」に帰った際に生ずる「神魂の位階」の問題により直接的・積極的な関係を有しているといえる。つまり、本田の霊的实践は、平田国学によって提唱された諸問題をもとに、死後の世界、「幽界」を目標に見据え、いかに「顕世」に生きる人間が自らに内在する神性を高めていけるか、という問いから発生していったのではないかと筆者は考える。

このような問題関心のもと、第三章で詳しく考察をおこなう本田霊学における「死後の魂の行方」の思想と「鎮魂法」の行法実践の関係性について進む前に本章では平田篤胤の「顕幽論」と「産土神<sup>41</sup>」の思想について、取り上げる。

## 第二節 『霊の真柱』

### （一）平田篤胤の『霊の真柱』と靈魂の回帰について

平田篤胤（号、大壑、大角、気吹舎）は荷田春満、賀茂真淵、本居宣長とともに国学四大人の一人に位置づけられる人物である。秋田藩士大和田祚胤の四男として不遇な幼少期を過ごした後、寛永七年（1795 年）に江戸に脱藩し、寛永十二年に松山藩士平田藤兵衛の養子となった。文化二年（1805 年）に本居春庭に入門し、自らは本居宣長（享保十五年－享和元年）（1730 年－1801 年）の門人を自称した。文化八年より日本古伝の研究に従事し、文政三年（1820 年）頃より外国

---

<sup>41</sup> 『神道史大辞典』の「うぶすながみ（産土神）」の項によると、「自分の生まれた土地の神。その人が他所に移住しても、一生を通じ守護してくれると信じられている神」とある。産土神は血縁集団である氏族・一門の守護神である狭義の氏神、そして今現在の居住地及び、その土地の宮造物の守り神である鎮守の神と本来別だが、「産土神」「氏神」「鎮守の神」という、この三つの名称は中世以降、混同して使われるようになっていった。また「うぶこうぶすな（産子）」の項目では「産土の神の靈威により生命を受けて誕生した子の意で産土神を同じくする者の集団全体あるいはそれに所属する個人を指して称する名称。」とある。『神道史大辞典』、117 頁。

古伝の研究に取り組んだ。篤胤の学問領域は広く、古道学、暦学、易学、軍学、玄学など多方面に渡った膨大な著述をなした。生前の門人は、五百五十三人、没後門人は、千三百三十人にのぼり、地方の神職層、豪農層を中心として幕末の思想界に大きな影響を与えた。

まずは平田篤胤が「死後の魂の行方」をどのように考えていたか、考察に入る前に篤胤自身の問題関心の前提となった本居宣長の靈魂観について触れておく。

宣長は古事記傳六之卷<sup>カシヨノヨマキトイフマキ</sup>神代四之卷において黄泉の国を以下のように定義づける。

黄泉國は豫美能久爾とも、豫美都久爾とも訓べし(中略)。たゞ黄泉とのみあるは、豫美と讀べし、さて豫美は、死し人の往て居國なり、(中略)生返をよみがへると云も、黄泉より返なり、[俗にも黄泉路返黄路障などいふ、](中略)、下文に燭一火とあれば、暗處と見え、又夜之食國を知着月讀ノ命の、讀てふ御名も通ひて聞ゆればなり、祝辭に、吾名妹能命波、上津國乎所知食倍志、吾波下津國乎所知牟止申氏とのたまひ、又欲<sub>ニ</sub>龍妣國根之堅洲國<sub>一</sub>と、須佐之男命の詔へる[私記に、根ノ國ハ謂黄泉也と云ヒ、萬葉五に之多敝乃使とよめるも、泉路のことなるが、

下方使<sup>シタベイツカ</sup>と聞ゆ、出雲ノ國ノ風土記に、伯耆ノ國ノ郡ノ内ノ夜見嶋と云ことあるは、黄泉に由あることありての名なるべし、]などを以見れば、下方に在ル國なりけり、さて此ノ黄泉の事、外國より來つる儒佛の書に、人の生死<sup>シセイ</sup>の理をとりどりに云ることどもを聞キ馴れたる後ノ世の人は、佛にまれ、己が心の引き々に、強て其方<sup>ソナタ</sup>に思ひ寄せめれど、皆ひがごとなり、然る外國の道々の書なかりし上ツ代の心に立歸りて、唯死人<sup>シセイビト</sup>の往て往國<sup>ソウコク</sup>と意得べし、[或人問、死にて夜見ノ國に罷るは、此ノ身ながら往くか、はた魂<sup>タマ</sup>のみ往くか、答フ、此身はなきからとなりて、しるく顯國<sup>ウツシクニ</sup>に留<sup>トドマリ</sup>在れば、夜身ノ國には魂<sup>タマ</sup>の往くなるべし・・・]<sup>42</sup>（筆者下線。以下同様。）

本居宣長によると、ヨミとは人間の死後、肉体と靈魂が分離した後、死者の魂が行く国であり、暗く汚い下方にある国であるという。この定義を平田篤胤（安永五年～天保十四年）（1776年－1843年）、は『靈の真柱』において「然るを、古くも今も、人の死ぬれば、其魂は<sup>ことごと</sup>尽に、夜見国に歸くといふ説のあるは、あなかしこ、（中略）大国主神の幽冥<sup>カミツミ</sup>を掌り治し着す、幽契<sup>カミツミ</sup>の妙なる謂をも顧考へず、いとも忌々しき曲説にて、慨きことのかぎりにならむ有ける。<sup>43</sup>」とい

<sup>42</sup> 「神代四之卷」『古事記傳六之卷』『本居宣長全集』第九卷、237-238 頁。

<sup>43</sup> 『靈の真柱』、146 頁。

い、受け入れなかった。そして、篤胤は死者の魂がどこへ行くのかという問題を次のように考察していく。

人の魂の、すべては夜見に帰くまじき<sup>こまじ</sup>埋<sup>う</sup>は、神代の<sup>かみよ</sup>事実によりて知るのみならず、人の生まれ出づる<sup>うまひ</sup>所由、また死にて後の事実を<sup>み</sup>察ても<sup>さ</sup>曉るべきは、まづ人の生まれ出づることは、父母の賜物なれども、その成り出づる<sup>なり</sup>元因<sup>もと</sup>は、神の<sup>かみ</sup>産霊<sup>うぶたま</sup>の、<sup>くす</sup>奇しく<sup>な</sup>妙なる<sup>みたま</sup>御霊によりて、風と火と水と土、<sup>よ</sup>四種の物を<sup>な</sup>むすび成し賜ひ、それに<sup>たまし</sup>心魂を<sup>さむ</sup>幸ひ<sup>くま</sup>賦りて、生まれしめ賜ふこととなるを、（中略）死にては、水と土とは<sup>なみ</sup>骸となりて、<sup>かみ</sup>顛に<sup>のこりあ</sup>存在るを見れば、<sup>かみ</sup>神魂は風と火とに、<sup>か</sup>供ひて、<sup>か</sup>放り去ることと見えたり。（中略）此は、風と火とは天に<sup>つ</sup>属き、土と水とは<sup>つ</sup>地に<sup>こまじ</sup>属くべき<sup>う</sup>埋の有るによりてなるべし。（中略）然<sup>しか</sup>在らば、これも、人の<sup>かみ</sup>神魂のなべては、夜見に帰くまじき一の理なり。然るは、<sup>かみ</sup>神魂はもと、<sup>うぶたま</sup>産霊神の<sup>かみ</sup>賦りたまへるなれば、その<sup>もと</sup>元因<sup>いわけ</sup>をもて云ふときは、天に<sup>う</sup>帰くべき理なればなり。然れども、おしなべて<sup>かみ</sup>然存るべき、たしかなる事実も、古伝もいまだ見あたらず。<sup>44</sup>

---

<sup>44</sup> 同、158-160 頁。

篤胤は、人が生まれ出るには父母のおかげではあるものの、その根本には天に  
いる<sup>ムスビノカミ</sup>産霊神より風・火・水・土の四元素の配合と共に心魂を賜ることによって人  
間は生成されるとする。そして産霊神から賜った心魂、つまり神霊は、人の死  
後、風と火の要素に伴って天に帰るという天上他界観が理にかなうようだが、こ  
のことに關しては、古伝からは確かな証拠が得られないとする。

『古事記伝』において宣長は、人の死後の魂の行方を生から死への移行という  
直線的意味において「ゆく（もしくは往く）」と表現している。一方、篤胤は  
「帰る」という漢字を「ゆく」という動詞に当てている。篤胤は人の魂は産霊神  
から賜った神魂であり、聖なる神から授かって此の世界にやってきて、その死後  
また元の聖なる世界に帰るという確信を持っていた。もし、人の死後、その魂が  
穢きヨミに帰るのであれば、人は穢きヨミから生じたことになる。これは篤胤に  
とって受け入れられない解釈であったといえる。

## （二） 篤胤の世界観、冥府論

『霊の真柱』の上つ巻において、篤胤は、本居宣長の門人服部中庸<sup>はっとり なかつゆ</sup>（宝暦七年  
－文政七年）（1756 年－1824 年）の『三大考』における世界創造、すなわち、虚  
中の一物から「天」が萌え上がり、「泉」が垂れ下がり、その真ん中に「地」が

生成されるという「高天原—葦原中国—黄泉国」の三層構造からなる垂直的世界観を継承している。ところが魂の回帰の問題に関して篤胤は、下方にある穢い黄泉の国に靈魂が帰ると考えず、また、天から授かって天に戻るという垂直的天上他界観の立場をもとらない。そして以下のような水平的他界を志向することになる。

此国土の人の死にて、その魂の行方は、何処ぞと云ふに、常磐にこの国土に居ること、古伝の趣と、今の現の事実とを考へわたして、明らかに知らるれども、万葉集の歌にも、〴〵百足らず、八十の隈路（ママ）に手向けせば、過去し人にけだし相むかも（中略）と詠めるが如く、此顯明の世に居る人の、たやすくは、さし定め云がたきことになむ。（中略）そはいかにと云ふに、遠つ神代に、天神祖命の、御定ましし大詔命のまにまに<sup>45</sup>、その八十隈手に隠り坐します、天国主神の治する、冥府に帰命ひまつればなり<sup>46</sup>。

---

<sup>45</sup> 高皇産靈尊の大己貴神（大国主神）へ「夫れ汝が治す顕露の事は是吾孫治すべし。汝は以て神事を治すべし。」という詔勅。「神代下第九段、一書第二」『日本書記』、138 頁。

<sup>46</sup> 『靈の真柱』、166 頁。

篤胤は『霊の真柱』において『万葉集』から引いたこの「<sup>もゝ</sup>百足らず、八十の  
隈路（ママ）に手向けせば、<sup>すぎに</sup>過去し人にけだし<sup>あむ</sup>相むかも」を何度も引用する。こ  
れは田口廣麿が死れる時、<sup>おさかべのたれまろ</sup>刑部垂麻呂が詠んだ歌であるが、隈路という「この  
世」と「あの世」の境に何度も手向けをすれば、亡くなってしまった近しい人に  
再会できるかもしれない、という死者を思う情感に溢れた歌である。この死者を  
思う情感を篤胤自身が死者の魂の行方を考える際に有していたといえる。つまり  
篤胤にとって、天は、死後の魂の行方としては遠すぎたのかもしれない。死後の  
魂の行方として垂直上に天に昇るという考え方よりも、この地上に存在する別の  
世界に死後の魂は帰るという水平上の他界、「<sup>かみのみかど</sup>冥府」を志向したほうが、心が通  
う近しい人の魂の行方として適切であると考えた。そしてこの世の水平上の他界  
について篤胤は以下のように説明する。

<sup>そもそも</sup>抑、その冥府と云ふは、<sup>このうつしくに</sup>此顕国をおきて、<sup>ひとところ</sup>別に一処あるにもあらず、  
<sup>ただ</sup>直ちにこの<sup>うつしくに</sup>顕国の<sup>うち</sup>内いづこにも有なれども、<sup>ほのか</sup>幽冥にして、<sup>うつしと</sup>現世とは隔たり  
見えず。<sup>なれ</sup>故もろこし人も、<sup>うつしと</sup>幽冥また<sup>めいふ</sup>冥府とは云へるなり。さて、その<sup>めいふ</sup>冥府  
よりは、人のしわざのよく見ゆめるを、（中略）<sup>うつしと</sup>顕世よりは、その幽冥を  
見ることあたはず。それを譬へば、<sup>ともしび</sup>燈火の籠を、<sup>しろ</sup>白きと<sup>くろ</sup>黒きとの紙もて、



中間よりはり分かち、そを一<sup>ひと</sup>間におきたらむが如く、その闇<sup>くら</sup>き方<sup>かた</sup>よりは、  
明<sup>あき</sup>き方<sup>かた</sup>のよく見ゆれど、明<sup>あき</sup>き方<sup>かた</sup>よりは、闇<sup>くら</sup>き方<sup>かた</sup>の見えぬを以て、此差別<sup>このはじめ</sup>を  
暁<sup>あきと</sup>り、はた幽冥<sup>かみぐと</sup>の、畏<sup>かこ</sup>きことをも暁<sup>あきと</sup>りねかし。（但し此はたゞに、顕明<sup>あきあき</sup>と  
幽冥<sup>かみぐと</sup>の別<sup>わか</sup>別<sup>わか</sup>をたとへたるのみぞ。その冥府は闇く、顕世<sup>あきよ</sup>のみ、明<sup>あき</sup>きとのこ  
とにはあらず、な思<sup>まが</sup>ひ混<sup>ま</sup>へそよ。実<sup>まこと</sup>は、幽冥<sup>かみぐと</sup>も、各々<sup>おのおの</sup>某々に、衣食住の道  
もそなはりて、この顕世<sup>あきよ</sup>の状<sup>さま</sup>ぞかし。）<sup>48</sup>

篤胤の思考する「幽世<sup>かみよ</sup>」という他界は「顕世<sup>あきよ</sup>」からはるかに遠い天界ではな  
く、「この世」のあらゆるところ隣接し、明確な境界はない紙一重の世界であ  
る。衣食住も備わり、この世と変わりのない世界である。そして「人の死ぬれ  
ば、（中略）神代の神等<sup>かみみな</sup>の、現世人<sup>あきよびと</sup>に見えまさねど、今もなほ、其社々<sup>そのやしろやしろ</sup>に御身<sup>みみ</sup>な  
がらに、隠<sup>かく</sup>り鎮<sup>しづ</sup>まり坐しますことをよく弁<sup>わきま</sup>へ、さて、人の上をも考ふれば、其理<sup>その</sup>  
の知らるめり。<sup>49</sup>」とし、神々の御霊が、社に鎮座している姿をこの世に生きる  
人間からは見ることができないのと同じようにこの世に生きる人間からは、死者  
の霊魂を見ることができないが、この世と紙一重の他界である「幽界」には、死

---

<sup>47</sup> 篤胤は「顕<sup>あき</sup>明<sup>あき</sup>一現世<sup>（ごと）</sup>」を皇孫が生命あるものを統治する世界とし、「幽冥<sup>かみぐと</sup>一幽世」を大  
国主神が死後の霊魂を統治する世界と考える。

<sup>48</sup> 同、167 頁。

<sup>49</sup> 同、167-168 頁。

者は確かに存在し、あちらの死者の世界からはこちらが見えると考えた。そして亡くなった人間自身の魂はどのようなになるか、篤胤は以下のように説明する。

さてまた、現身の世の人も世に居るほどこそ如此て在れども、死にて幽冥に帰きては、その靈魂やがて神にて、その靈異なること、その量々に、貴き賤しき、善き悪しき、剛き柔きの違いこそあれ、中に卓越れたるは、神代の神の靈異なるにも、をさをさ劣らず功をなし、また、事の発らぬ予より、其事を人に悟すなど、神代の神に異なることなく、（中略）其は、かの大国主神の、隠り坐しつゝも、侍居たまふ心ばへにて、顕世を幸ひ賜ふ<sup>ことわり</sup>理にひとしく、君親、妻子に幸ふことなり。<sup>50</sup>

人の死後、幽界に帰った魂はそれぞれの力量の違いはあれども、最終的に人魂は、皆神になり、顕世で生きる親族の守護をつかさどると篤胤はいう。つまり、「産靈神による肉体への心魂の賦与」によって人間は「顕界への誕生」し「肉体の死」による「魂の幽冥への帰還」によって「守護神霊」となり、また再び「顕界へ参与」という道筋が人間には存在すると考えた。そしてこの魂の全行程

---

<sup>50</sup> 同、172 頁。

を迫行するために、篤胤は、「この世」に隣接する水平上に他界を設定したといえる。つまり、水平上の他界であれば、「顕界」から「幽界」、「幽界」から「顕界」への往来をより簡易なものと捉えることができるからである。

さらに篤胤の「幽冥論」では、死後の魂の「幽界」への帰還だけでなく、靈魂の再生、つまり、死後「幽界」に帰った魂が再び人として生まれ出る機能についても考察が進められている。次に検討する『勝五郎再生記聞』において、篤胤は、「魂の回帰」、「人の生まれかわり」を論じるとともに、幽世を主宰する大国主大神の命をうけ、顕世における「魂の再生」に深く関与する産土神の役割について議論を展開してゆく。

### 第三節 『勝五郎再生記聞』

#### (一) 魂の再生、生まれかわり

文政六年発表の『勝五郎再生記聞<sup>51</sup>』は、文化十二年(1815年)十月十日に武州多摩郡柚木領中野村にて百姓源蔵の次男として生まれた勝五郎(当時九歳)が、同郡小宮領程窪村にて文化二年(1805年)に出生し、同七年(1810年)二月に疱瘡を

---

<sup>51</sup> 『勝五郎再生記聞』『仙境異聞・勝五郎再生記聞』岩波文庫。

病んで死亡した藤蔵としての前世の記憶を所持しており、前世の家族に再会を果たしたという話を平田篤胤及び伴信友（安永二年－弘化三年）（1773 年－1846 年）が聞き書きしたものである。

『勝五郎再生記聞』の前半を占める立入事負（伴信友）による聞き書きによると、勝五郎は四歳のころまで前世についてよく憶えていたが、その後、だんだんと忘れてしまうようになった。藤蔵としての自分は病気になり、薬を服用しなかったために死亡してしまったと理解していた。勝五郎は、藤蔵としての死後、人が自分の死因を疱瘡によるものであることを話しているのを聞いて自らの死因を知るようになったという。また藤蔵が文化七年(1810 年)に程窪村で死んでから六年目に勝五郎は生まれている。

また、死ぬ間際から勝五郎として生まれ出るまでの体験は次のように記されている。

息の絶ゆる時は何の苦しみも無かりしが、其の後しばしがほど苦しかりき。その後はいさゝかも苦しき事もあらず。さて体を桶の中へつよく押し入るゝと、飛び出でて<sup>たな</sup>傍へにをり、山へ葬りにもて行くときは、白く覆ひ

たる龕<sup>52</sup>の上に乗りて行きたり。さて其の桶を穴へおとし入れたるとき、  
其の音のひびきたること、心にこたへて今もよく覚へたり。さて僧共が経  
をよめども何にもならず、すべて彼等は錢金をたぶらかし取らむとするわ  
ざのみにて益<sup>えき</sup>なきものなれば、悪<sup>にく</sup>く厭<sup>いと</sup>はしく思はれて、家に帰り、(中略)  
机の上に居たるが、人に物をいひかけても聞きつけず。其の時に白髪を長  
く打垂れて黒き衣服着たる翁<sup>53</sup>の、こなたへとて誘<sup>よそ</sup>なはるゝに従ひて、  
何処とも知らず段々に高き奇麗なる芝原に行きて遊びありけり。花の盛<sup>さか</sup>な  
る所にあそびたるとき、其枝を折らむとするに、小さき鳥<sup>からす</sup>の出で来たり  
て、いたく威<sup>おど</sup>したる事のありしは、今も恐ろしくおぼゆ。(中野村の  
産土神熊野権現に坐すと源蔵いへり。) (中略) またしか遊びありくほ  
ど、我が家にて親たちのもの云ふことも聞こえ、経誦む声も聞こえたれ  
ど、吾は既に云へる如く僧はにくゝ思<sup>おも</sup>ゆるのみなり。食物を供へたるも食  
ふことは為さざれど、中に温かなるものは、其の烟氣<sup>けんき</sup>の香ひで甘く覚え  
たりき。七月には庭火<sup>にわび</sup>をたくとき家へ帰りたるに、団子などを備へてあり

---

<sup>52</sup> 龕(がん)とは死体をおさめる棺のことをさす。『大辞林』141680頁。

<sup>53</sup> 後日この翁について詳しく聞くと「白髪を長くうち垂れ、白き髭長く生えたり。白絹の衣服の上に黒き紋ぢらしある袖の大きな羽織のごとき物に後ろに長く垂れたる上着を着て、くゝり袴を着し、足には外黒く内赤く塗りたる丸き物の、足の甲までかゝるを履きたりしと」述べた。同、377頁。

き。斯くてあそびて有り終るほど、或とき彼の翁と家の向ひの路を通ると  
き、（家とは源蔵が家をいへり。）翁この家を指して、あれなる家に入り  
て生まれよといふ<sup>54</sup>。

死後、肉体を離れた藤蔵の魂は浮遊し、自分の葬送を観察し、いわば中有の状態のためか、人に話しかけても生きている人間には聞こえない。そして、このような状態にいた藤蔵は、白髪を長く垂らし黒い着物をきた老人に「何処とも知らず段々に高き」「他界」「幽界」へと誘われた。そこは奇麗な芝の生えた野原であり、藤蔵は子どもらしく遊び暮らしていたようである。

この立入事負の聞き書きでは、死後、藤蔵を幽界へ導き、勝五郎として生まれ出ることを命じた翁について、勝五郎の父源蔵は「中野村の産土神に坐す」と述べたとされる。

幽界へと行くさまを藤蔵(後の勝五郎)は、「何処とも知らず段々に高き」と形容している。藤蔵が行き着いた「他界」は、時折、両親などの話す声や供養のための読経が聞こえる「この世」とは必ずしも隔絶した空間ではない。実際、藤蔵はお盆には実家に帰ったりもしていた。また、翁に再生を命じられる際も「家の

---

<sup>54</sup> 『勝五郎再生記聞』、369-370 頁。

向ひの路を通るとき、（家とは源蔵が家をいへり。）翁この家を指して、あれなる家に入りて生まれよと云ふ」とあるように翁とともに「顕世」の源蔵の家の向かいの道を通ることができたようである。これは『霊の真柱』に「抑、その冥府と云ふは、此<sup>このうつしくに</sup>顕国をおきて、別に<sup>ひとところ</sup>一処あるにもあらず、直ちにこの<sup>そこの</sup>顕国の内いづこにも有なれども、幽冥<sup>ほのか</sup>にして、現世<sup>うつしよ</sup>とは隔<sup>へだ</sup>たり見えず。<sup>55</sup>」という篤胤の考え方に符号する、日常空間と隣接する「他界」として記されている。

そして「教へのまゝに翁に別れて、庭の柿の木の下にたゞずみて、三日伺ひ居て、窓の穴より家内に入り、竈<sup>かまど</sup>の側<sup>そば</sup>にまた三日をれるほど、（中略）その後母の腹内へ入りたりと思はるれど、よくも覚えず。さて腹内にて母の苦しからむと思ふ事ある時は、側<sup>かた</sup>のかたへよりて居たる事のありしは覚えたり。<sup>56</sup>」とあるように、藤蔵は翁にあの家に入って生まれなさい、と命じられても、なにやら躊躇するところがあったのか、すぐには母の腹には入らず、まずは家の敷地内である庭の柿木の下で三日間様子を伺う。そしてようやく、窓の穴より家の中に入った。ここで藤蔵は、「（源蔵の）家の向かいの路」から「庭の柿ノ木の下」、そこから「家内の竈の側」、そして「母体」へと、3つの境界を越えている。どこからが「幽界」から「顕界」への境界であったのか定かではない。しかしながら、母

---

<sup>55</sup> 『霊の御柱』、166 頁。

<sup>56</sup> 『勝五郎再生記聞』、371 頁。

親が苦しそうにしている時は母体から出て母の側にいたとされていることから考えると、この段階ではまだ魂は新しい肉体の内には定着していないようである。

勝五郎の母せいの体内から出産を経て、ようやく「顕界」へと生れ出ることになったのであろうか。

## (二) 翁について、産土神としての認知

『勝五郎再生記聞』の後半部の篤胤の記すところによると、勝五郎の父、源蔵に「汝は仏道を信仰せるにや」と篤胤が聞くと「己れは仏道を深く信仰と申すにては無けれども、父の時より乞食、道心者などの門口に立つがあれば、少しづつの施物は遣はしぬ。是は後世を願ふなどの意にあらず、只彼等が物を乞ふを憐れむのみなり。家内の者どもは朔望<sup>57</sup>、式日などに、鎮守の神に参詣し侍るを、己れは日々に詣で神々をたふとみ、仏閣といへども縁あれば詣でて捨てつることなし、然れども只今日の無事を祈ることをのみ心とせり。<sup>58</sup>」と答えた。このことより、日ごろ熱心に鎮守の神、産土神を崇敬していることを確信した篤胤は「彼の勝五郎を伴ひたる翁といへるこそ疑なく産土の神にて在りけめ」と述べ

---

<sup>57</sup> 朔望（サクボウ）陰暦で、月の一日と十五日。『漢語林』696頁。

<sup>58</sup> 『勝五郎再生記聞』、380頁。



る。すると、源蔵は先日訪れた西教寺でも同じことを言われたといい、これまで誰にも言ったことがないが、と断りつつ、勝五郎の父、源蔵が勝五郎の出会った翁を産土神と確信する理由として、姉ふさの前にも同じような翁が現れたことを述べていく。

### (三) 姉ふさの産土神との出会い

日頃、鎮守の神を敬う両親の元で育った姉のふさは、二度も庖丁をなくしてしまい、母にますます叱られることを恐れ、産土神に助けを求めた。すると、勝五郎が表す総髪（くわみ）の翁と同じような「髪長く垂れて山伏と云ふものゝ如き頭の翁」が夢の中に現れ、その教えによって無くした庖丁刀を見つけ出すことができた。またこの翁は翌日の夢にも現れ、ふさの前世が罪深き男であったことを教え、今世において、よくよく精進するようにと諫めることがあった。

姉のふさが、夢の中で出会った産土神は、勝五郎の身におこった「人の生まれ変わり」にも通じる前世の因縁を元にした諭しをふさに与えている。しかしその一方で、現世において自分の守護下におかれる産子が困っている際には、たとえ

それが庖丁一つであっても失せ物の在り処を知らせてくれるという、より日常的で身近な神として働いている。

この勝五郎およびその姉のふさの翁との出会いに象徴される産土神は、産子の生死の導きだけでなく、日常生活の守護という役割を果たす。そしてこの産土神との出会いは、人の生死という究極の事柄にもかかわりながらも、同時に日々の空間もしくはそれに隣接したより身近な他界においても起こっている。

平田篤胤は勝五郎の生まれ変わりの事例において、「見識<sup>みしき</sup>せまき漢意<sup>かんぎ</sup>の学者たち」は魂の再生の理を全くわかっておらず、生まれ変わりをあるまじきことのよ  
うにいい、輪廻転生を説く仏者たちは、皆が再生、転生するようにいうが、自らはそのように考えていないという。そして、『古事記』の伊邪那岐<sup>いざなぎ</sup>、伊邪那美<sup>いざなみ</sup>の  
黄泉比良坂<sup>よもつひらさか</sup>の別れを引用し、人の生まれ変わりを以下のように結論づける。

誠は人の世に生まれ出づることは、神の産霊<sup>むすび</sup>によりて一日<sup>ひとひ</sup>に千人死ぬ  
れば新たに千五百人生まるゝ由縁<sup>ゆえん</sup>なる中に、いと希々<sup>まれまれ</sup>に人を物とも、物  
を人とも、また人を人とも再生せしめ給う事もあるなるを、仏者のその  
希なることを常にとりて、然<sup>さ</sup>は論<sup>あはづら</sup>ふなりけり。さて然やうに再生転生  
せしめ給ふこともある物から、其の事を再生転生の人ごとには知らしめ

ざるは、神の幽事ひめごとの中の秘事ひめごとなるを、いと希々に知らせ給ふこともあ  
るは、幽ひめき由ある事とは通きこゆれども、凡人ただひとの何ちふ御心と云ふことは測  
り知るべき事にあらず<sup>59</sup>。

つまり、黄泉比良坂における伊邪那岐いざなぎ、伊邪那美いざなみの取り決めにより、一日千人  
死にながらも産霊の力によって、千五百人生まれ出ることになってはいるもの  
の、生まれ変わりというものは仏教の輪廻転生説とは異なり、どの魂にも起こり  
うることではなく、神の神秘に係る稀な事象として篤胤は捉えた。そして、勝五  
郎の転生に関与した産土神の幽界における位置づけを、次のように記している。

世人の死にて往くなる冥界の事の本は神世に天照大御神、産霊大神の詔  
令によりて、杵築大社にしづまり坐す大国主神の無窮に治め給ふ御業なる  
ことは、神典どもに委しく記し伝へて明らかなるを、なほ其の古伝に本づ  
き熟々に推し究め考ふるに、そは、幽冥の事の大本を統領給ふにこそあ  
れ、末々の事至りては、神々の持ち分け掌り給ふべき理あり。さるは凡て  
この現世の上に大君おはし坐して、御政事の大本を統治め給ひ、国々所々

---

<sup>59</sup> 同、384 頁。

をばそを分かち司る人々を任して治めしめ給ふが如く、冥界の事の大本は  
大国主統治め給ひ、其の末々はまた国々所々の鎮守の神、氏神、産土の神  
など世に申す神たちの持ち分けて司りたまひ、人民の世にある間は更にも  
云はず、生まれ来し前も身退りて後も治め給ふ趣なり。<sup>60</sup>

国譲りによって顕世の支配を瓊瓊杵尊に譲渡した大国主神は、天照大御神、産  
霊大神の詔令によって、冥界の幽政を司ることになる。この幽世の大本として君  
臨する大国主神の下にはさまざまな神々がそれぞれの国や地方を治めている。こ  
れが、いわゆる鎮守の神、氏神、もしくは産土神と呼ばれる神であると篤胤はい  
う。この氏神もしくは産土神は人間がこの世（顕世）にいる間だけではなく、生  
まれる前も、そして死んでから後も、死後の世界（幽世）において人々を守護し  
続けると考えた。

（改頁）

---

<sup>60</sup> 同、388 頁。

#### 第四節 まとめ

本章においては、本田親徳の霊学思想の基礎となった国学的議題である「死後の魂の行方」と「幽冥界」の位置づけの問題と人間の生死の直接的に関与する「産土神」の存在について、平田篤胤の『霊の真柱』と『勝五郎再生記聞』を取り上げて考察をおこなった。人間が生まれる際に産霊神から賜る靈魂が、その死後の肉体を離れた時に何処に「帰く」のか、そして魂の帰り着く先とされる「他界」は何処にあるのか、また実際に生まれ変わりを体験した人物である勝五郎の言動はどのようなものであったかを考察していった。篤胤の考える「幽冥界」とは、本居宣長が説いたような、汚き世界「黄泉」とは違い、この世に隣接する水平上に位置しており、「現世」とは鏡のような世界であるという。そして、人間は死後大国主神が主宰する幽冥界に移行し、神霊となる。そこで、子孫を守護する役目を拝命し、顕世において、子孫の守護神霊となると考えた。篤胤は、仏教の教えにあるように全人類が皆、輪廻転生するのではなく、人智を超えた神の働きとして、「生まれかわり」が生じることもあり得ると考えた。そして「人間（氏子）の生死に関わる神」として、「産土神」が重要な役割を果たすと考えた。篤胤によれば、「産土神」とは「幽冥界」を主宰する大国主神の眷属神をさし、各地域を大国主神に代わって統治していると考えた。

## 第二章 六人部是香の「産須那神論」

平田篤胤は文政六年（1823 年）に朝廷への著作の献上および、本居宣長の墓参を目的とした関西周遊をおこなっている。この時、仁孝天皇への取次ぎをおこなったのが山城国<sup>およくに</sup>乙訓郡<sup>むこう</sup>向日神社祠官<sup>むと</sup>六人部<sup>べさだか</sup>節香、是香<sup>よしか</sup><sup>61</sup>（寛政十年もしくは文化三年－文久三年）（1798 年もしくは、1806 年－1863 年）親子であった<sup>62</sup>。篤胤は、京都滞在中に向日神社にて講演をおこなっており、是香は同年九月に篤胤の門人となっている。是香は、もともと本居大平（宝暦六年－天保四年）（1756 年－1833 年）を師として、国学を学んでいたが、気吹舎入門後の是香は研鑽を重ね、後に関西平田派の重鎮となる。本章においては、篤胤が『霊の真柱』および『勝五郎再生記聞』において示唆した顕幽二元論及び、産土神の働きを是香がいかに発展させていったのか、『産須那社古傳抄廣義<sup>63</sup>』に注目することで明らかにしていきたい<sup>64</sup>。

是香は『産須那社古傳抄廣義』を執筆した動機を以下のように説明する。

---

<sup>61</sup> 舎号は 葵舎、篤舎（すずのや）。気吹舎『誓詞帳』二六八番、及び『門人姓名録』二八七番に文政六年九月入門、山城国乙訓郡向日町向日神社神主、後従五位下美濃守、六人部宿祢是香[後号一翁]、六人部縫殿とある。『平田篤胤全集、別巻』、28 頁、262 頁。

<sup>62</sup> 節香は是香の伯父にあたる。

<sup>63</sup> 巻末に「安政六年正月廿六日より執筆二月十四日書終ぬ」とある。『産須那社古傳抄廣義』『神道大系諸家神道（上）』、287 頁。

<sup>64</sup> 六人部是香による産須那神についての論考は『産須那社古傳抄』及び『産須那社古傳抄廣義』があるが、より細かい産須那神についての解釈が記されている『産須那社古傳抄廣義』を本稿の基本文献とする。

彼地獄極樂の妄説に迷ひ、見性成佛の偏見に陥り、或は消散睡夢の憶説  
に惑悩して、貴賤の衆庶、無上の神勅を曉る事能はず、空く心魂を勞し  
て、生涯其死後の魂の在所を慥に得悟り知らずして世を過しつる人、數  
百年の間、幾千萬とも算云べくあらざりしは、甚も甚も憐むべく働し

65。

是香によると、世にはびこる仏説、儒説の悪影響で人々が、死後の世界につい  
て、そして人間の肉体が滅びた後どのようなのか、という本来の死後の魂の  
行方について、理解をせずに日々を生きる状況を憂慮する気持ちが『産須那社古  
傳抄廣義』を執筆する強い動機付けになったという。つまり是香は日向神社の神  
官として、また平田派国学者として、地縁による<sup>うぶすな</sup>産須那神の守護を知らずに生き  
る人々を在世より教化し、「死後の靈魂の安心<sup>66</sup>」を与えることを目指したとい  
える。

---

<sup>65</sup> 『産須那社古傳抄廣義』『神道大系諸家神道（上）』、271 頁。

<sup>66</sup> 同、276 頁。

## 第一節 『産須那社古傳抄廣義』

### (一) 是香の世界観

是香は篤胤と同じく顕幽二元論を採用し、顕界を天照大御神の子孫である天皇が治め幽界を大国主大神が主宰するという考えを持っているものの、この顕幽二元論に至るまでの世界創造の宇宙観が篤胤とは異なる。

さるは天地始りし後、天照大御神は、高天原といひて、則太陽を領知し給ひ、其御弟と坐、須佐之男大神と申すは、此一地球の大主君として、此日本、唐土、天竺などいふ狭き事にはあらず、一地球と云は、其形、手球の如く丸き物の、其周圍には、皆國々と海とを以って包たるが如きものなるを、其一地球に附きたる國々を、五ツ割にして、是を五大洲といふ、其一分アジヤと云ひ、次をエウロッパ、其次をアフリカ、其次を南アメリカ、北アメリカといふ、此五大洲を残らず、須佐之男大神の掌り給ふべく、彼天照大御神と共に、其御親と坐、伊邪那岐ノ大神より與授け給へるなり、然るを此一地球を造固め給はんとするには、先根國とも、底國とも云ひて、此の地球の眞中にも、一の國土あり<sup>67</sup>

---

<sup>67</sup> 『産須那社古傳抄廣義』『神道大系諸家神道（上）』、219 頁。



是香の世界観において天地の始る時、伊邪那岐ノ大神より、天照大御神は「太陽」である「高天原」を、そして須佐之男大神は「地球」を領地として授かったとする。篤胤が『霊の真柱』において採用した、服部中庸の「高天原一葦原中国一黄泉国」三層構造はとらず、『日本書記』一書、第六<sup>68</sup>を基底に当時の西洋的宇宙観を利用し「高天原＝太陽」、「葦原中国＝地球」と考え、黄泉国すなわち根の国を地球の真ん中にある国土として考えた。また篤胤においては、日本を唯一の神国として峻別していたが、是香の思考の中では、五大陸および中心の根の国を含めた地球全体を須佐之男大神の領土として考えている。そこで須佐之男大神は地球における草木人畜の生育、つまり万物の生成を使命として持っていたため、まず根の国から統治を開始したとされる。そして大国主大神の出現後は、この神に地球上の支配を任せ、根の国に移ることになるが、その理由として、「先此根國より造固め整置給はざれば、此地球に草木人畜の生育する事能はざる深き謂のあるが故に、止事を得ず」とする。そして天照大御神の太陽の支配、須佐之男大神による根の国の支配によって、地球上の万物は「上は太陽とます、天照大御神の御光輝をうけ、下は此根國より發出する諸氣」を養分として受けることが

---

<sup>68</sup> 「伊弉諾尊、三の子に勅任して曰はく、「天照大神は、以て高天原を治すべし。(中略)素戔鳴尊は、以て天下を治すべし」とのたまふ。」「神代上第五段、一書、第六」『日本書紀』、48頁。

可能になったとする。先に見たように宣長においては、根の国は死者の魂が趣く地下世界＝黄泉国とされ、篤胤においては、死者の帰る冥界は地上に存在する他界＝異次元のようなものとみなされていた。これに対して是香は、「地球に根國ある事は、則草木に根ありて、それより、水氣、鐵氣、硫黄氣、燄硝氣、鹽氣（しおけ）、などいふ諸氣を吸い寄せ集て生長化育するに、異なる事なし、されば名をも根國とは云なりけり<sup>69</sup>」とし、生物の成育に必要な養氣を輩出する国として、根の国を新たな形で定義づけたのであった。

## （二） 幽政の主としての大国主大神と産須那神

是香によると、地球上の国土造営の任をうけた大国主大神は、自らの子弟および眷属の神たちを率いて、まず、最初に日本国を造営した。続いて、眷属の神たちを遣わして、唐土、天竺、アジア大陸、ヨーロッパ大陸ほか残りの3大陸に至るまで国土造成を進めたとする。そして大国主大神自らは日本国の大君主として万機の政令を敷施した。はるかに年を経た後、「大祖とます、彼高皇産靈大神、天照大御神の御議らひを以って、天照大御神の御孫、天津日子穗廼邇々杵命<sup>70</sup>を、彼高天原より天降らしめ給て、此大國主大神にかはりて、天下の萬國をも統

---

<sup>69</sup> 『産須那社古傳抄廣義』、220 頁。

<sup>70</sup> アマツヒコネホノニギノミコ

御せしめ給ふ事ぞ成れりける」とし、これ以後、顕政を天照大御神の子孫である天皇が行なうことが定められたと考える。その代わり「大國主大神は、今まで高皇産靈大御神の敷施し給へりし、幽冥政と申て、目にこそ見えね、此世中に人を生産せしめたまふも、生れ出つる後は、其人の生涯の禍福吉凶を始め、萬事の上を掌る事も其身死して屍と魂と分別たる後は、其魂を支配し給ふ、至貴至重の職<sup>ツカサ</sup>を授け給へり<sup>71</sup>」として、幽界の主宰神として、人の生死および、生前の禍福吉凶を支配する役割を賜ったとする。また是香の考えでは、顕界を統治していた時まで大國主大神は人体を有しており、幽政の大任を受けた後、隠身の神となった。しかしながら隠身といえども、大國主大神の体が滅び去ったわけではなく、顕界から幽界への移行により人眼によっては不可視となっただけで、「其大宮の裏に、永代無窮に御鎮座坐ましまして、萬代までも幽政を掌り給ふ事とぞ成れりける<sup>72</sup>」と思考した。

そして、邇々杵命の出現後、幽政を掌った大國主は、子孫および眷属たる八十萬の神を万国に派遣し、この地球上の幽界の支配をも完成した。この諸国に派遣された大國主大神の子孫・眷属が、今の産須那神の基礎となったと是香は考える。そして顕世において、各地に奉行所・代官所などがあり、これらの諸機関の

---

<sup>71</sup> 同、221 頁。

<sup>72</sup> 同、221 頁。

上に江戸の本府があるという、是香が生きた江戸時代のピラミッド型の顕政を、  
幽界の幽政においても想定した。つまり幽政においては、天日隅宮すなわち出雲  
大社が幽界の大政府であり、諸国の産須那社がそれぞれの地元の人々を管轄して  
いる奉行所となる。是香は平田派の門弟として、篤胤が『霊の真柱』『仙境異  
聞』『勝五郎再生記聞』の中で提示したこの世に連続する他界観を継承し、顕界  
と幽界を同型の他界と考える。そして是香の『産須那社古傳抄廣義』の特徴とし  
て、産須那神を産子の生死の全行程を管轄する神とみなし、各地の産須那神社  
は、顕世に生きる人々が今世の福德と死後の安寧を願うための唯一の幽界の窓口  
であるとした。

### (三) 産須那神について

産須那神の語源を是香は次のように定義づけている。

産須那といふの義は、（中略）為<sup>ミム</sup>産生<sup>ウツム</sup>という言葉なるを、ミムを約むれば  
ムとなるを、通音ブに通はして宇夫須とは云るにて、其牟須とは、産靈ノ  
神と申を始め、苔のむす、或は、むす子、娘などもいふ、むすにて、俗に

云は、苔のむすは苔の出来ること、むすこ・むすめは出かした子、出かした女、といふほどの意なり、さるは生成<sup>なみよ</sup>すといふが、言の本なればなり、然るを蒸<sup>か</sup>といふ義ぞおもふは非なり、かゝれば産須那といふ時は、萬物を出かし坐す、根本といふ意とはなる事なり、其は、那とは根といふ事なるを、同韻の那とは通はしたるにて、少彦名命と申す神を、少彦根とも申も同じことにて、其根とは、草木の根と云ふも同じく、根より幹も枝も葉も生ずるものなれば、草木に根のあるが如く、氏子地に生ずる萬物の根元といふ義を以て、産須那と稱し奉れる<sup>73</sup>。

---

<sup>73</sup>是香は、ウブスナに対し、産土の字を当てるのは、大きな間違いであるという。万物の生成の根本の神に対し、土の字を使うようになったのは儒者の僻事のせいである、としながらも次のような民間信仰をその理由としてあげている。

人々が遠いところへ旅行をする際に、地元の神社<sup>ウジガミ</sup>に参詣し、その社内の土を少し貰い受けてお守りとして携帯し、旅行中に具合が悪くなった場合には、地元の氏神に遥拝してからお守りの土を舐めるか、煎じて飲むなどすると、本復するとの奇瑞があり、この土を舐めるところから、土と砂は同種類のものとして当て字が利用されてきたことをあげている。この地元の神社の土を舐めると病気が治るという言い伝えを是香は、ただの俗信とは考えていない。その土地土地の産須那神は、人だけではなく草木に至るまでの生成に関与しており、「土中にも悉く幽政を施し置き給ひつれば、其地に生育したる人の是を服すれば、功驗有べき事は當然のことなり、況や其産須那神の守の爲と賜りたる土砂なれば、其神の幸福を與給ふはいうまでも無く(中略)萬金丹や赤玉、金屑丸などの及ぶ所にはあらず」とする。『産須那社古傳抄廣義』『神道大系諸家神道(上)』、215頁。

是香によれば、産須那神は産靈神より生じ、氏子地において、万物の生成に  
関与し、勿論人間の誕生にも作用する<sup>74</sup>。男女の交りにおいて、懐妊する場合と  
しない場合があるのはなぜか。是香はそこに、男女が交配によって受精し、母の  
胎内で胎児が成育するという作用を超えた神の働きが存在すると説く。蘭学は最  
新の科学であるとしながらも「いかほどに道理攻にする近來の蘭学者といへど  
も、量知る事能はざれば、其所に到りては、産靈の所爲ぞと云より外は有べきに  
あらず、彼稻にもあれ、瓜茄子にもあれ、同じ事」とし、人間の創造は男女の受  
精だけでは成り立たず、そこに産靈神から「精神」の付与がなければ生命は活動  
しないとする。詳しく述べるとするならば、人間をはじめとして、五穀、草木な  
どの万物がこの世に生み出されるには、五柱の産靈大神、および造化の神等のそ  
れぞれの働きが根源に作用するという<sup>75</sup>。しかしながら、『産須那社古傳抄廣  
義』で是香が強調するところでは、産須那神社は幽政において産子の生死に関わ  
るすべてを管轄するが、五柱の産靈神および造化の神々の働きがなくしては、人

---

<sup>74</sup> 産靈神の説明は『古事記傳三之卷』における「神代一之卷」に「高御産巢日神、神産巢日神（中略）御名義、神御は高御と並びたる稱辭なり、産巢日は、字は皆借字にて、産巢は生なり、其は男子女子、又苔の牟須（中略）など云牟須にて、物の成出るを云フ、（中略）此ノ天地を始めて、萬ヅの物も事業も悉に皆、此ノ二柱の産巢日大御神の産靈に資て成り出るものなり。」を引いている。『本居宣長全集第九卷』、128-129 頁。

<sup>75</sup> 是香の特徴として、人間の創造を他の創造と区別せず、必ず植物の生成と共に語られる。

間は受胎しない。産霊神の作用を取り次ぎ産子に施すのは、あくまでもその土地  
その土地の産須那神である。

『産須那社古傳抄廣義』巻一、五段においては是香は受胎における産霊神の働  
きについて以下のように説明する。

人を生産せしめ給には、五柱の産霊大神の幸福を蒙らざれば、應は  
ざるを、其五柱の神等の中にも、心魂を賜はるには、津速産霊神<sup>76</sup>、  
興台産霊神<sup>77</sup>などの取持給ひ、人毎に持前の心魂に、荒魂・和魂とい  
ふ二魂を取添て賜はるものなり、此三魂は何れも頭一腦中に留り坐す  
が故に、一身中に頭ばかり大切なる所はある事無し、此三魂の留り坐  
ます所を精神府といふ。また同じ頭腦中にて、後腦といふ所に、造化  
ノ神鎮座し給ふ、是を造化府といふ、造化神とは、身體を成育し、給  
ふ神等なり、かくて一身の動一揺活一潑するの機合を幸福し給ふに  
は、活産霊<sup>78</sup>、足産霊<sup>79</sup>、安産霊<sup>80</sup>の神等の執持せ給ふことなり、され

---

<sup>76</sup> ツハヤムスビノカミ

<sup>77</sup> コトトムスビノカミ

<sup>78</sup> イクムスビノカミ

<sup>79</sup> タルムスビノカミ

<sup>80</sup> ヤスムスビノカミ

ば此五柱の神等を精神活潑するの産靈神とは稱し奉るなり、偕また身體の成整ふ事は、風神、級津彦ノ神、火神、火雷神、金神、金山彦ノ神、水神、水波ノ賣神、土神、埴山姫神、此五柱の神等の各其職掌に就て幸福し給うが故に、身體は成整ふものなり、されば此五柱をさして、造化の神と稱し奉るなり<sup>81</sup>。

また『産須那社古傳抄廣義』卷三、十二段において、再度、脳内の神々の存在を次のように述べている。

兒の母の胎内に<sup>きど</sup>孕る時、産靈大御神より一箇の精神を賜はるを、其精神に、荒魂・和魂といふ二魂を副賜へり、また造化神よりは、造化神を副賜はれり、されば精神と荒魂・和魂とは、頭腦中に三箇の神座ありて、此處に留坐して、専心魂の活用を掌り給へり、是を精神府といふ、また造化神は、後腦中に一箇の神座あり、此處に坐まして、身體を製造する事を掌り給へり、是を造化府といふ、これに依りて日夜に成長して、遂に成整て分娩するの期にも到るものなり<sup>82</sup>

---

<sup>81</sup> 同、229 頁。

<sup>82</sup> 同、259 頁。



これらの説明を総合すると、人間の脳内には神々が住まう精神府と造化府という部分がある。造化府は後脳つまり後頭部に存在するとされるが、精神府の場所は明記されていない（おそらくは前頭部か）。人間が創造されるにはまず、人間が死んで、肉体と靈魂が分離した後に神靈となる一精神を産靈大神から賜り、さらに心魂の動静作用を持つ荒魂・和魂を津速産靈神・興台産靈神から賜る。この一靈二魂を是香は三柱の神として捉えているようで、精神府には三つ神座が存在する。その一方で、肉体形成に関しては、風・火・金・水・土の五要素の神々が集まって一つの体が造られると考えられているせいか、造化府には一つ神座のみが存在する。そして精神および肉体を活発に活動させるために、活産靈神、足産靈神、安産靈神の三柱の産靈神が人間の脳内にて作用していると考ええる。

## 第二節 人間に宿る神魂

### （一）穢れ觀念について

是香によると、人は精神として、産靈神より心魂を賜るという神性を有しているので、元々は清浄潔白な存在である。そして心魂は肉体の鍛錬によって強大剛猛になるのではなく、心の用い方によって、強くなったり大きくなったり、ある

いは、弱くなったり小さくなったりするという。つまり、外的な苦行によって人の神性が増幅するのではなく、己の心の修養によってその魂を強め、自らの神性を高めることができると説く。産須那神は顕世において日夜、産子の守護をつかさどるとしながらも、顕世に生きる間に人間が己の精神を善に用いるとも悪に用いるとも産須那神は一切関与しないという。是香はここに、人間の自由意志が存在すると考える。そして「悪事に用し心魂たりとも、別に穢たる物にあらず」とし、人間の死によって、靈魂と肉体が分離した時点で、肉体に穢は歸し、心魂の清浄性および神性は保たれるとする。つまり、神から付与された心魂はあくまでも神魂であり、その神性は消滅しないが、生前の心のあり方によって心魂の大小強弱が変化し、それが死後の神靈の品位の問題へと連続していくことになる。この神靈の品位の高低については是香は、独自の神靈階級を創造設定した。それを「上津大兄」「下津大兄」という。

## （二）上津大兄・下津大兄

「上津大兄」「下津大兄」の概念について、是香は次のように説明している。

兄とは、人を崇め敬ひていふ言にて、兄を兄といふも則此意なり、  
それに大といふ言を加たるは、取別て尊稱するが故なり、さて上津と  
いふは、下津大兄といふに對したるにて、上下の<sup>かみ</sup>上なり、如斯大兄と  
云を上下に分別たるは、貴賤共に氏子の人等の死すれば、其神靈は、  
悉く其處なる産須那社に参候する定りなれば、其参候したる神靈の中  
にて、此顯世に存在せるほどに、善心良行の人は其神位舉られて、上  
ツ大兄の詰所に居り、惡心暴行の人は、下ツ大兄の仲間に入るなり、  
此下ツ大兄と云中には、妖魔などの類も有て、上ツ大兄に對しては、  
一向に頭の擧らぬ者なり、されども是もまた幽政に用ひ給ふ事もあれ  
ば、其仲間に置て、御用ある時は使令<sup>ツカサ</sup>給ふ事なり、(中略)此神靈の神  
等を、上古より上ツ大兄・下ツ大兄と稱へ號しつる事は、内宮年中行  
事に見えて、其言の義は、神於呂志神歌考に注へり<sup>83</sup>

人が死ぬとそれまで頭の中に心魂として存在した靈魂は肉体を離れ、氏神であ  
る産須那社に参詣し、神靈として位階をうける。上津大兄の中でも特に優れたる

---

<sup>83</sup> 同、228 頁。

神霊は、顕世において神として祭られるという。これらの人間から神になった人神も、神代の時代に五大陸の開墾と造営を大国主大神の下で完成させた大国主大神の子孫および眷属の神々とともに、産須那神として諸国の村里を分担し幽政を掌っていると是香は考える。

死後、神となった人物として、是香は因幡国宇部神社、筑紫国高良神社に鎮座する武内宿禰命<sup>84</sup>、大宰府天満宮、北野天満宮の菅原道真、護明大明神である和氣清麻呂、日光東照宮に鎮座する徳川家康、宋祖神となった諸大名、伊予の和霊社となった山家公頼、下総の宋五社(ママ)の佐倉宋吾などをあげている<sup>85</sup>。なお、「上津大兄」の中でも武内宿禰や菅原道真などの天皇に仕え、忠義を貫いた「拔群の人等」は直ちに幽府に雇用され、神として産須那社に鎮座する。その一方で、普通の人々の中で善心良行の人たちは、その死後、氏子であった社の神霊として、その社に仕えるという。この心持がよく、善行を積んだ人々は其の死後、幽冥界においては、生前の貴賤を問わず、その霊の質によって位が授けられ、幽政に登用されるとし、顕界の身分制度を超えた幽界の実力主義を是香は唱える。

その一方で心持が悪く悪行をなした人物は、死後、「下津大兄」に分類されると

---

<sup>84</sup> 鳥羽上皇の天仁三年、出雲大社造営の際には幽界において普請奉行になっていたと考える。同、227 頁。

<sup>85</sup> 同、227-228 頁。

いう。妖魔天狗の類もこの「下津大兄」に属するというが、「下津大兄」の詳しい説明は以下のとおりである。

顯世にあるほど、心を悪事に用いて、不忠・不孝・不義・不慈などの、  
良からぬ筋の事どもを成したる人は、(中略)其身没するに及ては、是も同じく産須那社に参集するといへども、凶徒界と云て、謂ゆる天狗の類の妖魔の群黨と爲さしめ給ふ事なるを、此凶徒界に陥りては<sup>86</sup>、種々艱難辛苦の所行ありて、永く困苦に窮厄せり<sup>87</sup>

神道家として是香は極楽と地獄という仏教的な死後の世界を設定しないかわりに、幽冥界内において靈魂の品位によって異なる階層世界を設定する。善人は、上津大兄として、「神位界」へ悪人は、「凶徒界」へ下津大兄として送られ、それぞれに適した幽世の当用がある。妖魔天狗が住む凶徒界に落ちた人物として、崇峻天皇を弑し、物部大連を殺した蘇我馬子<sup>88</sup>、聖徳太子の御子である山背大兄

---

<sup>86</sup> 「凶徒界に陥りて・・・」という表現をするものの、幽冥界における「凶徒界」の位置を垂直的空間把握をもとに「神位界」の下部にあるいは「根国」に存在するというよう記述は『産須那社古傳抄廣義』においては、見受けられない。

<sup>87</sup> 同、254 頁。

<sup>88</sup> 蘇我馬子の父である蘇我稻目を是香は「さしも不忠の行跡も聞こえざりしかど此人始て佛法を尊信して、永世衆人の迷ひを残し、子孫斷滅の不慈不孝の道を世に弘めたりしかば、産須那神を始め、冥界神も嫌惡給へりしかば、其身没しつる後も、果たして凶徒界の中なる煩

王一族を弑した蘇我入鹿、後白河院を鳥羽福原に押し込め、公卿らを殺した平清盛、また叛臣の代表として北条義時、足利尊氏、そして護良親王を弑した淵邊義博の名前をあげている。

つまり人の死後、その靈魂は幽冥界内の「神位界」に行くか「凶徒界」に落ちるのかは、生前の「顕界」における生き方と連続しており、この「顕界」における人間の行状を見守っているのが、それぞれの地域の産須那神、または、産須那神から命を受けたその社に管轄された神靈(大兄)であると是香は説いている。この産土神もしくは神靈は、人が顕界に生きる間、諸病を始め、諸々の災難が氏子に降り掛からないようにと昼夜を問わず見守り続けている。この様子を是香は「産須那神の吾氏子を慈愛し給ふ状は、わけも無く親の吾子を慈愛すると同じ御心ばえなればなり<sup>89)</sup>」とし、顕世における万物の生成をつかさどる産須那神の「氏子」にたいする「親神」としての役割を強調している。その一方で「幽世」の任をうけた産須那神の厳しい側面について以下のように説明する。

---

之大人神の所属と成て、疱瘡神とぞ成竟る」とし、稻目とともに、『今昔物語集』卷第二十七、第十一、「或る所の膳部（かしはで）、善雄（よしを）伴大納言の靈を見し語」から行疫流行神となった伴善男の名前をあげ、悪人といえども、魔道に落ちず、疫病神となったのは、天皇を弑するほどの罪を犯したわけではないので、幽罰は軽くなったとする。同、225頁。

『今昔物語集－本朝世俗部上巻』、341-342頁。

<sup>89)</sup> 『産須那社古傳抄廣義』、234頁。

氏子の人毎に附副守り給ふとしては、恆に人々の行う行作の善惡は勿論にして、いまだ行作の上には顯はさず、心中ばかりに思ふ心ノ裏の隅々までも、此附副居給ふ靈神の見透し鑑給ひて、其趣を産須那神に通達し給ふ事なれば、いかに隠しても、氏子の人々の上は、産須那神の御許には隠れたる處ある事無し、かゝれば此一條ばかりにても、何處の産須那社にも、靈神等數多あらざれば應<sup>おほ</sup>はざる事を悟べし<sup>90</sup>。

人間は日常の行為だけではなく、心の中までも大兄（神靈）もしくは産須那神に見透かされ、より上の神様に報告がいつてしまう。この神靈の役割は民間信仰の中で常に語られる個人の守護に専心する守護靈とは異なり、是香が産須那神を幕藩体制における奉行職に例えるように、同心や目明しのような役割を担っている。

篤胤が『靈の真柱』『勝五郎再生記聞』において、「人間の死後の魂の行方」として、魂の行き着く「幽冥界」という他界の存在に興味を集中させ、「抑、<sup>そもそも</sup>その冥府と云ふは、此顯国<sup>このうつしくに</sup>をおきて、別に一<sup>ひと</sup>處<sup>ところ</sup>あるにもあらず、直<sup>ただ</sup>ちにこの顯国<sup>うつしくに</sup>の内いづこにも有なれども、幽冥<sup>みよ</sup>にして、現世<sup>うつ</sup>とは隔<sup>は</sup>たり見えず。<sup>91</sup>」という言

---

<sup>90</sup> 同、243 頁。

<sup>91</sup> 同、167 頁。

葉のとおり、「幽界」は「顕国」に隣接はしていても、そこは、はっきりとした空間および境界設定がされていない「ほのか」な場所であるのに対し、是香は、地縁による産須那神と産子の顕幽界を股にかけた結束を強調しており、そこでは「顕界」と「幽界」が同じ空間領域を共用し、お互いがぴたりと重なることになる。産霊神から心魂を賜って顕界に生まれた人間は、生きている間中、生まれた土地の産須那神の守護を受け続ける。そしてその死後は、霊魂のレベルによって上津大兄・下津大兄の差はあれども、「幽界」において、「顕界」で、お世話になった産須那神の社領内でその産須那神に仕える神霊となり、定められた使命を全うする。つまり、ある特定の産須那社領内のみで、人と神霊の循環が続いていくことが想定されているといえる。

### （三） 産子の務め

それでは、常日頃、神霊によって、行為と心の内を見透かされている人間は、如何にして、日々を過ごせばよいのだろうか。是香は次のように説いている。

然るを其御教といふは、別にむつかしき事にはあらず、唯第一に、其主君を大切に思ひ、主君の御爲には、我が妻子・従類は云も更なり、我身命



をも擲て奉公し奉る事を専一とし、第二には、仁慈と云ひて、人を愛憐するあはれみの心深く、自他に限らず人の難儀を救ひ、物の生育するやうにと心掛る事なり、第三には、我産須那神は、夜晝恆に我傍を離れ給はず、付添居給て、心に思ふ心中の隅々まで見透し居給ふ事なれば、聊にても惡事を思付時は、いまだ詞にも出さず、所作にもあらはさゞれども、委曲に見抜給て、顯世・後世につけて、貶褒し給ふ幽政の上などを、常に寝てもさめても忘れぬやうにとの御教にて、此三ツの外に、教立給へるといふ、をしへかたはあらざるなり<sup>92</sup>

是香が『産須那社古傳抄廣義』を出版した理由が、死後の魂の行方を知らず、様々な教義に踊らされている氏子たちを再び地縁の社に結集させることにあるため、本書において、生前の行為及び心持ちによって死後の靈魂の位階が決定すると示唆しながらも、是香はあえて日常生活を超えるような行法を薦めたりはしない。忠君仁慈をつくし、顯世における産須那の絶えざる守護と死後の幽政における登用を肝に銘じて日々を送ることのみが日々の生活で大切なこと、と是香はいう。そして「毎朝まつ朝日に向て禮拜し、次に産須那社に參詣して禮拜祈請する

---

<sup>92</sup> 同、 235 頁。

禮儀が闕べきにもあらず、其社程遠く、或は繁緊にして暇無き人などは、よし其社には参詣ずとも、其家より遙拜をだに勤行はずンばかなふべからず」といい、日拝を起床後の第一の儀礼とし、その後に産須那神への遙拝を挙げている。日拝が第一であることの理由として、是香は、『仙境異聞』において日拝は、神仙境で行われる勤行であることを指摘しつつ、以下のように説明づける。

日ノ神の御子孫の、今も主上と坐ます皇國にして、其御蔭は顯幽に就て厚く蒙り居る事なれば、まづ朝起いでゝ手水をだにつかはゞ、直に禮拜し奉らであるべき事ならんやは、此朝日に向て禮拜し奉る禮儀、やがて主上を尊敬し奉る心を失はざるの基なるうへ、其光輝を蒙りて、身體よりはじめ、萬物の生育する御禮をも賽し爲ずて有るべき事ならんや

<sup>93</sup>。

是香の教えを守る人間は、早朝に太陽を拝するという行為によって、太陽を主宰する天照大御神に思いを馳せ、その子孫である天皇を擁する特別な世界に自らが存在すること、そして太陽の放つ聖なる光によって万物が育まれることを悟

---

<sup>93</sup> 同、283 頁。

る。この悟りを得た後に産須那神を拝することによって、人間は、自らを産霊神及び産須那神から心霊を頂いた聖なる存在であることを自覚し、生命力に満ち溢れた存在として顕界に生きることができるようになる」と是香は説いている。

### 第三節 まとめ

関西平田派の重鎮であった六人部是香は、平田篤胤の「顕幽論」と「産土神」思想を継承しながらも、向日神社祠官として、氏子である産子が「儒説」「仏説」によって、本来の「死後の魂の行方」について理解せず、日々生きていくことに憂慮し、『産須那社古傳抄廣義』の執筆をもって、産子の在世における教化を目指した。平田篤胤の思想においては、「日本国」を唯一の神国と捉えていたが、六人部是香の思想においては、「太陽」を天照大御神が主宰し、須佐之男大神が「地球」全体と地球の真ん中にある「根の国」を統治し、その後、大国主神が「地球全体」を統治するものの、天照大御神の御孫である瓊瓊杵命に顕世を委譲したため、大国主大神は地球上の「幽冥界」の主宰神となったと考えた。是香は、篤胤の「顕幽論」を受容し、「顕世」と同世界の「幽世」を構想した。そして、是香が生きた時代の江戸幕府を頂点としたピラミッド形の顕政を幽界の「幽政」を想定し、産須那神社を「幽界」における奉行所とした。是香は、「顕界」と「幽界」を同型

の「他界」として位置づけることにより、この世に生きる人々がこの世の側から、今世の福德と死後の安寧を願うことができる唯一の窓口として産須那社の新たな意味づけをおこなった。是香の考える産須那神は自らの生きる「産子」を昼夜守護しつつも、その行状をつぶさに注目し、産子が死んだ後は、産須那の社において生前の行いに対する裁きをおこなう。そして産子の靈魂はこの裁判の結果、神靈として位階をうけ、「上津大兄」「下津大兄」のどちらかに分配され、産須那神の社領内で産須那神の配下として働くことになる。つまり、現世に生きている間にいかに靈魂の品性および清浄性を保つことができたかが、神靈となった際に重要となるとした。しかしながら、是香はこの死後の神靈の位階を生前の「言動」そして「心持ち」によって決まるといい、親神ともいえる産須那神の鎮座する産須那社への参詣と日拝以外、特別な靈魂の修養法を説くことはしなかったといえる。

### 第三章 本田親徳の「産土神論」と「鎮魂法」

前章までに平田篤胤によって魂の行方の問題と共に提唱された「顕幽二元論」が、六人部是香により、「顕世における産須那神の産子への守護」、と「幽界における神霊の位階の問題」へと発展したことを考察した。本章においては、霊学神道家である本田親徳（文政五年－明治二十二年）（1822年－1889年）の『産土百首』および『産土神徳講義義上・下』をもとに、平田篤胤そして六人部是香によって論じられてきた「魂の行方」及び「人間の神性」の問題が、本田親徳の思想にどのように継承されていったのかを考察する。

#### 第一節 本田親徳の霊学思想への国学の影響について

##### （一）国学者との交流について

本田親徳は、鹿児島県国学局の国学掛として奉職しつつも、自らを国学の徒と考えていたかどうか、これは定かではない<sup>94</sup>。「先哲敷島ノ大和心或イハ何々ノ

---

<sup>94</sup> 気吹舎の門人帳である『誓詞帳』及び『門人姓名録』には、薩摩藩国（鹿児島藩）出身の本田姓の門人は数人いる。『誓詞帳』『門人姓名録』『平田篤胤全集、別巻』。薩摩国、本田武毘古（親宣）、『誓詞帳』、一六五二番、100 頁、『門人姓名録』、一六九四番、347 頁。薩摩国、鹿児島、正一位諏訪大明神、大宮司、本田出羽守（親愛/穂積）、『誓詞帳』一七八一番、107 頁、『門人姓名録』一八二一番、354 頁。鹿児島藩、本田七左衛門（親盛）『誓詞帳』三六〇五番、201 頁、『門人姓名録』三六六九番、453 頁。しかしながら、気吹舎の門人帳には、本田九郎親徳の名前はなく、『本田親徳全集』に掲載された親徳の著作には上記の本田姓の平

心ト論ジタレドモ、我先聖ノ此ノ如キ御本文ヨリ説キ来ラザル故ニ、偶々靈魂ノ学ヲセムトスルモ適従スル所ヲ知ラズ。」といい、国学の中で語られていた靈魂の学びでは満足しなかったようである。そして以下のように国学的世界観を批判する。

彼ハ蛮夷ナリ獸心ナリ、我ハ皇民ナリ日本心也ナドト誇リ居レドモ、其ノ敷島ノ日本心ト云ウモノハ如何ナル心ナラムカト詰問スルモノアル時ハ、立派ニ之ガ日本心也汝ガ輩ノ国ニハカカル心ハ有ルマジキゾト屹度返辞スルモノ有リヤ否ヤ心ヲ平ラカニシテ能ク察スベキモノ也。（中略）蛮夷ノ国ト雖モ（中略）所行ニ千古ノ鑑トスベキ人物少ナカラズ、一概ニ之ヲ蛮夷視シテ輕蔑スベカラズ<sup>95</sup>

---

田門人達に関する記述はない。親徳自身の記述によれば、下総国の平田の門人と交流があった。『古事記神理解、巻二』、279-280 頁。また山中浩之の『六人部是香における国学の宗教化』には現存する是香の門人表が掲載されており、門人 32 名の出身地をみると、薩摩、豊前、肥前、筑前などの九州出身者が三分の一を占めていることがわかる。そのうち、薩摩出身者は二名おり、一人は安政三年五月入門の「鹿児島諏訪宮神主、本田親登」、年令 27 歳と入門年令不詳者として「薩摩、本田長徳」の名がある。文政五年生まれの本田親徳と本田親登は年齢が一致しないものの、年令不詳者の「本田長徳」を含め薩摩藩の本田家に平田門人および六人部是香の門人のネットワークがあったことは注目に値する。

<sup>95</sup> 『古事記神理解巻三』、318 頁。

藤田東湖が『続東湖随筆』において「国学者流、其の道を光大にせんと欲すれども、これを小にし、これを汚す者これ有り。蓋し□<sup>96</sup>神皇の道は則ち天下の大経なり。<sup>97</sup>」といい、国学の古道研究の主観的解釈と儒教批判に異を唱えていたのを受けて、親徳も、水戸学の影響を受けていたのかもしれない<sup>98</sup>。

しかしながら、親徳は国学者との交流が全く無かったわけではなく、特に上総国および下総国の平田門人である玉崎神社神主、神原肥後守喜重<sup>99</sup>、濤川胤苗<sup>100</sup>、第六天神社神主、千本松連<sup>101</sup>、宮負定雄<sup>102</sup>、金杉常永<sup>103</sup>を知っており<sup>104</sup>、また、

---

<sup>96</sup> □は判読不能文字の箇所をさす。

<sup>97</sup> 菊池謙二郎編『新訂 東湖全集』、529 頁。

<sup>98</sup> 本田親徳の弟子の一人である副島種臣との問答集『眞道問対』及び『滄海問答』は儒教を通して、本田霊学を受容していくスタイルをとっている。

<sup>99</sup> 玉崎神社、神主。気吹舎『誓詞帳』『門人姓名録』には神原の名は無く、『誓詞帳』二〇七番及び『門人姓名録』二一五番に文政二年四月十三日入門、上総国長柄郡中原村玉崎神社神主として弓削周防（物部春彦）の名がある。『新修平田篤胤全集別巻』、25 頁、258 頁。玉崎神社は上総国一之宮として古くから栄え、江戸時代には、平田篤胤、平田鐵胤、大国隆正らが参詣していた。

<sup>100</sup> 歌人。『誓詞帳』二五七番、『門人姓名録』二七四番、文政六年正月廿八日入門、下総国香取郡宮本村後同国海上郡横根村、飯田丹次郎、後、波川右兵衛、胤苗とある。同、29 頁、261 頁。

<sup>101</sup> 『誓詞帳』二〇二番、『門人姓名録』二一〇番に文政二年四月入門、下総国海上郡西足洗村第六天神社神主、千本松修理、菅原吉周とある。同、25 頁、258 頁。

<sup>102</sup> 宮負定雄（みやおいさだお）（寛政九年-安政五年）（1797 年-1858 年）下総国香取郡松沢村の世襲名主の長男で、弓道人、亀齡道人と号し『神界物語』を記した参澤宗哲と交流があり、平田篤胤の玄学研究を継承した人物といわれている。『奇談雑誌』、『幽現通話』、『霊夢記』、『奇談聞書』、『太神宮靈験雜記』などの著作がある。『誓詞帳』二九三番、『門人姓名録』三一三番文政九年三月十九日入門、宮負佐平（定雄）とある。同、30 頁、254 頁。

<sup>103</sup> 『誓詞帳』二五四番、『門人姓名録』二六九番、文政五年八月入門。下総国香取郡外口村、金杉竜蔵（常長）とある。『新修平田篤胤全集別巻』、28 頁、261 頁。

<sup>104</sup> 上総国、下総国の平田門人との交流について本田は以下のようにしるしてある。「コハ前ニ下総国海上郡ノ海辺ヲ見遊ビタル時見テヨク覚エタリ。（中略）篤胤ガ珍重シテ居タル岩笛





## (二) 本田親徳の宇宙論

本田親徳の産土神思想に入る前に、まずは、親徳のコスモロジー（宇宙論）について、触れておく。『古事記』の注釈書である『古事記神理解巻一』の「神代第一」において、親徳は、『古事記』の「天地初めて発けし時、高間の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。この三柱の神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき。<sup>106</sup>」という冒頭文から「天」と「地」、「高天原」、「天之御中主神」、「高御産巢日神」、「神産巢日神」という項目を引き出し、独自の解釈をおこなう<sup>107</sup>。

まず「天」について以下のように説明する。

天ハ アメノ漢字ナリ、 アハ ヒト同ジク靈妙ナル義。 メハ

巡運ノ義ニテ アメトハ即チ今現ニ仰ギ見ル所ノ太陽ナリ。

---

<sup>106</sup> 「天地初発之時、於高天原成神名、天之御中主神。次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱神者、並独神成坐而、隱身也。」『古事記』、18 頁、214 頁。

<sup>107</sup> 『難古事記』が『古事記』世界の解体を試みる書であるのに対し、『古事記神理解』は親徳自らの『古事記』解釈によって、神代の再構築を試みるものであるといえる。『難古事記』『古事記神理解』の二書に共通するのは平田篤胤の『古史伝』への批判であるものの、親徳の文献注釈のスタイルは、自らの解釈を支えるエッセンスをあらゆる他文献から持ち出し、自らの解釈を補強するという、まさに篤胤の学問スタイルを継承するものである。そのため『古事記神理解』は新たな西洋天文学の情報を利用しつつ、『古事記』のコスモロジーを再構成しようとしている。

アヒ同義ナルガ故ニ、天メヲ又日ノ国トモ云フ。光リ明リ等ノヒ

アモ亦其例ナリ。<sup>108</sup>

親徳の解釈において「天」とは地球上に住む我われが空を仰ぎ見る際に存在する太陽をさすという。太陽を一般に「お日様」というように、太陽の別名が「日の国」であるという。「日の国」については「而シテ其ノ表面ニハ山河アリ金石アリ宮室アリ民人アリ君主アリ。其他万般の事物一切具備スルコト、猶我地球の如シ。故ニ之ヲ日ノ国ト称ス。」<sup>109</sup>といい、太陽の外面には地球と同じ世界が存在するという。本書において親徳は、神典の解釈とともに宇宙空間における星の誕生及び、惑星・衛星・恒星の公転・自転を説明しつつ「日本書記ニ天地混成之<sup>マロカレナル</sup>時トアルガ如シ。（中略）西洋天文学者（中略）望遠鏡ノ力ニ籍リテ推測セシ者ナレドモ吾ガ本教ト符契ヲ合スルガ如シ。人智ヲ究ムルノ極比ニ至ル真ニ驚くベシ。<sup>110</sup>」といい西洋天文学と神代紀の記述が一致しているという。また、親徳の解釈によると、「天地」の「地」とは本来、太陽系に存在する星々をさし、「地球」のみを指すのではないという。しかしながら古典において語られるのはもっ

---

<sup>108</sup> 網掛け部分は原文では神代文字で記されている。以下の網掛け部分の文字も同様に神代文字。『古事記神理解一』、245 頁。

<sup>109</sup> 同、246 頁。

<sup>110</sup> 同、245-246 頁。

ばら「太陽」「地球」「月」のみであるため「地」といえば「地球」をさすという。そして神世文字を使いながら親徳は「チハ之ヲ漢字ニ訳スレバ則チ父ナリ、乳ナリ血ナリ。凡テ万物ヲ長養成育スルノ義アリ。」または、「大地ノ化育ヲ被ルヲ以テ特ニ地ト称ス。<sup>111</sup>」と説く。そして「高天原」は高天ノ原であり<sup>112</sup>、高天原とは太陽系の真ん中にある虚空を指すという。そしてこの高天原に成る神、天御中主神について以下のように説明する。

成ルトハ物ノ始メテ成レルヲ云フ語ナレドモ、御中主神ハ無始ヨ  
リ幽天<sup>113</sup>ノ高天原ニ坐シテ、我ガ太陽系ノミナラズ晴夜天外ニ仰見  
ル所ノ無数ノ恒星天ヲモ尽ク造化セラレシ神徳ニ坐セバ、固ヨリ其  
ノ外ノ始ヲ知ルベキニ非レドモ、此処ハ造化ノ神攻ヲ説クガ為ニ姑

---

<sup>111</sup> 本章において後に考察する本田の『産土百首』及び『産土神徳講義』においてウブスナを「産土」と書くのは「大地の化育を被る」ことを視野に入れているためか。

<sup>112</sup> 「アメ」と「アマ」では漢字が同じ「天」といえども示す場所が違うという。すなわち「古語ニ天地ト対セル天ハアメニテ太陽ヲ指シ、蒼々ノ天ヲ云ヘルアマトハ名義各々異ニシテ」混同してはいけないという。（下線部は本文によるもの。）同、246 頁。

<sup>113</sup> 「天トハ本ト至大無涯ノ大虚空ヲ云ヒテ、高天原トハ其大虚空ノ中極ヲ付シテ云フ語ナルヲ後ニ太陽系中ノ中極ヲモ高天原ト云フヨリ、学者ノ混ジテ惑ヲ生ゼンコトヲ懼ルルガ故ニ、太陽系ノ高天原ヲ名ヅケテ顕天ト云ヒ、御中主神ノ所在ノ高ヲ称シテ幽天ト云フ。」親徳によると宇宙には天御中主神がいる幽天と太陽系の虚空の真ん中にある顕天が存在するという。同、249 頁。

ク無始ノ始マリニ遡リテカク記サレシ者ニテ、顕天ノ高天原アリテ

而シテ後御中主神ノ生出玉ヒシト云フニ非ズ。<sup>114</sup>

親徳の考えでは天御中主神は太陽系が形成されるより以前の大宇宙の始まりから、その虚空すなわち幽天の中極に存在する神であり、私たちが晴天の夜空を仰ぎ見る際に輝く星々を造化した宇宙神であるという。そのため、太陽系に存在する高天原の創造以前より存在する神であると考え。つまり親徳の考える顕幽界とは、平田篤胤、六人部是香が示唆していたようなこの地球上に存在する「この世」と「あの世」という区別を超えた大宇宙と太陽系（地球）という巨大な幽界内に顕界が存在するという位置づけをなすものである。

そして親徳の解釈において「<sup>カミ</sup>神」とは<sup>カクレミ</sup>隠身の略語であり、人間の肉眼では見ることができない幽体をさすという<sup>115</sup>。

より詳しい天之御中主神の語源として、**ア**は萬物の原質たる五十霊であり**マ**は真にしてすべての物が満ち足りた状態をさすという。そのため天御中主神は幽顕の大根元を主宰する神であり、宇宙の天地万物の元素たる五十霊を統括する

---

<sup>114</sup> 同、246-247 頁。

<sup>115</sup> 同、250 頁。

116。親徳によれば、天御中主神以降に『古事記』に出現する神々は主宰神の項用をそれぞれ分別したものであると考える。

そして、「高皇産巢日神」「神御産巢日神」について親徳は「此の二神の御名を神代紀には高皇産靈神、神皇産靈神と書せり。（中略）伝に、ムスハ生ニテ息子息女又苔ノムス等ノムスト其ノ義同ジト云ハレタレドモ、ムトスノ二音ヲ合セテ物ヲ生ズルノ義トナルノ原由ヲ説カズ。マタ疎ナリト云フベシ。<sup>117</sup>」と述べる。ここで「ムス」の語義を論じる際に親徳は、本居宣長もしくは六人部是香の名を直接挙げてはいない。しかしながら、これは宣長の『古事記傳三之卷』の「神代一之卷」に見える「高御産巢日神、神産巢日神（中略）御名義、神御は高御と並びたる稱辭なり、産巢日は、字は皆借字にて、産巢（中略）此ノ天地を始めて、萬ヅの物も事業も悉に皆、此ノ二柱の産巢日大御神の産靈に資て成り出るものなり。<sup>118</sup>」という言述、もしくは、是香の『産須那社古傳抄廣義卷一』において、「其牟須とは、産靈ノ神と申を始め、苔のむす、或は、むす子、娘などもいふ、むすにて、俗に云はゞ、苔のむすは苔の出来ること、むすこ・むすめは出かした子、出かした女、といふほどの意なり、さるは生成すといふが、言の

---

<sup>116</sup> 本田によるとこの五十霊とは五十元とも言い、西洋科学でいう元素に相当するという。同、250 頁。

<sup>117</sup> 『古事記神理解卷一』、251 頁。

<sup>118</sup> 「神代一之卷」『古事記傳三之卷』『本居宣長全集』、128 頁～129 頁。

本なればなり<sup>119</sup>」という説明を踏まえたものであることは明らかである。そして本田の『古事記神理解卷一』の同項目には、「産霊トハ総テ物ヲ産成スルコトノ霊異ナル神霊ヲ云ウト。<sup>120</sup>」とあり、産霊神が万物の生産を司るという作用については宣長、是香に異議はない。しかしながら、親徳の思想において、高皇産巢日神（高皇産霊神）、神御産巢日神（神皇産霊神）とは、宇宙の主宰神である天御中主神が統括する五十霊（元素、気）の内、それぞれ顕幽二十五気にあたるという。親徳の言説を引用するならば、以下のとおりである。

則チ高ハ顕ニシテ光ナリ。神ハ幽ニシテ温ナリ。此ノ光温二気ハ万物ヲ造化生育スルノ根元ニシテ、大虚空中此ノ二気普ネカラザルノ地ナシ。蓋シ我地球ト雖モ（中略）光温ノ二気並行シテ相離レザルハ造化自然ノ妙用ナレバ、唯凡眼凡智ノ見知スルニ及バザルノミ。決シテ二気其ノ一ヲ欠クノ理ナシ。故ニ此ノ光温二元素ヲ以テ天地万物ヲ造化シ玉ヒシ基本トイフモ敢テ誣言ニアラザルナリ。（中略）太陽系ノ

---

<sup>119</sup> 『産須那社古傳抄廣義卷一』、215 頁。

<sup>120</sup> 『古事記神理解卷一』、252 頁。

ミナラズ、他ノ万有ノ世界ヲモ総ジテ主宰シ玉フ神徳ニ坐セバ、其ノ

廣大無辺ナルコトハ言辞ノ得テ形容スベキ所ニ非ズト知ルベシ。<sup>121</sup>

つまり、親徳の宇宙論において、高皇産巢日神は顕界である太陽系に存在する光の元素二十五気であり、神御産巢日神は幽界である大宇宙に存在する温の元素二十五気である。親徳の考えでは万物は、顕界に存在する元素/霊のみで生成されるのではなく、太陽系を超えた宇宙の霊気である温の元素との融合つまり、高皇産巢日神と神御産巢日神の二柱の働きによって成り立つと考えている。

## 第二節 『産土百首』と『産土神徳講義』

### (一) 『産土百首』

『古事記』の注釈書である『古事記神理解』では、広大な宇宙論を展開する親徳ではあるが、より身近ともいえる地球内の産土神の働きについて自らの思想を示した書物として、『産土百首（上巻）・（下巻）』および『産土神徳講義（上）・（下）』が存在する。そして和歌によって産土神の働きを詠った『産土

---

<sup>121</sup> 『古事記神理解巻一』、250-253 頁。

百首上巻・下巻』は、より六人部是香の産須那神論からの強い影響を見ることができる。その一例として、『産土百首(上)』第三十五首を挙げてみよう。

第三十五首 産土乃神不在地奈之鳥鳴邪留里波有登毛<sup>122</sup>

これは是香の『産須那社古傳抄廣義』巻一における次のような言述を受けたものである。

凡天下弘しといへども、太古より以來、産須那の神の鎮坐し給はぬ地は有事無く、其御蔭を蒙らざる人も有こと無し、此處に、天下と學たるは、まづ、吾大日本國中を指て云るなり、さるは市中は勿論、津々浦々、何處のいかなる山の奥までも、人家あるかぎりは、産須那の神の坐まさゝる地は、尺寸の間もある事なし、小屋・えたの村々にも、鎮守の社、有もあり、無きもあれど、社は無くとも、其地は即其本郷の産須那神の、幽政を執行ひ坐ます事なれば、其本郷の氏神、則産須那神に坐ませばなり<sup>123</sup>

---

<sup>122</sup> 『産土百首（上）』『本田親徳全集』、4頁。

<sup>123</sup> 下線は筆者による。『産須那社古傳抄廣義、巻一』、217頁。



しかしながら、『古事記神理解』の産霊神の語義に見られるように、親徳は是香の産須那論をそのまま踏襲はせずに、以下のように発展させる。

第85首 いゑみかきののすまやまのおくやまもうぶすなのかみいまさぬはなと<sup>124</sup> 家居那支野乃末山乃奥山母産土乃神在佐奴者那志

是香の「産須那論」が産子の守護を強調し、人が居るところは必ず産須那神が存在すると説くのに対して、この歌では、人間の守護を超えた万物の生成に関与する産土神の働きが詠われている。

## (二) 『産土神徳講義』

『産土百首』が六人部是香の「産須那神論」をもとに、本田親徳自身の産土神観を詠じたものであるとするならば、同じ産土神について親徳が論じた文献として『産土神徳講義、上・下』が現存する。親徳は明治十八年五月に『産土百首』を完成させ、この時期に静岡県之三島大社にて地元の神職に対して『古事記』を

---

<sup>124</sup> 「産土百首（下）」『本田親徳全集』、9頁。

講じており、この『産土神徳講義上・下』も、同じ三島大社にて地元の氏子に対する講演を筆記したものであるといわれている<sup>125</sup>。

この『産土神徳講義上』において親徳は、明治の新時代に生きる人々が、旧来の仏教に加えて新たな諸宗教の宣教に曝されているにも関わらず、産土神の神徳を理解せずに日々を過ごしていることを、以下のように憂いている。

仏道ノ外国ヨリ来リテ御国ノ妨害トナリシソレニ覆輪カケテ、耶蘇、  
マホメッドナド種々ザツタノ邪法ヲカツギ来リ、内部落ヲナセシ処々ニ  
ハ、人民ヲ欺キ愚昧ヲサソヒ、会堂説教場ト名付ケテコノ邪教ヲオシ弘  
メント、ヒソヒソ談合シテ居ルソノ事柄ハ、皆叛逆朝敵ノ言草ニアラザ  
ルモノスクナク、殊ニ神ハ一神ト云ヒ募リ、天神地祇アル事ヲ知ラズ、  
人民モ亦先刻ヨリ云フ通り、我産土神ノ産土神タル所以ノ理由ヲ知ラザ  
ル故ニ、只アングリト、アキレテロヲアイタ処ニ牡丹餅カ饅頭デモ投込  
レタヤウニ、甘ガリ有難ガリテ居ト云フモノハ、丁度是迄ノ愚民ドモガ

---

<sup>125</sup> 本文献には「本田親徳先生講、駿河国駿東郡岩崎元巧筆記」とある。筆記者の岩崎元巧は駿東郡清水村八幡神社の神職であった。「巻末記」『本田親徳全集』、581 頁。

坊主ドモニ騙シ込マレテ、田地モ資材モ娘モ嬬モ、オ寺サマノ御心次第

打チマカセテ顧ズ、実ニ歎息嗟嘆ノ限り<sup>126</sup>。

これは是香の『産須那社古傳抄廣義』に記されている次の言文に影響されているといえる。

彼地獄極樂の妄説に迷ひ、見性成佛の偏見に陥り、或は消散睡夢の憶  
説に惑悩して、貴賤の衆庶、無上の神勅を曉る事能はず、空く心魂を勞  
して、生涯其死後の魂の在所を慥に得悟り知らずして世を過しつる人、  
數百年の間、幾千萬とも算云べくあらざりしは、甚も甚も憐むべく慟し

127

しかしながら、是香が平田国学者として批判の標的としていたのが儒学・仏教  
であったのに対し<sup>128</sup>、親徳は水戸学の素養によってか、儒学批判はなく、仏教・

---

<sup>126</sup> 「産土神徳講義（下）」『本田親徳全集』、18-19 頁。

<sup>127</sup> 「産須那社古傳抄廣義」『神道大系諸家神道（上）』、271 頁。

<sup>128</sup> 「儒者どもの天命説、佛者の因果報應説などに、古今の人を宛て説來つれども、其論遂に事成るべくも無く、日もまた足らざるは、幽政の大義を得伺ひ知らざるが故也」『産須那社古傳抄廣義』卷三、256 頁。

キリスト教・イスラム教を批判対象としている<sup>129</sup>。また産土神への不敬を嘆く際に「其先祖ノ代々コノ村ノ人々が賢カツタ故ニ氏神ノ社ヲ造営シ尊崇セラレテ、今ニ至ツテ、神ハ厳然トオ坐シナガラ、如何ナル悪魔ノ付入リシヤ、其ノ先祖ノ前件通り丹精ヲ抽テ毎日参拝セラレタル御殿ノ方ニ背ヲ向ケテ、(中略)祝詞ノ一モ唱フルコトヲ能ハズ。忠孝慈愛ノ一言ヲ吐クコト能ハズ。<sup>130</sup>」としていることから、是香の「産須那信仰」の四つの要である「日々産須那社に参詣すること」「顕幽における産須那神の働きを知ること」、「主君に忠義を貫くこと」「仁慈の心を持ちそれを実行すること」を親徳も重要視していたことがわかる。

---

<sup>129</sup> 「産土神徳講義(下)」18頁－19頁。

反仏教、反キリスト教の和歌として『産土百首上・下』には以下のようなものがある。

第四首「産土乃靈乃懸留此身乎之仏乃子曾止言者誰子曾」  
うぶすなのみたまのかかるこのみをしほとけのこぞといふはたがこぞ

第十九首「寺々尔住武僧等母産土乃神乃御子曾母悪敷須奈人」  
てらでらにすむほうしらのうぶすなのかみのみこぞもあしくすなひと

第二十首「魚乎食比美酒飲母産土乃恵成曾止思閉僧等」  
いおをくひうまさけのむもうぶすなのめぐみかきねしほうしばらかも

第二十一首「錦着弓妻子止寝留母産土乃神恩重禰之僧原加母」  
にしききてつまことねるもうぶすなのめぐみかきねしほうしばらかも

第二十二首「産土乃道知禰古曾僧等賀道乃巷尔立食須奈礼」  
うぶすなのみちしらねこそほうしらがみちのちまたになちくひすなれ

第二十三首「産土尔見放多連多留僧等賀石根本根尔人乃夢美留」  
うぶすなにみはなれたるほうしらがいはねきのねにひとのゆめみる

第二十四首「物食閉婆父乎之思比衣着連婆母思倍之僧奈賀良母」  
ものくへばちちをしおもひきぬきればはおもふべしほうしながらも

第二十五首「僧等賀経誦武声母産土乃人尔授計志人乃声曾毛」  
ほうしらがきとうよむこゑもうぶすなのひとにさづけしひとのこゑぞも

第二十六首「八十神乃遺世之道加母西戎国乃耶蘇賀教乃曲連留見連婆」  
やそかみののこせしみちかもからくにのやそがおしへのまがれるみれば

第五十五首「産土乃神乃稜威乎不知之弓異之幾蕃神仰世人」  
うぶすなのかみのみいづをしらずしてけしきからかみあぐよのひと

『産土百首』『本田親徳全集』、1－10頁。

<sup>130</sup> 下線部は筆者によるもの。『産土神徳講義(上)』、12頁。

### (三) 産土神の定義

それでは、本田親徳の思想において、産土神とはどのような神なのであるか。まずは親徳が産土神をどのように定義しているかみていきたい。『産土神徳講義(上)』の初日冒頭は以下の文ではじまる。

今按ズルニ皇国ノ島数十五ナリ。此ノ国魂ヲ大国魂神ト云ウ。而シテ此ノ大嶋、長州下関ヨリ奥州ノ端マデノ国魂ノ御名を大倭豊秋津根別トイフ。四国九州其他ノ小嶋皆国魂ノ別名アレドモ爰ニハ省ク。此ノ如ク小部分ニ各々名アルニツケテハ、当時ノ国郡村又其一小部落ノ分魂アリテ、顕幽カケテ治メ給フ御事、弁ゼズシテ明ナルモノナリ。サテ其ノ各町各村苟モ人民在ル所々、産土ノ神社アラザルナシ。是人間過去未来ノ保護ヲ受ケテ千萬世ニ至リテ<sup>131</sup>、其ノ子孫ノ恩頼ヲ受クル神霊ナレバ、必ズ之ヲ尊崇セザルベカラズ。<sup>132</sup>

---

<sup>131</sup> 第九十六首においても、「まへのよもこのよものちのよのこともうぶすながみぞつかきどります前世母現世母後世乃事母産土神曾主宰坐須」と詠む。

<sup>132</sup> 『本田親徳全集』、11 頁。

ここで親徳は、日本国全体の国魂として大国主神を擁し、本州の国魂として大倭豊秋津根別が存在するという。そして「当時ノ国郡村又其一小部落ノ分魂アリテ、顕幽カケテ治メ給フ御事、弁ゼズシテ明ナルモノナリ。」とあるが、小部落にまで御霊を賦与するのが、大国主神なのか、大倭豊秋津根別なのか、あるいは二柱それぞれが御霊を付与するのか上掲の引用文においては明らかではない。

『産土神徳講義(下)』に記されている翌日の講演では、産土神を次のように説明している。

大倭豊秋津根別ト云フ国魂ノ所食ス山陰山陽東海東山北陸南海等ノ諸国ハ、国名ハ別レタレ共長州下関ヨリ奥州迄一ト続ニテ、一国ノ国御霊ミナ此ノ神ノ分魂分体ニマシマシテ、亦各郡各村ノ産土神ハ又其ノ小分子ニ坐マシテ、其地ノ度数トソノ地ノ地質トニ随テ、種々変化アルニ依リ、其程々ニ随ヒ守リ幸給フ故ニ、五穀ノ其地ニ応スルモ何モ彼モ各村各里ミナ各々ヨシアシノ変化アルナリ。<sup>133</sup>

---

<sup>133</sup> 同、19－20 頁。

ここでは、鼠算で親鼠から子鼠が、そして次の代の子鼠が次々と生み出されるように、本州でいえば、本州全土を守護する国魂である、大倭豊秋津根別の分魂分体が本州の各国々に、そして各国の国魂が各郡に、そして各郡から各村へと分魂分体された小分子が産土神であるとされる。上の引用文において、親徳は『古事記』のイザナギとイザナミの国生みに則り、本州を大倭豊秋津根別とする。そして、この島自体の国魂が本州全土に分魂分体として行き渡っており、最小単位として村々に産土神として鎮座しているとする。

しかしながら、『産土百首』の第四十二首において「産土乃神乃御名乎之<sup>うぶすなのかみのみなをよ</sup>人間婆国津御霊乃御子止答倍牟<sup>ひとよはばくにつみたまのみこととこたへ牟</sup><sup>134</sup>」とあり、産土神は国津御霊すなわち大国主神の分霊としている。明治十六年に記された『道之大原』において「顕界の活物は大国主の所轄に係る。然り而<sup>しかう</sup>して悉く其の魂を守る能わざるは乃<sup>すなわ</sup>ち魄体の故なれば也。（顕界活物者係大国主之所轄。然而不能悉守其魂乃魄体之故也。）<sup>135</sup>」とし、これを鑑みれば、日本国全体からすれば、産土神は大国主神の分け御魂と考えることができるのではないだろうか。

六人部是香はウブスナ神の万物を生みなす力に着目し、これを「産土」とは表記しなかったが、親徳の思想において、大国主神は日本国の国魂であり、日本の

---

<sup>134</sup> 『産土百首（上）』『本田親徳全集』、5頁。

<sup>135</sup> 『道之大原』『本田親徳全集』、35頁。

大地そのものを体として包括し、国魂として万物の生成する神として考えられている事から、ウブスナに「産土」の字が使用される。『産土百首（上）』の第二首では「ゆきみへそあしとおごとにうぶすなのかみのめぐみをおもはれ<sup>136</sup>のひと」とあり、大地そのものが産土神として表現され、人が大地を踏みしめるという行為が、産土神の恵を想起する一種の観想法として、挙げられている。そして「尤モ生レテ活キテ居ルバカリガ其産土デハ無イ。死ンデ仕舞テモ産土様ノ御体中ニ葬ラルル事、夫ヲ仏地ニ葬ラルルカラ寺ハ尊イ者デヤト思フノハ大間違イノ極ト云フモノゾヤ。<sup>137</sup>」とし、人が埋葬されることを「産土様ノ御体中ニ葬ラルル事」と表現している。

また『産土百首』、第十六首、第十七首、第十八首、第三十三首の内容を見てみると以下のようなになる<sup>138</sup>。

十六 うぶすなのかみのめぐみのつゆのもからづばよものくさき<sup>136</sup>のたににそだたわ

十七 ちをはしるはもちそらちとりもあたままへるうぶすな<sup>136</sup>のかみ

十八 はむしもみづくいおもうぶすな<sup>136</sup>のかみのたまものいづくしめせよ

三十三 うぶすなのかみあたよくみよなねもきもつちあみずひもそのなかにあり

<sup>136</sup> 同、1 頁。

<sup>137</sup> 『産土神徳講義上』『本田親徳全集』、13-14 頁。

<sup>138</sup> 「産土百首（上）」『本田親徳全集』、2-4 頁。



この四首を総合して考えてみると、顕世における万物の創造に産土神が関与しており、その恵は大地に象徴されるだけではなく、この世の世界を形作る五大要素である「木」「火」「土」「金」「水」の働きすべてに「産土神」を見出すことができるということになる。

### 第三節 心魂の浄化

#### (一) 気海丹田に心を沈める瞑想法、人間からの心魂への積極的な関わり

『産土神徳講義（上）』において、親徳は、「神ヲ知ラズ先祖モ知ラズ、只生キテ居ルバカリノ心」を持った人間は「衣服居宅其ノ外ノ器械ヲ美麗ニ飾ラルルトモ、其ノ言行ハ禽獣ト同様ナルモノ<sup>139</sup>」として、外見だけを取り繕うことをよしとしない。

『産土百首〈上〉』、第五首でも次のように詠っている。

産土乎神止母不知祭良受弓棄置村者獸成加母

---

<sup>139</sup> 『産土神徳講義（上）』『本田親徳全集』、12 頁。

それでは禽獸以上の言行を持つ人間になるにはどのような心を持てばよいのか、親徳は以下のようにその方法を説く。

今日加様ニ縁アリテ講席ニ列ナラレタル衆ハ、拙者が申分ヲ必ズ悪ク心得ズニ、今言ハルル所ハ所謂神ニロナシ人ヲ以テ云ハシメ給フ者ナリト、シツカリト氣海丹田<sup>140</sup>ト云フ腹ノ底ニ心ヲ据エテ、閉目拱手ト云テ眼ヲ閉ヂ手ヲ胸ニ当テ、心ヲ公平無私ト云ヒ、生マレナガラノ本心ニ立  
歸リテ能ク考ヘラルルト、コノ靈魂トイフ魂モ即チ此ノ産土神ノ御支配ナサルモノ故ニ、ソノ心ノ鏡ヲ忽チニ産土神ノ磨キニ磨キ給ヒテ、真澄  
ノ鏡ト云フ様ニ明カニ照リカガヤイテ、カネテ見ヘザル我靈魂モ手ノ裏カヘス様ニ見え透ク也。夫ヨリシテ益々其産土神ヲ尊崇シ、其魂ヲ琢磨シテ見ルト、今迄ノ曇天風雨ノ空トハ雲泥ノ相違ニシテ晴天白日トナリ、其ノ快ク樂シキコト譬ヘン方ナシ。<sup>141</sup>

---

<sup>140</sup> 氣海丹田とは腎臓および臍のまわりを指す。

<sup>141</sup> 下線は筆者によるもの。『産土神徳講義（上）』『本田親徳全集』、13頁。

『産須那社古傳抄廣義』において六人部是香は心の用い方による魂の強弱・高低について述べながらも、あえて、心魂についての修練法については説かなかった。しかしながら、親徳は「今言ハルル所ハ所謂神ニロナシ人ヲ以ッテ云ハシメ給フモノナリ」と言い、自らを神の意を表す神口だとし<sup>142</sup>、産土神の支配する靈魂、すなわち心を磨く黙想を勧める。この瞑想は眼を閉じて手を胸に当てる「閉目拱手」の型をとり、心を公平無私に努め、魂を「氣海」「丹田」すなわち腎臓と臍の周りに鎮める。

親徳は「拱手」を「手を胸に当て」としか表現していないが、『漢語林』によると「拱」の字義として「両手を胸の前で重ね合わせる」とあり、また熟語としての「拱手」は「①両手を胸の前で重ね合わせて敬礼する。②手をつかねたまま何もしないさま。」とある<sup>143</sup>。

胸の前で、手をどのように重ね合わせるかは定かではないが、眼を閉じて手を胸の前に置き、魂を氣海丹田に据えるように心掛け、心を落ち着かせ、生まれな

---

<sup>142</sup> 親徳は産土百首において自らを以下のように詠っている。

第四十七首「産土乃神尔習弓顯人乃道乃柱尔立倍岐吾曾」  
うぶすなのかみにならいてあらひとのみちのはしらになつべきわれぞ

第四十九首「敷島乃日本国乎産土乃道乃御供止出立我波」  
しきしまのやまとのくにをうぶすなのみちのみともといでたつわれは

第五十首「産土乃神乃御典乎文机乃上尔演都々斃牟我波」  
うぶすなのかみのみふみをふづくえのうえにのべつたおれむわれは

<sup>143</sup> 『漢語林』、531 頁。

がらの本心に立ち帰り、内観をする。この黙想を実践し、心すなわち魂が鏡のように磨かれていくように努めていくと、「カネテ見ヘザル我靈魂モ手ノ裏カエスヨウニ見エ透ク」ようになるという。

この内観法を安易に道教的瞑想法と呼ぶことはできない。しかしながら、中国において三国時代に当たる 255 年までには成立していたといわれている道教経典『太上黄庭外景玉經』は、黄庭（脾臓）を中心とした五臓及び人間の体内に宿る神々を呼吸法と観想の実践によって、不老長生の仙人を目指すものである<sup>144</sup>。この『太上黄庭外景玉經』文献には、次のような一節がある。

正室之中神所居。洗身自理無敢汚。歷觀五臓視節度。六腑修治潔如素。虚無自然道之故。物有自然事不煩。垂拱無爲身體安。虚無之居在幃中。寂寞曠然口不言。恬然無欲遊徳園。清淨香潔玉女存。修徳明達道之門。

正室、つまり体内は神々のいるところであり、身を洗い、自らをおさめ、あえて穢れることをしてはならない。五臓（肝臓、心臓、脾

---

<sup>144</sup> 『道蔵』、332 号 167 冊（洞玄部本文類）巻上 2A。（道蔵“某号”は Kristofer Schipper and Franciscus Verellen eds., *The Taoist Canon: A Historical Companion to the Daozang* に指定された経典番号“work number”を示す。道蔵“某冊”は 1926 年上海影印版道蔵中の冊数を示す。）『太上黄庭外景玉經』の成立年代については Schipper and Verellen eds., *ibid.*, vol.1, pp. 96-97 を参照。

臓、肺臓、腎臓）を次々と観察し、節度を見よ。六腑（胃、大腸、小腸、胆、膀胱、三焦）を修めれば、白い絹のように清らかになる。虚無自然は道のもとである。物事が自然であれば、煩わしさはない。手を拱いて何もしなければ、身体が安まる。虚無の住居は帳の中にある。そこは広々として静かであり、口はものを言わない。恬然無欲であれば、徳の園に遊ぶことができ、清浄香潔であれば、仙女がそこに存在する。徳を修め聡明に達すればそれが、道の門である。

道教の内丹法において、体の隅々には神が宿るとされているが、特に、上掲の『黄庭外景經』においては、「虚無自然道之故。物有自然事不煩。垂拱無爲身體安。」とあり、心身を清め、拱手の状態で余計なことはあえてせず、自然な状態で五臓六腑の神々を觀応することにより、道の門に到達することができるとされる。また十二世紀後半までには成立していたとされる金陵子唐淳の『黄帝陰符經經注<sup>145</sup>』においては、丹田に集中させた神（精神）と自らの気との觀応について、以下のように記されている。

---

<sup>145</sup> 『道蔵』、121 号 57 冊（洞真部玉訣類）、卷上 1 B。

神在丹田氣結爲胎。眞氣不散神明自來。故神炁相守。豈不爲長生之道。神是炁之子。炁是神之母。

神が丹田に存在する時、氣は神を包み、子宮を形作る。此の時、眞の氣が拡散しなければ、神明が自ら訪れる。故に、氣と神はお互いに守り合う。これが長生の道でないはずがなかろう。神は氣の子供であり。氣は神の母である。

日本における禪の養成術書である『夜船閑話』は、過度の修行により、禪病を患った白隱が、白河の山中の岩居する白幽先生という道人に出会い、内丹法を伝授されるという内容の文献であるが、そこには次のような一節がある。

昔し<sup>ぎげいしよ</sup>呉契初、石臺先生に見ゆ。齋戒して鍊丹の術を問ふ。先生の云く、我に元玄眞丹の神秘あり、上々の器にあらざるよりんば得て傳ふべからず。古へ黃成子是れを以て黃帝に傳ふ。帝三七齋戒して是れを受く。夫大道の外に<sup>〔眞丹一本ニアリ〕</sup> 呉<sup>（一）</sup> 丹なく、眞丹の外に大道なし。蓋し五無漏の法あり。爾の六欲を去け、五官各々其の職を忘るゝ則は、混然たる本源の眞氣、彷彿として目前に充つ。是れ彼の大白道人の謂ゆる、

我が天を以て事<sup>つみかう</sup>る所の天に合する者なり。孟軻氏の謂ゆる浩然の氣、  
是れをひきいて臍輪氣海丹田の間に藏めて、歲月を重ねて、是を守一  
にし去り、是を養て無適にし去て、一朝乍ち丹竈<sup>たんそう</sup>を掀<sup>ひきた</sup>する則は、  
丹外<sup>〔内外一本あり〕</sup>中間八紘四維、總に是れ一枚の大還丹。此時に當て、初て自己即  
ち是天地に先つて生せず、虚空に後れて死せざる底の眞箇長生久視の  
大神仙なる事を覺得せん。是れを眞正丹竈功成る底の時節とす<sup>146</sup>。

本田は「心の鏡を磨くこと」<sup>147</sup>を重要視しており、同日の講演の中でも重ねて  
以下のように述べている。

扱テ拙者が加様ニ云フテ聞カシテハ、只々別モナク宮殿ニ参上シテ、頭  
ヲ下ゲ手ヲ拍ツバカリヲ勸ムルノデハナイ。随分裸参リヲ致シタリ丑刻参  
リヲ致シタリ、寒中ニ水ヲ浴ビタリ、火ノ物ヲ断ツタリ、彼是好キノ物ヲ  
禁食シタリ、人前デハ自分モ云ヒ出シ難キ願ガケシタリスルヨウナ馬鹿ゲ

---

<sup>146</sup>宝暦7年（1757年）刊。「夜船閑話」『日本哲學思想』、162-163頁。

<sup>147</sup> 山崎闇齋（元和四年～天和二年）（1618年-1682年）の門流、跡部良頭<sup>あとべよしあき</sup>（万治元年～享保十四年）（1658年-1729年）による『垂加翁神説』には「大いなる哉、神皇の道は天人唯一なり。  
（中略）以って心<sup>こころ</sup>の神明は正<sup>しんめい</sup>直<sup>せい</sup>なり。祈禱<sup>きとう</sup>祓<sup>ふ</sup>を以って内<sup>ない</sup>外<sup>がい</sup>清<sup>せい</sup>浄<sup>じよう</sup>なれば則ち土・金  
の徳全し。」とあり、祈禱と祓いによる心身の浄化によって人間の徳が完成されるとある。  
『垂加翁神説卷之下（抄）』『神道思想集』、295頁。

タ拝礼ノ仕様ハ真ノ信心デナイカラ今日ヨリ止メニ致シテ、先刻ヨリ申ス  
清浄ノ心ト清浄ノ体トニ成リ変リテ、貧ナル家モ安楽ニ成ラウ、愚ナル我  
モ賢クナロウ、世間ノ交際モ睦間敷クナラウ、ナゾ様ナ天地ノ神ニ対シ奉  
ツテモ恥シカラヌ様ニ祈リ奉ルノガ真ノ祈祷ト云ウモノヂヤ。其ノ真ノ祈  
禱ヲスルニハ、心ヲ清浄ニスルノガ第一等ヂヤ。其第一等ノ心ダテハ如何  
イタシテ宣シカラウト問フ人在ラバ、即チ此ノ氏神ノ御支配ノ人心ノ内ニ  
省ルト云フ魂カ（ママ）一ツ入ツテ有ル、此ノ省ルト云フハ、我身ハ昨日  
マデ萬事ノ所業万端ノ心得悉ク善キ方ナリシヤ、又人ハ知ラネ共、惡敷キ  
心ノ出タルヤト、魂ト体トノ事柄ヲ生レテヨリ只今マデノ所ヲ心ノ中ニヨ  
ク調べテ見ルト、先刻モ云フ通り残ル隈ナク、夫ノ明鏡ノ影ヲ写スガ如  
ク、写真ノ如ク毛筋裡モ残ル所ナク見ユル、其ノ見ユル処ノ影ト形ヲ以テ  
又我ガ心ノ底ニ探索シテ見ルト、昨日迄ノ言葉ト行ト悉ク相違シテ、アノ  
事ハ実ニ後悔ダ、彼ノ事ハ実ニ恥シキ事ダ此ノ事ハ恐れ入タル事ダ、今迄  
ノ事ハ愚ナ事ダ悪イ事ダアホーナ事ダトカ何トカ覺リノ出来ルモノダ。此  
レガ神ノ実ノ寵愛<sup>148</sup>(ママ)シ給フ心デ、清浄心ト古ヨリ申シ伝ヘテ、善人

---

<sup>148</sup> 寵愛か。



ニハナルトモ決シテ愚悪者ニハナラン心ノ極ト云フモノ、何ノ教エモ何ノ

規則モ此レノ外ニアルベキ筈ノモノデ無シ<sup>149</sup>。

ここでは、「裸参り」「丑刻参り」「寒中の水行」「禁食<sup>150</sup>」などの負の情念より発する過度の行を戒めており、「天地ノ神ニ対シ奉ツテモ恥シカラヌ様ニ祈リ奉ルノガ真ノ祈祷」であるとされる。この真の祈祷とは、清浄な心身を持って自らの向上を目指す祈りである。また、産土神が支配する人心には、自らの言動を省みるという働きを持つ魂が入っているとする。そして自らを省みるという内観法を実践すると「残ル隈ナク、夫ノ明鏡ノ影ヲ写スガ如ク、写真ノ如ク毛筋裡モ残ル所ナク見ユル」ようになるという。また内観によって磨かれた魂を「清浄心」といい、神が最も愛する心であるとする。『産土百首（下）』の第九十九首には、

「たましひのよごれをはらひうぶすなのかみのめづこといませよのひと 靈魂乃汚乎祓比産土乃神乃愛子止在世世人」とあり、『産土百首』第八十首には

「おのおののむねはらうちうぶすなのかみかくれまずおそれよひと 各々乃胸腹内尔産土乃神隱坐須恐与与人<sup>151</sup>」とある。是香は頭の中に神々が宿

---

<sup>149</sup> 下線は筆者によるもの。「産土神徳講義（上）」『本田親徳全集』、14-15 頁。

<sup>150</sup> 六人部是香は「草木鳥獸の生産するも、産須那神の御蔭に依れるよしに云述置つるを、此處に、それ皆食料・器用の爲なる由に云るに付て、總て今人の心には、獸肉には穢ありて、神の甚嫌はせ給ふものとのみ心得居る事と成れるは、甚しき心得違なり」とし、そもそも獸肉は天神地祇の神供となりえるものであり肉食の禁止は、仏法の伝来により広まり、「不學淺陋」の神職によって世俗化したものであるという。『産須那社古傳抄廣義卷二』、238 頁。

<sup>151</sup> 『産土百首下巻』『本田親徳全集』、8 頁。

るとしたが、この歌では人間の胸腹の中に産土神が宿るとされる。これは先において言及した『黄庭外景經』において、体内には神々が存在するということ、そして心身を清め、五臓六腑を内観し、余計な実践をせずに、清浄香潔であれば、仙女がそこに存在するようになる、という考え方に非常に近いといえる。

膨大な經典を有する『道蔵』の中の『黄庭外景經』、『黄帝陰符經經』、そして白陰禪師の『夜船閑話』に記された「気海丹田に心気を静める瞑想法」を本論文では、比較対象として取り上げた。古代から慶応三年（1867 年）までの間に日本人によって著述、編纂翻訳された書籍情報を記した『国書総目録<sup>152</sup>』には『黄庭外景經』の注釈書として、中山城山（宝暦十三年－天保八年）（1763 年－1837 年）による『黄庭經解』および、岡本況斎（保孝）（寛政九年－明治十一年）（1797 年－1878 年）の『黄庭經攷証』が掲載されており、また、『黄帝陰符經經』の注釈書として、寺尾東海（正長）の『黄帝陰符經指玄』、そして河野玉鉉による『黄帝陰符經諸賢集解』が記載されており、『黄庭外景經』、『黄帝陰符經經』は日本において注釈書が出版されるほど広く普及していた漢書であったことが想像できる。このことを前提とすれば、親徳は自らの神道思想を構築する際に、『黄庭外景經』、『黄帝陰符經經』もしくはこれらを収蔵した『道蔵』および、『夜船閑話』の

---

<sup>152</sup> 『補訂版国書総目録第三巻』、274-275 頁。

ような道教經典書を読んでいた可能性は十分考えられる。

## （二）「鎮魂法」との関係

国学者、鈴木重胤<sup>153</sup>（文化九年-文久三年）（1812年-1863年）による『延喜式祝詞講義十二之卷下』には、『令義解』神祇令、神祇伯の職掌「掌鎮魂」の条に「謂鎮安也、人陽氣曰魂々運也、言招離遊之運魂鎮身體之中府、故曰鎮魂、（鎮は安なり。人の陽氣を魂と曰ふ。魂は運なり。言ふところは離遊の運魂を招き身體の中府に鎮む。故に鎮魂と曰ふ。）」とある中、「鎮<sub>二</sub>身體之中府<sub>一</sub>とは、我身體の中府に元より神在て此に主たり、其上に天中の神靈を招鎮めて天神に靈合ふ由なり、（但に中府とは臍下丹田の邊を云ふなり。）」とある<sup>154</sup>。この鈴木重胤の言説に基づいて考えてみれば、『産土神徳講義』の中で語られている「心を氣海丹田に鎮める法」もしくは「心魂を浄化する瞑想法」は鎮魂法であるといえる。

---

<sup>153</sup> 淡路国津名郡仁井村、庄屋、穂積重威の五男。通称、雄三郎又は勝左衛門。樞廼家、嚴樞本、府生、柱州と号した。天保三年には、書信にて、平田篤胤より、教えを受ける。天保五年には、大国隆正に入門。『延喜式祝詞講義』『日本書紀伝』を著述。篤胤の養子、鍊胤と不和が生じ、安政五年（1858）に破門となる。文久三年（1863）に江戸にて暗殺される。平田家（気吹舎）門人帳『誓詞帳』、三九九番、天保三年五月十八日入門、源重胤、鈴木雄三郎とある。『平田篤胤全集別巻』、35頁。『門人姓名録』四二三番、同、270頁。

<sup>154</sup> 『鈴木重胤全集第十一』、596-598頁。

しかしながら、津城寛文による先行研究および、本田親徳のひ孫弟子にあたる佐藤卿彦氏の下で修行した渡辺勝義は、「鎮魂法」を「帰神法」の内、神を自ら召喚し、神懸かりをする「自感法」と連続することを示唆する<sup>155</sup>。その一方で本田親徳のひ孫弟子にあたる佐藤卿彦の率いた顕神本会刊の『改訂版、顕神本田靈學法典』には「鎮魂法は（中略）あくまでも自己の靈魂の運轉活用にあるので憑靈現象等は全然必要としないのである。故に修法中憑依を望むような気分は聊かでも持ってはならない。帰神術とは本質的に異なるものであるから、絶対に憑靈はしないと云う強い信念を持って取りかかる事である。<sup>156</sup>」とし、神憑りの行法の「帰神術（法）」と瞑想法の「鎮魂法」との違いを強調する。このように瞑想法である「鎮魂法」と神憑り行法である「帰神法」が連続するかどうかは、研究者や実践者によって、それぞれ意見が分かれるところである。しかしながら、津城、渡邊、佐藤の三者とも「鎮魂法」の行法においては玉石を用い、手は印を結ぶ形をとるとする<sup>157</sup>。

---

<sup>155</sup>津城寛文『鎮魂行法論』、30 頁。

渡辺勝義『古神道の秘儀―鎮魂と帰神のメカニズム』、225-244 頁。

<sup>156</sup>顕神本会『改訂版、顕神本田靈學法典』、36-55 頁。

<sup>157</sup> 玉石を使った鎮魂法の細かい作法については、前掲の渡辺勝義氏『古神道の秘儀―鎮魂と帰神のメカニズム』、225-244 頁、顕神本会『改訂版、顕神本田靈學法典』、36-55 頁を参照。

本田親徳のひ孫弟子にあたる佐藤卿彦が記した『顕神本田霊學法典』には、「鎮魂法」に用いる玉石の大きさや「鎮魂法」をおこなうための準備について詳しく述べている。

### (三) 佐藤卿彦による玉石を用いた「鎮魂法」<sup>158</sup>

佐藤によれば、「鎮魂法」には、直径約五分（約 1.5cm）の黒く底光りした石を用いるという。実践者はこの石にあらかじめ、天宇受大神<sup>159</sup>の御霊を鎮祭し、「生きた石」とする。この石を「羽二重等の白地の袋」で包み、袋の上部を紐で結ぶ。神霊を石に鎮祭した後は、白地の袋は絶対に開けてはいけない。鎮魂法を実践する場合は、この白地の袋のままで行う。鎮魂法の実践以外の時には、白地の袋に包んだ石の上袋として「金襴の袋」を重ね、更に櫨の箱に納めて置く。

佐藤卿彦は、鎮魂法をおこなう適切な空間についても指示を与えている。部屋は四畳半くらいの部屋でおこなう。光線は実践者の後方より来るようにし、窓へ向かう場所は不適當であるという。正面に位置する壁面は無地の黒か紺を理想とし、他の色や模様の場合は、三尺四方(約 1 m)ほどの黒か紺色の布又は紙を貼

---

<sup>158</sup> 特に玉石を使用した「鎮魂法」の解説は「古式鎮魂法の研修法」『顕神本田霊學法典』、43-48 頁を参照。

<sup>159</sup> アメノウズメノミコト。『古事記』では天宇受売命、『日本書紀』では天鈿女命と表記する。

る。鎮魂法の実践に適した空間を用意できたら、鎮魂石を天井から吊るす。その方法としては、部屋の天井から細い針金か紐を下げて、下の部分に針金でカギを作り、金欄の外袋を外し、白地の内袋に入った「鎮魂石」を掛けて、石が実践者の「目通り」の高さになるようにする。この時、天井から吊るした「鎮魂石」と実践者の目の間隔は、おおよそ、四尺(約 1.21m)か五尺(1.51m)ぐらいが適当であるという。

佐藤卿彦の記した『顕神本田靈学法典』には、「鎮魂法」をおこなう際の「鎮魂印」の図とともに、印を組む方の説明をしている。「鎮魂印」を組む場合、実践者は、「右を上にして、内側に組む。人さし指を立て合わせ、左の指を上部にして組む。」形をとる。

「鎮魂印」を結んだら、実践者は、印を結んだ手を胸の前に自然に置く。この時、印を結んだ手を胸部にぴったりと密着させず、楽な姿勢で前方に置く。そして「鎮魂法」をおこなう際の座り方としては、胡座をかいてはならず、左足を下にして、右足を上にした結跏趺坐の形をとる。この時、座布団を敷いてはならず、祭具の円座や、<sup>ひざつき</sup>軾の使用は認められる<sup>160</sup>。そして、鎮魂法の作法として以下のように説明している。

---

<sup>160</sup> 膝を悪くした年配者は、在椅子や西洋椅子を用いてもよいとされるが、その場合の座り方についての但し書きはない。『顕神本田靈学法典』、47 頁。また軾とは、宮中の儀式などで、

鎮魂石に向かって先づ一揖（軽い拝）、次に二拝（深い拝）、次に二拍手する。次に前述の如く手を組み神気（精神）を鎮め、石に向かって『吾が靈魂が鎮魂石に鎮まる』（ママ）と云う、強い思念を四、五回送るのである。この思念を送る事が鎮魂に於て一番大切な“要点”である。此れを行はないと鎮魂の意義を成さないし、又完全な鎮魂法とはならないので、必ず確実に行うべきである。息を止めて、石に向かって押し入れる感じである。

眼は“半眼”がよい。（中略）熟練して来ると全部眼を閉じて、石は完全に見えるものである。

時間は、二十分―三十分ぐらいがよく、長くて四十分程度で止める。（中略）なお此の時間中（修法中）にも、時々靈魂が鎮まるの思念を送ることを忘れない様にしたい。（ママ）終りは、二拍手、二拝、一揖の順で終了となる<sup>161</sup>。

---

地面にひざまずく時に地上に敷く半畳ほどの敷物。

<sup>161</sup> 「古式鎮魂法の研修法」『顕神本田靈学法典』47-48 頁。下線部は原文による。

佐藤卿彦の「鎮魂法」の説明では、「天宇受大神」の神魂が鎮まった玉石を用意し、手は胸元で印を結び、半眼もしくは、閉眼の形で瞑想する。この時、自らの靈魂を集めて、玉石に鎮めることを「鎮魂法」とする。佐藤によれば、「吾が靈魂が石に鎮まる（ママ）」と強く思念を何回か玉石へ送った後に「“無我”の境地に入る」という<sup>162</sup>。

本田親徳の『産土神徳講義』で説かれる瞑想法における「拱手」の状態がはたして、佐藤卿彦の説く「鎮魂法」にあるように印を結ぶ状態を指すのかどうかは定かではない。また、『産土神徳講義』で説かれる「氣海丹田心魂を据える」瞑想法には玉石についての言及はない。このことから本田親徳伝承の「鎮魂法」を実践しているとする佐藤卿彦の玉石を使用した「鎮魂法」と『産土神徳講義』の「瞑想法」とは別の「鎮魂法」であり、本田親徳は複数の「鎮魂行法」をおこなっていたのだろうか。

---

<sup>162</sup> 同、54 頁。



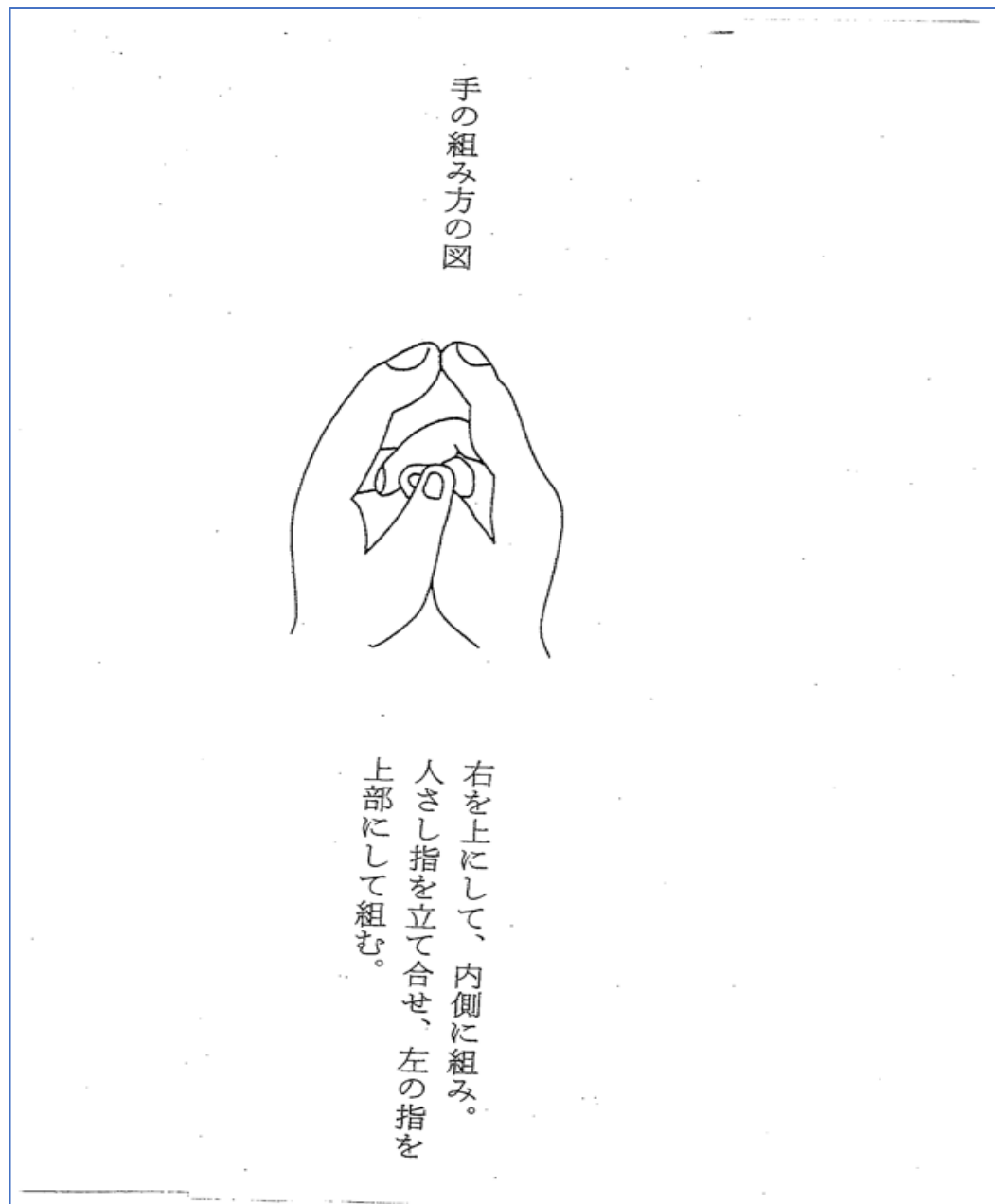


図 2 佐藤卿彦による「鎮魂印」<sup>163</sup>

この問題を考察するにあたって、『本田親徳全集』に収められている本田親徳の内弟子であった鈴木廣道が授与された「鎮魂法」の伝書を見ていきたい<sup>164</sup>。この

<sup>163</sup> 佐藤卿彦『顕神本田霊学法典』、47 頁。

<sup>164</sup> 「鎮魂法」『関係文書』『本田親徳全集』、364 頁。

伝書には、鎮魂行法の順番が書かれている。それを引用すれば以下のとおりである。

## 鎮魂法

先 清浄式

次ニ 十種十柱ノ神名ヲ奉称ナリ

次ニ 恐クモ某今般鎮魂神業ヲ奉行ニ因ッテ神代ノ任々平久御受令聞

ト恐美々々毛白須

次ニ 鎮魂乃神乃伝エシ術ナレハ鎮里給ヘ霊主神

次ニ 十度普留御霊乃奇支鎮魂ニ鎮里賜エ天地ノ神

(此神名ハ随意ナリ)

次ニ 三産霊神ヲ一心ニ祈里幽山貫徹ノ加持ヲ冥中ニ行フ。(口伝)

但玉石ニ鎮ムルハ前以テ其目方見置ク可シ。

一 生産霊ノ鎮ル時ハ前ヨリ輕クナル

一 足産霊ノ鎮ル時ハ前ト平均ナリ

一 玉留産靈ノ鎮ル時ハ前ヨリ重クナル

右何レノ神鎮リテモ同断也。

右鈴木廣道に伝授ス

明治二十年五月五日

本田九郎 花押

この「鎮魂法」の伝書では、まず、清浄式をおこない、次に「十種十柱」の神の名をとえ、神々を奏称し、召喚する。この「十種十柱」の神とは、「神皇産靈神、高皇産靈神、生産靈神、足産靈神、玉留産靈神、大宮能女神、御食津神、事代主神、直日神、普留御靈神」であると考えられる。これらの神々は、内弟子である鈴木廣道が本田親徳より授かった「伝書」類を収めた『関係文書』において、「鎮魂法」の伝書に続く、病氣平癒の行法である「禁厭法」の行法書内に記されている十柱の神である<sup>165</sup>。次に「祝詞」の形式に則り、自らの名前を名のり、「鎮魂神業」を行うことを神々に奏上する。そして、次に「<sup>たましづめのかみのつた</sup>鎮魂乃神乃伝<sup>すべ</sup>へ<sup>しづまりたま</sup>シ術ナレハ<sup>たまぬしのかみ</sup>鎮里給へ<sup>とたびふるみたまのくしきたましづめ</sup>靈主神<sup>しづまりたま</sup>」続いて、「十度普留御靈乃奇支鎮魂ニ鎮里賜へ

<sup>165</sup> 「禁厭法」『関係文書』『本田親徳全集』、366 頁。

あまつち かみ  
天地ノ神」と神歌を二歌唱える。親徳の但し書きによれば、「天地ノ神」と記されているところは、「鎮魂法」の実践者の召喚したい神名を唱えることができるという。そして、次に「生産霊神」「足産霊神」「玉留産霊神」の三産霊神へ一心に祈り、「幽山貫徹ノ加持」を「冥中」でおこなう。

『新漢語林』における「冥」の字義によれば、「冥」とは、「心のおくそこ」、「目に見えない、神仏の作用についていう。」、あるいは「目をとじる。

思いにふける。＝瞑」とある<sup>166</sup>。この字義を考慮して、考えると「生産霊神」

「足産霊神」「玉留産霊神」の三産霊神へ一心に祈り、目を閉じて、心の奥底において、神々の作用の中で、「幽山貫徹ノ加持」の術により、神人合一をおこなうと推測できる。「鎮魂法」の伝書によれば、「幽山貫徹ノ加持<sup>167</sup>」は「口伝」であるとされ、一般公開できない秘術である記されているので、どのような方法でおこなわれるのか、明らかではない。この「幽山貫徹ノ加持」に続いて、「鎮魂法」の伝書では、但し書きがある。これによると「<sup>ただし</sup>但 玉石ニ鎮ムルハ前以テ其目方見置ク可シ。」とあり、玉石に神霊を鎮める場合は前もって儀式前に玉石の重さを測っておくべきであるとする。つまり、本田親徳によって記された「鎮魂

---

<sup>166</sup> 『新漢語林』162頁。

<sup>167</sup> 加持とは、仏教の梵語“adhisthāna”の訳語。諸仏の大悲が行者に加わり、行者の信心に応じて互に通じ合うことをさす。『新漢語林』190頁。このことから、神の恵みと行者の祈りが一体化する行法を表しているといえる。

法」の伝書によれば、「鎮魂法」において、玉石の中に神霊を鎮めておこなう鎮魂法と、鎮魂法の行法実践者自身の体内に神霊を鎮める鎮魂法があるのではないだろうか。人間の体内に神を鎮める場合は、鈴木重胤の『延喜式祝詞講義』において記された「我身體の中府に元より神在て此に主たり、其上に天中の神霊を招鎮めて天神に靈合ふ由なり、(但に中府とは臍下丹田の邊を云ふなり。)<sup>168</sup>」という天中の天神と人間の臍下丹田において、人間に内在する心魂を合一させる鎮魂法と同様の実践であると考えられ、これによれば、本田親徳の『産土神徳講義』において説かれた「閉目拱手」によって心魂を「気海丹田」に据える方法も「鎮魂法」であると考えられる。

#### 第四節 肉体の死滅と靈魂の不滅

##### (一) 身の浄化と寿命について

『産土神徳講義』において、「心を気海丹田に沈める鎮魂法」によって心の浄化方法を示した親徳であったが、身体については「病が身の第一等の不浄で」とし、病気になった場合は、名医に頼み、治療看護が行き届くように努めてか

---

<sup>168</sup> 『鈴木重胤全集第十一』、596-598 頁。

ら、薬の効験、病氣平癒を産土神に祈れば、必ず神の助けあるという<sup>169</sup>。そして病も含めた他の悪しき肉体の穢れは、「薬・避・棄・拒・洗」の五法に実践することによって清浄化できるという。しかしながら、人間の生死寿夭の決定、つまり肉体の寿命は産土神の専門とするところではなく、「天地開闢よりして天津神の立て置き給ふ所」の事という<sup>170</sup>。ここで親徳は、病における肉体の穢れから靈魂不滅の問題へと言及していく。

祈リシトテ、死ニタルモノ再ビ蘇生シタル例モアラザレバ、死セバ天地  
ト共ニ死セザル我親吾子或ハ親戚何人ニ寄ス、コノ死タル者ノ靈魂ヲ、幾  
萬代モ保護シテ下シ給ハント祈禱スルコソ神ノ道ト云フモノ。<sup>171</sup>

大変わかりにくい文章だが、要するに、「人間の肉体には寿命あり、死者の肉体の復活というものはありえないが、たとえ肉体が滅びたとしても、天地とともに、人間の靈魂は永遠に不滅である。肉体の死後、靈魂として生き続ける肉親を

---

<sup>169</sup> 心身の浄化について言及した歌として第五十九首、「産土乃うぶすなの巖乃いづの華表波とりあは靈止体乃たまとみの

不浄乎けがれを祓布門尔はらふかどにこそあれ古曾安礼」がある。『産土百首（下）』『本田親徳全集』、7頁。

<sup>170</sup> 『産土神徳講義（上）』『本田親徳全集』、16頁。

<sup>171</sup> 同。

どうか、恙無く、永遠に保護し続けてください、と祈る事こそ神の道である。」

ということであろうか。この靈魂の不滅について親徳は本田靈学の教義書である

『道之大原』において、「人心也は大精神の分派。故に生無く死無く之れが、制御する所たり。而して今時太陽大地大陰及び人魂を以て各位の守神と為す。<sup>172)</sup>」

といい、靈魂の不滅を説く。また、「神子善心を治むれば、大精神之れに靈魂を与え、神子良行を乱せば、大精神之が靈魂を奪う。其の与奪の速かなること影の形に従うが如し。<sup>173)</sup>」といい、顕世における生命は天之御中主神によって握られており、悪行によって神がその肉体の生命を奪うことが述べられている。『道之大原』は天御中主神を頂点とした天津神の顕幽の働きを記した書であるため、氏子に添った産土神の働きを強調した『産土神徳講義』と強調点の違いはある。しかしながら、靈魂の不滅、大国主神もしくはその分魂である産土神の顕世の魄体の守護、人の寿夭を決定するのは天御中主神であること、魄体の有限性について説かれていること、などについては一致する。また、『道之大原』において、

「而して今時太陽大地大陰及び人魂を以て各位の守神と為す。」とあり、ここでは、「今時」つまり「顕世」における天照大御神、大国主神、月読命、そしてそ

---

<sup>172)</sup> 下線は筆者によるもの。「人心也者大精神之分派。故無生無死。為之所制御。而今時以太陽大地大陰及人魂」『道之大原』『本田親徳全集』、36 頁。

<sup>173)</sup> 「神子治善心。大精神与之靈魂。神子乱良行。大精神奪之靈魂。其与奪之速如影従形。」同、37 頁。

のほかの神々による人魂の守護について述べられているが、『産土百首』第五十三首においては、「うぶすなのわがすめみきはよるずよにみたままもらすかみにこそあれ<sup>174</sup>」とあり、「顕幽」あるいは、次の生まれ変わりの世においても続く産土神の守護が詠われている。

## (二)、死後の富貴、死後の魂の位階について

旧幕藩体制下で下級武士であった幕末の志士たちが明治新政府の高官に登りつめることができたように、霊魂と身体を神にかけて清廉潔白にし人事を努めて学ぶならば、当世は農家の子でも町家の子でも世界に名を轟かすような大人物になることができる、これが生前の名誉というものであると親徳はいう。しかしながら、たとえ神を深く崇敬し心身潔白であったとしても、生前の幸福を勝ち得ない者には次のような死後の祝福があると説く。

才能ガ有テモ、農民ハ溝渠ニ斃レ、市民ハ小店ニ死シテ、戸長ノ一度モ勤ムルニ至ラザルモノアリ。此ノ現世ノ幸福ナキ者ニシテ、死シテ霊魂ハ無比ノ神霊トナリ、産土神ニ召シ連レラレテ国魂ノ沙汰ヲ受ケ、国魂ノ神

---

<sup>174</sup> 『産土百首（下）』『本田親徳全集』、6頁。



ヨリ天日巢ノ宮、即チ所謂出雲ノ杵築ノ大社ニ召シ出サレルルト、此ノ大社ノ大神ノ和魂トオ（ママ）坐ス大和ノ大三輪ノ社ニ鎮座スル大物主神、大地球上ノ人魂ヲ悉ク御主宰遊バシ、御上天在ラセラレ、天ノ高市ト云フ所ニ参上ノ上御届出仰上ゲラルルト、天津神御出張アラセラレテ、其神等ヲ悉ク其程々ニ位次ヲゴ決定遊バシ、萬代無窮ニ存在スル事デアルガ、何ト皆ノ衆ヤ、此ノ如ク産土ノ神ヲ尊信スル心ノ露ノ一滴ヨリ、廣大不測ノ末ノ世迄彼様ノ富貴ヲ得ルト云フモノハ、我輩幼年ヨリ皇学ヲイタシ御歴史ヲ拝読シテ居ルニ依テ胸中ニ秘シ黙々ニ付キ難ク、只々心服ヲ開イテ情実ヲ述ブルハ、人々ノ為ニ天壤無彊ノ福德ヲ与ヘントスル一片ノ婆心ヂヤ

175。

ここでは、人の死後、その靈魂は神靈となり、生前の靈魂の高低に基づいて、天津神から神として位を授かることが示されている。しかしながら、神靈となった人魂が産土神に連れられて大国主神の裁きを受けた後、<sup>あめのひすのみや</sup>天日巢ノ宮に行き、そこで大国主神の和魂である大物主神によってほかの靈魂とともに集められて天に上り、神々の集う<sup>あま</sup>天の<sup>たけち</sup>高市において天津神からの位階をうけ、永遠の存在となる

---

175 『産土神徳講義（上）』『本田親徳全集』、16～17 頁。

のか、それとも、死後神霊となった人魂は、産土神によって、大国主神の裁きを受けたあと、この世の幽界に留まり、大物主神のみが上天し、天の高市において、天津神による神霊の位階がおこなわれるのか、親徳の説明では定かではない。しかしながら、ここで親徳は、篤胤の『霊の真柱』や是香の『産須那社古傳抄廣義』で描かれた顕界と隣接する水平上の他界とは異なる「天」、という垂直的他界観をイメージしていることは明らかである。そしてこの垂直的他界観による靈魂の上天思想は平田篤胤の『本教外編』<sup>176</sup>における、死後の魂の行方と酷似している。

『本教外編』において篤胤は次のように述べている。

人魂は、善人の魂<sup>たましひ</sup>は天上<sup>てんじやう</sup>に昇ること、旧く天<sup>あま</sup>がけりと云へるを証とし<sup>しやう</sup>  
し<sup>177</sup>、（中略）人<sup>ひと</sup>、死すれば形骸<sup>けいがい</sup>は主<sup>しゆ</sup>に歸り、其の靈性<sup>れいせい</sup>は滅<sup>ほろ</sup>ぶる事なく、必ず幽冥<sup>かくりよ</sup>大神<sup>のおほかみ</sup>の御判<sup>みだぬ</sup>を承けて天国<sup>あまつくに</sup>に復命す。天地<sup>ちどう</sup>の初発<sup>はつぱつ</sup>より、一人

---

<sup>176</sup> 文化三年（1806年）成立。別名『本教自鞭策』。本書は、マテオ・リッチの『畸人十篇』、G・アレニの『三山論学紀』、D・パントーハの『七克』をもとに平田篤胤自らの「冥府論」と「古事記」の世界を融合させ、キリスト教の三位一体論から、主宰神としての天御中主神、高産靈神、神産靈神の働きと大国主神による死後の審判を創造している。「未だ他見を許さず」とし生前は公刊されず、明治四十四年（1911年）『平田篤胤全集』第二巻に収められるまで一般には知られていなかった。石田一良『神道思想集』、300頁。

<sup>177</sup> 『本教外編』『神道思想集』、308頁。

も産霊神の善しき霊性を賦け賜はらぬはなく、顕幽相判れたるより、一

人も死して幽冥大神の賞罰の御判を承けざる者なし<sup>178</sup>。

このように篤胤は『本教外篇』において、死後の魂は天に上るとした。この死後の魂の上天についてのより詳しい説明として、以下の一文がある。

抑人は母の痛みを以て顕世に生れ、己が痛みをもて幽世に入る。これ死期なり。霊と身と既に別るゝに至りて、身は蓐床に遺りて知る事なく、霊は身外に出づれば忽に痛苦を免れて、夢の如く現の如く、吾にも非ず幽界に入り、既にして神を正し、目を定めて見れば、産主神の御前に侍ひ、即ち伴はれて冥府天神の神庭に参り至りて、吾が一生に為したる事と行と逐一に判断して遺す事なく、是に於て顕世に在りし間の諸の罪過先づ詳らかに知られ奉り、（中略）斯くて神判既に終りて、善人は幽世の天神集へ率ゐて天上に参のぼり、天神に復命白さしめ賜ひ、永々此の国土の幽世に侍せしめて其の処を得しめ給ひ、天上に往来しつゝ各々某々の功績を為さしめ給ひ、悪人は理のまにまに遂に予美都国に逐はれて、限なき殃苦を

---

<sup>178</sup> 同、319頁。

受け、懊悩痛哭して、永々身に脱せざらん。悲しむべし。憐むべし

179。

ここでは、人の靈魂は肉体をはなれると、夢現の間に幽世に入り、気が付くと産土神の御前に侍っている。そして産土神に伴われて幽冥大神の神庭に到着し、生前の行いについての裁判がある。裁判が終わると善人たちは幽冥大神に引き連れられて天に上る。そして（神）靈となった人間は天津神に復命を申し上げ、それぞれこの国土の存在する幽世において領地および任務を受け、この地上に存在する幽世と天上を往復しつつ、それぞれの責務を全うすることになる。しかしながら悪人は、予美都国に追放され、永遠の苦しみに苛まれることとなるという。

『本教外編』において篤胤は、この現世の水平上に幽世を設定しつつも、その垂直上に天を思考しており、善良なる人の死後の魂は幽世において、天と地を往復しつつ、その職務を全うすることになっている。

この篤胤の『本教外篇』と親徳の『産土神徳講義』の死後の魂の説明を照らし合わせてみると、親徳は自らの魂の行方の思想を構築する際に、平田門人から『本教外編』の写本を入手し、種本とした可能性が高い。そして、『本教外篇』

---

<sup>179</sup>下線は筆者によるもの。『本教外篇』『日本の思想 14 神道思想集』、349-351 頁。

をもとに、上掲の親徳の言説をもう一度考察してみるならば、神霊となった人魂は産土神に連れられて大国主神の裁きを受けた後、<sup>あめのひすの</sup>天日集ノ宮<sup>みづ</sup>に行き、そこで大国主神の和魂である大物主神によってほかの靈魂とともに集められて天に上り、神々の集う<sup>あま</sup>天の<sup>たけち</sup>高市において天津神からの位階をうけ、永遠の存在となると親徳は考えていたと推測できる。また『産土百首（下巻）』の第七十六首において、  
「<sup>たましひのみちのゆくすえはうぶすなのかみのみやべぞはじめなりける</sup>靈魂乃道乃行末者産土乃神乃宮辺曾初也祁留<sup>180</sup>」と詠っており、死後の魂の旅の始まりが産土神の宮辺だとする。しかしその一方で、第九十首においては  
「<sup>よしあしまたまのしらべをうぶすなのかみのみかどはきだめたまへる</sup>善悪敷靈乃審判乎産土乃神府波定給閉留<sup>181</sup>」、と詠っており、ここでは是香が説く「死後の靈魂は善悪邪正に拘はらず、何れも皆其地々々の産須那社に参勤し、産須那神は其靈魂を進退し給ふ<sup>182</sup>」とあるのを受けて、産子の死後の裁きは、産土神の宮においておこなわれ、死後の審判は出雲大社にて大国主神が直接おこなうのではなく、あくまでも、産子の審判は産土神がおこなうことが詠われている。これはつまり、篤胤の『本教外篇』を参考に垂直的天上他界を論じた『産土神徳講義』と、水平上の他界を説く是香の『産須那社古傳抄廣義』に依拠

---

<sup>180</sup> 『産土百首（下）』『本田親徳全集』、8頁。

<sup>181</sup> 同、9頁。

<sup>182</sup> 『産須那社古傳抄廣義卷四』、271頁。

した『産土百首』では、死後の魂の審判の場所に差異が生じているということである。

## 第五節 まとめ

本章では、本田親徳の『産土神徳講義』及び、『産土百首』を取り上げ、親徳が、平田篤胤の顕幽論を踏まえつつ、六人部是香の産須那思想を発展させ、自らの神道思想と行法を創造していったことを考察した。特に『産土神徳講義』では、六人部是香によっても示唆された神より心魂を賜った人間がこの心魂を「顕世」に生きる間、いかに清め、神に愛されるような心を保持できるか、という問いに対応する修養法として、「気海丹田に心を沈める瞑想法」の重要性を説いた。そして靈魂の不滅について触れ、死後裁判後の靈魂の上天を示唆した。この上天思想は篤胤が『霊の真柱』で提示し、是香の『産須那社古傳抄廣義』を経て、親徳自身の『産土百首』において継承された、この世の水平上に位置する他界観とは異なりなり、むしろ篤胤の『本教外篇』を参考にしているといえる。しかし篤胤の『本教外篇』においては、死後神霊は上天後、天地を往復しつつ職務を果たすこととなっており、天界において永続するわけではない。

親徳思想においては、人間がたとえ顕世において幸福や名誉を得ることができなくとも、心の清浄性を保持できるように修養を重ねることによって、死後、天界において神霊の位階とともに永遠の命を得ることができる。これが親徳自身の考える「死後の魂の行方」であり、救済論であったと考えられる。

(改頁)

## 第四章 本田親徳と門人の本田靈学の受容について

### 第一節 本田靈学の受容の問題の所在

今日まで大本教および大本教より派生した神道系新宗教の中で、そしてそれらを調査研究する日本宗教史研究、日本思想史研究、民俗・民衆宗教研究の中で認知されてきた神人感合の行法に「鎮魂帰神法」というものがある。この行法は、出口王仁三郎（明治四年－昭和二十三年）こと上田喜三郎が、明治三十一年（1891年）に京都府亀岡市曾我部町穴太<sup>あなお</sup>にある高熊山<sup>しんし</sup>に神使に伴われて入山し、岩窟において、「異靈彦命」<sup>ことたまひこ</sup>より教授されたものであると云われている。出口王仁三郎によれば、「異靈彦命」とは薩摩藩出身の神道家、本田親徳の威霊であり、出口王仁三郎は、幽界にて本田親徳より、直教を拝し、現世においては、本田親徳の門人であった御穂神社祠官の長澤雄楯より教えを受け、自らの靈学を完成したことになっている<sup>183</sup>。しかしながら、「鎮魂帰神法」という名称とともに大本教の宗教的实践として世に認知されていく以前には、元来、本田親徳によって提唱され、皇国思想および国学から派生して起こったテキスト解釈の方法論であり、国家統治の方法論として明治維新以降に政治家や神社神官達の中で広がった類似しつつも異なる二つの神道行法、鎮魂法と帰神法であった。

---

<sup>183</sup> 大本教七十年史編纂会編『大本教七十年史』上巻、158-163頁。





図 3 出口王仁三郎（左）、長澤雄楯（中央）、出口日出麿（右）<sup>184</sup>

本田親徳の思想と行法を出口王仁三郎が、本田親徳の門人である長澤雄楯より教授され、それらを大本教の教義及び「鎮魂帰神法」に応用したことについては、田中初夫<sup>185</sup>、安丸良夫<sup>186</sup>、津城寛文<sup>187</sup>、バーギット・シュテムラー<sup>188</sup>、ナンシー・ストーカー<sup>189</sup>によって既に指摘されている。しかしながら、これらの先行研究においては、研究の主眼は、1) 大本教および出口王仁三郎にあること、2) 本田親徳の著作類が本田自身の国学および神道思想の学統を明らかにしてい

<sup>184</sup> 昭和八年に出口王仁三郎は、霊学の師である長澤雄楯を亀岡に招き、大阪、神戸、竹田、鳥取、松江、出雲、綾部を案内した。大本竹田別院五十年誌編纂委員会編『大本竹田別院五十年誌』123頁。本資料について、は出口三平氏より、教授を受けた。

<sup>185</sup> 田中初夫「神霊の系譜」、28-38頁。

<sup>186</sup> 安丸良夫「出口王仁三郎の思想」、島藺進、成田龍一、岩崎稔、若尾政希編『安丸良夫集3』、177頁。

<sup>187</sup> 津城寛文『鎮魂行法論：近代神道論と身体論』。

<sup>188</sup> Birgit Staemmler. *Chinkon kishin: Mediated Sprit Possession in Japanese New Religions*, pp.4-5.

<sup>189</sup> ナンシー・K・ストーカー『出口王仁三郎帝国時代のカリスマ』134-139頁。Nancy K. Stalker. *Prophet Motive: Deguchi Onisaburo, Omoto, and the rise of new religions in Imperial Japan*, pp.89-92.

ないこと、3) 本田の出自を辿る薩摩藩関係資料に限りがあること、4) 本田親徳の著作の読者であった本田の門人及び、当時の神道界に身を置く者達が、必読の神道家や、国学者である山崎闇斎、荷田春満、加茂真淵、本居宣長、平田篤胤を本田親徳は批判し、自らの思想と行法の独自性を主張していることから、本田親徳とは、どのような経歴をもつ神道家であり、本田親徳の思想及び行法が、どのようなものであったのかについて考察を避けてきた。そして、先行研究においては、『本田親徳全集』の編者であり、『本田親徳研究』の著者である、北海道余市町入船町にある明治神社、宮司であった鈴木重道の調査を踏襲する形で本田親徳を説明している<sup>190</sup>。このような傾向の中、宗教社会学者であるバーギット・シュテムラー(Birgit Staemmler)は「鎮魂帰神法」を「近代日本において出現した“Mediator”(仲介者・審神者)を用いた憑依の実践」と定義する。そして大本教を中心として、鎮魂帰神法を実践する新宗教とその教祖の諸相とともに日本の民俗宗教におけるシャーマニズムや修験道における神憑りの行法を考察の対象とした<sup>191</sup>。シュテムラーは田中初夫、津城寛文と同じように本田親徳を大本教系鎮魂帰神法の祖として取り上げている。シュテムラーは親徳の「帰神法」の中で特に

---

<sup>190</sup> 鈴木重道「巻末記」『本田親徳全集』、569-598頁。

<sup>191</sup> Birgit Staemmler, *Chinkon kishin: Mediated Spirit Possession in Japanese New Religions*, pp.4-5.

審神者（さにわ）を用いた「他感法」に注目し、これを修験道の「憑祈祷」や御岳教における「御座」、あるいは中国密教に触発されたものとする<sup>192</sup>。親徳は「此ノ神ノ神法ノ今時ニ廃絶シタルヲ慨嘆シ、岩窟ニ求メ草庵ニ尋ネ終ニ三捨五歳ニシテ神憑三十六法アルコトヲ覚悟リ<sup>193</sup>」といい、本田は神道行法として神憑りが当時廃絶しているかのように語っているもののシュテムラーは「仲介者・審神者」を伴う憑依の実践が当時の日本において、山岳信仰および民俗宗教において存在していたことから、親徳が聖山を巡り修行をおこなっていた際に「憑祈祷」や「御座」もしくは他の憑依行法と接触があったとみる。確かに、シュテムラーが推測するように何かしらの憑依行法に親徳が接近していた可能性は高い。

『加世田市史』によれば、本田親徳の出生地とされる加世田地方を治めていた戦国時代の領主である島津忠良（日新公）（明応元年－永禄十一年）（1492 年－1568 年）は、戦場において、現在の熊本県に位置する金峰山蔵王権現や、現在の鹿児島県に位置する烏帽子岳などを修行場とする陣中山伏を重用し、加持祈祷や、敵陣の調伏などをおこなっていた<sup>194</sup>。島津忠良が重用していた陣中山伏の

---

<sup>192</sup> Ibid., p.60.

<sup>193</sup> 『難古事記（巻五）』、224 頁。

<sup>194</sup> 加世田市史編纂委員会『加世田市史』上巻、195-196 頁。戦国時代の島津家と陣中山伏の行法については、永松敦「島津貴久の宗教政策－修験道を中心として－」、1-20 頁。同「島津義久と修験道－合戦と作法」、231-262 頁。同『狩猟民俗と修験道』。

内、天文五年（1536 年）の一字城攻めの際の陣中山伏は本田石見坊慶俊である。

本田慶俊は一字城攻め後に一字城が存在した伊集院地方の稲荷神社の神職となった。このように本田親徳と同姓の調伏や、加持祈祷を得意とした山伏兼神官が戦国時代には存在したことから、本田親徳の憑依行法の基礎には山岳信仰の影響が存在した可能性はある。しかしながら、本田親徳の思想において、あるいは本田の思想に共鳴した門人たちは、一般民衆を仏教、キリスト教、イスラム教などの邪法に惑う「愚民」と称し<sup>195</sup>、民衆をあくまでも統治の対象とみなしていた。そして、民俗・民衆宗教の担い手であった民間巫者たちの宗教実践を「巫或は法華僧の行は此等外下々下等也<sup>196</sup>」と軽蔑する皇学的エリート性を有していた。また、なおかつ本田霊学は、苦行の否定を信条としている<sup>197</sup>。そのため、シュテムラーが主張するように本田親徳が苦行を有する山岳信仰や民俗・民衆宗教である御嶽講に密接に関係していたかは疑問が残る。それよりも、本田の行法は近世において主流であった白川神道<sup>198</sup>や吉田神道における神道行法と橘守部や平田篤胤のような天保国学の研究の対象となっていた「神霊の實在論証」を試みる思想の

---

<sup>195</sup> 「産土神徳講義(下)」、19 頁。

<sup>196</sup> 「帰神」『霊学抄』、369 頁。

<sup>197</sup> 『産土神徳講義（上）』、14-15 頁。

<sup>198</sup> 神道大系編纂会編「神事伝授之事」『神道大系 論説編第十一 伯家神道』、341-388 頁。  
神道大系編纂会編「事相方内傳草案」『神道大系 論説編第九 卜部神道（下）』、165-355 頁。

実践化によって、創造されていったものと推測できる<sup>199</sup>。つまり、本田親徳は、巷に流布する憑依現象をより洗練された学問的技法としての意味を持たせ、門人のみが知ることができる口伝秘法として、自らの行法に付加価値を持たせた可能性が高い。本稿では、本田親徳とはどのような人物であり、なおかつどのような人物が本田の門人であったのかを考察するために、本田親徳の門人の中で神社神道と神道系新宗教の結節点となった御穂神社祠官、長澤雄楯に注目をする。長澤雄楯の思想と実践を取り上げることによって、明治維新以降の地方神官が直面していた問題を考察し、本田親徳の思想と行法を現実の神社経営にどのように適応させていったのかを考察してみる。

## 第二節 本田親徳の出自について

本田親徳の提唱した霊学は、口承伝承を経て編纂された『古事記』『日本書紀』などの神典における不確かな原義を神憑りにより神界より直接神霊を召喚し、テキストの正確な解釈を深めることを目指した。そして、内戦や対外戦争などの国

---

<sup>199</sup> 平田篤胤の記した『仙境異聞』には仙童寅吉に越谷宿の産土神「久伊豆様」が降臨した様子が記されている。平田篤胤、子安宣邦校注『仙境異聞 勝五郎再生紀聞』、212-216 頁。橘守部の神霊思想については中野裕三「橘守部の神理解」、1-22 頁、同「顕生魂（あらみたま）説の原由―橘守部の神学」、1-36 頁を参照。

家の危機的状況において、敵の戦法や戦況状況について神霊から啓示を受けることにより、国家の不測の事態に対応できると考えた。この神霊から啓示を受ける方法として、実践者たちは、神憑りの行法である「帰神法」をおこない、また「天象地理及人獣鳥魚虫」を観察する「形象卜法」、万物の声音を聴いて判断する「声音法」、天数一から十まで使い、経緯の数理によって判決する算数法を内包する「太占」を実践した。そして『古事記』の始源の神である、天御中主神から賦与された自らの霊魂の神性をより高め、浄化し、死後の位階に備えるために霊魂の浄化方法として、「鎮魂法」をおこなった。また、彼らは、統治の対象となる民衆に病氣癒しの行法である「禁厭法」を施した。これらの宗教的实践は明治維新以降に、薩摩藩出身の政治家達が行政をになった諸県において、地方の神道行政をになった地方神官たちや、戸長などの亜流エリートたちの間で受容されていった。

本田九郎親徳（号：瑞園）は、太占、鎮魂法、帰神法を皇国固有の霊（魂）学と称し門人をあつめた神道家である。本田九郎の先祖にあたる本田氏の薩摩地方への入植は、島津忠久が元暦二年（1185 年）に源頼朝から島津荘下司職に補任され、代官として本田貞親を下向させたことに始まる。本田氏は戦国時代には島津家の外戚として、家老職を排出した島津家の重臣であったが、本田九郎自身の細

かい履歴を辿ることは難しい<sup>200</sup>。現存する薩摩藩資料からわかる事として、京都留守居役であった内田仲之助（政風）（文化十二年－明治二十六年）（1815 年－1893 年）から大久保一蔵（利通）（文政十三年－明治十一年）（1830 年－1878 年）への本田九郎に関する手紙（年代不明）によれば、幕末期の本田九郎は、一身上の都合により脱藩しつつも、皇国学を信奉する者として長州の馬関辺為探索方として働き<sup>201</sup>、明治維新後には鹿児島県の国学局の国学掛として登用されていた<sup>202</sup>。明治二年には、本田九郎と旧知の間柄であった三島通庸（天保六年－明治二十一年）（1835 年-1888 年）が都城地頭となるが、その翌年七月に三島は、陰陽石と呼ばれる巨石信仰と稲荷信仰が継承されていた石峰稲荷明神社において本田九郎の幽祭により祭神を神鏡に取り替え、主祭神を豊宇気姫神と決定し、神社名を「母智丘神社」と改め、再建している<sup>203</sup>。

本田九郎は明治維新以降、同じ本田氏の薩摩国鹿児島諏方大明神大宮司、本田親徳（寛政十二年－元治二年二月二十九日）（1800 年－1865 年）の名を継ぎ本田親徳と名乗り始めるが、橘守部による『難古事記伝』（天保十三－十五年）（1842 年－1844 年）と守部の提唱する神秘五箇条に触発されて記した古事記の注

---

<sup>200</sup> 鹿児島県姓氏家系大辞典編纂委員会編『鹿児島県姓氏家系大辞典』、121 頁。

<sup>201</sup> 立教大学日本史研究室編『大久保利通関係文書』第二巻、133 頁。

<sup>202</sup> 鹿児島県立図書館所蔵「母智丘神社由緒書御届申上候扣」。

<sup>203</sup> 鹿児島県立図書館所蔵「母智丘神社由緒書御届申上候扣」。

釈書『難古事記』（明治十二年）（1879年）によれば、自らを天照大御神と建速須佐之男命の誓約において天照大御神の勾玉より生じた皇祖忍穗根命（正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命『古事記』、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊『日本書紀』）の子孫とし<sup>204</sup>、「筑紫日向、橘小門の出身」としている<sup>205</sup>。そして、六人部是香による『産須那社古傳抄廣義』（安政六年）（1859年）の産土神思想をもとにして詠んだ和歌集『産土百首』（明治十八年）（1885年）の巻末には「桓武天皇之皇子葛原親王三十四世 平朝臣親徳 六十一年五ヶ月」と記し、ここでも皇孫を自称している<sup>206</sup>。また、明治二十年（1887年）に刊行された反耶書『耶蘇教審判<sup>207</sup>』では本

---

<sup>204</sup> 本田親徳『難古事記』巻五、『本田親徳全集』、209頁。

<sup>205</sup> 本田親徳『難古事記』巻四、『本田親徳全集』、189頁-190頁。先行研究の戸籍調査によれば、本田九郎は現在の鹿児島県南さつま市に位置する川辺郡加世田郷武田村一五三番戸に生まれたとされる。鈴木重道「年譜」『本田親徳全集』、569頁。九郎の父の名は主蔵という士族あるいは、典医とされるが、定かではない。本田九郎が典医の息子というのは、九郎とは別人物の諏訪大明神大宮司、本田親徳の義父が、薩摩藩典医、森本高見であることから混同されたのかもしれない。『加世田市史』に掲載されている「幕制時代末期麓方限のうち（上鴻巣、下鴻巣、屋地、大迫、馬場、大坊の各屋敷）」図絵によれば、本田九郎屋敷は武田村ではなく、加世田郷において士族が多く居住していた麓地区西方向に位置する柿本寺付近に描かれている。加世田市史編纂委員会『加世田市史』上巻、218頁。また、鈴木重道によれば、明治五年に父主蔵の死亡により家督を相続したとされるが、明治五年の『加世田士族明細帳』には、麓にも武田村にも本田九郎あるいは本田主蔵の記録はない。鈴木重道「年譜」573頁。上東三郎編『加世田士族明細帳』。

<sup>206</sup> 本田親徳『産土百首』『本田親徳全集』、10頁。元禄期までの薩摩藩における本田氏の系図によれば、本田氏は桓武平氏から派生したことになっている。鹿児島県歴史資料センター黎明館編「正統本田氏并ニ庶流」「諸家系圖一」『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺伊知地季安著作資料集三』、1-23頁。

<sup>207</sup> 本田瑞園『耶蘇教審判』。本書は明治憲法制定直前に執筆、出版されている。当時、伊藤博文政権下において、キリスト教が国教化するのでは無いかという噂に危機を抱いた本田親徳が、本書を読むことによって、キリスト教の倫理性に疑問を抱かせるべく執筆した。本書



田瑞園という号を用いており、この瑞園という号から推測するに本田九郎親徳は江戸中期の薩摩藩の国学者、白尾国柱（宝暦十二年－文政四年）（1763 年-1821 年）（本姓：本田親白、号：瑞楓）の学派の下で国学を学んだとみられる。

### 第三節 本田門人と秘伝行法の受容について

明治維新以降本田親徳は、薩摩藩の尊皇攘夷グループであった精忠組をもとにした縁故により会津、羽後、甲府、駿河、遠州、三河、伊豆、武州（秩父、川越）地方で門人を集め、天保国学の思想的議論を継承した神道思想の宣教と行法伝授をおこなっていた。親徳によれば、「神界ニ感合スルノ道ハ至尊至貴、濫ニ語ル可キ者ニ非ズ。吾朝古典往々其实績ヲ載スト雖モ、中世祭祀ノ道衰へ、其術ヲ失フ既ニ久シ。神法ニ依リ其古ニ復ス。是即チ玄理ノ窮極、皇祖ノ以テ皇孫ニ伝ヘシ治国ノ大本ニシテ祭祀の蘊奥ナリ。<sup>208</sup>」といい、自らの霊学を「正哉吾勝々速日天忍穂根命」の末裔である自らが復古した治国の道であると主張し自らの行法の特殊性を主張していた。

---

の内容としては、老子と釈迦牟尼が原告として大日本帝国下の法廷において、イエス・キリストと「神」を訴え、本田親徳と思われる検事が、「神」とされる男性とマリア、エリザベスの姦通罪を暴く内容である。本書は神道界だけでなく、明治十年代に反キリスト教運動を展開していた仏教関係の書店でも宣伝販売されていた。

<sup>208</sup> 本田親徳『霊学抄』『本田親徳全集』p.372.

明治元年(1868 年)、三月十三日に出された太政官布告により、祭政一致制度が興り、神祇官制度が再興されるが、これにより、吉田家白川家の執奏制度は廃止となる<sup>209</sup>。明治維新と近代神道の創出を研究するジョン・グリーンは祭政一致制度をすべての地方神社の神職を「私的」神道家である吉川家・白川家との関係を絶ち、神祇官の管轄下に置くことで、神社（とその神主）を国家儀礼（つまり祭祀）の場としての国家に連結させることが狙いであったと説明している<sup>210</sup>。本田親徳は白川家・吉田家との関係が切れた地方の神官や国学の素養のある有識層をターゲットとして、白川家・吉田家が変わる神道行法の秘伝伝授を提供することで、自らの神道思想とその行法を広めようとしていたと言える。

明治二年(1869 年)に発足した宣教使制度において発行された「宣教使心得書」には、呪術的行為を禁じ、「説諭の際牽強付会荒唐戲謔の語を発し世を惑はし人を誣ふる等の談説嚴ニ禁止すべきこと」「希望の者有之候共禁厭祈祷之儀一切停止之事」という条項が挙げられることとなる<sup>211</sup>。竹中信常によれば、「禁厭」とは、予測される災難厄事を防ぎ、または、治病のために行う呪術的行為をさす

---

<sup>209</sup> 明治維新以後の神道政策については Helen Hardacre, *Shinto A history*, Chapter 12 “Shinto and the Meiji State,” pp.355-440 を参照。

<sup>210</sup> ジョン・グリーン「近代神道の創出一神仏判然令がめざしたもの」『儀礼と権力 天皇の明治維新』、151 頁。

<sup>211</sup> 井上順考「神道教派の境界線形成と二種類の認知プロセスの関与」、3-29 頁。

212。「禁厭」を「まじない」詳しくは「まじないやむる」と読む。すなわち「禁厭祈祷」とは呪法によって超自然的な怪異の力を駆使して、病気を治し、災厄の起こらぬように祈念することをいう。『日本書記』神代宝剣出現第六の一書の大己貴命・少彦名命の国土経営の条に「夫の大己貴命と少彦名命と、力を戮<sup>あは</sup>せ心を一つにして、天下<sup>あめのした</sup>を経営<sup>つく</sup>る。復<sup>また</sup>顯<sup>うつつ</sup>見<sup>し</sup>蒼<sup>あお</sup>生<sup>お</sup>及び畜産<sup>けもの</sup>の為は、其の病を療<sup>をさ</sup>むる方を定む、又鳥<sup>とり</sup>獸<sup>けだもの</sup>昆虫<sup>はふむし</sup>の災異<sup>わざわい</sup>を壊<sup>わざわい</sup>はむ為には、則ち其の禁厭<sup>まじないやむる</sup>之法<sup>のり</sup>を定む是を以て百姓、今に至るまでに<sup>ことごとく</sup>咸<sup>みな</sup>に恩<sup>みたま</sup>頼<sup>のふゆ</sup>を蒙<sup>かがふ</sup>れり。213」とあり、大宝律令（701年）では典薬療に呪禁師・呪禁博士を置いたことから、古くから禁厭は実践されていた。近世から現代まで広く知られる禁厭として、疱瘡や麻疹を防ぐために源為朝（鎮西八郎）（保延五年－嘉応二年）（1139年－1170年）の武威により、疫病を避ける方法として「鎮在八郎為朝御宿」と書いて戸口に貼り、家内への疫病神の侵入を防ぐ方法などがある<sup>214</sup>。しかしながら禁厭は、人間が不安を除き危機を回避し、平安を願う欲求から生じ、特に治病に用いられたものの、市井一般の呪者や巫者が民間治療を生業としてする中で、依頼者の要望により、人を害す

212 竹中信常「禁厭」 藺田稔、橋本政宣編『神道大辞典』、298 頁。

213 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注「神代上第八段」『日本書記』巻一、102-103 頁。

214 源為朝の武威と疱瘡除けの関係についてはハルトムート・オ・ローテルムンド『疱瘡神—江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』107-170 頁、第三章「疱瘡絵ト疱瘡絵本」に詳しい。

る妖術として禁厭をおこなうことがあった。そのため、禁厭を政府は公安を害し、医療の妨げになる行為として、禁止していくこととなる<sup>215</sup>。

明治六年(1873年)一月十五日教部省達第二号「従来梓巫市子並憑祈禱狐下ケ等ノ所業禁止ノ件<sup>216</sup>」では「従来梓巫市子憑祈禱狐下ケ杯ト相唱玉占口寄等之所業ヲ以テ人民を眩惑セシメ候儀自今一切禁止候条於各地方官此旨相心得管内取締方嚴重可相立候事」とされ、民間巫者の神憑り、ト占などの宗教的行為を禁止する布告が出された。翌年の明治七年六月七日に教部省（第22号達）は「禁厭祈禱ヲ以って医薬ヲ妨クル者取締ノ件<sup>217</sup>」において、禁厭祈禱により、医療を妨げ、湯薬を止めさせ人命に関して衆庶の方向をあやまらせることは「政治の障害」となり、取り締まりの対象となるとされた。しかしながら、当時地方の神社神官を兼務する戸長などの地域の有力者は、氏子や産子が求める病氣直しの禁厭法 竈神祭、霹靂祭、除蝗、祈晴、祈雨、ト占等などの私祈禱<sup>218</sup>の領域において、皇国学に依拠した方術行法を習得すべく、本田九郎親徳の門人となっていた。そして行法の基礎となる実践者の靈魂の清浄化をはかる「鎮魂法」や神々から直接的啓示を受けるための神懸りの法である「帰神法」の修練をおこなっていた。

---

<sup>215</sup> 同、298 頁。

<sup>216</sup> 宮地正人「宗教関係法令一覧」『宗教と国家』、452 頁。

<sup>217</sup> 同、461-462 頁。

<sup>218</sup> 本田親徳『本田親徳先生祝詞文』『本田親徳全集』、335-346 頁。

現在『本田親徳全集<sup>219</sup>』として出版されている本田九郎親徳の著作集の元本となる著作群を行法の許可状とともにもらい受けた北海道余市郡余市町入舟町の明治神社祠官、鈴木廣道（嘉永三年－？）（1851年－？）は山形県飽海郡上野曽根村薬師神社の社家の出身であり、明治四年より上田村の戸長であった。鈴木廣道は福島県北会津郡下荒井村、熊野神社社家の出身で会津藩における吉田神道を継承し、宗源神道<sup>220</sup>興隆に努めていた（山形県皇典講究分所教授・権大教正（明治23年））坂内須賀美の紹介により、明治十五年(1882年)頃に本田親徳の門人となっている<sup>221</sup>。

鈴木廣道は、内弟子となる前にまずは文通により親徳と交流を持ち、特に病氣なおしの方術である禁厭法について教授を受けていた。当時、親徳は、伊豆国田方郡塚本村戸長の小川宗右衛門宅に滞在し、活動をおこなっていたが、「伊豆駿河遠江三国は神道盛大のことに候。」と述べている<sup>222</sup>。伊豆地方では、小川宗右衛門の外に伊豆君沢郡の名主で平田篤胤の没後門人であった萩原正平（天保九年－明治二十四年）（1838年－1891年）が親徳の門人であった。萩原正平は維新

---

<sup>219</sup> 鈴木重道「巻末記」『本田親徳全集』578-580頁。

<sup>220</sup> 吉田兼俱（1435-151）によって創唱された吉田神道を兼俱自身は「唯一神道」「宗源神道」「元本宗源神道」と呼んでいた。伊藤聡「吉田神道」『神道事典』、445-447頁。

<sup>221</sup> 鈴木重道「巻末記」、578頁。

<sup>222</sup> 「書簡」『本田親徳全集』、377-378頁。

後に神祇官、宣教使、権大教正、三島大社少宮司伊豆山神社祠官を歴任し、静岡に皇学舎を設立し、大社教の分院長も努めた。本田親徳が明治十八年に三島大社でおこなった「古事記」および「産土神」の神徳についての講義も萩原正平の招聘であったと見られる。

#### 第四節 長澤雄楯と御穂神社

本田親徳の駿河門人として、本田親徳の名を現在においても存続させた人物として、長澤雄楯（安政五年－昭和十五年）（1858 年－1940 年）がいる。長澤雄楯は静岡県不二見村下清水の月見里稻荷神社の出身で、義父隼人は慶応四年(1868 年)二月二十五日に駿河地方の神社神主達によって結成された尊皇攘夷部隊である赤心隊府辺組に入隊し上野戦争に参戦している<sup>223</sup>。雄楯自身も数え年十一歳にて義父と共に従軍したという。長澤雄楯は明治二年(1869 年)六月四日より、静岡藩立学校に入学し、漢学を学び、明治四年(1871 年)九月一日に清水学校に転校し、ここでも漢学を修めた。本居豊穎門人で平田篤胤の没後門人であった浅間神社宮司、大井菅麿、富士萬に国学を学び、浅間神社に設立されていた中教院に明治七年(1874 年)一月六日に入学し、同年八月四日には、はやくも同院より皇学漢学助

---

<sup>223</sup> 静岡県史編纂委員会編『駿河国赤心隊姓名書』『静岡県史』、67 頁。

教を申し付けられた秀才であった。長澤は明治七年(1874年)八月二十五日静岡県より安倍郡三保村に鎮坐する御穂神社祠掌に任命され、続いて明治十九年(1886年)九月二十五日に御穂神社祠官に昇任されたのを始めとして没するまでの間、静岡県下において、御穂神社に限らず、清水地域周辺の無格村社を多く管理し、復興維持に尽力している。

三保の松原で知られる御穂神社の創建は不詳ではあるが、国史である『日本三代実録』巻十一卷 貞観七年(865年)十二月二十一日には「授(中略)駿河國從五位下御廬神從五位上」という昇叙の記載が存在する<sup>224</sup>。『府縣郷社明治神社誌料上<sup>225</sup>』によれば祭神を「大己貴命」、「三穂津姫命」の二柱を祭神とし、「みほ」の字は「御穂」「御廬」「三穂」「三保」と作られ、明治維新後の近代社格制度において明治六年に「郷社」、明治三十一年(1898年)に「県社」に昇格している。

明治政府は成立以来、神社の全国的把握や神社調査を進めた結果、明治四年(1871年)五月十四日に近代社格制度の基盤となる大政官布告「官社以下定額・神官職制等規則」を公布した<sup>226</sup>。この公布では、神社の格を官社と諸社に分類

---

<sup>224</sup> 黒板勝美編『日本三代実録』『新增補國史大系』第四卷、169頁。

<sup>225</sup> 明治神社誌料編纂所編、「御穂神社」『府縣郷社明治神社誌料』上巻、37-39頁。

<sup>226</sup> 阪本是丸「近代社格制度」『神道事典』、121-128頁。

し、官社には、官幣の大中小社、国幣の大中小社とし、官幣社は神祇官が祭り、国幣社は地方官が祭るものとした。また例祭において、官社が皇室から幣帛料が支出されるのに対し、国幣社は国庫から支出される違いがあった。諸社には、府社、藩社、県社、郷社がおかれ、それぞれの行政単位において、崇敬する神社として規定された。そして、明治四年(1871年)七月四日「郷社定則」において、郷社の付属として村社が設けられた。

『府縣郷社明治神社誌料』が出版された明治四十五年(1912年)の時点での御穂神社の氏子戸数は「五百一戸」、崇敬者員数「二千五百三十人」と記されている。この御穂神社の「郷社」から「県社」への昇格は当時御穂神社に奉職していた長澤雄楯の手腕に依るところが大きい。近代社格制度において、当初、御穂神社は静岡県安倍郡三保村地域の産土神（氏神）として氏子の寄付および、郡村行政下の下賜金を授与していた。しかしながら実際には、三保村周辺地域にも崇敬者が存在し、三保村という村落共同体の信仰共同体には収まらない神霊の威力を内包していた。長澤は、より大きな信仰地帯を保持することによって、公的下賜金の増額及び、御穂神社の信仰勢力の拡大を目指したのであった。

長澤は、明治十二年(1879年)二月に御穂神社祠官山口守の辞職により、御穂神社を司掌として担当する中、氏子の寄付のみで御穂神社を永久維持するのは困難



と考え、「崇敬者の勧誘」「社殿の整備」「維持資金の蓄積」を目標としつつ、氏子の他に崇敬者組合が存在する三保村、二見村、清水町入江町にて「御穂神社」を維持していく方法を模索していく。当時、郷社としての公的下賜金「千五百余円」を御穂神社は賦与されていたが、長澤はこれを経費節約とともに投資による「利倍増殖」に励み、明治三十年(1897年)には、約二倍の「参千参百余円」となったことを区切りとして、三月に「県社」昇格を申請し、九月より御穂神社は「県社」に列せられることとなった。この後も長澤は、氏子及び崇敬者からの寄付に頼らない利殖による神社維持経営の道を進んでいく。長澤は、御穂神社だけでなく、三保村、二見村、清水町、入江町の無格村社を「崇敬者の勧誘」「社殿の整備」「資金の蓄積」の戦略によって維持復興していった<sup>227</sup>。昭和五年(1930年)二十五日には、長年の功績により当時静岡県下の神職において唯一天皇陛下に拝謁を許され、昭和十五年(1940年)五月に正七位に叙位、同年十月十日の永眠を受けて、同月二十一日に従六位に叙せられている。このように長澤雄楯は、地方の小社の社家出身者としては明治維新以降、太平洋戦争敗戦以前の神道職界において栄転を全うした人物といえる。長澤は明治十七(1884年)、もしくは、十八年

---

<sup>227</sup> 中島重雄「長澤雄楯翁略歴」『惟神』、14-17頁。

(1885 年)頃に当時静岡県令であった奈良原繁の招きにより駿河地方にて学苑を開  
いていた本田親徳の門人となり、本田霊学を受容している。



図 4 御穂神社



図 5 月見里神社



図 6

長澤雄楯（月見里神社所蔵）

## 第五節 長澤雄楯の本田靈学の受容と「禁厭法」について

長澤は奉職する御穂神社、自社である月見里稲荷神社そして自らが管轄する地元の村社を維持復興し、崇敬者の増加を図るためには「靈威の顕現」「病氣癒し」は重要な要素として認知し、本田靈学を受容しつつ禁厭法を実践していた。月見里神社に現存する資料には『禁厭秘法書<sup>228</sup>』（資料番号 No.269/Y269）という「蟲歯の禁厭と神歌」「やけどのまじない」「腫物を治する厭」「眼に物の入りしを取るまじない」「血止めの方法」「目星を治す神歌」「安産の禁厭」「蟻除の神歌」「食物の胸につかへたる時まじない」「咽喉に魚又何かかりたるを取神歌」「十種神宝祈禱の祝詞」「十種口授の伝」「十種神財玉之用様次第」が書かれた折本が現存している。

---

<sup>228</sup> 本書の表紙には「第廿号」とあり、本書に所蔵されている「禁厭」内容を鑑みても、本書に記されていない「病苦」に対応する他の「禁厭法」の伝書が存在した可能性もある。本資料は科研「複眼的視点からの大本教研究－データベース構築と国際宗教ネットワークの研究」（科研番号：15K02068）「日本新宗教史像の再構築」（科研番号：18H00614）研究分担者、舞鶴工業高等専門学校、吉永進一教授の指揮の下おこなった、月見里神社資料調査により発見された。石原和、吉永進一、並木英子編「月見里神社・稲荷講社史料目録」『月見里神社・稲荷講社史料/宮城島家史料目録－近代清水の神職たちと鎮魂帰神－』、67 頁。

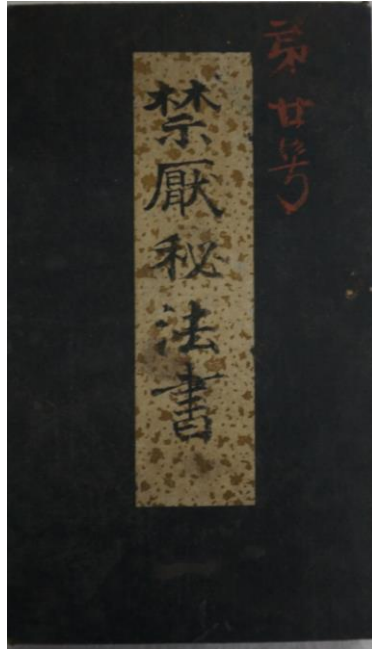


図 7

『禁厭秘法書』表紙（月見里神社所蔵）

長澤自身が本田親徳から伝授された許可状や伝書自体は、現存していないが本田親徳門人の一人である鈴木廣道が明治十九年(1886 年)に授与された禁厭法の伝書には以下の様な詞書きが書かれている。

禁厭<sup>229</sup>

謹而案スルニ禁厭は大己貴命少彦名尔原始里中世尔到利朝廷尔亦咒禁  
之博士乎置支益之ヲ講明セシム後世衰乱相繼其法廢絶シタルガ如シ親  
徳其之ヲ慨歎スル日久シ而シテ之ヲ両神之神勅尔頼リ之ヲ実症（マ  
マ）ニ験ミ百折千挫四十年の歲月ヲ累子神妙ノ秘奥ヲ現時ニ施用スル

<sup>229</sup> 本田親徳「伝書」『本田親徳全集』、358 頁。

コト得ルニ至ル于茲明治十九年五月十三日羽後国飽海郡上野曾根村門

人鈴木廣道ニ伝授ス

咒文 吹笛 以心伝也

桓武天皇三拾四世皇胤 従五位平朝臣 親徳 花押

本田親徳の詞書きによれば、禁厭法は大己貴命、少彦名命にはじまるものの、中世以降衰退してしまったが、帰神法による大己貴命、少彦名命に神勅を頼りに、親徳自身挫折を繰り返しながら四十年ほど掛けて、「神妙ノ秘奥ヲ現時ニ施用スルコト得ルニ至」ったという。神憑りの行法である「帰神法」について詞書き「吾朝古典往々其实績ヲ載スト雖モ、中世祭祀ノ道衰へ、其術ヲ失フ既ニ久シ。神法ニ依リ其古ニ復ス<sup>230</sup>」と、ほぼ同じ説明をしている。ここでも親徳は自らを「桓武天皇三拾四世皇胤」としている。また行法として「咒文」と「吹笛」が使用されることが記されている。そして、鈴木廣道が伝授された「禁厭法」の行法作法は以下のものである。

---

<sup>230</sup> 本田親徳『霊学抄』『本田親徳全集』、372 頁。

禁厭法

先神前ニ向ヒ二拝二拍手 心中祈念ニテモヨシ

○橘乃小戸乃身禊乎始メニテ今モ清ムル吾身ナリケリ

○千早振神ノ御末ノ吾ナレバ祈リシ事ノ叶ワヌハ無シ

○唱ヘノ神名

神招ノ文ニ 招キ奉ル此拍手ニ恐クモ寄り来座坐セ

薬師の大神<sup>231</sup> 拍手

神皇産霊神 高皇産霊神 生産霊神 足産霊神 玉留産霊神

大宮能女神 御食津神 事代主神 直日神 普留御魂神

此神床ニ仕奉人々ニ寄り来給ヒテ速ク病ヲ愈シ給閉止

恐美恐美毛白寸

奥津鏡 辺津鏡 八握ノ劔 生玉 足玉 死返玉 道反ノ玉

蛇ノ比礼 蜂ノ比礼 種々物ノ比礼

吹笛ナリ

比止 布太 身 与 出 武与 奈那 弥 古比 多里

---

<sup>231</sup> 鈴木廣道は羽後国飽海郡上野曾根村の薬師神社社家の出身であるため、「薬師の大神」を召喚している可能性もある。

布留部由良由良

○ 祕歌神人結ノ印ニテ

心苦ク悩ムノ禍災ヲ療シ給ヘヤ薬師ノ大神

年ヲ経テ身ヲ妨グル禍災ヲ祓ヒ賜ヘヨ天地ノ神

一節二十種唱ヘテ祈リテハ浮世ノ病療ヘザルハナシ

禍神ノ災ヨリ病発ルトモ直日ノ神ゾ直シ玉ヘル

(図略)

○吹笛 十二返。

比\_\_止布\_\_太身與出武\_\_與奈\_\_那弥古\_\_比多\_\_里十二返

○吹笛 同上

血ノ道ト血ノ道ト其血ノ道ト血ノ道<sup>かへ</sup>復シ父母ノ神

ヒフミヨイムナヤコトモチロラネシキルユキツワヌソヲタハク

メカウオオエニサリヘテノマスアセエホレケ

○伊吹加持

禍災ニ悩武病モ此加持ニ今吹き払フ伊勢乃神風

ト唱ヘテ吹払フ

恐クモ此拍手ニ大神乃本ツ御魂ヘ歸リマシマセ 拍手



偕テ禁厭審秘之祈念ニ心中ニ祈ルニモ石笛ニテモ比布美ノ

文を唱へ「九ノ十リ」ノ末ニ布留部由良／＼ト必ズ唱フ

神憑ノ折ハ比布美ノ「九十」ノ末ニ百千萬と唱へテ

布留部ハ云ハズ。

月見里神社所蔵の折り本『禁厭秘法書』に含まれる禁厭の種類は「蟲齒の禁厭と神歌」「やけどのまじない」「腫物を治する厭」「眼に物の入りしを取るまじない」「血止めの方法」「目星を治す神歌」「安産の禁厭」「蟻除の神歌」「食物の胸につかへたる時まじない」「咽喉に魚又何かかりたるを取神歌」と適切な治療を行わなければ、究極的には人間の生死に関わる内容であるかもしれないが、人間の一生の日常の中で頻発する病苦に対応するものである。『禁厭秘法書』の行法は鈴木廣道所蔵の「禁厭法」の行法と同様に神歌を唱え、息吹を掛け、「十種神寶祈禱祝詞」を利用する。特に「血止めの方法」には「血の道は父と母との血の道よ血の道止めよ血の道の神」とあり、鈴木廣道所蔵「禁厭法」内の「血ノ道ト血ノ道ト其血ノ道ト血ノ道復シ父母ノ神」と類似した神歌を唱えるが、鈴木

廣道所蔵の「禁厭法」の伝書に示されている石笛や 「秘歌神人結印」に関する記載はなく、「十種神寶祈禱祝詞」の他に十種口授の傳という「一徳二氣三消四殺五鬼六害七曜八難九厄十と一線を引く毎に唱へつつ一より十まで神氣と精神を込め力を十分に入れ順序を謬らず圖の如く左右に切込む事」という十字切りの行法が掲載されている。

血止めの禁厭法と「十種神寶祈禱祝詞」の詳細は以下の通りである。

#### 血止めの方法

手や足などを痛め出血する時は手拭でも又は手布にても創口を押へ付けて、左の歌を一心になりて神を念じつつ十返創口に向ひて唱へ込むのである

血の道は父と母との血の道よ血の道止めよ血の道の神

最後に一度左の哥を唱へ込ム

ちり／＼とさはく切目の血の道なりともわが声聞かはやかてとどまれ

と唱へ息を吹き掛くる必ず止まるなり

又切疵を膿ませぬやうと思はば藍をぬりをけばうむことなくなをる

十種神寶<sup>とくきしんぼ</sup>祈禱<sup>きと</sup>の祝詞

天津御祖神天璽<sup>あまのつみ</sup>の瑞寶「おきつかがみ、へつかがみ、やつかのつる

ぎ、いくたま、たるたま、まかるかへしのたまちかへしのたま、をろ

ちのひれ、はちのひれ、くさ／＼<sup>を</sup>のもののひれ袁、物部遠津祖<sup>ものべのとほつおやに</sup>

饒速日命<sup>にぎはやひのみこと</sup>爾授<sup>にまづけ</sup>介給<sup>けたまひて</sup>比<sup>ひ</sup>弓詔利<sup>のりたまわくもあひとくきのいなむところ</sup>給波久若<sup>あもほとくきのななたち</sup>蒼生<sup>そうせい</sup>乃痛<sup>なりいた</sup>所在良波<sup>そこはら</sup>十種<sup>とくき</sup>乃神寶<sup>のみかみ</sup>袁

以<sup>もつて</sup>弓一二三四五六七八九十止<sup>とひてよるべゆめらゆらとふるべよるべかくせ</sup>謂<sup>い</sup>弓布留倍由良々々止<sup>とひてよるべゆめらゆらとふるべよるべかくせ</sup>布留倍斯久爲波

死人毛返<sup>まにうり</sup>弓生<sup>にまう</sup>那武止<sup>なむと</sup>詔給<sup>のりたまひし</sup>比志奇<sup>ひしき</sup>伎尊<sup>きそ</sup>伎御法<sup>きみほり</sup>乃任々<sup>のまじ</sup>傳<sup>つた</sup>辺來志<sup>へこしかみわざ</sup>神事<sup>かみわざ</sup>袁

奉仕<sup>つかへまつ</sup>謹美<sup>つしめ</sup>敬比<sup>けいひ</sup>祈美<sup>いのみ</sup>奉留<sup>ほうりゅう</sup>状乎<sup>しやうこ</sup>安良仁<sup>あんらに</sup>聞食<sup>きんじき</sup>弓某<sup>とく</sup>我病<sup>われやま</sup>苦波速<sup>くるはすみ</sup>介久

平癒<sup>ひやういよ</sup>給比<sup>たまひて</sup>弓命<sup>のちのみこと</sup>長久堅<sup>ながくき</sup>盤常盤<sup>はんじょうはん</sup>爾守利<sup>にまもり</sup>坐弓<sup>まゐりまゐり</sup>千秋五百秋<sup>ちゅうせうごひゃくしゅう</sup>乃世<sup>のよ</sup>長人<sup>ながひと</sup>止在良志<sup>とほし</sup>米

給<sup>たま</sup>辺止<sup>へと</sup>畏美<sup>かしこみ</sup>畏美<sup>かしこみ</sup>母白<sup>ははしろ</sup>須<sup>す</sup>

(十種<sup>とくき</sup>口授<sup>のく</sup>の傳<sup>で</sup>図<sup>ず</sup>絵)

十種<sup>とくき</sup>口授<sup>のく</sup>の傳<sup>で</sup>

一徳二氣三消四殺五鬼六害七曜八難九厄十と一線を引く毎に唱へつつ

一より十まで神氣と精神を込め力を十分に入れ順序を謬らず圖の如

く左右に切込む事一遍にて宜し重きは三遍切るべし

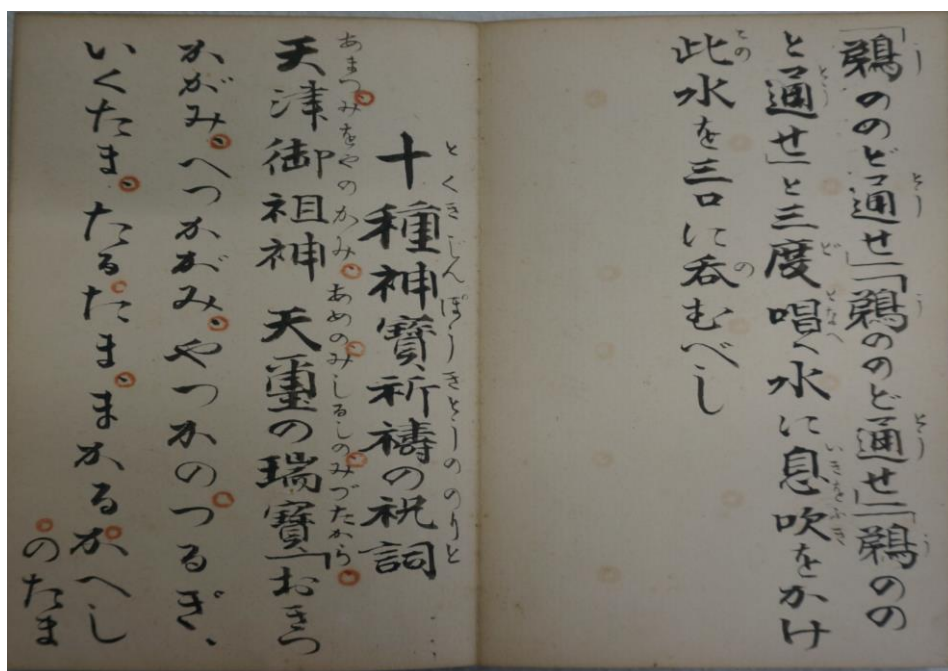


図 8 「十種神寶祈禱の祝詞」 1. (左)『禁厭秘法書』

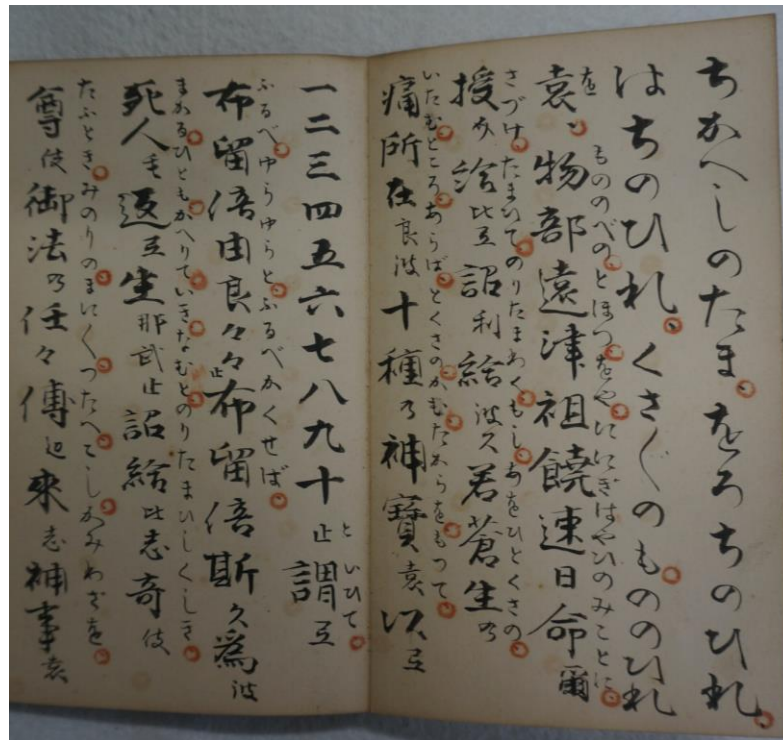


図 9 「十種神寶祈祷の祝詞」 2. 『禁厭秘法書』



図 10

「十種神寶祈祷の祝詞」 3. 『禁厭秘法書』

長澤雄楯は禁厭法の諸行法を駆使しつつ、自らの管轄する社の復興維持をおこなっていたが、明治十九年に「疱瘡よけ」の行法実践により当局に目を付けられ、逮捕される事件も起こしている。この事件は、本田親徳に入門後に起きており、本田親徳とその門人達は自らが実践する行法を皇国学に基づく治国のための神道的実践と主張しつつも、当局からみれば、「民衆の幻惑」を招く行為として取り締まりの対象となりうる可能性を内包していたことがわかる。

## 第六節 理想と現実 月見里神社の流行神化と逮捕事件

明治十八年(1885年)十一月十日の『静岡大務新聞』によれば、長澤家の屋敷神であった御笠稲荷（月見里稲荷神社）が当時天然痘の「流行神」となっていたことが記されている。新聞の記事によれば、家の門口に貼る「守札」求める老若男女が社に集まったという。社前には露店が並ぶ盛況ぶりで、「貳円以上の賽銭」があつまったと記されている<sup>232</sup>。しかしながら翌十九年一月二十一日の同紙には、御穂神社祠掌である長澤雄楯が屋敷内の「月見里稲荷」神社において家伝の

---

<sup>232</sup> 静岡県史編纂委員会『清水市史資料近代』、174-175頁。

鎮西八郎為朝<sup>233</sup>奉納の笠を参詣にかぶらせ人を惑わして疱瘡よけの祈祷をおこない、「金四拾七円五拾錢」の祈祷料を利益として受けていたことが「刑法第 427 条左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ処シ又ハ二十錢以上一円二十五錢以下ノ科料ニ処ス第 12 号十二 妄ニ吉凶禍福ヲ説キ又ハ祈禱符咒等ヲ為シ人ヲ惑ハシテ利ヲ図ル者」に該当するとして検挙されている。その後、裁判の結果、罰金「壹円」と刑法第四十三条「左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ没収ス但法律規則ニ於テ別ニ没収ノ例ヲ定メタル者ハ各其法律規則ニ従フ、一 法律ニ於テ禁制シタル物件、二 犯罪ノ用ニ供シタル物件 三、犯罪ニ因テ得タル物件」に照らし、金「三拾四円五拾錢」の没収を受けた。

---

<sup>233</sup> 源為朝（保延五年－嘉応二年）（1139 年－1170 年）源為義の八男。父により九州地方に追放されたが、その地を制圧し「鎮西八郎」と名乗った。保元の乱では、崇徳上皇方で奮戦するが、敗れ、伊豆大島に流され、その後八丈島に渡ったとされる。平安時代の武将。鎌倉幕府初代征夷大將軍、源頼朝の叔父にあたる。江戸時代より、疱瘡除けの錦絵として、為朝が描かれた。また、家の門口に「為朝の宿」「為朝ここにあり」など書いた紙を貼ると為朝の武威を恐れて、疫病神が家内に侵入するのを防ぐまじないが流行した。ハルトムート・オ・ローテルムンド『疱瘡神－江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』107-170 頁



図 11 月見里神社所蔵「鎮西八郎為朝の笠」

長澤雄楯自身が本田親徳の門人になったのは、明治十七年あるいは十八年とされるが、親徳は自らの著書『霊学抄』において、「巫或ハ法華僧ノ行」は妖魅界による帰神法十八法「此等外下々下等也」と見下し、あるいは門人たちに巫覡に落ち入る事なかれ、と警告を与えている<sup>234</sup>。このような本田親徳のエリート意識は本田霊学自体が民間巫者や日蓮宗系の仏教行法と類似した領域を包括する宗教的实践でありつつも、自らの思想及び行法が天御中主神を頂点とした崇高な神霊の介在によってなされるものであるという確信からきている。また、本田親徳自

---

<sup>234</sup> 『霊学抄』『本田親徳研究』、369-376 頁。



身は自らが奉職する社を持たない、皇国学に依拠した靈魂学教授として、副島種臣<sup>235</sup>のような政治的エリート、或いは、地域社会における亜流エリートたる神社神官や戸長に行法を伝授する行法家として一般民衆を仏教・キリスト教に惑う愚民として片づけることがきた<sup>236</sup>。しかしながら、長澤雄楯のような神社神官からすれば、社の維持、拡大の必要条件である崇敬者の増加とそれに伴う参詣費の増加を目指すためにも、「不開化連中」を惑わす祈祷巫呪行為として当局から違法とみなされる可能生がある一方で、神霊の靈驗を求める者のニーズに対応する行法を地域の崇敬者に提供することで、自ら奉仕する社の繁栄を目指していった。

## 第七節 長澤雄楯の本田靈学の理解と「帰神法」の受容について

長澤雄楯は本田靈学の中で特に神憑りの行法である、帰神法の研究を進め、神霊が憑依する神主の育成をおこない、長澤自身も神主の操作および、神霊の神託

---

<sup>235</sup> 副島種臣（文政十一年－明治三十八年）（1828年－1905年）は号を蒼海とする。佐賀藩士。父は佐賀藩の藩校である弘道館の国学者枝吉南濠、兄も同じく国学者の枝吉神陽。明治維新後は政府の要職を歴任。明治二年参議、明治四年外務卿、明治十二年宮内省一等侍講、明治二十年宮中顧問、明治二十四年、第二代枢密院副議長、明治二十五年第四代内務大臣を務めた。本田親徳と副島種臣は明治六年頃より、西郷隆盛を介して親交を結び始める。明治九年に副島邸における帰神により「明年早々西郷は衆に擁せられて兵を挙ぐるにつき未然に防ぐには種臣自ら赴いて説き東京に俱う外道なし。若し挙兵にいたらば災必ず汝の身に及ぶ故難を国外に避くべし」という神教が下り、これにより副島は清国へ行き、明治十一年に帰国後、親徳の門人となり、鎮魂・帰神行法を修めた。鈴木重道「靈学の継承」『本田親徳研究』、430-450頁。副島種臣「與本田子書」『蒼海全集卷六』『副島種臣全集 1』、446-448頁。

<sup>236</sup> 『産土神徳講義（下）』『本田親徳全集』、19頁。

を精査する審神者として研鑽を積んでいた。そして、長澤の奉職する御穂神社或いは長澤家の自社の月見里神社において神霊の靈驗を希求する神社崇敬教会もしくは崇敬講社が、本田靈学の修練会として、後の神道系新宗教を創造する民間巫者を輩出していくことになった。

長澤によれば、国学は学問として、十二の諸学を包括し、第一科に「神典學」、第二科に「國史學」、第三科に「律令格式學」、第四科に「歌學」、第五科に「物語の記學」、第六科に「古實諸體學」、第七科に「軍學（或いは武士道）」、第八科に「音義學」、第九科に「日文學（神代文學の研究）」第十科に「系統學（系圖學）」第十一科に「古醫學」、そして第十二科目に「靈学」が存在するという。第十二学科目にあたる「靈学」について長澤は以下の様に説明している。

靈学というのは神典と國史とを根據とし、専ら神憑の法則に随つて修業し、神霊の實在を徴證して、その尊嚴を體得し、我が国神典の世界無比なる所以を諒解し、茲にはじめて宇宙成立の原理、地球の組織、顕幽の分界、天孫降臨の所以を解釋し、皇祖天神の御威徳を感銘し、我が皇室の尊嚴なる所以と神社存在の理由を解釋し得べきものであるのだ。然し

ながらこの靈學は神典學と兩々相俟つもので神典を精研し、神靈の存在を體驗して始めて御威徳を知るべきものであつて、古來の學者の如く古訓の解釋のみで神典の主旨を玄妙なる所以を了解し得るものではないのぢや。神憑の法に因る神靈の實在の體驗を得て始めて我が神界の幽遠微妙なる原理を了解し、古來先哲の難解として居たものも解釋し得られるのだ<sup>237</sup>。

上述の靈學についての説明から長澤雄楯は単なる神社經營のために本田親徳の靈的行法を受容していたのではなく、親徳の靈學思想自体も理解し、師として仰いでいたことが推測できる。本田親徳は『古事記』序文に着目し、『古事記』に記されている事柄は口語伝承を経て、『古事記』として編纂される時点ですでに多くの「虚偽説」が混入しており、『古事記』に記されている事柄をそのまま信じ、解釈をおこなってはならないと考えた<sup>238</sup>。また、本田親徳自身は、本居宣長の言義解釈を高く評価しつつも、宣長の『古事記伝』は「真幽界ノ真教ヲ得ラレザシ故ニ」充分ではなく、平田篤胤にいたっては「本居没後ノ門人ト自称シツツモ、師説ニ反シテ老子派ノ子書を補綴シ、奇々怪々ノ妖説ヲナシ世ノ頑愚ヲ騙惑

---

<sup>237</sup> 夏目隆文『神社異色鑑』、190-191 頁。

<sup>238</sup> 本田親徳『難古事記』卷一『本田親徳全集』、126 頁。

シタリ。如何ニ可惡ノ怪説翁ニアラザラムヤ<sup>239</sup>」と言い、平田国学の『古事記』  
解釈を激しく批判していた。本田親徳によれば、多くの虚偽説が混入した「神  
典」を正しく解釈するためには、神霊からの直接的な啓示が必要不可欠であると  
考えていたのである。このことを示唆する親徳自身の言葉として以下のものがあ  
る。

此ノ神懸ノコト本居平田ヲ始メ名ダタル先生達モ明ラメ得ラレザリシ故  
ニ古事記伝、古史伝トモニ其ノ説々皆誤レリ。親徳拾八歳皇史ヲ拝読  
シ、此ノ神法ノ今時ニ廃絶シタルヲ慨歎シ、岩窟ニ求メ草庵ニ尋ネ、終  
ニ三十五歳ニシテ神憑三十六法アルコトヲ覺悟リ、夫レヨリ幽冥ニ正シ  
現事ニ徴シ、古事記日本紀ノ真奥ヲ知り、古先達ノ説々悉ク皆謬解タル  
ヲ知り弁ヘタリキ<sup>240</sup>。

本田親徳は三十五歳にして神憑に三十六法あることを悟ったというが、親徳の  
「帰神標目<sup>241</sup>」によれば、帰神法には自己に神霊を憑依させる「自感法」と他者

---

<sup>239</sup> 同、134 頁。

<sup>240</sup> 『難古事記』卷六『本田親徳全集』、224 頁。

<sup>241</sup> 「帰神標目」『靈学抄』『本田親徳全集』、374-375 頁。

に神霊を憑依させる「他感法」そして神霊による憑依である「神感法」が存在し、この三つの帰神法には「無形」「有形」が存在し、それぞれに「上中下」の三法があり合計十八法が存在するという。この他に「邪神」「妖魅」に感合する帰神法が十八法存在するという。親徳によると「無形」の神「上中下」とは『古事記』『日本書記』の神代の神々を指し、「上」とは「天御中主神」をさし、「中」とは神皇産霊神・高皇産霊神を指し、「下」とは「アシカヒヒコチノ神」「常立神」「トヨクモヌ神」「オホトノヂノ神」「オホトノベノ神」「スヒヂニノ神」「ウヒチニノ神」「イククヒノ神」「ツヌクヒノ神」「オモタルノ神」「カシコ子ノ神」をさす。そして「有形」の神のうち「上」とは「天照皇太神」、「中」とは「大国主神」「下」とは「月夜見命」をさすという。

本田親徳による『靈学抄<sup>242</sup>』には自感法による帰神法の様式が以下の指示されている。

- 一、 身体衣服ヲ清潔ニス可シ。
- 二、 幽邃ノ地閑静ノ家ヲ撰ム可シ。
- 三、 身体ヲ整ヘ冥目静座ス可シ。

---

<sup>242</sup> 『靈学抄』、369-376 頁。

四、 一切ノ妄想ヲ除去ス可シ。

五、 感覺ヲ蕩尽シ意念ヲ断滅可シ。

六、 心神ヲ清澄ニシテ感触ノ為ニ擾レザルヲ務ム可シ。

七、 一意ニ吾靈魂ノ天御中主大神ノ御許ニ至ル事ヲ默念スベシ。

まず、身体と衣服を浄め、喧噪から離れた静かな家屋の中で、身体を整えて目を閉じて、静かに座り、一切の妄想を排除する。そのうちに、感覚や意念が消滅することによって、自らに内包する「心神」を浄め、自らの魂を沈める。本田親徳の思想では「上帝以四魂一靈造心。而賦之活物」「上帝は四魂一靈を以て心を造り而して之を活物に賦す。」とあり<sup>243</sup>人間の心魂は元来「天御中主大神」から賦与された分魂であると考え。そのため、自らの靈魂が宇宙の源の「天御中主大神」の御許に到り神人合一するように默念する。この方法を修行すれば、「幽冥」に通じることが可能になるという。

また、他者に神霊を憑依させる「他感法」について親徳は鈴木廣道への伝書において以下の様に述べている。まずこの伝書は、「唯今神憑之人者男ニテ候哉婦女ニテ候哉細敷御申遣有之度、尤モ返書相達次第詳細可申進候。<sup>244</sup>」という文言か

---

<sup>243</sup> 本田親徳『道之大原』『本田親徳全集』、36 頁。

<sup>244</sup> 本田親徳「関係文書」『本田親徳全集』、360-362 頁。

ら始まるが、これは鈴木廣道が、神主には男女どちらが、適切であるかという問い合わせがあったためであろう。本書には、これ以降、男性の神主への言及は出てこず、その後の説明では、女性の神主に神霊を憑依させる方法が記されている。

婦人二者「マナカタラ」ト朝夕唱サセテ宜シ。

月穢カ何ゾノ穢ニ触レタル時ハ神憑ハ遠慮スベシ。体ノ不浄ヨリモ心ノ穢ヲ神ハ嫌ヒ玉フユヘニ悪シキ心ヲ除キ謹テ神懸ハスベシト申シ付ケラルベシ。

朝暮神前にて唱言

ヒフミヨイムナヤコトモチロラネシキルユキツワヌソヲタハクメカウオ  
エニサリヘテノマスアセエホレケ

(中略)

サテ過日拝見ノ時ノ如クニ婦女ヲ台ノ上ニ座セシメ、指ヲ組合ワセ死眼  
口ヲ閉チ一心ニ神々ヲ念思セシメテ然シテ、後貴君ハ竹笛ニテ

ヒト フタ ミ ヨ イツ ムユ ナナ ヤ ココノ タリ モモ  
チ ヨロツ

ト心ニ念シテ吹カルベシ吹き様ハ

ヒート ト長クフキテ其ノヒーノ内ニ「ヒト」ヲ含セテ、又、ヒーニ

「フタ」ヲ含セテ段々ト「ヨロツ」マテフキ、フキ終リテ又始メノ如ク

フキ、始メノ程ハ百篇クリ返シクリ返シ吹キテ祈ルナリ。此百吹きニテ

其ノ時ハ暫クヤメテ、又翌日ニテモ翌晩ニテモ修行スル也。如此シテ日

数ヲ重ヌル内ニハ必ス神憑アルナリ。其始ハ其の婦女ノ身ガ振ヒ終ニ寝

入タルガ如ク覚ヘザル也。ソコデ神ノ御名御尋申上グレバヨロシ<sup>245</sup>。

他感法の様式として、親徳は女性を神主とする方法が記している。親徳自身自らが審神者となり、二番目の妻である知香あるいは娘のミカ<sup>246</sup>に神霊を憑依させていた<sup>247</sup>。親徳による神主の養成方法としては、朝夕「マナカタラ」という呪文を唱えさせ、なおかつ、「一二三神歌」を神前にて唱えるが、神前にて「一二三神歌」を唱えるのは、神主なのか、審神者なのか、それとも両者なのかは定かでは

---

<sup>245</sup> 「関係文書」『本田親徳全集』、360－362 頁。

<sup>246</sup> 神主名としては薫子と名乗っていた。

<sup>247</sup> 鈴木重道「巻末記」『本田親徳全集』、573-576 頁。



ない。そして、数日後、神霊を憑依させる女性を台の上に座らせ、指を組み合わせて目と口を閉じさせて、一心に神霊を思念させつつ、審神者は竹笛を使い心の中で念じつつ、「一二三神歌」をゆっくり唱えるように吹く。「一二三神歌」を引き続き百回繰り返して竹笛を吹きつつ祈りを捧げる。初日はこれで終了するが、翌日、翌晩同じ行法を繰り返しておこなう。日を重ねるうちに必ず神霊の憑依が実現するという。神霊の憑依が起きる場合、女性の身体が痙攣し、入眠したかのように意識不明となる。この時審神者は、憑依した神霊の名前を尋ねるのがよいとする。

親徳の門人となった長澤雄楯は、御穂神社の神職を続ける一方で、本田霊学の実践を試み、神霊が憑依する神主の育成と、行法の稽古会を重ね、二人の卓越な神主に出会うこととなる。宮城島金作（明治六年―大正十年）（1873年―1921年）と出口王仁三郎である。長澤雄楯は、この二人の神主による帰神法の実践により、日清戦争および、日露戦争の戦況予言を成功させたという。これは、本田霊学の三行法の一つである太占について、親徳の親友であり、亀卜の研究家であった大畑春国（文化十五年―明治八年）（1818―1875）が「抑太占ノ古典ヲ復古ニ成シツル上ハ、国家枢要ノ至宝トシテ、萬世ニ伝ヘテ、外寇不虞ノ備エトシ、若事シアラン時ニハ蔵否吉凶ヲ未然ニ察知シ、敵味方ノ勝敗存亡ヲ不戦ニ洞覧シテ

百戦百勝ヲ全フシテ、皇軍ノ皇軍タル所以ヲ示シ、皇大御国ノ大御稜威ヲ海外萬  
国ニ輝キ給フベシ。<sup>248</sup>」と説いていたことを本田親徳およびその門人たちは帰神  
法に応用していた。本田親徳自身は西南戦争の予言を副島種臣邸でおこない、こ  
のことで副島種臣の信頼を得ることになるが、長澤は御穂神社において、明  
治二十七年(1894年)四月に日清戦争の予言を神主宮城島金作によって実現させ、  
月見里神社付属の稲荷講社においては明治三十四年(1901年)に日露戦争の予言を  
上田喜三郎こと後の出口王仁三郎の神主によって成功させという<sup>249</sup>。長澤雄楯  
は、本田親徳の志を受け、帰神法における戦争予言の実証によって本田霊学の皇  
国における実学的活用をめざしていたともいえる。長澤の最期に近い昭和十五年  
(1940年)九月三日には、当時の海軍大将山本英輔<sup>250</sup>が長澤を訪問し、四日間の国  
学霊学研修を受けるなど軍部の門人も存在していたのである<sup>251</sup>。長澤家の自社で

---

<sup>248</sup> 大畑春国『亀卜雑記』『本田親徳全集』、524頁。

大畑春国は紀伊日高郡志賀村出身。号は金斎。医家で歌人であった大畑円治の孫。国学者、  
大国隆正の門人で、維新後は大学少助教、宣教権少博士、浅草神社祠官を歴任した。

<sup>249</sup> 上田喜三郎の入門は明治三十一年頃とされる。明治三十四年に長澤雄楯の審神者、上田喜  
三郎の神主による帰神法により石清水八幡宮の眷属小松林命が憑依し、日露戦争の予言をお  
こなった。鈴木重道「霊学の継承」『本田親徳研究』、506-509頁。

<sup>250</sup> 山本英輔（明治九年－昭和三十七年）（1876-1962）鹿児島県出身。日本帝国海軍軍人で最  
終階級は海軍大将。霊的関心が強く戦前には数多くの霊術宗教家と接近した。特に大本教の  
出口王仁三郎のもとで、神がかりを体験し、出口王仁三郎の師、長澤雄楯にも師事し、長澤  
の稲荷講社から派生した三五教とも交わりを深くした。戦後に自らの宗教思想を記した『真  
の光』、自伝『七転び八起きの智仁勇』を出版した。山本英輔『真の光』 山本英輔『七転び  
八起きの智仁勇』。

<sup>251</sup> 中島重雄「長澤雄楯翁略歴」『惟神』、21頁。

ある月見里神社付属稲荷講社を雄楯は、明治二十四年(1891 年)に設立するが、この講社を本田霊学道場とし、臨終までの間に千人以上の門人を集めた<sup>252</sup>。そしてこれらの門人の中から大本教の出口王仁三郎だけでなく、神道天行居の友清歓真(明治二十一年－昭和二十七年)(1888 年－1952 年)、三五教の中野与之助(明治二十年－昭和四十九年)(1887 年－1974 年)ら神道系新宗教の教祖らが輩出された<sup>253</sup>。また長澤雄楯の最初の神主である宮城島金作は御穂神社の祭神である「三穂津姫命」とその眷属達の神託をおこない、御穂神社の崇敬教会「神道三穂教会」の神主として御穂神社の崇敬者の信仰を強固なものとしていった<sup>254</sup>。

---

<sup>252</sup> 長澤雄楯『大本事件に対する意見』、13 頁。私家本(昭和二年大本教事件のため大審院に提出した)。

<sup>253</sup> 友清歓真については、津城寛文『鎮魂行法論－近代神道世界の靈魂論と身体論』、47－50 頁を参照。中野与之助は静岡県焼津出身。明治三十八年に材木商となり、大正六年に名古屋にて建設工事請負業開始した。大正十年の第一大本事件で、出口王仁三郎を知り、大本教に入信。大正十四年に見神体験にて霊能を開眼。昭和十年の第二次大本教事件にて昭和十一年に検挙され、昭和十三年に保釈。昭和十七年に無罪となった。保釈後に長澤雄楯に入門し、本田霊学を学んだ。昭和二十五年に静岡県清水市に三五教あなないきょうを設立。

<sup>254</sup> 本田霊学の神道系新宗教への継承については津城寛文「大本教系の鎮魂行法家」『鎮魂行法論：近代神道論と身体論』、30－239 頁を参照。

## 第八節 まとめ

本章では、本田親徳の出自と学統を明らかにするとともに、本田門人は何を求めて本田霊学を学んだのかを明らかにするために本田の駿河門人であり、本田霊学を神道系新宗教へと橋渡しをおこなった御穂神社祠官長澤雄楯の本田霊学の受容による神社経営の考察をおこなった。

本田の駿河門人の一人である長澤雄楯は、自らの奉職する御穂神社と自社の月見里稲荷神社そして、自らが管轄する小社を本田霊学の実践により復興させた。特に明治維新後の社格制度において、郷社と定められた御穂神社を、長澤は投資による蓄財の他、神霊の霊威の顕現により、地域社会の潜在的信徒の参詣集社を成功させ、氏子の寄付に頼らない集金を実現し、社殿の整備をおこない、御穂神社を県社へと昇格させた。長澤は、御穂神社だけでなく、長澤家の自社である、月見里神社や、清水地方の自らが管轄する小社において同じ方法を用い、清水地方の神社神道の復興を試みた。長澤雄楯は神社神道の復興の功績により、天皇への拝謁し、死後には従六位の昇格をうけるまでの出世を果たした。

本田親徳は、皇国学の徒として幕末には、長州探索方として働き、明治維新以後には鹿児島県国学局国学係となり、その後神道家として、旧薩摩藩出身の政治家や副島種臣などの宮中官僚の信認を受ける中、自らの霊学を皇国における民衆

統治の方法論あるいは、対外戦争などの国家の非常時に直接的に神勅を受けうる実践と考えていた。本田親徳が、門人の他に、旧薩摩藩士などの信奉者がいたが、親徳の死後、本田霊学の継承者として、世に知られていた長澤雄楯の下には、海軍大将の山本英輔が聴講に訪れるなど、形而上的神秘主義を希求する者たちが集まっていた。親徳自身は本田霊学を巷に流布する民間巫者や、日蓮宗系の仏教系行者の実践とは一線を画す学問と考えていたものの、本田自身が幕末に希求していた祭政一致が実現した明治維新後の政策においては、本田霊学の重要視する神懸かりや、病気癒しの禁厭法などは、法令に基づき、民衆を惑わす「政治の障害」とみなされる側面を有していた。親徳の門人であり、霊学の実践者であった長澤雄楯は、疱瘡が清水地方で猛威を振るう中、自社が「流行神」となる一方で「疱瘡除け」の禁厭法は、取締りの対象となった。長澤雄楯は警察に検挙され、罰金の徴収を受ける事件をおこした。このように、本田門人達の霊学の実践と受容は、神秘的形而上的事象に注目する彼らにとっては、秘伝実学であった一方で、明治維新後の「開化思想」、あるいは実際の警察行政では、他の淫祠邪教の実践と同等の取締をうける側面を有していたといえる。

## 第五章 宮城島金作と本田靈学<sup>255</sup>

### 第一節 神主、宮城島金作

本稿では、宮城島光二氏所蔵の「宮城島家史料/神道三穂教会史料」の調査をもとに神道三穂教会と本教会神主であった宮城島金作（号：宇宙）（明治六年五月九日－大正十年六月十七日）（1873 年－1921 年）の宗教活動について考察をおこなう。宮城島金作は御穂神社祠官長澤雄楯が最初に見出した、本田靈学における神憑りの帰神法の神主であった。



図 12 宮城島金作（宮城島家所蔵）

---

<sup>255</sup> 本章の論攷は、並木英子「宮城島家史料にみる神道三穂教会と宮城島金作」『月見里神社・稲荷講社史料/宮城島家史料目録－近代清水の神職たちと鎮魂帰神』、30－36 頁、を加筆修正した。

御穂神社祠官長澤雄楯は、自社の月見里神社付属稲荷講社および御穂神社社務所を本田霊学道場とし、多くの門人を集めた。長澤の門人の中には、後に新宗教の教祖となる大本教の出口王仁三郎や、三五教の中野与之助、神道天行居の友清勸真、白髭神社宮司の稲葉大美津らがいた。現在においても本田霊学が世の人の興味を引き、新宗教研究において、本田霊学が研究の対象となった背景には、これらの宗教家の活躍がある。そして、長澤雄楯より、本田霊学を受容した門人達の弟子筋からまた新たな新宗教教団の創造が起り続けている。

しかしながら、本田霊学に連なる神道系新宗教の教祖を多く輩出した長澤雄楯が自らの思想を表した著作は限られている。現存する長澤雄楯の著作は全て長澤の講義もしくは、インタビューを第三者が文字化して書籍化したものに限られている<sup>256</sup>。そのため、先行研究においては、長澤家の自社である月見里神社における史料調査、あるいは、長澤雄楯が祠官として奉職していた御穂神社における史料調査が進まなかったことを背景に長澤雄楯より本田霊学を受容したことを公言していた出口王仁三郎の宗教思想とその宗教実践が本田霊学とされてきた。

---

<sup>256</sup> 夏目隆文『神社人異色鑑』、186-191 頁。

長澤雄楯『大本教事件に対する意見』私家本、発行年不明。

長澤雄楯「神と神道」『神の国』14-20 頁。

しかしながら、先行研究で考察された大本教を中心とした神道系新宗教教団における本田霊学の受容の前段階として、神社社家出身者や地方村落共同体の有力者たちの本田霊学の受容が存在する。本田霊学を世に広めた長澤雄楯や本田親徳の著作類を後世に残した山形県飽海郡上田村の薬師神社社家の出身である鈴木廣道や静岡県岡部町三輪の<sup>まむ</sup>神神社祠官三輪武などである。

本章で考察をおこなう宮城島金作は、御穂神社の社家の出身者であり、長澤雄楯から独立後には、教派神道の神道本局（教名：「神道」）管轄下の御穂神社崇敬教会である神道三穂教会を開き、御穂神社の祭神への信仰と本田霊学を融合させた人物である。宮城島家所蔵の「宮城島家史料/神道三穂教会史料」を考察することによって、鈴木家に伝わる本田親徳の現存する著作類や鈴木廣道への印可状を収めた『本田親徳全集』の複合的考察が可能になると考える。

（改頁）



## 第二節 宮城島家史料

本章の考察に利用する史料群は、駿河国三宮御穂神社社家の宮城島家に残されていた神道三穂教会史料による。史料の年代としては、明治二十六年（1893 年）から大正十四年（1925 年）までの三十二年間における 599 点の史料が含まれる

<sup>257</sup>。

本田霊学の継承者である御穂神社祠官、長澤雄楯は、千人余りの門弟を有した。その一人に宮城島金作がいる<sup>258</sup>。宮城島金作の神異はこれまで①友清九吾（勸真）の『鎮魂帰神の原理及応用<sup>259</sup>』で広められ、さらに②月見里神社付属稲荷講社が発行した『惟神<sup>260</sup>』、③顕神本会教祖、佐藤卿彦が記した『鎮魂法帰神

---

<sup>257</sup> 宮城島家史料群は 7 つに分類できる。①神道霊学書類、②神道三穂教会関係書類、③神道三穂教会託宣関係書類、④宮城島家関係書簡類、⑤宮城島金作書簡類、⑥宮城島家事業関係書類、⑦吉永夏子往復書簡類である。①から③までは、宮城島金作とその父源作の宗教活動に関係するものである。④⑤は、宮城島家と金作の書簡類で日常生活や宮城島一族内での遺産相続問題などを垣間見ることができる。⑥は、宮城島家がおこなっていた再製塩業などの事業に関するものである。⑦は、宮城島金作の長男信雄とその妹の綾子、のちに信雄の妻となる吉永夏子の 3 名を中心とした往復書簡類である。

<sup>258</sup> 長澤雄楯『大本教事件に対する意見』、16 頁。本書は、昭和 10 年の第二次大本事件の対策のため、出口王仁三郎の側近が長澤雄楯の下を訪れ、2 日間の講義を受けた際の速記録である。長澤は出口の側近に対し、昭和 2 年に起きた第一次大本事件の際に長澤が大審院に提出した「鑑定書」をもとに講義をおこなっている。本書は、鈴木重道『本田親徳研究』（487-521 頁）に一部抜粋されている。

<sup>259</sup> 友清九吾『鎮魂帰神の原理及応用』、46-48 頁。

<sup>260</sup> 中島重雄編『惟神』第 2 号、21 頁。

術の法<sup>261</sup>』、そして④明治神社祠官、鈴木重道による『本田親徳研究<sup>262</sup>』などに記録されている。

しかしながら、上述の四書による、長澤門人からの伝聞以外には、宮城島金作とは、どのような人物であったのか、明らかにされてこなかった。昭和十五年（1940年）発行の『惟神』によれば、「明治二十七年四月御穂神社に於いて雄楯審神者となり、神主宮城島金作に御穂神社眷属八十彦命神憑あり、日清戦争の予言をなす<sup>263</sup>」とある。また、鈴木重道の『本田親徳研究』によれば、宮城島金作は晩年には、神道三穂教会を設立し、盛大であったとされる。鈴木は自らの調査において、金作の長男であり、神道三穂教会第二世主<sup>264</sup>であった宮城島信雄との接触を持ったが、自らの過去を閉じた信雄からは、詳細を聞くことはできなかった。そのため、これ以後、神道三穂教会についての調査は進むことがなかった

<sup>265</sup>。しかしながら、舞鶴工業高等専門学校、吉永進一教授を中心とした史料調査

---

<sup>261</sup> 佐藤卿彦は、長澤雄楯の門人であった白髭神社社司、稲葉大三津（明治7-?）の弟子。佐藤卿彦『古法式鎮魂法帰神術の神法』、91-92頁。『古法式鎮魂法帰神術の神法』によれば、稲葉大三津と宮城島金作は友人で、二人は御穂神社の社務所で起居を共にして修業をおこなっていた。稲葉の回顧によれば、金作は就寝中もしばしば、神霊の憑依があったという。

<sup>262</sup> 前掲鈴木重道『本田親徳研究』、484-486頁。

<sup>263</sup> 前掲中島重雄編『惟神』第2号、21頁。

<sup>264</sup> 宮城島信雄『幽事宝典並道之太原』[M592]。括弧（[]）内の数字は神道三穂教会史料目録における史料番号をさす。以下の史料でも同様。

<sup>265</sup> 大正10年（1921年）に金作が死亡した後、信雄は、神道三穂教会を継ぐことになる。しかしながら、帰神法の修行により心身を害した [M435]。

により、神道三穂教会および、教会神主であった宮城島金作の宗教活動が推測できる史料群が発見できたといえる。

### 第三節 宮城島家について

宮城島金作の生家である宮城島家は、駿河国三宮、御穂神社神官、太田氏に属する社家の一族であった。「宮城島源作御穂神社司掌願」〔M4<sup>266</sup>〕によれば、慶長四年(1599年)に宮城島三太夫(藤原信成)が有渡郡三保村、御穂神社に社人として仕えたのを始まりとする。その後、代々、宮城島家では、吉田家より許状を受けて<sup>267</sup>、御穂神社に神官として仕えていた。金作の父である源作(天保七年ー明治四十五年)(1836-1912)は、幕末には、駿河地方の神社神職達で結成された尊皇攘夷部隊、「赤心隊」に三保地方の領主である太田健太郎とともに名を連ね<sup>268</sup>、倒幕運動に参加した。

---

<sup>266</sup> 括弧〔 〕内の数字は神道三穂教会史料目録における史料番号をさす。

<sup>267</sup> 吉田神道は、唯一神道、元本宗源神道、卜部神道ともいう。室町後期の神道家、吉田兼俱(卜部兼俱)(永享七年ー永正八年)(1435年ー1511年)によって樹立された神道説。文明十六年(1484年)に兼俱は「神祇菅領長上」を名乗り、個人祈願の私的祓の儀礼に用いる『中臣祓』や伊勢・八幡春日三社の託宣の形で正直・清浄・慈悲の三つの徳目について説いた『三社託宣』の普及を通して神道教説の宣揚をおこない、各地の神社の統括をはかった。江戸時代には、徳川幕府が寛文五年(1665年)に制定した「諸社禰宜神主法度」により、「神祇道宗家」「神道本所」として公認され、全国の神社及び神職を支配下に置いた。高橋美由紀「吉田兼俱」『日本思想史辞典』、567頁。同「吉田神道」、569頁。

<sup>268</sup> 『駿河国赤心隊姓名書』、67頁。

しかしながら、明治元年(1868 年)には、駿河に帰国した旧幕臣達の恨みによって、三保領主である太田健太郎は、暗殺される。そして源作は、明治四年に静岡藩郡方役所より、御穂神社社人を解免となり、明治六年(1873 年)七月に静岡県平民へ編入することになった。

宮城島家は、領主とともに参加した倒幕運動後の明治維新によって、先祖代々有した職位を失うことになる。その後、源作は、明治七年(1874 年)七月に御穂神社常備となる。しかしながら当時、御穂神社祠官には、山口守が就任し、長澤雄楯が、祠掌となっていた。その後、山口の辞職により、明治十二年(1879 年)に長澤雄楯が、御穂神社祠官となる。源作は、明治二十年(1887 年)十二月に教派神道の大社教<sup>269</sup>の訓導となっている。そして、明治二十六年(1893 年)に五十六歳にしてようやく、御穂神社祠掌に復職となった<sup>270</sup>。

---

<sup>269</sup> 出雲大社教は明治十五年（1882 年）に出雲大社、前大宮司、千家尊福（弘化二年～大正七年）（1845 年-1918 年）が設立した教団。祭神は大国主大神。教派神道十三派の一つ。千家尊福が明治六年(1873 年)に布教のために設立した、出雲大社敬神講を前身とする。明治十五年一月二十四日、内務省達丁第一号「神官ハ教導職ノ兼補ヲ廃シ、葬儀ニ関係セサルモノトス」の発令により、司祭の職分である神官と布教をおこなう教導職の分離が命じられたため、同年五月十五日、出雲大社と分離し、「神道大社派」が設立。同年十一月、「神道大社教」と改称。千家尊福が出雲大社の宮司職を後継に譲り、初代管長となった。宮地正人「宗教関係法令一覧」『宗教と国家』、480-481 頁。

<sup>270</sup> 源作は、御穂神社に復職するため、明治二十五年十二月に大社教訓導を辞している。

#### 第四節 御穂神社と宮城島金作

御穂神社は、祭神を「大己貴命（三穂津彦命）」「三穂津姫命」の二柱とする。「みほ」の字は、古くから「御穂」「御廬」「三穂」「三保」の字が使われてきた<sup>271</sup>。近代社格制度において、明治六年(1873 年)に「郷社」に定められている。

長澤雄楯は、明治十二年(1879 年)に御穂神社祠官に就任後、郷社としての下賜金を経費節約と投資により利殖し、社殿の整備をおこなった。そして御穂神社の崇敬者の増加に努め、明治三十一年(1898 年)に御穂神社を県社に昇格させている<sup>272</sup>。

静岡県下の神社数の推移について、明治十二年(1879 年)から昭和十五年(1940 年)までの 10 年間ごとの変遷を調査した吉水希枝によれば、明治三十三年(1900 年)には、静岡県下において、3944 社が存在したが、十年後の明治四十三年(1910 年)には 265 社減少している。続いて、明治四十三年から大正九年(1920 年)にかけては、357 社減少し、他の 10 年間毎の推移よりも神社数の減少幅が大きいという<sup>273</sup>。これは、日露戦争（明治三十七年－明治三十八年）（1904－1905）後の内務

---

<sup>271</sup> 「御穂神社」『府縣郷社明治神社誌料 上巻』、37-39 頁。

<sup>272</sup> 中島重雄「長澤雄楯翁略歴」『惟神』第 2 号、14-17 頁。

<sup>273</sup> 吉水希枝「神社神道からみる月見里神社史料・宮城島家史料－静岡県下の神職団体と神社経営の視点から」石原和、吉永進一、並木英子編『月見里神社・稲荷講社史料/宮城島家史料

省による神社中心主義政策により、神社は非「宗教」であるという前提のもと、

諸社に到るまで神社は国民教化の中心であるとされた一方で、諸社に対する

しんせんへいはくりょうきょうしん  
神饌幣帛料共進の開始による財政的な都合により、氏子数や境内の設備などを

基準として「国家の宗祀」の条件に適合しない神社は合祀・廃祀されたことが背

景にある。また、吉水によれば、静岡県下の神社の社格毎の神社件数の推移をみ

てみると、静岡県では、無格社を中心に合祀・廃祠が進んだ<sup>274</sup>。

長澤雄楯は御穂神社や自社の月見里神社の他に数多くの村社や無格社を歴任し

ていたが、長澤の本田霊学の受容による稲荷講社設立や、御穂神社における宮城

島金作を神主とした本田霊学の実践時期は、全国的な神社数の整理時期と重な

り、長澤が兼務した小社の存続そのものが危ぶまれる時期であった。

明治十七年（1884年）もしくは十八年（1885年）に長澤雄楯は、本田親徳門人

となることにより、「鎮魂法」「帰神法」「禁厭法」を習得した<sup>275</sup>。長澤は、明

治二十年（1887年）頃より、自らが「審神者」となり、宮城島金作への「帰神法」

の教授をおこなったとみられる〔M327〕。長澤は、金作を神主とした「帰神法」

---

目録―近代清水の神職たちと鎮魂帰神―』、13-14頁。

<sup>274</sup> 同、14頁。

<sup>275</sup> 鈴木重道『本田親徳研究』、463頁。鈴木重道「巻末記」『本田親徳全集』、574頁。

Namiki, Eiko. “Honda Chikaatsu’s Spiritual Learning as a Means of Bringing Blessings and Guiding the Nation.” *Journal of Religion in Japan*, pp.276-305.

による神霊の託宣や、病氣癒しの「禁厭法<sup>276</sup>」の実践により御穂神社の神霊の霊威を地元住民に示すことに成功し、御穂神社の崇敬者の信仰をより強固なものへとしていった。

長澤雄楯の門人の一人である、友清九吾（歆真）の記した『鎮魂帰神の原理及応用』には、御穂神社における宮城島金作の神憑りの様子が記されている<sup>277</sup>。

明治二十六年六月、長澤雄楯の指導の下に御穂神社の社務所で帰神の修行を盛んにやつて居た時のことである。男女澤山の修行者が居合わせたが、その中の宮城島金作氏に佐田彦命が懸られ、「當所は千年餘り不浄に不浄を重ね居れば本日午後八時を以て修祓すべし」との御誥げがあった。さあ如何なることが出来するかと一同は片唾を呑んで時刻の来るのを待ったが、やがて午後八時となるや宮城島氏は突如として帰神状態になり(神感法)、拝殿の方へ駈けつけて行って直ちに疾風の如き勢ひで引き返して飛んできた。そして社務所の玄関に入る時には、ズドン、ミシノズドンと百雷の一時に落下するとでも言ふか何

---

<sup>276</sup> 金作は、幼少の頃より、神童として、地元の人々に知られていた。三保の人々は、御穂神社の眷属神であり、金作の守護神霊であった八千彦命から、金作を「八千彦さん」と呼んでいた。「八千彦さんが浜に出ると大漁になる」と漁師から言われていた（[M599] 39 枚目）。

<sup>277</sup> 友清九吾『鎮魂帰神の原理及応用』、46-47 頁。

とも名状すべからざる大音響を發したので、一同の修行者皆膽  
をつぶし婦人などは覚えず悲鳴を揚げたものもあったが、一同  
皆な身動きもならず恐縮して平伏して居ると、宮城島氏は玉串  
を以て一同の修行者の頭上を左右左に打ち被ひ、そして拝殿へ  
引き揚げやがて氣抜けのやうな顔をして社務所へ歸つて來た。  
一同のものが直ぐに調べて見ると拝殿から社務所までの間、宮  
城島氏の足跡は九尺に一足づゝ印して居た。而して更らに問題  
となつたのは其の玉串である。どこに玉串が置いてあったと  
不審に禁へずして搜してみると拝殿の縁に投げ捨てゝあつた。  
これを社務所へ持つて來て研究してみると奇は愈々出でゝ奇  
で、その玉串といふのは三尺五寸位みの根ひきの生々しき見た  
ことの無い木で、少し黒い土を交つて居たけれども大體に赤い  
粘土が根に着いて居た。針葉樹ではるが一寸五分位みの長さの  
葉で太く丸く高野松の如くにして高野松とは大いに異なり曾て  
見たことも聞いたことも植物図譜にも無い不思議の珍植物であ  
つた。そしてその玉串に附せる弊の切り目が表裏とも一厘動き  
なく、これは如何なる精巧の機械を以てしても到底不可能のこ



となので、其の席に在つた新井陸太郎（現に遠州横須賀町の登記所長たり）をはじめ一同の修行者は且つ呆れ且つ恐縮するばかりであつた。又其の時刻、村の若者が神社の鳥居前を通りかゝると拝殿から社務所へ向け長け一丈ばかりなる髭いかめしき人が装束をつけて飛び行かれしを見たとして縮み上がり、御穂神社には化け物が出ると言ひふらしたりしたものであつた。其の夜、海上に在りし漁夫等は御穂神社の松の梢に火の燃えるのをみたさうである。さて其夜又た宮城島氏に神憑りがあつて、右の玉串は明朝三保の濱に流せよとのお託げであつた。翌拂曉一同の者は三保の濱に出で（社務所より五六丁あり）虔んで玉串を波打際に投げ入れると不思議や忽然として玉串が見えなくなった。本来ならば暫くは流れて行くのが見えねばならぬが波打ち際に入れるや否やパッと消えて了つた。

宮城島金作の神懸りの様子を最初に記した友清歆真は、大正七年(1918 年)に大本教に入信し、翌年の大正八年(1919 年)には大本教を脱退し、長澤雄楯に入門し

ている<sup>278</sup>。そのため、明治二十六年(1893 年)の御穂神社における宮城島金作の神憑りの様子は、友清が実際にその様子を見たのではなく、長澤雄楯からの聞き取りや、門人らの伝説をもとにしていると推測できる。しかしながら、友清の記述は、当時の長澤が御穂神社の社務所で開いていた帰神法の稽古の様子をうかがい知ることができる。

長澤雄楯は御穂神社への地元住民の崇敬を強化するため、明治十六年(1883 年)に御穂神社付属の誠敬講社を設立している。誠敬講社では 1) 御穂神社の大祭への講社員の参加や、2) 講社員間の相互扶助、特に貧窮者への基礎的な学習支援を促進していた<sup>279</sup>。長澤雄楯が月見里神社付属稻荷講社を、本田靈学の道場としていたことから、友清が記述した御穂神社における帰神法の稽古会も、誠敬講社の講員の間で行われていた可能生がある<sup>280</sup>。友清の記述によれば、長澤の指導による帰神法の修行には、男女ともに参加し、その中で、突出した神主としての能力を発揮していたのが、宮城島金作であった。

---

<sup>278</sup> 津城寛文『鎮魂行法論』47-50 頁。

<sup>279</sup> 吉水希枝「神社神道からみる月見里神社史料・宮城島家史料」、17 頁。

「御穂神社に誠敬講社できる」『函右日報』1199 号、明治十六年(1883 年)6 月 3 日、静岡県立歴史文化情報センター所蔵。

<sup>280</sup> 鈴木重道の調査においては、長澤雄楯は明治十七もしくは十八年に本田親徳の門人となっている。しかしながら、本田親徳の門人帳は存在しておらず、長澤の正確な入門時期は定かではない。鈴木重道「巻末記」『本田親徳全集』574 頁。鈴木重道「靈学の継承」『本田親徳研究』463 頁。

友清によれば、宮城島金作は、御穂神社の眷属神、佐田彦神が憑依した状態で、根付きの松のような特殊な神木を玉串に使い、長澤の弟子達に祓いをおこなった。その際、御穂神社では、百雷が一度に落ちたような異常音が聞こえたという。帰神状態の金作は、九尺、つまり約 2m73cm の歩幅で、御穂神社の拝殿と社務所の間を移動したという。宮城島金作の神憑りの様子は、帰神法の修行をしていた長澤の弟子達だけでなく、御穂神社周辺の住民にも目撃されている。そして、海上の漁夫達は御穂神社近くの三保の松原の梢が燃えているかのような超常現象を目撃したという。翌朝には、三保の浜辺で、昨夜、金作が憑依状態で使用した玉串の海上流しがおこなわれた。参加者によると、海に玉串を投げ入れた際に、玉串は波間を漂わず、瞬時に海上で消えてしまう超常現象が起きたとされる。

元来、御穂神社の社家の生まれであり、卓越した霊能力を有した金作は、自らの信奉者を有していき、長澤雄楯からの独立を図ったようである。金作は神道本局（教名：神道）権中教正であり、竜爪山穂積神社祠官であった高田潤作（弘化二年－大正八年）（1845 年－1919 年）<sup>281</sup>に接近し、高田潤作を神道三穂教会長

---

<sup>281</sup> 山田万作『嶽陽名士録』、781-782 頁。高田潤作は東海道二十三番宿である島田宿下本陣、置塩藤八郎の二男に生まれた。柏尾の名主であり、明治八年より竜爪山穂積神社祠官となった高田宣和（文政四年－明治十九年）（1821 年－1886 年）の養子となった。潤作は明治九年（1876 年）には静岡県議員となり、明治十五年（1883 年）には岳南自由党を結成し、自由民

に据え、神道三穂教会を設立した<sup>282</sup>。神道三穂教会史料の中で、金作の幼少の頃

について触れた「宮城島金作経歴」〔M403〕（成立年代不詳）では、金作が九歳

の時に、長澤雄楯を訪問するために御穂神社に立ち寄った本田親徳から直接「鎮

魂帰神法」の稽古を受けたことになっている。金作は明治六年(1873 年)生まれで

---

権運動の指導者として活躍した。宣和は報徳運動指導者として明治十一年(1878 年)には「駿河東報徳社」を組織したが、潤作も義父の報徳運動に協力し、「杉山青年報徳学社」の指導者となっている。吉永進一「清水・静岡の宗教風景」『月見里神社・稲荷講社史料/宮城島家史料目録－近代清水の神職たちと鎮魂帰神』、11 頁。また、友清九吾（欽真）『鎮魂帰神の原理及び応用』にも高田潤作についての記述がある。友清によれば、明治二十一年に浅間神社の宮司であった三浦弘夫の要請により、浅間神社の山宮である麓山神社拝殿において、親徳の妻、知可子（ちか）が審神者、親徳の娘薫子（みか）を神主とした帰神がおこなわれた。この帰神会の立会者の一人として高田潤作がいた。この帰神会において、浅間神社の主祭神である木花咲耶比売命が神主薫子に憑依し、長澤雄楯が、『古事記』『日本書記』『スペンサー哲学』についての質問をおこなったところ当時十二歳であった薫子が難問に立板に水を流すが如く名答をおこなったという。友清九吾『鎮魂帰神の原理』、10-11 頁。

神道三穂教会史料によれば、高田潤作の息子である高田雄民と金作は、同盟契約を結んでいる。金作は神道三穂教会の資金を流用し、雄民が経営していた貿易会社高田洋行に出資をしていた。金作自身も三穂洋行を興し、中国各地と満州に支店を開いた。しかしながら、三穂洋行の事業は失敗に終わる。〔M387、M388、M414、M415〕。また金作は、雄民を介し、鉾山経営に出資をするものの、これも上手くいかなかった〔M412〕。金作は、神道三穂教会での神主としての活動の外に数種の事業を展開した。明治四十一年より、三保村、塚間弁天において、「三穂岩塩再製工場」を開いた。金作の妻のすぎが三保の本宅に居住し、経営をおこなった。塩業の他に金作は、官許薬の製薬と販売、染料工場の経営、蘭の品種改良による投機、米相場への投資、掛川遊郭における貸座敷、「山口楼」の経営をおこなっていた「宮城島信夫回想録」〔M599〕 47 枚目。

<sup>282</sup> 「宮城島信夫回想録」〔M599〕 41 枚目。神道三穂教会は、教派神道「神道」の公認教会として、宗教活動をおこなった。「神道」は、東京市麻生区筈町に本局があり、各地方に分局を有し、教会講社があった。内務省達乙第五七号「社寺取扱概則」では、社寺類似の装飾や神社名を教会講社に付けることを禁じている。そのため、金作は、「御穂神社」の「御穂」とは異なる「三穂」を祭神「三穂津姫命」から採用し、「神道三穂教会」とした宮地正人「宗教関係法令」『宗教と国家』475 頁。神道本局は、宮中三殿奉斎の神霊を祀り、惟神の大道を広め神道を宣揚することを目的として、「三条の教則」を「教憲」とした。管下の教会講社は、神道系・山岳信仰系・法華神道系など多様であった。安原清輔『神社と宗教』、231-239 頁。

あるため、金作九歳とは、明治十五年(1882 年)である。先行研究において、長澤雄楯は、明治、十七年(1884 年)もしくは十八年(1885 年)に本田親徳の門人となつたとされていることから、長澤を訪問するために本田が御穂神社を訪れ、本田に金作は神主として見出されるという金作の記述は、確かではない<sup>283</sup>。本田親徳は明治二十二年(1882 年)に死亡していることから、本田親徳の存命中に宮城島金作が本田と会合した可能性はある。「宮城島金作経歴」〔M403〕は長澤雄楯からの独立後、金作が本田親徳の直弟子と名乗ることによって、長澤雄楯の影響を消し、神道三穂教会における自らの霊的能力と行法の正統性を補強しようとしたといえる。

---

<sup>283</sup> 鈴木重道「巻末記（一）年譜」『本田親徳全集』、574-575 頁。鈴木重道「巻末記、本田親徳先生略年譜」『本田親徳研究』、544-545 頁。

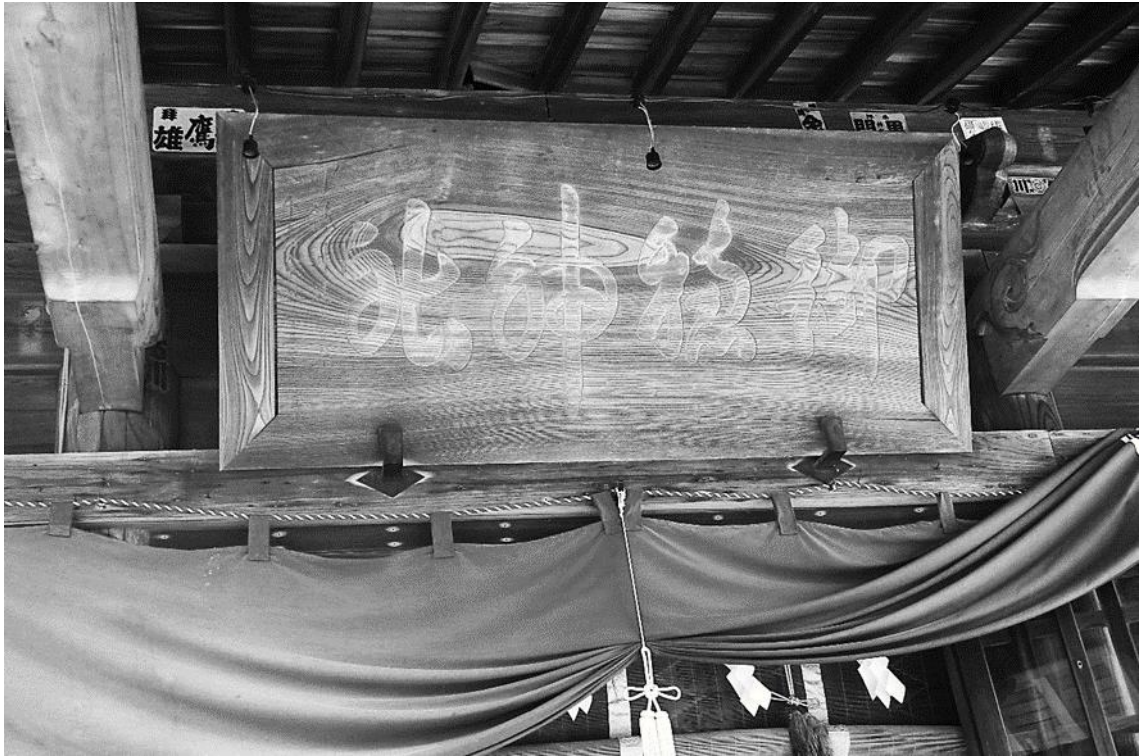


図 13 宮城島金作による御穂神社本殿の扁額

(改頁)

## 第五節 神道三穂教会成立時期について

宮城島家史料のうち、神道三穂教会関係史料の多くは、神道三穂教会が事実上、三保の地を離れ、静岡市街に移転した後のものである。そのため、三保地方に存在した神道三穂教会本部史料は、現存されておらず、正確な教会の設立時期は不明である。しかしなが

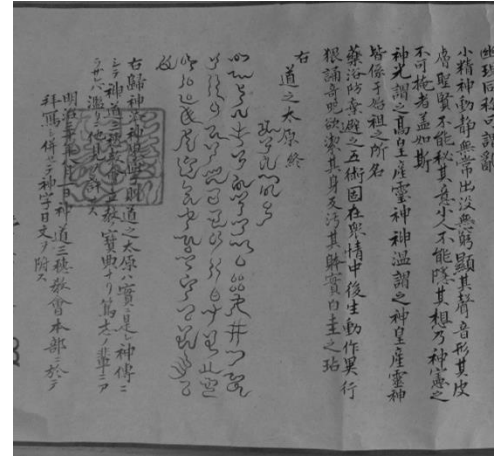


図 14『幽事寶典秘録』[M590]

ら、神道三穂教会史料『幽事寶典秘録』[M590]には、①宮城島金作が祭神「三穂津彦命」の憑依によって記した「幽理顕象」の書、②三穂教会会長の高田潤作による本田親徳の『道之太原』と『靈学抄』の書写、③神代文字による「一二三神歌」が記されている。そこでは、「右、帰神法、神界学則<sup>284</sup>、道之太原ハ、実ニ是レ神伝ニシテ、神道三穂教会立教の宝典ナリ。篤志ノ輩ニアラザレバ、濫リニ他見を許サズ。明治三十年、八月一日。神道三穂教会本部ニ於テ拝写シ、併セテ神字日文ヲ附ス」とある。このことから、明治三十年(1897年)には、神道三穂教会本部が存在していることがわかる。

また、〔神道三穂教会所分教会設置願綴〕[M325-06] [M325-09]は、明治三十二年(1899年)から明治三十五年(1902年)にかけて、神道管長、本多康穰<sup>285</sup>の

<sup>284</sup> 宮城島金作は、本田親徳の『靈学抄』を「神界学則」とし、教会幹部に伝授していた。

<sup>285</sup> 本多康穰（天保六年～明治四十五年）(1835-1912)は近江膳所藩十二代藩主。明治三十五

添え書きとともに静岡県知事山田春三に提出したものである。これによると、明治三十二年(1899年)に神道三穂教会では「三穂津彦命」「三穂津姫命」「天鈿女命」「事代主神」の四柱の神々からの神勅があった。これにより、神道三穂教会は三保の地を離れ、静岡市街に神道三穂教会分教会所を設立する計画を立てている。神道三穂教会関係史料「幽典秘録」[591]によれば、明治三十六年(1903年)には、教会分教所が、静岡市本通四丁目四十六番地に存在している<sup>286</sup>。

#### 第六節. 宮城島金作の本田霊学受容

神道三穂教会史料には、本田親徳の記した本田霊学の教義書である『道之大原』の書写版[M1]や抜粋

[M330]、そして本田霊学の「学則」や「帰神法」「審神者」の心得が記された『霊学抄』の書写による巻物が多く

残されている[M585、M586、M587、M589、M590、

M591、M592、M594、M595、M598]。

神道三穂教会史料中の『道之大原』は、本田親徳の内弟子であった鈴木廣道が残した鈴木家所蔵の『道之大原』ではなく、長澤雄楯の門人の間で流布された長

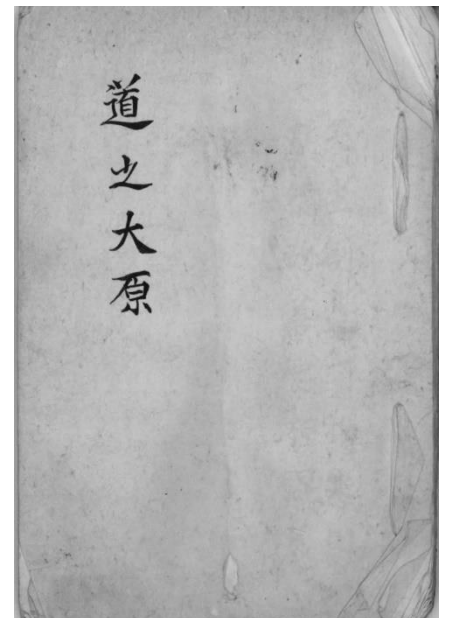


図 15『道之大原』[M1]

---

年(1902年)に教派神道の「神道」管長となり、従二位に昇任。

<sup>286</sup> 「宮城島信夫回想録」[M599]の42枚目にも本通四丁目の教会の様子が記されている。



澤版にのみ記された用例語が記されている。そのため、宮城島金作が所持していた『道之大原』は長澤雄楯が門人に書写させていた長澤版『道之大原』であるといえる<sup>287</sup>。

また、神道三穂教会史料の特徴として、本田靈学の行法において、靈魂の清浄化をはかる「鎮魂法」についての書写文献は存在しない。

## 第七節 本田親徳の鎮魂法

本田親徳は、『道之大原』において、「人心也者大精神之分派。（人心也是大精神之分派）」（中略）「上帝以四魂<sup>288</sup>一靈造心。而賦之活物。（上帝は四魂一靈を以て心を造り、而して之を活物に賦す。）」（中略）「靈学者以浄心為本。故皇神<sup>289</sup>以鎮魂為之主。百姓尊奉日練真心。令義解云鎮者安也言招離遊之運魂留身体中府。可見其国家之重典。今人蒙昧頑乎不顧。求法于外尋術于異。慣習為常。汚穢日加。噫悲矣哉。（靈学は心を浄くするを以て本と為す。故に皇神鎮魂を以て之を主と為す。百姓、日に真心を練るを尊奉す。令義解に云く。鎮は安なり。離遊の運魂を招きて身体の中府に留むと言ふ。其の国家の重典たるを見る可

---

<sup>287</sup> 鈴木重道「卷末記」『本田親徳全集』、583 頁。

<sup>288</sup> 四魂は、あらみたま荒魂、くしみたま奇魂、さきみたま幸魂、にぎみたま和魂をさす。

<sup>289</sup> 皇神とは神の尊称。

し。今人蒙昧頑乎にして顧みず。法を外に求め、術を異に尋ぬ。慣習常と為り。

汚穢日に加わる。ああ悲しい哉。）」と述べている。

本田親徳の教義では、人間の靈魂は上帝である天御中主神から賦与されたものであり、心魂は神からの分霊であるという。そして、本田靈学は心を浄化することを基本して、神を靈魂に鎮めることを重要とする。万人が日々真心を練ることを尊ぶとする。これは、天長 10 年（833 年）淳和天皇勅の律令解説書『令義解』にあるように鎮魂とは、体外へ浮遊してしまう靈魂を体の中に留めておくことをさすという。現在、鎮魂は廃れ、人は神道以外の術法を重要視し、そのため、日々人間の靈魂は穢れ続けていると親徳は、嘆いている。しかしながら、親徳の現存する著作では、本論文、第三章で考察をおこなった『産土神徳講義』において説かれた気海丹田に心魂を据えて閉目拱手の型によって内観をおこなう方法<sup>290</sup>以外にどのように鎮魂法をおこなうか詳しい説明はなされていない。

神道三穂教会史料において、唯一、「鎮魂法」について述べた史料としては、真一学人著『幽事神伝帰神法（附神界物語）』〔M3〕（成立年代不詳）がある。

本書は、天保国学の議論の対象であった神霊の实在論を明治維新後に証明可能と

---

<sup>290</sup> 本田親徳『産土神徳講義（上）』、『本田親徳全集』13 頁。

する人物として、宮城島金作を取り上げている。本書は、手書きによる原稿で、著者の真一学人は宮城島金作本人、もしくは教会内部者である可能性もある。

## 第八節 『幽事神伝帰神法（附神界物語）』における鎮魂法

本書は、他の神道三穂教会関係史料と同様に、本田親徳の『霊学抄』を基礎とした「帰神法」の説明が書かれている。その一方で、「審神者」と「神主」の二者によっておこなわれる神憑り方法である「他感法」の前段階として「鎮魂法」が記述されている。いわば、本書においては、「鎮魂法」を独立した行法としてではなく、「帰神法」に連続した瞑想法としている。

『幽事神伝帰神法』における「鎮魂法」の記述は以下のとおりである<sup>291</sup>。

さて、既に神主あり、審神者あり、場所あり。是にて準備  
整へり。是より、招請行為の第一着に取りかゝることを得べ  
し。

招請行為につきては、如何なる手段をとるものなるか。

---

<sup>291</sup> 真一学人『幽事神傳帰神法（附神界物語）』[M3] 40-43 頁。

招請行為に先だちて、鎮魂法といふことをせざるべからず。

鎮魂とは、靈魂を鎮むといふことにして、神主となりし人の靈魂をして、その本座に鎮まらしめざるべからず。其の本座に鎮まらしむるというふは、如何にといへば、人の靈魂の本座は天府なりと古書にも見えしが如く。神を招請して寄らしめんとするには、其神主の身体に宿り得べき様にせざるべからず。宿り得るべき様にせんとならば、其人の靈魂を居らしむべからず。其靈魂を天府の本座に送還して鎮まらしめ置きて、而して後に神を招請し来り、其身体に寄するなり。是を鎮魂の法といふ。

『幽事神伝帰神法（附神界物語）』の著者である真一学人の説明によれば、神靈を召喚し、神主の身体に神靈を宿す、「帰神法」の前段階、地ならしとして、「鎮魂法」があるという。真一学人の説明によれば、鎮魂法では、神主である人間の靈魂を「本座」に鎮めなくてはならないという。そして、靈魂の本座とは、天府であるという。帰神法において、神靈を神主の肉体に憑依させるには、神主自身の人間の靈魂が肉体に残っていないため、人間自身の靈魂は、天の本座に歸し、靈魂を天に留め置いて、人間の肉体を空にする必要があるという。

つまり、真一学人の「鎮魂法」は人間の靈魂を肉体から脱魂させ、天の本座に帰

し、人間の肉体を神靈の憑依する器とする行法が「鎮魂法」であるという。

つづいて、真一学人は鎮魂法の実践方法を説明している。

其方法、如何といふに、こゝに至りては、最早いふべき

こともなきなり。筆紙も言語も充分にいひえべからざる

なり。そは如何となれば、精神的作用に帰すればなり。

信念のはたらきといふの外なし。然らば、其信念は如何

にもつべきかといはば、先づわれかくの如くせば、彼れ

の靈魂は天府に帰座するに相違なしと、是丈けのことな

り。さらば、其形式は如何に問ふ人あらん。そはたゞ神

主となるべき。人を正座に居らしめ、審神者は其神主よ

り距ること凡そ三尺程のところにて神主と相對し、神主

は瞑目にて端座し、審神者は（ママ）端座して最も嚴格

なる態度によりて、最も慎嚴に神主を見つゝ、石笛の如

きものを平調に吹きつゝくるなり。是を鎮魂の形式と

す。

真一学人によれば、神主が、どのように自らの靈魂を脱魂させるのか、という  
と、神主自身が、靈魂は天の本座に帰るのだと信じる精神的作用しかないとい  
う。作法として、神主と審神者は、正座をして向かい合って座る。神主と審神者  
の距離は三尺、約90センチであるという。

神主が目を閉じて、天の本座に靈魂を帰すことを念じている一方で、審神者は神  
主を注意深く観察しながら石笛を吹くという。これが鎮魂法の形式であるとい  
う。

神主と審神者が相対して座り、神主が目を閉じて祈念する一方で、審神者は石  
笛を吹くというこの作法は、本田親徳の『関係文書』の中に書かれている帰神法  
のうち、審神者と神主の二者でおこなう他感法の行法と酷似としている。

本田親徳の「関係文書」においては、審神者の指導の下で神主へ神靈を憑依さ  
せる方法について説明がされている。第四章においても、考察したようにそこで  
は以下のような手順を経る<sup>292</sup>。

1) 女性を神主とする場合は、月経日を避け、「マナカタラ」と朝夕唱えさせ  
る。

---

<sup>292</sup> 『関係文書』『本田親徳全集』360-362頁。

- 2) 朝夕神前にて「ヒ、フ、ミ、ヨ、イ、ム、ナ、ヤ、コ、ト、モ、チ、ロ、  
ラ、ネ、シ、キ、ル、ユ、ヰ、ツ、ワ、ヌ、ソ、ヲ、タ、ハ、ク、メ、カ、ウ、  
オ、エ、ニ、サ、リ、ヘ、テ、ノ、マ、ス、ア、セ、エ、ホ、レ、ケ」と一二三  
神歌を唱える。
- 3) 神主は台の上に座り、指を組み合わせ、目を伏せて、口を閉じて、一心に神  
を念思する。
- 4) 審神者は、「ヒト、フタ、ミ、ヨ、イツ、ムユ、ナナ、ヤ、ココノ、タリ、  
モモ、チ、ヨロツ」と心で念じつつ、竹笛を吹く。これを百回繰り返す。
- 5) 毎日朝晩修行する。
- 6) 日を重ねていくと、神憑りが発生する。
- 7) 神霊が憑依する時、神主は身体が痙攣し、入眠したように意識がなくなる。
- 8) この状態が発生したら、審神者は憑依した神の名前を尋ねる。

長澤雄楯より、本田霊学を受容した出口王仁三郎は、「神人合一」の実践を  
「鎮魂帰神法」と呼称していた<sup>293</sup>ことから、長澤雄楯の「神主」の育成におい  
ては、「鎮魂法」は独立した行法として重要視されていなかったのかもしれな

---

<sup>293</sup> 津城寛文『鎮魂行法論』、165-182 頁。

い。また、金作の「神主」の修練は、あくまでも神憑りの「帰神法」と病気癒しの「禁厭法」に特化したものであった可能性もある。

このように神道三穂教会史料には、本田霊学の書写史料が多く発見できる。上述の「宮城島金作経歴」〔M403〕のように長澤雄楯からではなく、本田親徳から霊的实践を直接教授されたとする史料も残されている一方で、本田親徳の影響さえも抹消し、帰神法の行法伝授は、御穂神社の神々から受けたとする史料も存在する。

## 第九節 宮城島金作の帰神法の習得について

明治二十七年(1894年)七月九日の日付が記された宮城島金作（当時二十一歳）による帰神の「履歴書」〔M327〕では、金作の「帰神法」の習得は、長澤雄楯からの本田霊学の継承によるものではなく、御穂神社の祭神からの直接的な啓示によってなされたことになっている。この帰神の「履歴書」には、「静岡縣有渡郡三保村三保式百九拾参番地。平民、宮城島源作、二男。同縣同郡同村鎮坐、郷社御穂神社常傭、宮城島金作、明治六年二月生」とあり、「履歴書」当時、金作は御穂神社の常傭の身分を得ていたことがわかる。



この「履歴書」によれば、金作が始めて帰神法を会得したのは、明治二十年(1887年)三月二十八日である。この日、金作は、御穂神社の祭神である御穂津姫命の神感により、帰神の法式を伝授されたという。同年六月十五日には「御穂神社眷属憑依」があり、八月三日には、再び、「御穂津姫神ノ神感」があった。翌年の明治二十一年(1888年)四月三日には、名を明らかにしない神憑あり、同年十二月十五日に「御穂神社眷属」の憑依があった。明治二十三年(1890年)十月十二日に再び、御穂津姫命の神感があり、同年中「帰神法式ノ自習ニ従事セリ」とある。金作の神憑りの記述を本田親徳の『霊学抄』「帰神標目」に照らしてみると、明治二十年(1887年)から明治二十二年(1889年)まで、金作は、専ら「神感法」による神憑りをおこなっていた。そして、「自感法」が可能になったのが、明治二十三年(1890年)中の自習によるものであった<sup>294</sup>。そして「履歴」書には、「明治二十四年四月四日ヨリ、御穂神社祠官、長澤雄楯の依頼ニ応ジ、稲荷講社総本部、帰神ノ神主ニ囑託セラル」とある。金作は、帰神の「履歴書」において、意図的に長澤雄楯、あるいは、月見里神社付属稲荷講社から距離をおいた記述をおこなっている。神道三穂教会関係史料においては、この明治二十四年四月四日の記述以外に月見里神社付属稲荷講社の情報は、発見できない。そして、金

---

<sup>294</sup> 本田親徳「帰神標目」『霊学抄』374-375頁。

作の帰神の「履歴書」は明治二十七年(1894 年)七月九日に書かれたものであるが、長澤雄楯の稲荷講社の系譜においては、伝説となった明治二十七年四月におこなわれた日清戦争の予言については、金作の帰神の「履歴書」内には記載がない。また、他の神道三穂教会関係史料からも発見できない。

これは、あくまでも宮城島金作自身が、御穂神社社家の出身である自らの出自に重きをおき、長澤の下での神主としての活動には、満足しなかったためかもしれない。あるいは、金作自身の追従者、もしくは弟子筋が、ある一定数集まるようになり、一人の独立した神主としての宗教活動を金作が、目指していったことによるものかもしれない。

明治二十四年(1891 年)六月のあいだ、金作は、御穂神社社務所において、敬神篤志の者を募集し、帰神法式の稽古会を開くようになる。そしてこの時期に金作は、神界より、「神感普通一等神主ニ任ゼラ」れ、靈的位階を受けたことになっている。また、明治二十五年四月には、御穂神社社務所において帰神法式の稽古会を継続し、ついで、「同月二十日午後八時頃、猿田彦大神ノ神感ニ依り、同社祠官祠掌及ビ稽古人等ニツイテ祓ノ行事アリ。小松ニ垂手（紙垂）及形代ヲ付ケ、是ニ就イテ祓ノ行事ヲ神界ヨリ齋ラセラル。其祓串ハ神勅ニヨリ羽衣湾ニ棄

却ス」とある。この当時、宮城島金作は神霊の啓示により、御穂神社において祓の儀礼をおこなうまでになっていた。

そして明治二十五年(1892年)六月より、「信仰者ノ請求ニ応ジ、神憑シテ、万事ヲ伺ウニ悉ク其験アリ。明治二十六年、四月ヨリ六月マデ帰神法式ノ稽古会ヲ開ケリ。同明治二十七年七月十七日ヨリ二十三日マデ、神勅ヲ奉ジテ帰神法式ノ稽古会ヲ開キ、思金之神ノ試験ノ成績ニ依リ」「神感高等一等神主ニ任ゼラル」

「右ノ通り相違無之候也」と「履歴」書は締めくくられている。

明治二十五年(1892年)から二十七年(1894年)の「帰神の履歴」書の記述をみると、金作は、「神感普通一等神主」から「神感高等一等神主」に昇進するにつれ、御穂神社の祭神や眷属以外の「記紀神話」の神霊が憑依するようになっていく。金作は、信奉者からの求めに応じ、「帰神法」による託宣をおこない、その的中率が高いことから評判を呼んでいたことがわかる。金作の「帰神法」は、金作自身の記述によれば、御穂神社の祭神である御穂津姫命の直接的啓示によって伝授されたことになっている。金作は、神霊から「帰神法」を伝授された後、自習や、御穂神社での稽古会を重ねるにつれ、「神界」より霊的位階を授与されている。そして、思金之神の試験により「神感高等一等神主」となる。このことから、明治二十四年(1891年)から明治二十七年(1894年)あたりに金作を神主として

活動する信徒集団が御穂神社の崇敬者の中から出現した可能性が高い。しかしながら、金作による「履歴書」には、友清歆真の『鎮魂帰神の原理及応用』に記述された明治二十六年(1893年)六月の佐田彦神の憑依による祓いの行事と翌朝の玉串の海上流しの超常現象についての表記はない。

## 第十節 神道三穂教会の静岡市街への移転

明治三十六年(1903年)以降、神道三穂教会神主である宮城島金作と金作の長男、信雄と長女の綾子は、静岡市街に設立された静岡分教会に居住した。事実上、三保にある本教会は空洞化し、分教会所であった静岡教会が金作の活動の主体となった。

静岡分教会では、1) 病氣託宣と禁厭法による神霊保護、2) 三穂教会製造の生薬の販売、3) 事業託宣により、信徒を獲得していった<sup>295</sup>。信徒としては、衆議院議員、松本君平(明治3年－昭和19年)(1870年－1944年)のような地元政治家、静岡茶の茶葉卸業者、花柳界の妓楼経営者、料亭、飲食店経営者に勢力

---

<sup>295</sup> 神道三穂教会史料には、金作のおこなった託宣紙類が多く残されている。相談者は、静岡市内、安倍郡、庵原郡、蒲原郡などの御穂神社の崇敬地域からの相談者だけでなく、焼津、浜松、横浜、大阪に及んだ。神道三穂教会託宣関係書類 [M6-12、M6-20、M147-M300、M302、M304、M305、M307-M317、M319、M320、M331-343、M345-351]。

を伸ばした<sup>296</sup>。明治四十年代には、静岡市屋形町十八番地に移転し [M81]、大正五年(1916 年)には、同市、下魚町一番地に移転した [M108]。下魚町への移転をおこなう際の静岡市役所への教会長、高田潤作による届け出では、正式名称を「神道三穂教会静岡分教会所」としている。しかしながら、金作の私的書簡類の住所印をみると「静岡市下魚町一番地神道三穂教会」として、金作の意識の中では、静岡教会が神道三穂教会の活動の中心であった [M8、M11-4、M21、M22、M93、M94]。

神道三穂教会の活動として、大祭日は十一月十五日であった。当日は、祭儀の他、金作の説教があり、信徒の芸者連のおどりや、くじ引きなどの催しがあり、盛大であった<sup>297</sup>。

---

<sup>296</sup> 「宮城島信夫回想録」[M599] 42 枚目、53-55 枚目。

<sup>297</sup> 「宮城島信夫回想録」[M599] 92 枚目。



図 16 神道三穂教会祭日（右端に宮城島金作）（宮城島家所蔵）



図 17 大正六年十月二十五日日付「神道三穂教会参会案内状」  
（静岡県立図書館所蔵）

## 第十一節 神道三穂教会における行法術の伝授

長澤雄楯は、御穂神社の社務所や、月見里神社付属稲荷講社を本田霊学の道場とし、帰神法の習得を目指す、多くの門弟が集まった。これと同様に、静岡市街に成立した宮城島金作を神主とする「神道三穂教会」においても、齋官が九名ほど常駐し〔M2〕、帰神法の伝授がおこなわれていた。明治四十四年(1910年)には、金作の守護神霊、八千彦命が憑依し、教会内の行法修練者の幽冥界において、自らの行法実践を証明する「幽冥登録」がおこなわれている〔M585〕。この資料では、静岡分教会齋官部の齋官ならびに役員達の審神者としての等級が記されている。その等級は「普通〇等審神者」とあり、一等から一八等まで数えられる。このことから、宮城島金作の静岡分教会所設立による、静岡市街移転は、同じ三保地方において、長澤雄楯の月見里神社付属稲荷講社における行法修練者や信徒層との競合を避ける意味合いがあったかもしれない。第三章において、考察したように本田親徳の救済論を説いた『産土神徳講義』において、親徳は、大国主神による死後の裁判と天界における位階に備えるために産土神への帰依と鎮魂法による心魂の清浄化を唱えた<sup>298</sup>。しかしながら、宮城島金作を神主とした神道三穂教会では、現実世界である「顕界」と対置する神霊世界である「幽冥界」

---

<sup>298</sup> 本田親徳『産土神徳講義（上）』『本田親徳全集』14－17頁。

の概念と「幽冥界」における位階の概念を思想的に継承しながらも、宮城島金作の神道三穂教会の教義においては、死後の裁判とその後、天界において位階を授与されるのを待つのではなく、金作自身の帰神の「履歴書」[M327]において記述されたように、「帰神法」の修練と帰神法による神霊との交流によって、顕世であるこの世において幽冥界における位階を獲得可能であると考えられた。



図 18 宮城島金作（中央）と斎官と信徒達（宮城島家所蔵）



## 第十二節 まとめ

本稿では、宮城島家史料をもとに神主、宮城島金作が、どのような人物であり、神道三穂教会ではどのような活動をおこなっていたのかを概観した。

宮城島金作の父である源作は、幕末には赤心隊員として、尊皇攘夷運動に参加し、倒幕を志した神職であった。しかしながら、源作は、明治維新後の政策において、近世において保証されていた宮城島家の御穂神社社人としての職務や職位を一時的には失ってしまう。源作は教派神道の大社教の訓導として宗教活動に関わりつつ、晩年になりようやく、御穂神社の祠掌に復帰した。

明治十二年(1879年)より、長澤雄楯は、御穂神社祠官となるが、明治十七(1884年)もしくは明治十八年(1885年)に霊学神道家本田親徳の門人となり、その教学と行法を受容しつつ、駿河地方の神社神道の復興をおこなった。宮城島金作は幼少のころより、生まれつきの霊能力により、神童として三保の人々から知られ、長澤雄楯の下で本田霊学の思想と行法術を学んだ。

特に「帰神法」により、御穂神社の祭神を中心とした神霊からの託宣を受ける行法を習得する。三保地方では、古くから御穂神社社人として知られてきた宮城島家の「氏のカリスマ」と、御穂神社の「神霊のカリスマ」により、金作は信徒

を獲得していく。そして、御穂神社常備から離れ、神道本局管轄下の教会講社である神道三穂教会を設立した。

金作はその後、三保の地を離れ、静岡市街に分教会所を設立し、勢力を伸ばした。宮城島金作の特徴としては、神道三穂教会の教義思想と行法術を長澤雄楯の教授した「本田霊学」をそのまま利用していることである。長澤雄楯は、月見里神社付属稲荷講社において、霊学道場を開いていたが、同様に、金作は、神道三穂教会の斎官部において、「帰神法」を教会幹部に教授していた。そして、「本田霊学」を御穂神社の祭神である三穂津姫命や、自らの守護神霊である御穂神社の眷属神達からの神託とし、自らのものとした。

金作は、神道三穂教会における宗教活動だけでなく、数々の事業も展開し、宗教活動に偏らない経済的活路を模索していった。しかしながら、金作が教会教主であった時期に継続して成功していた事業は、医療託宣の後に信徒が購入する生薬販売と、貸座敷経営であった。

明治十年(1877年)に金作が死亡した後、神道三穂教会では、長男信雄が、二世主となった。しかしながら、金作のように生まれつきの霊能力を有していなかった長男、信雄は、古参の斎官の指導下に「帰神法」の習得に励むものの、修行

に励んだ結果、心身を害してしまう。この結果、神道三穂教会は大正十五年  
(1926 年)頃に教会としての宗教活動を終えたようである。

(改頁)

## 終章

薩摩藩出身の霊学神道家である本田親徳とは、どのような人物であり、どのような学問的背景をもとに自らの霊学思想を発展させたのか、そして、本田の思想の延長上に存在する行法とは、どのようなものであったのかということを明らかにすることを本論文は目指した。また、本田親徳の霊学思想と行法を受容した本田門人とは、どのような人物であったかを考察するため、親徳の駿河門人の一人である御穂神社祠官長澤雄楯に注目し、本田霊学を用いた神社復興の様子を取り上げた。そして、本田霊学の行法を習得した長澤雄楯が、最初に見出した「帰神法」の「神主」であった宮城島金作の宗教活動を神道三穂教会史料によって明らかにした。

本田親徳の提唱する「霊学」とは、顕幽の主宰神である天御中主神より賦与された「一霊四魂」である自らの心魂（神魂）を「鎮魂法」により、清め、「帰神法」によって神霊の实在を探求し、過去未来に通じるための皇国固有の学問であるとされた。そして、实在の神霊の霊威による病氣癒しの「禁厭法」を内包し、「太占」によって人智を超えた神霊の啓示を受けるものであった。本田霊学の行法は呪術的、神秘的実践であり、本田親徳の門人になることによってのみ享受できる口伝秘法であった。本田親徳によれば、自らが教授する秘伝行法は、中世祭

祀が衰退し、消失してしまった術法であるものの、皇祖忍穗根命の子孫であり、桓武天皇の皇胤である親徳自らが長い年月をかけて、神勅を頼りに復古した皇国の道であるとした。本田親徳の門人たちは、神霊の实在論証が学問的議題となった天保国学の読者であり、幕末期に尊王攘夷思想を受容した、宮中官僚、神社社家の出身者、そして、地方の地域社会の統治を司る戸長など亜流エリートであった。親徳の門人たちは、明治維新後の神道政策において、吉田家白川家の執奏制度が廃止され、神社神道が国家の祭祀へと直結していく中で、地域の氏子や産子が日常生活の中で神霊の恩恵をうける私祈祷の領域において、近世の吉田・白川家の行法伝授に変わる皇国の世の神道行法として、親徳の霊学行法を受容した。

本田親徳は、旧薩摩藩の縁故が存在した会津、羽後、甲府、駿河、遠州、三河、伊豆、武州（秩父、川越）地方を遊行し、それぞれの地域において、布教をおこない門人をあつめた。親徳の駿河門人の一人であった長澤雄楯は、自社である月見里神社付属稲荷講社や奉職をしていた御穂神社の社務所を本田霊学の道場として、神憑りが可能となる神主の霊能力育成をおこなっていた。長澤雄楯は、門人を千人以上も有し、この中から、神道三穂教会神主宮城島金作の他、大本教教祖である出口王仁三郎、神道天行居の友清歆真、三五教の中野与之助などの神道系新宗教家が輩出された。現在まで、本田親徳による本田霊学が周知されるよ

うになったのは、これら新宗教の教祖達が、本田霊学を受容し、自らの宗教思想の基礎としていったからである。そして、本田親徳の布教においては、秘伝伝授を受けた門人のみが、知ることが可能とされた本田霊学の行法実践は、それぞれの教団において、教祖の解釈による霊学行法が教団信者たちに広く実践され受容されていくようになった。大本教を大正八年(1919年)に脱会后、長澤の門人となった友清歓真が友清九吾の名前で同年に出版した『鎮魂帰神の原理及応用』によって、霊学神道家本田親徳の名前とその行法は、出版物として、最初に世に周知されたといえる。

本田親徳の内弟子であった山形県飽海郡上野曽根村の薬師神社社家出身の鈴木廣道が本田親徳より許可状と共に授けられた本田親徳の著作群と手紙類が鈴木廣道の孫である北海道余市町入船町の明治神社宮司であった鈴木重道によって、昭和五十一年に鈴木重道編『本田親徳全集』として山雅書房より出版された。これにより、ようやく本田親徳自身の記した本田霊学の著作群が一般公開されたといえる。翌年、昭和五十二年に鈴木重道は『本田親徳研究』を山雅書房より出版した。同書の中で、鈴木重道は、自らの調査による本田親徳の出自と、本田門人の列伝である「霊学の継承」を記した。これにより、これまでの先行研究においては、鈴木重道の調査が、本田の出自として、定説となったといえる。

御穂神社祠官長澤雄楯の門人であった白鬚神社祠官稲葉大三津の門人であった佐藤卿彦は、昭和十一年(1936年)に「顕神本会」を設立し、稲葉が長澤から受容した「本田霊学」の布教に努め、「顕神本会」の本田霊学の実践者の中から『古神道の秘儀－鎮魂と帰神のメカニズム』の著者、渡辺勝義が現れた。このように本田親徳研究や本田霊学研究は、本田親徳の門人達を経由した「本田霊学」の実践者によって、自らの属する団体の解釈にもとづく在野研究として開始された。そのため、本田親徳自身が著作の中で繰り返し主張した自らは「皇祖忍穂根命の子孫であり、桓武天皇の皇胤である本田親徳が、神勅を頼りに復古した皇国の道」が本田霊学であるという主張が在野の研究者の中ではそのまま受容された。つまり、本田霊学とは、本田親徳という特殊な霊的神道家によって創造された独自の思想体系であるとされてきたといえる。しかしながら、どの宗教者の宗教思想もその宗教者が生きた時代の思想的議論を継承しつつ、自らの思想体系を築いていくものであり、本田親徳の霊学思想においても、本田親徳が生きた時代の思想的議論を踏まえ、自らの宗教思想を築いていると言える。

政治思想史学の視点から「出口王仁三郎研究」のために本田親徳に注目した安丸良夫は本田親徳の著書『道之大原』を考察し、親徳の思想を一種の汎神論ではあるが、完全に思弁的ではなく、「鎮魂帰神法」による神憑りによる神の実見に

結びついたものであるとした。また「鎮魂帰神法」について、安丸は、近世国学者や神道家の間で定式化された「神憑り法」と定義し、平田篤胤の国学思想に連なるものであると言われながらも、詳しい考察はおこなわれなかった。そのため、本論文の前半部においては、平田国学と本田霊学の思想的関係について考察をおこなった。特に、「魂の行方」に注目する平田国学と本田親徳の霊学思想の関係性を明らかにするために、第一章において、平田篤胤の『霊の真柱』『勝五郎再生記聞』を主要文献として取り上げた。次の第二章では、平田門人の六人部是香の『産須那社古傳廣義』を考察の対象とした。そして、第三章では、本田親徳の『産土神徳講義』『産土百首』を主要文献とした。第一章から第三章までを通して、篤胤、是香、親徳という三人の国学・神道家に共通する主題である、「顕幽論」および「死後の魂の行方」、そして「産土神の働き」について考察を試みた。

第一章では、平田篤胤の思想において、人間が生まれる際に産霊神から賜る霊魂が、その死後の肉体を離れた時にどこに「帰く」のか、そして魂の帰り着く先とされる「他界」はどこにあるのか、また実際に生まれ変わりを体験した勝五郎の言動はどのようなものであったかを考察していった。この結果、篤胤の考える「他界」である「幽冥界」とは、この世に隣接する水平上に位置しており、人間



（氏子）の生死に関わる神として、「産土神」が重要な役割を果たす事が明らかとなった。

第二章においては、平田門人であり、日向神社の神官でもあった六人部是香の『産須那社古傳抄廣義』を取り上げた。是香は、本書において、儒学、仏教、そして流行神の言説に踊らされた人々が死後の安心を知らないことを憂い、篤胤の顕幽論を継承しつつも独自の「産須那神論」を発展させたといえる。是香は自らが生きた近世の現実の世界である「顕界」とその政治システム「顕政」と同型の「幽界」と「幽政」を想像した。それは、大国主神を頂点とした縦割りの「幽政」を「幽界」において想定したものであり、産須那神社を「幽界」における奉行所とした。「顕界」と「幽界」を同型の「他界」として位置づけ、この世に生きる人々がこの世の側から、今世の福德と死後の安寧を願うことができる唯一の窓口として、産須那社の役割の意味づけと位置づけを新たにおこなったといえる。是香の考える産須那神は自らの生きる「産子」を昼夜守護しつつも、その行状をつぶさに注目し、産子が死んだ後は、産須那の社において生前の行いに対する裁きをおこなう。そして産子の靈魂は、裁判の結果、神靈として位階をうけ、「上津大兄」「下津大兄」のどちらかに分配されることになる。そして「大兄神靈」つまり眷属神として、産須那神の社領内で産須那神の配下として働くことに

なる。是香は、現世に生きている間にいかに靈魂の品性および清浄性を保つことができたかが、神霊となった際に重要となると説いた。しかしながら、是香は死後の神霊の位階を「生前の言動」と「心持ち」によって決定されると説きながらも、親神である産須那神の鎮座する産須那社への参詣と日拝以外、特別な靈魂の修養法を説くことはしなかった。

第三章では本田親徳の『産土神徳講義』及び、『産土百首』を取り上げた。そして、本田親徳が、平田篤胤の顕幽論を踏まえつつ、六人部是香の産須那思想を発展させ、自らの思想と行法を創造していったことを明らかにした。特に『産土神徳講義』では、六人部是香の『産須那社古傳廣義』において示唆された神より心魂を賜った人間がこの心魂を「顕世」に生きる間にいかに清め、神に愛されるような心を保持できるか、という問いに対応する修養法として、「気海丹田に心を沈める瞑想法」の重要性を説いた。親徳は『産土神徳講義』において「鎮魂法」という名称を使用していないものの、「気海丹田に心を静める」瞑想法は、心魂の清浄化のための実践であるとしているので、「鎮魂法」とであると推測できる。親徳によれば、この瞑想法をおこない、心魂を鏡のように磨いていくと、自らの靈魂を実見できるようになっていくと説明している。そして、親徳は、靈魂の不滅についても説きつつ、死後の裁判の後に靈魂の上天があることを示唆し

た。この上天思想は、篤胤が『霊の真柱』で提示し、是香の『産須那社古傳抄廣義』を経て、親徳自身の『産土百首』において継承された、この世の水平上に位置する他界観とは異なりなり、むしろ篤胤の『本教外篇』を参考にしているといえる。しかし篤胤の『本教外篇』においては、人間が死後、神霊となり、上天した後は、天地を往復しつつ職務を果たすこととなっており、天界において永住するわけではない。

親徳の思想においては、人間がたとえ「顕世」において幸福や名誉を得ることができなくとも、心の清浄性を保持できるように修養を重ねることによって、死後に天界において、神霊として位階が授けられるとともに永遠の命を得ることができると説いた。これが親徳自身の考える「死後の魂の行方」であり、救済論であったと考えられる。

第四章では、本田親徳の出自及び学統を明らかにするとともに、本田門人は何を求めて本田霊学を学んだのかを明らかにするために本田の駿河門人であり、本田霊学を神道系新宗教へと橋渡しをおこなった御穂神社祠官長澤雄楯の本田霊学を用いた神社経営の考察をおこなった。

長澤雄楯は、自らの奉職する御穂神社と自社の月見里稻荷神社そして、自らが管轄する小社を本田霊学の実践により復興させた。特に明治維新後の社格制度にお

いて、郷社と定められた御穂神社を長澤は、投資による蓄財の他、霊威の顕現により、地域社会の潜在的信徒の参詣集社を成功させた。このことにより、長澤は、氏子の寄付に頼らない集金を実現した。そして、長澤は、社殿の整備をおこない、御穂神社を県社へと昇格させている。長澤は、御穂神社とともに、長澤家の自社である、月見里神社や、清水地方の自らが管轄する小社においても同じ方法を用い、清水地方の神社神道の復興を試みた。長澤雄楯は神社神道の復興の功績により、天皇に拝謁を許され、死後には、従六位の昇叙をうけるまでの出世を果たした。

本田親徳は、皇国学の徒として幕末には、長州探索方として働き、明治維新以後には鹿児島県国学局国学掛となり、その後神道家として、旧薩摩藩出身の政治家や副島種臣などの宮中官僚の信認を受けた。親徳は、自らの霊学を皇国における民衆統治の方法論あるいは、対外戦争などの国家の非常時に直接的に神勅を受けうる実践と考えていた。親徳は、門人の他に、旧薩摩藩士や副島種臣のような信奉者がいたが、親徳の死後、本田霊学の継承者として、世に知られていた長澤雄楯の下には、海軍大将の山本英輔が聴講に訪れるなど、形而上的神秘主義を希求する者たちが集まっていた。親徳自身は本田霊学を巷に流布する民間巫者や、日蓮宗系の仏教系行者の実践とは一線を画す学問と考えていたものの、本田自身

が幕末に希求していた祭政一致が実現した明治維新後の神道政策においては、本田霊学の重要視する神憑りの行法である「帰神法」や、病氣癒しの「禁厭法」などは、法令に基づき、民衆を惑わす「政治の障害」とみなされる側面を有していた。親徳の門人であり、霊学の実践者であった長澤雄楯は、疱瘡が清水地方で猛威を振るう中、自社である月見里稻荷神社が「流行神」となった。長澤は、家伝の鎮西為朝の笠を使った「疱瘡除け」の「禁厭法」を民衆に授け、多くの参拝者を得たものの、警察の取締りの対象となった。長澤は警察に検挙され、罰金の徴収を受ける事件を起こすこととなった。このように、本田親徳や、本田霊学の継承者である長澤雄楯の霊学の実践は、神秘的形而上的事象に注目する彼らにとっては、秘伝実学であったが、その一方で、明治維新後の「開化思想」の信奉者からは、あるいは、実際の警察行政からは、本田霊学が蔑視する「淫祠邪教」の実践と同等の取締をうける側面を有していたといえる。

第五章では、本田霊学の駿河地方の継承者である長澤雄楯が最初に見いだした神主宮城島金作を取り上げ、本田霊学が長澤雄楯を経てどのように受容され、また思想的にどのように変化していったのかを考察した。宮城島金作は、代々御穂神社に仕える社家の出身者であり、幼児の頃より霊能力を有し、長澤雄楯が本田霊学の神憑りをおこなう神主として最初に見出した人物である。

静岡中教院を修了後、御穂神社に奉職した長澤雄楯は、明治維新以後の神社社格制度において三保地方の郷社として認可された御穂神社を「神霊託宣」と病気癒しの「禁厭法」により、信仰共同体をより強固なものにし、県社にまで昇格させている。長澤雄楯は、神憑りをコントロールする審神者としての手腕を発揮しつつ、宮城島金作をより精度の高い神憑りの神主として育て上げた。しかしながら、宮城島金作自身が二十一歳になる頃には、精度の高い託宣能力により、金作自身の信奉者を抱えるようになる。その後、金作は長澤雄楯のもとから独立し、教派神道の一つである神道本局（教名、神道）管轄下の神社崇敬教会である神道三穂教会を設立した。

神道三穂教会が所属した神道本局は、明治五年にキリスト教が解禁になって以降、国民教化運動の基盤となった教部省を経て設立された神道事務局が母体である。神道事務局では天御中主神、高皇産霊神、神皇産霊神の造化三神及び天照大神の四柱を奉祀する伊勢派と先の四柱に大国主神を併せて祀ることを主張した出雲派の祭神論争をへて、明治十四年(1881年)の明治天皇の勅裁により、伊勢派が勝利した経緯を持つ。明治十五年(1882年)の神官教導職分離令を経て明治十七年(1884年)に神仏教導職全廃を契機に神道事務局は宗教としての形態を整えて、明治十九年(1886年)に神道本局（教名、神道）と改称した。宮城島金作が自らの宗

教活動の保証として神道本局の管理下に入ったこのことにより、平田派国学から本田靈学が継承した幽冥の大神である大国主神による死後審判の思想は脆弱化したといえる。

宮城島金作は、長澤雄楯より伝授された本田靈学を受容しつつも、これを三保地方の産土神であり、御穂神社の祭神でもある「三穂津姫命」、「三穂津彦命」、そして御穂神社の眷属神達の靈威に集約させた。

本田親徳の唱えた本田靈学においては、宇宙の主宰神である天御中主神より人間は、一靈四魂を授かっていると考えられ、天御中主神の分霊として、自らに内在する靈魂の神性をより高め、浄化をおこなう「鎮魂法」は重要な行法であった。

また、「鎮魂法」は行法として、死後の裁判や、天界における位階に備える行法として重要な位置を占めた。しかしながら、長澤雄楯の指導下から離れた宮城島金作の思想では、「鎮魂法」は「帰神法」に連続する神憑りの行法の前段階と捉えられていた。また、神道三穂教会では、平田派国学から続く、「幽冥界」の概念は継承されるものの、あくまでも「顕界」のこちら側にいきる信徒の現世の実生活の問題に対する問題解消が比重を占め、これらの問題を解消する方法として、神憑りの行法である「帰神法」と病氣癒しの「禁厭法」は重視されたといえる。そして、神道三穂教会では、本田親徳が『産土神徳講義』において、提唱さ

した1)「大国主神」による死後の裁判の後に「天ノ高市」へ神霊として上天し、「天津神」から神界の位階を授与され、2) そのために「顕世」において「鎮魂法」の修練によって、心魂の浄化に努める必要があるという教義は消失している。宮城島金作の教義においては、現世において、「帰神法」の実践による神霊との交流能力により、神界の位階を授かることが可能になるという思想に変化していったといえる。



付録：宮城島家史料／神道三穂教会史料目録<sup>299</sup>

---

<sup>299</sup> 「宮城島家史料/神道三穂教会史料目録」は石原和、吉永進一、並木英子編「II 宮城島史料」『月見里神社・稲荷講社史料/宮城島家史料目録－近代清水の神職たちと鎮魂帰神－』70頁－97頁、を基にしている。

II 宮城島史料／神道三穂教会史料 目録  
(1) 神道霊学書類

番号	標題（〔仮題〕）	作成者（差出）	宛先	年代	西暦	形態	写刊	内容／特記事項	小分類
M 1	道之大原					仮綴、縦帳、1冊、26丁	写本	本田親徳著『道之大原』長澤版、鈴木広道版にはない句あり。	本田霊学
M 3	〔幽事神伝帰神法 附 神界物語〕	真一学人				仮綴、縦帳、1冊、36丁	写本	ペン書、和紙。本田霊学の他感法の前段階としての鎮魂法についての記述あり。	本田霊学
M 321	祭祀之御よふし	藤原臣信政				仮綴、縦帳、1冊、23丁	写本	神道論。宇宙観。神観念。	儀礼関係
M 322	〔草稿〕					一紙、大判型、1枚	写本	神道論。宇宙観。	教理関係
M 323	御穂神社本末社祭神系図全	宮城島		明治27年1月	1894	仮綴、縦帳、1冊、32丁	写本	祭神系図を図示したもの。挟紙あり。	教理関係
M 324	国体論			明治30年9月6日	1897	仮綴、縦帳、1冊、6丁	写本	国体について。	教理関係
M 326	〔開教の由来〕					一紙、22枚	写本	開教の由来を自らの人生を主神と関係づけて論じる。「大正五年の春から幽冥の人と化ける」とあり。20枚目途中から朱字。	教理関係
M 327	履歴書	宮城島金作		明治27年7月	1894	仮綴、縦帳、1冊、2丁	写本	金作の明治20年3月28日以降の帰神体験の履歴書。	本田霊学
M 329	〔教説〕					仮綴、縦帳、1冊、4丁、一紙、大判型、1枚	写本	三保教会の世界観を叙述したもののか。三保教会の境内図か。	教理関係
M 330	〔『道之大原』抜粋〕					一紙、大判型、1枚	写本	本田親徳『道之大原』抜粋と金作による解説。	本田霊学
M 392-1	〔教理〕					仮綴、縦帳、1冊、5丁	写本	精神修養の重要性について。	教理関係
M 403	〔宮城島金作経歴〕					一紙、13枚	写本	8歳の時に入水自殺から再生、9歳の時に長澤雄楯を訪問した本田九郎（親徳）と妻子に御穂神社で遭遇し、鎮魂帰神法の稽古を受けた、とある。	教理関係
M 585	〔幽理顕象〕	宮城島金作（藤原信彦）		大正4年20日	1915	卷子本、1冊	写本	①帰神法②幽冥通道法③霊府養子タルノ覚④幽冥登録。御穂津姫大神眷属神三穂彦命、八千彦命憑依によって記された詞書、本田霊学抄の流用改変書、教会会員の審神者階級書所収。	本田霊学

M	586	[神界学則]	高田潤作				卷子本、1冊	写本	三穗彦命憑依による宮城嶋金作の詞書と三穗教会教会長高田潤作による本田親徳靈学抄（神界学則）の書写、浅間神社、木花之佐久夜毘売への安産祈念法、社靈憑依による後書所収。	本田靈学
M	587	[神界学則]	治頭大総管長				卷子本、1冊	写本	社靈憑依による詞書、神界学則、治頭大総管長神三穗彦命伝授による神語（神代文字）所収。	本田靈学
M	588	[卷子本]					卷子本、1冊		白紙。	その他
M	589	[神界学則]	治頭大総管長				卷子本、1冊	写本	神界学則、治頭大総管長神三穗彦命伝授による神語（神代文字）所収。	本田靈学
M	590	幽事宝典秘録	菅原朝臣維寧		明治30年8月1日	1897	卷子本、1冊	写本	神三穗彦命憑依による藤原信彦（宮城島金作）詞書、本田親徳『靈学抄』より、「帰神法」、「帰神標目」、「審神者覚悟」、「神界学則」、「『道之太原』、神代文字による「一二三神歌」。明治30年8月1日に神道三穗教会本部で書写された事が菅原朝臣維寧（高田潤作）の後書によって記されている。	本田靈学
M	591	幽典秘録	高田維寧		明治37年12月19日	1904	卷子本、1冊	写本	上等四等審神者高田維寧による詞書、本田親徳『靈学抄』書写の「帰神法」「帰神標目」「審神者ノ覚悟」神代文字による「一二三神歌」、「十種神宝」「虫鎮祈祷神符」所収。	本田靈学
M	592	幽事宝典並道之太原	信雄		大正14年1月末旬	1925	卷子本、1冊	写本	信雄神靈憑依による詞書、本田親徳『道之太原』書写、神代文字による「一二三神歌」、大正14年1月末旬「幽冥ノ神許ヲ得特ニ之ヲ謹写ス」信雄と記されるとともに「神道三穗教会第二世主之印」の印鑑あり。	本田靈学
M	593	[卷子本]					卷子本、1冊		白紙。	その他

M	594	鎮魂之神語 一	社霊				卷子本、1冊	写本	社霊憑依による 詞書と本田流 「神界学則」治 頭大総管長神三 穂彦命伝授神語 所収。	本田霊学
M	595	幽事秘録	小山登女				卷子本、1冊	写本	『道之太原』抜 粹、「神語」所 収。敬神者に伝 授されたもの。 みだりに披見し てはいけないと する。	本田霊学
M	596	神感高等神主藤 原信彦之宝典秘 録	宮城島金作、川 福登女		4月18日		卷子本、1冊	写本	神府之命、無形 之約、契約神教 所収。「教会長 六十オニ至ラザ レバ披見ヲ許サ ズ」とあり。	教理関係
M	598	〔神界学則〕	治頭大総管長				卷子本、1冊	写本	本田流「神界学 則」、治頭大総 管長神三穂彦命 伝授神語所収。	本田霊学

（２）神道三穂教会関係書類

M	2	役員芳名					仮綴、竖帳、1冊、9丁	写本	御穂教会役員名簿。	教会運営書類
M	6-4	〔書簡〕					一紙、1枚	写本	経済について。	教理関係
M	6-5	〔書簡〕					一紙、1枚	写本	信仰について。	教理関係
M	6-11	〔祝詞〕			大正10年8月19日	1921	一紙、1枚	写本		儀礼関係
M	6-16	〔覚〕					一紙、1枚	写本	神職待遇の向上について。	教理関係
M	6-17	〔覚〕					一紙、1枚	写本	正直であること。	教理関係
M	6-20	〔裁認登録〕	三保教会神主宇宙、幽事御用係 役員野村トミ、 取扱斉官花井紅葉	小林亮三、蝶子	大正10年6月15日	1921	仮綴、竖帳、1冊、2丁	写本	三穂教会幽事御 用係役員野村ト ミ娘、蝶子22歳 と大阪市曾根中 2丁目197在住の 小林亮三33歳の 婚姻に際し、親 族関係の不安解 消、家庭の円満 を願うため、幽 府第一課保護部 への奏願書。	儀礼関係
M	6-25	〔覚〕					一紙、1枚	写本	説教の草稿か。	教理関係
M	7	〔説教〕					一紙、巻紙、1枚	写本	説教草稿カ。	教理関係
M	28	〔書簡〕	神道本局	宮城島信雄			封筒一括	写本		教会運営書類
M	108	移転届	中教正 高田潤 作	静岡市長 小森 慶助	大正5年7月1日	1916	一紙、1枚	写本	貼 り 紙 2 枚 あ り。 静岡市屋形町18 番地から静岡市 下魚町一番地に	教会運営書類
M	109	〔書簡〕					一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	113	〔書簡〕					一紙、2枚	写本	浜寺からひで子 が参り、先生に お目にかかりた いとのこと。	書簡類
M	124	〔書簡〕					封筒、1枚、一 紙、5枚	写本	夫をなくした梅 子について。	書簡類
M	131	〔書簡〕					一紙、巻紙、1枚	写本	諸物高値。食わ ねばならぬ。戦 争。	書簡類
M	325-1	〔書類封筒〕					封筒、1枚	写本	白紙。	教会運営書類
M	325-2	戸籍抄本下付願					一紙、1枚	写本	長澤権作分。 325-3の草稿	教会運営書類
M	325-3	戸籍抄本下付願	長澤ゑつ	安倍郡三保村戸 籍吏 川口忠五 郎	明治34年4月	1901	一紙、1枚	写本	長澤権作分。	教会運営書類

M	325-4	御請書証			明治32年8月7日	1899	仮綴、竖帳、1冊、3丁	写本	四柱の神勅を受けた者を列挙。	教会運営書類
M	325-5	土地基帳謄本御下付願	長澤えつ		明治34年4月20日	1901	一紙、1枚	写本	長澤家の土地書き出し。	教会運営書類
M	325-6	[神道三穂教会所分教会設置願綴]			明治35年9月	1902	仮綴、竖帳、1冊、5丁	写本	①[神道三穂教会分教会所設置願添状]②神道三穂教会分教会所設置願③神道三穂教会分教会所設置願。	教会運営書類
M	325-7	印鑑証明	長澤えつ	安倍郡三保村々長川口忠五郎	明治34年4月27日	1901	一紙、1枚		長澤えつ分。	教会運営書類
M	325-8	土地基帳謄本	静岡税務署長司税官兼房重任		明治34年5月1日	1901	仮綴、1冊、9枚		長澤家の土地について。	教会運営書類
M	325-9	[神道三穂教会所分教会設置願綴]					仮綴、竖帳、1冊、4丁		325-6 の 下 書 か。①神道三穂教会分教会所設置願②神道三穂教会分教会所設置願所収。	教会運営書類
M	328	[出納帳]			明治41年3月19日	1908	ノート、1冊、136頁	写本	個人との金銭のやり取りの記録。作成時期は73頁より。	教会運営書類
M	344	[封筒]	神主	事務長	3月8日		封筒、1枚	写本	封筒のみ。	教会運営書類
M	345	神界より役員代表として出仕シタル事務長ニ対シ御返戻遊バサレタル書状	藤波銀次郎	野村光清	大正10年11月26日	1921	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	野村光清は斎官之部斎官長、藤波銀次郎は斎官副長、事務長とは、宮城島義明のこと。	教会運営書類
M	358	[祝詞]		幽府ニ坐ス諸々ノ御神璽			一紙、2枚	写本	三穂教会第二世主就任についての奏上文。	儀礼関係
M	359	[説教草稿]					一紙、1枚	写本	信雄第二世主就任後の神殿での説教文草稿。	教理関係
M	360	[投薬覚書]					一括	写本	漢方処方覚書。	教会運営書類
M	365	証	東京国民書院	三穂教会静岡分教会			一紙、小型、1枚	写本	衛生百科全書購入領収書。	教会運営書類
M	369	[計算用紙]					一紙、1枚	写本		教会運営書類
M	373	身元保証書		村長			一紙、1枚	写本	身元保証書下書。兵役、犯罪歴、財産欄あり。	教会運営書類
M	375	[書簡]	宮城島金作	望月音吉	明治22年12月20日	1889	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	由蔵にもよろしく。お詫びをお願い。	教会運営書類
M	380	書状	小山九兵衛	神主	22日		一紙、巻紙、1枚	写本	静岡帰宅の知らせ。	教会運営書類
M	382	[封筒]	高田潤作	宮城島金作	6月1日		封筒、1枚	写本	封筒のみ。	教会運営書類
M	391	[封筒]	小山九兵衛	宮城島	6月11日		封筒、1枚	写本	封筒のみ。	教会運営書類
M	395	美穂教会主神御代理神璽	藤原義明		明治34年5月18日	1901	封筒一括	写本	藤原義明は宮城島義明か。未開封。「此緘書ニ付神璽免許セン書章ナレバ会員、役員ハ無論教会長ト雖も猥リニ披見スル事ヲ禁ズ」とあり。	儀礼関係
M	396	[封書]	宮城島金作		明治35年4月7日	1902	封筒一括	写本	未開封。「何者タリト雖モ此封書ヲ披見スル事アル時ハ捨置カズ十分争論ヲ為シ處分ス心得ノ為一書シテ置ク」とあり。	儀礼関係

M	401	〔葉書〕	はる	花井紅葉	大正14年2月8日	1925	三折葉書、1枚	写本	花井紅葉は三穂教会常駐主任齋官。はるの母が信雄の返事を待っている。早く返事ほしい。	教会運営書類
M	402	〔由来書〕					仮綴、縦帳、1冊、20丁	写本	公德公社を舞台にした物語。	教理関係
M	404	〔説教〕					一紙、5枚	写本	青年懷疑の波にある。自己の霊的生命を自覚すべしとある。途中まで。	教理関係
M	408	〔請求書〕					封筒一括	写本		教会運営書類
M	410	〔覚〕					一紙、1枚	写本	村井蒔太について。	教理関係
M	411	特別月掛簿	三穂教会		大正11年12月	1922	仮綴、縦帳、1冊、16丁	写本	大正13年まで使用した形跡あり。	教会運営書類
M	413	〔大聖日蓮神秘伝写〕	日照、日朗				一紙、21枚	写本	『大聖日蓮神秘伝』中巻の写しの一部（金作書写力）。	教理関係
M	417	〔説教〕					仮綴、縦帳、1冊、10丁	写本	近世までは仏教が勝手気ままに活動したため国運衰退。人生観。	教理関係
M	419	王代畧誦					仮綴、縦帳、1冊	写本		その他
M	420	〔説教〕					一紙、1枚	写本	「平素教祖より聞き及び居る…」と教祖という呼称が見える。	教理関係
M	427	〔書簡〕	長澤権作	宮城島金作	大正3月15日	1914	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	長澤権作の花柳病罹患について。	教会運営書類
M	428	〔書簡〕	神道本局	神道三穂教会宮城島信雄			封筒、3枚、針金綴、1冊、一紙、2枚、一紙、小型、2枚	写本	神道管長選挙関連書類。①〔神道管長選挙告示〕（選挙期間は大正14年3月15日）／②投票用紙、2枚③〔神道管長候補者〕（候補は神崎一作）／④返信用封筒、2	教会運営書類
M	429	〔書簡〕	神道本局顧問一同	神道三穂教会宮城島信雄	大正14年2月16日	1925	封筒、1枚、巻紙、一紙、1枚	写本	神崎一作の管長選推薦状。	教会運営書類
M	430	〔封筒〕	神道本局	神道三穂教会宮城島信雄			封筒、1枚	写本	封筒のみ。	教会運営書類
M	431	〔封筒〕	神道本局顧問一同				封筒、1枚	写本	封筒のみ。	教会運営書類
M	435	〔書簡〕	望月次吉	小山大			封筒、1枚、一紙、巻紙、2枚	写本	途中で切れている。信雄修行により身心を害し困窮のため、金銭の援助を申し出る手紙。	教会運営書類
M	437	森下屋受取書		宮城島金作			封筒一括	写本		教会運営書類
M	441	〔書簡〕	小山兼吉	宮城島信雄	大正14年2月4日	1925	封筒、1枚、一紙、1枚	写本		書簡類
M	442	〔手帳〕	宮城島金作				縦帳、紺色革表紙、1冊	写本	病症と服用すべき生薬の覚書。	教会運営書類

（3）神道三穂教会託宣関係書類

M	6-12	[託宣]		小林亮三			一紙、1枚	写本	大阪市北区曾根崎中2丁目197（阪急電車前南入る）三稽屋小林亮三宛託宣、手紙の下書き。	託宣類
M	147	[託宣紙]		笠井慶作			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	148	[託宣紙]	幽祭部	昆野辰而	大正7年9月30日	1918	一紙、小型、1枚	写本	印刷版託宣紙。	託宣類
M	149	[託宣紙]	幽祭部	宮城島たつ	大正7年3月5日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	150	[託宣紙]	幽祭部	八木久之	大正7年9月17日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	151	[託宣紙]	幽祭部	福世つま			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	152	[託宣紙]	幽祭部	山崎善次郎			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	153	[託宣紙]	幽祭部	佐野幸久	大正8年8月31日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	154	[託宣紙]	幽祭部	上山金平妻こう	大正8年11月26日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	155	[託宣紙]	幽祭部	柳原善次郎	大正8年12月25日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	156	[託宣紙]	幽祭部	小塩ハツ	大正8年1月30日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	157	[託宣紙]	幽祭部	小柳鈴吉	大正9年1月23日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	158	[託宣紙]	幽祭部	中村栄太郎	大正7年9月22日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	159	[託宣紙]	幽祭部	榎本八五郎	大正7年12月25日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	160	[託宣紙]					一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	161	[託宣紙]					一紙、小型、2枚	写本		託宣類
M	162	[託宣紙]	幽祭部	松下栄之助			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	163	[託宣紙]	幽祭部	船橋スエ	大正7年9月22日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	164	[託宣紙]	幽祭部	松下栄之助	大正7年10月1日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	165	[託宣紙]	幽祭部	天野丑太郎	大正7年10月1日	1918	一紙、小型、1枚	写本	遠隔 書面での問い合わせカ。	託宣類
M	166	[託宣紙]	幽祭部	藤田わか	大正7年7月11日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	167	[託宣紙]					封筒一括	写本		託宣類
M	168	[託宣紙]	幽祭部	山角文作	大正7年6月3日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	169	[託宣紙]	幽祭部	小山政	大正7年6月3日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	170	[託宣紙]	幽祭部	柴田ゆき	大正7年6月6日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	171	[託宣紙]					一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	172	[託宣紙]	幽祭部	福島とり	大正7年6月3日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	173	[託宣紙]	幽祭部	林ゑつ	大正7年6月6日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	174	[託宣紙]	事務長	室井慶作			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	175	[託宣紙]	幽祭部	海野栄吉	大正7年6月6日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	176	[託宣紙]	幽祭部	前川音三	大正7年6月25日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	177	[託宣紙]	幽祭部	関房次郎	大正7年7月3日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	178	[託宣紙]	幽祭部	寺岡房吉	大正7年6月28日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	179	[託宣紙]	幽祭部	福地義の助	大正7年7月3日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	180	[託宣紙]	幽祭部	山本松次郎娘	大正7年7月3日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類

M	181	[託宣紙]	幽祭部	船橋スエ	大正7年9月17日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	182	[託宣紙]	幽祭部	福世つま	大正7年9月17日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	183	[託宣紙]	幽祭部	五十幡くま	大正7年11月30日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	184	[託宣紙]	幽祭部	数馬せき	大正7年11月30日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	185	[託宣紙]	幽祭部	岡田とよ	大正7年11月22日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	186	[託宣紙]	幽祭部	堺いよ			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	187	[託宣紙]	幽祭部	大石兼	大正7年11月22日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	188	[託宣紙]	幽祭部	野村つま	大正7年11月16日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	189	[託宣紙]	幽祭部	岡田とら	大正7年11月16日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	190	[託宣紙]	幽祭部	藤江忠二郎			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	191	[託宣紙]	幽祭部	野村トミ			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	192	[託宣紙]	幽祭部	山田なか			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	193	[託宣紙]	幽祭部	寺本さだ			一紙、小型、1枚	写本	教第番号日付なし。	託宣類
M	194	[託宣紙]	幽祭部	柴田耕			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	195	[託宣紙]	幽祭部	柳原ふよ			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	196	[託宣紙]	幽祭部	鈴木伝六	大正7年10月1日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	197	[託宣紙]	幽祭部	柳原ふよ	大正7年10月1日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	198	[託宣紙]	幽祭部	柴田耕	大正7年10月9日	1918	一紙、小型、1枚	写本	本文朱字。	託宣類
M	199	[託宣紙]	幽祭部	市川ひさ	大正7年10月5日	1918	一紙、小型、1枚	写本	本文朱字。	託宣類
M	200	[託宣紙]	幽祭部	佐塚法吉	大正7年10月5日	1918	一紙、小型、1枚	写本	本文朱字。	託宣類
M	201	[託宣紙]	幽祭部	松下栄之助	大正7年10月5日	1918	一紙、小型、1枚	写本	本文朱字。	託宣類
M	202	[託宣紙]	幽祭部	大石いし	大正7年10月5日	1918	一紙、小型、1枚	写本	本文朱字。	託宣類
M	203	[託宣紙]	幽祭部	神田宗久	大正7年10月5日	1918	一紙、小型、1枚	写本	本文朱字。	託宣類
M	204	[託宣紙]	幽祭部	福島とり	大正7年5月10日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	205	[託宣紙]	幽祭部	松下かね	大正7年4月15日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	206	[託宣紙]	幽祭部	岡田かめ	大正7年4月4日	1918	一紙、小型、1枚	写本	宛先青字、本文朱字。	託宣類
M	207	[託宣紙]	幽祭部	青木乙三	大正7年4月4日	1918	一紙、小型、1枚	写本	宛先青字、本文朱字。	託宣類
M	208	[託宣紙]	幽祭部	吉田サダ	大正4年4月19日	1915	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	209	[託宣紙]	幽祭部	天野団太郎	大正7年4月4日	1918	一紙、小型、1枚	写本	本文朱字。	託宣類
M	210	[託宣紙]	幽祭部	小山英一			一紙、小型、1枚	写本	宛先青字、本文朱字。	託宣類
M	211	[託宣紙]	幽祭部	船橋徳太郎			一紙、小型、1枚	写本	本文朱字。	託宣類
M	212	[託宣紙]	幽祭部	望月ヤス	大正7年4月29日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	213	[託宣紙]	幽祭部	吉田サダ	大正7年4月29日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	214	[託宣紙]	幽祭部	福島トミ	大正7年3月16日	1918	一紙、小型、1枚	写本	宛書青字。	託宣類
M	215	[託宣紙]	幽祭部	船橋スエ			一紙、小型、1枚	写本	青字。	託宣類
M	216	[託宣紙]	幽祭部	木曾六三	大正7年5月4日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	217	[託宣紙]	幽祭部	吉野利陽	大正7年3月16日	1918	一紙、小型、1枚	写本	宛書青字。	託宣類
M	218	[託宣紙]					一紙、小型、1枚	写本	他の託宣紙と違い割印なし。	託宣類
M	219	[託宣紙]					一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	220	[託宣紙]	幽祭部	岸端長右工門	大正7年10月21日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類



M	221	[託宣紙]	幽祭部	宮城島すぎ	大正7年10月21日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	222	[託宣紙]	幽祭部	望月貞二	大正7年8月13日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	223	[託宣紙]	幽祭部	富永よし	大正7年8月13日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	224	[託宣紙]		植本清吉			封筒一括	写本		託宣類
M	225	[託宣紙]					一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	226	[託宣紙]	幽祭部	笹野宗次郎			一紙、小型、1枚	写本	本文朱字。	託宣類
M	227	[託宣紙]	幽祭部	松下栄之助	大正7年9月22日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	228	[託宣紙]	幽祭部	林エツ	大正7年9月22日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	229	[託宣紙]	幽祭部	川崎義晴	大正7年9月22日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	230	[託宣紙]	幽祭部	榎本伊平	大正7年9月22日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	231	[託宣紙]	幽祭部	鈴木友吉	大正7年9月22日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	232	[託宣紙]	幽祭部	伊倉たき	大正7年12月7日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	233	[託宣紙]		山本つね			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	234	[託宣紙]	幽祭部	小野田喜一	大正8年5月6日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	235	[託宣紙]	幽祭部	松井安吉	大正9年1月26日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	236	[託宣紙]	幽祭部	長倉春吉	大正9年1月21日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	237	[託宣紙]		堀よね			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	238	[託宣紙]	幽祭部	鈴木兼一	大正9年1月25日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	239	[託宣紙]		事務長			一紙、小型、1枚	写本	幽祭部から事務長への伊藤ヒサ分託宣紙の申し送り力。	託宣類
M	240	[託宣紙]	幽祭部	吉田与右エ門	大正8年10月26日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	241	[託宣紙]	幽祭部	上田きん	大正8年10月30日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	242	[託宣紙]	幽祭部	上山こう	大正8年10月30日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	243	[託宣紙]	宇宙	野村光清	9月5日		一紙、1枚	写本		託宣類
M	244	[託宣紙]	幽祭部	山崎定次郎			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	245	[託宣紙]	幽祭部	小山英一	大正8年10月26日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	246	[託宣紙]	幽祭部	澤田粂蔵	大正8年10月26日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	247	[託宣紙]	幽祭部	山田あわ	大正8年10月13日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	248	[託宣紙]	幽祭部	澤田粂蔵	大正8年10月13日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	249	[託宣紙]	幽祭部	久保田さだ	大正9年3月4日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	250	[託宣紙]	幽祭部	久保田とく	大正9年2月17日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	251	[託宣紙]	幽祭部	中根富士子	大正9年3月4日	1920	一紙、小型、1枚			託宣類
M	252	[託宣紙]	幽祭部	久保田さだ	大正9年2月17日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	253	[託宣紙]	幽祭部	力丸かね	大正9年3月6日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	254	[託宣紙]	幽祭部	宮城島神主	大正9年2月10日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	255	[託宣紙]	幽祭部	望月やす	大正9年3月8日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	256	[託宣紙]	幽祭部	谷川しげ	大正9年2月17日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	257	[託宣紙]	幽祭部	梶山庄太郎	大正9年3月6日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	258	[託宣紙]	幽祭部	藤浪銀次郎	大正9年2月10日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類

M	259	[託宣紙]	幽祭部	中根富士子	大正9年3月6日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	260	[託宣紙]	幽祭部	田中保郎	大正10年2月12日	1921	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	261	[託宣紙]	幽祭部	八木ゆき			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	262	[託宣紙]	幽祭部	梶山庄太郎	大正9年5月4日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	263	[託宣紙]	幽祭部	小山うめ	大正9年5月4日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	264	[託宣紙]	幽祭部	服部ふみ江	大正9年11月26日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	265	[託宣紙]	幽祭部	深津うめ	大正9年5月4日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	266	[託宣紙]	幽祭部	高橋末吉	大正8年1月10日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	267	[託宣紙]	幽祭部	笠井ぎん	大正9年5月4日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	268	[託宣紙]	幽祭部	谷川しげ	大正9年4月8日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	269	[託宣紙]	幽祭部	望月たけ	大正8年1月5日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	270	[託宣紙]	幽祭部	堂下いせ	大正9年4月8日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	271	[託宣紙]	幽祭部	榎本八五郎	大正8年1月5日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	272	[託宣紙]					一紙、小型、2枚	写本		託宣類
M	273	[託宣紙]	幽祭部	梶山庄太郎	大正9年3月12日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	274	[託宣紙]	幽祭部	野田直光	大正8年1月5日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	275	[託宣紙]	幽祭部	横田トミ			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	276	[託宣紙]	幽祭部	岸端長右エ門	大正7年12月19日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	277	[託宣紙]	幽祭部	杉本当子	大正9年12月21日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	278	[託宣紙]	幽祭部	原田金八	大正9年12月21日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	279	[託宣紙]	幽祭部	山崎まさ	大正9年12月29日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	280	[託宣紙]	幽祭部	成瀬音吉	大正7年12月18日	1918	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	281	[託宣紙]	幽祭部	望月せき	大正10年1月14日	1921	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	282	[託宣紙]	幽祭部	井上スグ	大正8年1月17日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	283	[託宣紙]	幽祭部	天方タイ子	大正十10年1月29日	1921	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	284	[託宣紙]	幽祭部	中川金太郎	大正10年2月4日	1921	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	285	[託宣紙]	幽祭部	松下作左	大正8年1月17日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	286	[託宣紙]	幽祭部	中西トメ	大正9年11月26日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	287	[託宣紙]	幽祭部	山崎マサ	大正9年11月26日	1920	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	288	[託宣紙]	幽祭部	小野家満			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	289	[託宣紙]		杉本留			一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	290	[託宣紙]	幽祭部	田中保郎	大正10年2月4日	1921	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	291	[託宣紙]	幽祭部	川崎義雄	大正8年4月6日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	292	[託宣紙]	幽祭部	小野光景	大正8年4月15日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	293	[託宣紙]	幽祭部	林勇	大正8年3月13日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	294	[託宣紙]	幽祭部	大石政彦			一紙、小型、1枚	写本		託宣類

M	295	[託宣紙]	幽祭部	望月豊吉	大正8年4月15日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	296	[託宣紙]	幽祭部	小野光景	大正8年4月28日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	297	[託宣紙]	幽祭部	笠井繁太郎	大正8年3月18日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	298	[託宣紙]	幽祭部	小山英一	大正8年7月16日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	299	[託宣紙]	幽祭部	石川初江	大正8年7月17日	1919	一紙、小型、1枚	写本		託宣類
M	300	[託宣紙]		山崎善次郎			一紙、1枚			託宣類
M	302	特命第二教告	神主	事務長、小庭者	12月5日		一紙、7枚			託宣類
M	303	[書簡]	神主	事務長	大正9年6月1日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本		託宣類
M	304	[書簡]	神主	事務長	大正9年4月12日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	305	[書簡]		事務長	大正9年1月27日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	山本松次郎への託宣について、本人へ事務長から送るよう指示。	書簡類
M	306	[封筒]		事務長			封筒、1枚	写本	封筒のみ。	託宣類
M	307	[書簡]		事務長	大正9年1月27日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	子供の引きつけについて。	託宣類
M	308	[書簡]	神主	事務長	大正5年5月15日	1916	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	309	[書簡]	宇宙	事務長	4月16日		封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、宇宙（神主）から、事務長への報告。	託宣類
M	310	[託宣紙]	三穂教会	大橋廻壺、野村正蔵	大正8年1月15日	1919	封筒、1枚、一紙、小型、2枚	写本	教第12号、教第15号。	託宣類
M	311	[書簡]	神主	事務長	大正9年4月7日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	312	[書簡]	神主	事務長	大正9年7月4日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	313	[報告書]	神主	事務長	大正9年3月9日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	教告の取り消し実行について原田はなに命令したことを、神主から事務長に報告。	託宣類
M	314	[書簡]	宇宙神主	事務長、審神者	大正7年12月13日	1918年	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	政友会陣置達の仕事をみて安心したことを報告。	託宣類
M	315	[書簡]	三穂教会	事務長、花井審神者	大正7年12月7日	1918	封筒、1枚、一紙、小型、1枚	写本	相場託宣。封筒は事務長宮城島義明、審神者花井紅葉宛、但書として、「明朝九時までに開封すべし」。裏書には「大正七年十二月七日午前一時命令」。	託宣類
M	316	[書簡]	神主	事務長	8月5日		封筒、1枚、一紙、巻紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	317	[書簡]	神主	事務長	8月7日		封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類

M	318	[封筒]	三穂教会		12月10日		封筒、1枚	写本	封筒のみ。	託宣類
M	319	[託宣紙]	三穂教会	庄司岩男、一ノ瀬清	大正9年3月13日	1920	封筒、1枚、一紙、小型、2枚	写本	教第（口）41号、教第（口）41号。	託宣類
M	320	[書簡]	神主		大正9年2月31日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主からの報告。	託宣類
M	331	[書簡]	神主	事務長	大正9年2月10日	1920	封筒、1枚、一紙、6枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	332	[書簡]	神主	事務長	大正9年3月15日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	333	[書簡]		事務長			封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容。	託宣類
M	334	[書簡]	神主	事務長	大正9年3月13日	1920	封筒、1枚、一紙、5枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	335	[書簡]	神主	事務長	6月22日		封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	336	[書簡]	神主	事務長	4月3日		封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	337	[書簡]	神主	事務長	大正9年8月10日	1920	封筒、1枚、一紙、小型、2枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告1枚及び託宣紙2枚。	託宣類
M	338	[託宣紙]	三穂教会	野林蝶子、望月清光、土谷きぬ、大見喜一	大正9年6月29日、7月1日、2日	1920	封筒、1枚、一紙、小型、4枚、一紙、短冊型、4枚	写本	託宣紙4枚それぞれに短冊状の覚書4枚。	託宣類
M	339	[封筒]	神主	事務長	大正9年3月2日	1920	封筒、1枚	写本	封筒のみ。	託宣類
M	340	[書簡]	神主	事務長	大正9年6月4日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	341	[書簡]	神主	事務長	大正9年6月7日	1920	封筒、1枚、一紙、2枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	342	[書簡]	神主	事務長、審神者	大正7年12月6日	1918年	封筒、一枚、一紙、一枚	写本	相場の変動状況についての託宣。	託宣類
M	343	[封筒]	神主	事務長	3月4日		封筒、1枚	写本	封筒のみ。	託宣類
M	346	[書簡]	神主	事務長	大正9年3月17日	1920年	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。書簡は3月17日付、封筒は3月12日付。	託宣類
M	347	[書簡]	宇宙	事務長	大正7年12月13日	1918	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	宇宙から事務長へ救護を求める。一代一篇の頼み。	託宣類
M	348	[書簡]	神主、幽祭部	事務長、酒井作蔵、高橋常光、松下作太郎、浅野さん、酒井作蔵、古山加藤太	大正9年3月17日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚、一紙、小型、6枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告1枚及び託宣紙6枚。	託宣類
M	349	[封筒]	神主	事務長、審神者	大正7年12月5日	1918	封筒、1枚	写本	封筒のみ。	託宣類
M	350	[書簡]	神主、幽祭部	事務長、小林好	大正9年5月25日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚、一紙、小型、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告1枚及び託宣紙1枚。	託宣類

M	351	[書簡]	神主	事務長	大正9年5月21日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	託宣の内容について、神主から、事務長への報告。	託宣類
M	357	[白紙]					一紙、2枚	写本		託宣類
M	433	[書簡]	青木弘治	宮城島信比古	大正14年12月23日	1925	封筒、1枚、一紙、2枚	写本	病気のため神界保護願申請。	託宣類
M	434	[書簡]	青木乙吉	宮城島信雄	大正14年2月15日	1925	封筒、1枚、一紙、巻紙、1枚	写本	三穂教会住所：静岡市鷹匠町3丁目。息子の蓄膿症手術についての神界保護願い。	託宣類

(4) 宮城島家関係書簡類

M	4	郷社御穂神社祠掌就職願	宮城島源作		明治26年7月8日	1893	仮綴、竖帳、1冊、5丁	写本	①宮城島源作御穂神社祠掌就職願：宮城島家由緒書含む／②家系：社務を務めた先祖六代及び源作／③履歴書：明治4年から明治25年までの宮城島源作の神道家としての経歴。明治20年大社教訓導に就任の記載あり。	由緒書類
M	6-0	[宮城島金作書類]					封筒、1枚	写本	中に6-1から6-27を封入。	その他
M	6-2	徴集猶予願	宮城島信雄	静岡連隊区徴兵官	大正10年4月9日	1921	一紙、1枚	写本	国学院在学中の信雄が徴兵の猶予を求めたものの。控。	その他
M	6-3	[草稿]					一紙、1枚	写本		相続関係
M	6-15	[覚]					一紙、1枚	写本	前戸主よりの遺留財産について。	相続関係
M	6-18	[覚]					一紙、1枚	写本	調停について。	相続関係
M	6-21	[書簡]					一紙、1枚	写本	遺産相続問題について。下書。	相続関係
M	6-22	[書簡]					一紙、大判型、1枚	写本	遺産相続問題について。下書。	相続関係
M	6-23	[覚]					一紙、2枚	写本	遺産相続問題について。	相続関係
M	6-24	[覚]					一紙、1枚	写本	遺産相続問題について。	相続関係
M	6-26	[覚]					一紙、1枚	写本	遺産相続問題について。	相続関係
M	6-27	[書簡]					一紙、1枚	写本	書簡下書。	相続関係
M	11-1	[封筒]	原田はな	宮城島すぎ	3月11日		封筒、1枚	写本		書簡類
M	11-2	[書簡]					一紙、1枚	写本	入院のこと。	書簡類
M	11-3	[書簡]		奥様	3月11日		一紙、巻紙、1枚	写本	お礼状。11-1の中身力。	書簡類
M	11-4	[書簡]		青木捨太郎			一紙、巻紙、1枚	写本	原田はな息子、金作庶子賢治の病気見舞いに対する礼状。	書簡類
M	11-5	[書簡草稿]		愛蘭事務所泉月主人			一紙、1枚	写本	愛蘭事務所：静岡市紺屋町	書簡類
M	11-6	[書簡草稿]		横田登女			一紙、1枚	写本	静岡市両替町「鳥亀」女将横田登女への残暑見舞いと登女母の病気伺い。	書簡類

M	11-7	〔書簡草稿〕					一紙、1枚	写本	手紙下書き。天候について。	書簡類
M	11-8	〔書簡草稿〕		三穂教会役員御中、大高八太郎			一紙、1枚	写本	金作の庶子原田はな息子原田賢治の重病全快後の礼状。	書簡類
M	11-9	〔書簡草稿〕		ご家族様一同			一紙、巻紙、1枚	写本	原田家に対して、賢治の看病に対するお礼。	書簡類
M	11-10	〔断簡〕					一紙、巻紙、1枚	写本	親族の死去の一報を受けて返書の一部力。	相続関係
M	11-11	〔草稿〕					一紙、2枚	写本	婚 礼 祝 状 の 下 書。	書簡類
M	11-12	〔書簡〕					一紙、巻紙、1枚	写本	悲惨、哀れ。困難。	書簡類
M	11-13	〔書簡〕					一紙、巻紙、1枚	写本	御 海 容 く だ さ い。	書簡類
M	11-14	〔書簡〕	宮城島すぎ	小田勝次郎			一紙、1枚	写本	静岡県七間町2丁目小田勝次郎宛。父親（原作）の病氣回復後の見舞状への返礼。	書簡類
M	11-15	〔書簡〕	宮城島すぎ	武藤久三、大高八太郎、青木音吉			一紙、1枚	写本	源 作 病 気 回 復 後、役員の見舞への返礼。	書簡類
M	11-16	〔書簡〕					一紙、1枚	写本	教会役員浅野みさ母が91歳にて死亡、悔状の清書を依頼。	書簡類
M	11-17	〔書簡〕					一紙、1枚	写本	浅野死去に対する 返 書 。 下 書 力。	書簡類
M	11-18	〔草稿〕					一紙、1枚	写本	婚 礼 祝 状 の 下 書。	書簡類
M	11-19	〔草稿〕	宮城島金作				一紙、巻紙、1枚	写本	卵百個送付願いなど数件分の下書。	書簡類
M	11-20	〔書簡〕	宮城島すき	浅野みさ子			一紙、1枚	写本	浅野死去に対する 返 書 。 下 書 力。	書簡類
M	46	〔書簡〕	信雄、綾子	杉	7月30日		封筒一括	写本		書簡類
M	63	〔書簡〕	宮城島原作	宮城島宇宙	大正5年4月13日	1916	封筒一括	写本		書簡類
M	92	〔書簡〕	宮城島	宮城島杉			封筒一括	写本		書簡類
M	95	〔書簡〕	宮城島信雄	宮城島すぎ	大正11年5月27日	1922	封筒一括	写本		書簡類
M	98	〔書簡〕	宮城島あやこ	母上	6月4日		封筒一括	写本		書簡類
M	99	〔書簡〕	綾子	母上	大正10年6月11日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	104	〔書簡〕	宮城島	宮城島さよ子	大正6年4月6日	1917	封筒一括	写本		書簡類
M	112	〔書簡〕	すぎ	ご主人様	1月4日		一括	写本		書簡類
M	128	〔書簡〕		宮城島すぎ			封筒一括	写本		書簡類
M	130	〔書簡〕					一紙、2枚	写本	静岡に帰って工場へ2回ほど出張したが、実家によらなかったことに詫び。	書簡類
M	137	〔書簡〕	兄	宮城島あや子	大正5年2月21日	1916	封筒一括	写本	郵 便 刻 印「5.2.28」。兄は宮城島信雄のこと。	書簡類
M	352	〔書簡〕	近藤、母	宮城島信夫	大正4年1月24日	1915	封筒、1枚、一紙、2枚	写本	今後の信雄について。	書簡類
M	370	覚	鈴木楼	宮城島原作	11月23日		一紙、1枚	写本		その他
M	397	〔書簡〕			大正14年2月8日	1925	一紙、1枚	写本	あやの妊娠について。	書簡類
M	398	〔封筒〕		兄	大正14年2月	1925	封筒、1枚	写本		書簡類

M	416	[書簡]	田中鏡	宮城島すぎ	大正14年2月28日	1925	封筒、1枚、一紙、巻紙、1枚、葉書、一枚	写本	封筒の中に、二つ折りにした葉書。東京滞在中のすぎに横須賀官舎在住の息子の面倒を託す手紙。	書簡類
M	438	[書簡]	佐誉子	宮城島信雄	大正14年1月31日	1925	封筒、1枚、一紙、2枚	写本	原田商店は金作妾宅。	書簡類
M	439	[書簡]	あや子、奈津子	宮城島信雄	2月2日		封筒、1枚、一紙、2枚	写本	あや子出産後の様子について、奈津子からの書簡。封筒の差出はあや子。	書簡類
M	440	[葉書]		宮城島信雄	大正14年1月	1925	封筒、1枚、葉書、9枚	写本	封筒は、三穂教会役員浅野みをが安倍川町にて経営していた妓楼恵比寿楼宛。はがきはすべて、宮城島信雄宛。	書簡類
M	436	大職官藤原氏系図 二階堂之系図					封筒一括	写本	未開封。	由緒書類
M	522	[書簡]					一紙、1枚	写本		書簡類

(5) 宮城島金作書簡類

M	5	[書簡]	宇宙	遠藤	大正9年6月20日	1920	仮綴、縦帳、1冊	写本	遠藤に対し豊子への愛を促す激励文。文末に「宇宙 家方東の家の貰ひ子の元金作です」。	書簡類
M	6-1	[書簡]	[宮城島金作]				一紙、2枚	写本	源作の借金、その委任について。	書簡類
M	6-6	[書簡]					一紙、3枚	写本	文子の語り、友人について。	書簡類
M	6-7	[書簡]					一紙、5枚	写本	入梅の季節。	書簡類
M	6-8	[書簡]	宮城島宇宙	宮城島信雄	大正10年2月3日	1921	三折葉書、1枚	写本	東京市麹町区下六番町近藤良敬宅に下宿していた信雄への手紙。掛川の山口楼で働いていた加茂久作死亡の知らせ。	書簡類
M	6-9	[書簡]	宮城島宇宙	宮城島信雄	大正9年2月2日	1920	葉書、1枚	写本	東京市浅草区北三筋町28番地中村常造宅に下宿していた信雄へのはがき。	書簡類
M	6-10	[書簡]	宮城嶋	宮城島信雄	大正4年1月7日	1915	葉書、1枚	写本	静岡市上大工町62番地原田干物店原田はな（金作妾）宅から旧制中学に通う信雄への警告文。	書簡類
M	6-13	[書簡]					一紙、1枚	写本	内外の多忙のため、訪問できず。	書簡類
M	6-14	[書簡]	宮城島宇宙	大高賢基	大正10年5月24日	1921	一紙、1枚	写本	災害に際してお見舞い。	書簡類
M	6-19	[書簡]					一紙、1枚	写本	70円で購入した貴重蘭「霧島」の状態が悪いため、購入元へ苦情を申し出る内容。	書簡類

M	8	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	大正7年2月14日	1918	封筒一括	写本	封筒のみ。郵便局 刻 印「7.2.15」。	書簡類
M	9	〔書簡〕	宮城島宇宙	豊島弁次郎	大正7年2月12日	1918	一紙、巻紙、1枚	写本	濱子改名の知らせ、No.8の封書の中身か。	書簡類
M	10	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	大正7年1月1日	1918	封筒一括	写本	郵便局刻印「大正7年1月1	書簡類
M	12	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	11月25日		封筒一括	写本		書簡類
M	13	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ			一括	写本		書簡類
M	14	〔書簡〕	三穂教会		大正10年5月2日	1921	封筒一括	写本	表：「四章 至急」。裏：面御穂教会住所電話番号。「宮城島宇宙」の印あり。	書簡類
M	15	〔書簡〕	宮城島	宮城島すぎ	大正8年7月12日	1919	封筒一括	写本	郵便日付刻印「大正8年7月13日」。	書簡類
M	18	〔書簡〕	宮城島宇宙	山崎千代子、宮城島信雄	大正8年6月16日	1919	封筒一括	写本		書簡類
M	19	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	大正8年6月5日	1919	封筒一括	写本		書簡類
M	20	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島信雄	大正4年2月18日	1915	封筒一括	写本		書簡類
M	21	〔書簡〕	宇宙	宮城島信雄	大正7年11月12日	1918	封筒一括	写本		書簡類
M	22	〔書簡〕	のぶ雄	御母上			封筒一括	写本		書簡類
M	24	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ			一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	25	〔書簡〕	金作	すぎ	5月11日		一紙、1枚	写本	野村とたみの縁談について。	書簡類
M	26	〔書簡〕	宇宙	すぎ	大晦日		一紙、2枚	写本		書簡類
M	27	〔書簡〕					一紙、1枚	写本		書簡類
M	29	〔書簡〕					封筒一括	写本	裏：梓弓の和歌あり。	書簡類
M	30	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	大正7年5月29日	1918	封筒一括	写本	表：郵便日付刻印「大正7年5月29日」清水郵便局日付「大正7年5月30日」。	書簡類
M	31	〔封筒〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	7月23日		封筒、1枚	写本		書簡類
M	32	〔書簡〕	宮城島	宮城島すぎ	6月20日		封筒一括	写本		書簡類
M	33	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ	27日		封筒一括	写本		書簡類
M	34	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ	7月26日		封筒一括	写本		書簡類
M	36	〔書簡〕	金作	宮城島すぎ	5月9日		封筒一括	写本		書簡類
M	37	〔書簡〕	宇宙	すぎ	7日		封筒一括	写本		書簡類
M	38	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ	5月31日		封筒一括	写本		書簡類
M	39	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ	大正6年5月22日	1917	封筒一括	写本		書簡類
M	40	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ	大正6年5月14日	1917	封筒一括	写本		書簡類
M	41	〔書簡〕	宮城島	宮城島すぎ	大正6年2月24日	1917	封筒一括	写本		書簡類
M	42	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	大正7年2月18日	1918	封筒一括	写本		書簡類
M	43	〔書簡〕	金作	母上	7月5日		封筒一括	写本		書簡類
M	44	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ	12日		封筒一括	写本		書簡類
M	45	〔書簡〕	宮城自島宇宙	宮城島すぎ	2月15日		封筒一括	写本		書簡類
M	47	〔書簡〕	金作	杉	8月6日		封筒一括	写本		書簡類
M	50	〔書簡〕	高田多春	高田潤作	3月1日		封筒、1枚、一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	52	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ	6月17日		封筒一括	写本		書簡類
M	53	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ子			封筒一括	写本		書簡類
M	54	〔書簡〕	宮城島	宮城島すき	大正1年9月2日	1912	封筒一括	写本		書簡類
M	55	〔書簡〕	金作	すぎ			封筒一括	写本		書簡類
M	56	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	大正6年8月29日	1917	封筒一括	写本		書簡類
M	57	〔書簡〕	宮城島	宮城嶋すぎ	大正3年7月17日	1914	封筒一括	写本		書簡類
M	60	〔書簡〕	宮城島	東之内	23日		封筒一括	写本	東之内 = 宮城島家。	書簡類
M	61	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ	大正4年4月9日	1915	封筒一括	写本		書簡類
M	62	〔書簡〕	金作	宮城島すき	17日		封筒一括	写本		書簡類
M	64	〔書簡〕	宮城島	宮城島すぎ	6月2日		封筒一括	写本		書簡類
M	65	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すき	大正2年1月6日	1913	封筒一括	写本		書簡類



M	66	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島かの母	大正4年3月7日	1915	封筒一括	写本		書簡類
M	67	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島杉	大正7年1月16日	1918	封筒一括	写本		書簡類
M	69	〔書簡〕		内野	明治42年11月4日	1909	一紙、5枚	写本		書簡類
M	70	〔書簡〕	宮城島	宮城島すぎ	7月30日		封筒一括	写本		書簡類
M	72	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ	11月30日		封筒一括	写本		書簡類
M	73	〔書簡〕	酒好	すぎ			封筒一括	写本		書簡類
M	74	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ	大正元年9月1日	1912	封筒一括	写本		書簡類
M	75	〔書簡〕	宮金	宮城島すぎ	7月20日		封筒一括	写本		書簡類
M	76	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ、母上	大正5年7月2日	1916	封筒一括	写本		書簡類
M	78	〔書簡〕	宮城嶋金	宮城嶋すぎ	明治43年7月25日	1910	封筒一括	写本		書簡類
M	79	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ	4月8日		封筒一括	写本		書簡類
M	81	〔書簡〕	宮城島金作	宮城嶋すぎ	明治4■年6月9日		封筒一括	写本		書簡類
M	82	〔書簡〕	金作	母上	8月31日		封筒一括	写本		書簡類
M	83	〔書簡〕	原田宅	宮城島杉子			封筒一括	写本		書簡類
M	87	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ	7月31日		封筒一括	写本		書簡類
M	89	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ	大正5年6月22日	1916	封筒一括	写本		書簡類
M	90	〔書簡〕	金作	宮城島すぎ	2月4日		封筒一括	写本		書簡類
M	93	〔書簡〕	三穂教会	宮城島すぎ	大正10年3月1日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	94	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ	大正9年1月4日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	96	〔書簡〕	宮城島	宮地賢基	3月12日		一紙、巻紙、1枚	写本	下魚町宮城島	書簡類
M	97	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	6月6日		封筒一括	写本		書簡類
M	101	〔書簡〕	金作	宮城島すぎ	7月12日		封筒一括	写本		書簡類
M	102	〔書簡〕	信雄	宮城島すぎ	大正6年5月17日	1917	封筒一括	写本		書簡類
M	105	〔書簡〕	金作	宮城島すぎ	9日		封筒一括	写本		書簡類
M	106	〔書簡〕	社霊	宮城嶋すぎ	6月12日		封筒一括	写本		書簡類
M	107	〔書簡〕	宮金	杉			封筒一括	写本		書簡類
M	110	〔書簡〕	宮城島		大正5年5月4日	1916	封筒一括	写本		書簡類
M	111	〔書簡〕	宮城島金作	宮城嶋すぎ	大正7年3月4日	1918	封筒一括	写本		書簡類
M	114	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	大正9年4月4日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	115	〔書簡〕	宮城島宇宙	晴山兆太郎	大正5年7月5日	1916	封筒一括	写本		書簡類
M	116	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ	大正4年12月14日	1915	封筒一括	写本		書簡類
M	117	〔書簡〕	金作	宮城島すぎ	大正5年2月2日	1916	封筒一括	写本		書簡類
M	118	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ	6月25日		封筒一括	写本		書簡類
M	119	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島杉			封筒一括	写本		書簡類
M	120	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ	明治44年2月3日	1911	封筒一括	写本		書簡類
M	121	〔書簡〕	宮城島	宮城島すぎ	大正5年8月13日	1916	封筒一括	写本		書簡類
M	122	〔書簡〕	宇宙	宮城島すぎ	10月6日		封筒一括	写本		書簡類
M	123	〔書簡〕					一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	125	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ、宮城島君枝	明治45年2月2日	1912	封筒一括	写本		書簡類
M	126	〔書簡〕	宮金作	宮城島すぎ、母上	明治44年12月21日	1911	封筒一括	写本		書簡類
M	127	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ	明治45年3月29日	1912	封筒一括	写本	郵便印「明治四十五年三月二十八日」。	書簡類
M	129	〔書簡〕	金作	すぎ	9月1日		一紙、2枚	写本	小山金作への見舞状の指示。	書簡類
M	132	〔書簡〕	金作	宮城島すぎ	7月27日		封筒一括	写本		書簡類
M	134	〔書簡〕	宮城島金作	宮城嶋定八	明治28年10月30日	1895	封筒一括	写本		書簡類
M	135	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	6月28日		封筒一括	写本		書簡類
M	136	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	7月18日		封筒一括	写本		書簡類
M	138	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城島すぎ	大正8年8月15日	1919	封筒一括	写本		書簡類
M	139	〔書簡〕	宮城島	宮城島すぎ			封筒一括	写本		書簡類
M	140	〔書簡〕	宮城島宇宙	宮城嶋すぎ	大正5年7月11日	1916	封筒一括	写本		書簡類
M	142	〔書簡〕	金作	宮城島すぎ	6月29日		封筒一括	写本		書簡類
M	143	〔書簡〕	金作	宮城島すぎ	大正5年2月21日	1916	封筒一括	写本		書簡類
M	144	〔書簡〕	金作	宮城島杉	11月3日		封筒一括	写本		書簡類
M	145	〔書簡〕	金作	すぎ	6月11日		一紙、巻紙、1枚	写本	家族の病気について現状報告。	書簡類
M	146	〔書簡〕	宮城島金作	宮城島すぎ	7月10日		封筒一括	写本		書簡類

M	405	[書簡]					一紙、10枚	写本	塩場のこと。	書簡類
M	406	[書簡]					一紙、11枚	写本	梅吉日露戦争従軍中の激励。	書簡類
M	407	[書簡]					一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	432	[書簡]	のぶ比古	原口はな	2月12日		封筒一括	写本	未開封。	書簡類
M	599	[宮城島信雄回想録]	宮城島信雄				一紙、114枚、一紙、10枚	写本	前 114 枚 は 墨筆、和紙。最後の10枚は、鉛筆書き、ノート。	回想録

（6）宮城島家事業関係書類

M	16	[書簡]	宮城島金作	宮城島すぎ	大正4年5月20日	1915	封筒一括	写本		事業関係
M	17	[書簡]	金作	宮城島すぎ	10日		封筒一括	写本		事業関係
M	23	[書簡]	三穂再製塩合名会社	宮城島信雄	大正14年	1925	封筒一括	写本		事業関係
M	35	[書簡]	宮金	宮城島すぎ	9月24日		封筒一括	写本		事業関係
M	48	[書簡]	宮金作	宮城島杉	明治42年9月12日	1909	封筒一括	写本		事業関係
M	49	[書簡]	宮城島	宮城島杉	9月13日		封筒一括	写本		事業関係
M	51	[書簡]	宮城島	岩塩再製場内ご一同御中	明治42年6月4日	1909	封筒一括	写本		事業関係
M	58	[書簡]	宮城島金作	宮城島すき	明治42年5月14日	1909	封筒一括	写本		事業関係
M	68	[書簡]	宮城島	宮城島母	大正4年1月1日	1915	封筒一括	写本		事業関係
M	71	[書簡]	宮城島金作	宮城嶋すぎ	明治43年7月12日	1910	封筒一括	写本		事業関係
M	77	[書簡]	野村清二郎	宮城島すぎ子	明治41年12月3日	1908	封筒一括	写本	郵便刻印「明治四一年十二月二十九日」。	事業関係
M	80	[書簡]	宮城島金作	宮城島杉	5月7日		封筒一括	写本		事業関係
M	84	[書簡]	柴田李四郎	宮城島御家内	明治42年11月7日	1909	封筒一括	写本		事業関係
M	85	[書簡]	宮城島金作	宮城島すき	7月2日		封筒一括	写本		事業関係
M	86	[書簡]	宮城島金作	宮城島すぎ	明治43年7月7日	1910	封筒一括	写本		事業関係
M	88	大正八年度 三穂再製塩所静岡支店営業成績報告書	三穂再製塩所静岡支店営業部		大正8年	1919	仮綴、竖帳、1冊	写本		事業関係
M	91	[書簡]	社霊	宮城島杉	明治42年9月16日	1909	封筒一括	写本		事業関係
M	100	[書簡]	宇宙	宮城島すぎ	9日		封筒一括	写本		事業関係
M	103	[書簡]	宮城島	宮城島すぎ	大正6年2月21日	1917	封筒一括	写本		事業関係
M	133	[書簡]	宮城島金作	宮城島すぎ	明治43年8月21日	1910	封筒一括	写本		事業関係
M	141	[書簡]	宮城島金作	宮城島杉	9月11日		封筒一括	写本		事業関係
M	353	[留]	保	宮城島金作	明治37年5月14日	1904	一紙、巻紙、1枚	写本		事業関係
M	354	明治四拾叁年七月拾八日調査			明治41年7月18日	1908	仮綴、竖帳、1冊、3丁	写本	資材、勝手道具の書上。	事業関係
M	355	[再製塩所関係書類]	名古屋専売支局収納所	宮城島金作	明治45年5月12日	1912	封筒、1枚、一紙、2枚	写本	①塩元売捌人指定申請書（宮城島金作→専売局長官濱口雄幸）／② [塩元売捌人指定申請書雛形] 。	事業関係
M	356	[書簡]	小山兼吉、野村光清い	幽頭総長御神璽	大正4年6月24日	1915	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	「奏願」封入。願人小山兼吉の営む茶卸販売問屋業に関する神託願書。	事業関係
M	361	覚	宮城島定八	宮城島金作	明治37年3月31日	1904	一紙、1枚	写本	金銭の受領書。	事業関係
M	362	証	小山兼吉	宮城島金作	明治38年9月8日	1905	一紙、1枚	写本	金銭の受領書。	事業関係
M	363	再製塩生産見込高申告書	宮城島金作		明治42年11月8日	1909	一紙、1枚	写本		事業関係
M	364	[封筒]	名古屋専売支局江尻出張所	宮城島金作			封筒、1枚	写本	封筒のみ。	事業関係
M	366	塩元売捌人指定申請書		専売局長官			一紙、1枚	写本	塩元売捌人指定申請書下書。	事業関係

M	367	借入金之証	青木捨太郎、中山九兵衛	宮城島源作	明治38年5月27日	1905	一紙、1枚	写本	金二百円を源作より借り入れた証文。	事業関係
M	368	委任状	宮城島金作		明治43年	1910	一紙、1枚	写本	小山九兵衛に金二千円貸付金の返済請求を委任。	事業関係
M	371	[書簡]		宮城島金作	明治45年4月15日	1912	封筒、1枚、一紙、3枚	写本	①〔税務官の出張について〕／②〔添状〕（安倍郡三保村役場→宮城島金作：45年分第三種所得金額申告用紙の送付、期間内に返送せよ）／③第三種所得金額申告。	事業関係
M	372	委任状	永田一郎				一紙、1枚	写本	業務代理人として内野兼吉を立て、保有株を譲渡する旨が記されている。	事業関係
M	374	記	青木■■■郎	青木■■■	明治39年10月30日	1906	一紙、1枚	写本	望月金次郎、小山久吉等へ金壹百円貸し出しの証文。虫損激しい。	事業関係
M	376	記、受取書	松下久茲	内野兼吉、小山九兵衛、望月蔵次郎	明治39年1月4日、明治38年7月9日	1906、1905	一紙、2枚	写本	①記（松下久蔵→内野兼吉：借金一部返済の受領書）／②受取書（松下久蔵→小山九兵衛、望月蔵次郎）。	事業関係
M	377	金員借用証	宮城島金作	松下久蔵	明治38年1月6日	1905	一紙、1枚	写本	借用分の金員の書上。	事業関係
M	378	記	松下久蔵	小山九兵衛、望月蔵金次郎	明治40年11月3日	1907	一紙、2枚	写本	金銭の受領書。	事業関係
M	379	[予算書上]					一紙、1枚	写本	建物建設のための材料費と予算の書上。	事業関係
M	381	火災保険証券	浪速火災株式会社	原田はな	明治43年12月15日	1910年	一紙、1枚	写本	原田はなは原田干物店店主で金作妾。賢治、三郎の母。	事業関係
M	383	[書簡]	打田喜代左衛門	宮城島金作	9月2日		封筒、1枚、一紙、巻紙、1枚	写本	見積について。	事業関係
M	384	[書簡]	小山九兵衛	宮城島	明治45年5月22日	1912	封筒、1枚、一紙、巻紙、1枚	写本	借金の返済滞りの弁明。	事業関係
M	385	[書簡]	官塩販売株式会社	宮城島金作	明治41年2月18日	1908	封筒、1枚、一紙、2枚	写本	①記（官塩販売株式会社→宮城島金作：金銭のやりとりについて）／②〔書簡〕（→宮城島金作：頭金送付せよ）。	事業関係
M	386	[書簡]	永井徳三郎	宮城島金作	3月4日		封筒、1枚、一紙、巻紙、1枚	写本	名古屋市南園町2丁目三株屋村宛。伊勢国松坂西町永井徳三郎より投機蘭の取引についての連絡	事業関係
M	387	[書簡]	高田雄民	宮城島金作、内野兼吉	明治43年2月22日	1910	封筒、1枚、一紙、巻紙、4枚	写本	満州での事業失敗の詫びと鉱山投資についての誘い。	事業関係
M	388	[名刺]	三穂洋行				一紙、小型、1枚	写本	裏にメモ書きあり。	事業関係

M	392-2	[書簡]	剣持照吉	宮城島金作	11月16日		封筒、1枚、一紙、巻紙、1枚	写本	金作の製塩業事業申請認可について。	事業関係
M	409	[書簡]	専売局名古屋収納再静波出張所	宮城島金作	大正10年10月22日		封筒一括	写本		事業関係
M	412	白瀬鉱山調書					仮綴、竖帳、1冊	写本		事業関係
M	414	貸金証	高田潤作／高田雄民	宮城島金作、青木捨太郎	明治38年6月1日、明治38年5月12日	1905	封筒、1枚、一紙、3枚	写本	①記（高田潤作→宮城島金作、青木捨太郎：高田洋行を介して、ウエルキンソン炭酸香水会社より炭酸香水三百箱を買付けた代金支払いについて）／②沓部同盟契約書追加（高田雄民→宮城島金作：高田雄民と宮城島金作の同盟契約書）他／③？（三穂教会資金についての取り決め等）。	事業関係
M	415	[書簡]	高田	宮城島金作	大正1年9月19日	1912	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	金銭的困窮につき至急の借金願い。	事業関係
M	418	[書簡]					一紙、2枚	写本	塩再製所のことなど。一部欠力。	事業関係
M	421	借入金延期之証					一紙、1枚	写本	下書。	事業関係
M	422	金員借用証	宮城島金作	遠藤平三郎	明治36年4月1日	1903	一紙、1枚	写本	金壹百円借金証文、借主宮城島金作、保証人望月金次郎、貸主遠藤平三郎。	事業関係
M	423	証	大橋源次郎	宮城島金作	明治37年5月21日	1904	一紙、1枚	写本	金銭の預かりについて。	事業関係
M	425	[書簡]	専売局名古屋収納再請波出張所	宮城島金作	明治40年10月31日	1907	封筒、1枚、一紙、1枚	写本	借家之証（→静岡出張所大高八太郎）封入。借家、借家料金、期限などを記す。印紙が手書き、借家主が何々誰とされているため、雛形と考えられる。	事業関係
M	426	塩小売人（又ハ塩元売別人）指定申請書					一紙、1紙	写本	雛形。	事業関係

（7）吉永夏子往復書簡類 ※宛名については並木解説1を参照。

M	443	[書簡]	狆	大			一紙、2枚	写本	狆＝宮城島信雄。	書簡類
M	444	[書簡]	宮城島宇宙	吉永夏子	大正9年5月7日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	445	[書簡]	宮城島宇宙	吉永夏子	大正9年5月20日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	446	[書簡]	本田蔵太郎	吉永夏	10月13日		封筒一括	写本		書簡類
M	447	[書簡]	石川典子	吉永南都子	1月24日		封筒一括	写本		書簡類
M	448	[書簡]	中尾良正	吉永なつ子	大正11年3月17日	1922	封筒一括	写本		書簡類
M	449	[書簡]	横田トミ	吉永なつ子	大正11年2月11日	1922	封筒一括	写本	横田トミは三穂教会副事務長。	書簡類
M	450	[書簡]	宮城島宇宙	宮城島信雄	大正9年9月11日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	451	[書簡]	宮城島宇宙	吉永なつ子	大正9年2月10日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	452	[書簡]	遠山景福	宮城島信雄	12月23日		一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	453	[書簡]	宮城島宇宙	吉永夏子	3月13日		封筒一括	写本		書簡類

M	454	[書簡]	宮城島宇宙	吉永夏子	大正9年12月26日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	455	[書簡]	宮城島宇宙	宮城島信雄	大正8年2月27日	1919	封筒一括	写本		書簡類
M	456	[書簡]	トミ	なつ子			一紙、3枚	写本	トミは横田トミ。	書簡類
M	457	[書簡]	トミ	吉永姉			一括	写本	トミは横田トミ。	書簡類
M	458	[書簡]	トミ	吉永姉			一括	写本	トミは横田トミ。	書簡類
M	459	[書簡]	成島貫一	吉永	大正9年2月10日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	460	[書簡]	中	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	461	[書簡]	阿也子	吉永なつ子			封筒一括	写本		書簡類
M	462	[書簡]	田中まき	吉永夏子	大正9年2月5日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	463	[書簡]	宮城島宇宙	吉永夏子	6月1日		封筒一括	写本		書簡類
M	464	[書簡]	宮城島宇宙	吉永なつ子	大正10年1月10日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	465	[書簡]	宮城島宇宙	吉永なつ子	大正10年3月13日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	466	[書簡]	三穂教会	吉永夏子	大正9年6月4日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	467	[書簡]	三穂教会宮城島	吉永夏子	大正9年6月2日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	468	[書簡]	アヤ	吉永	大正10年9月29日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	469	[書簡]	宮城島宇宙	吉永夏子	大正10年1月23日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	470	[書簡]	宮城島宇宙	吉永夏子	大正10年6月7日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	471	[書簡]	宮城島宇宙	吉永なつ子	大正10年5月23日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	472	[書簡]	野村光清	吉永夏子	大正10年10月9日	1921	封筒一括	写本	野村光清は三穂教会斎管長。	書簡類
M	473	[書簡]	宮城島宇宙	吉永奈津子	大正9年9月30日	1920	封筒、1枚、一紙、1枚	写本		書簡類
M	474	[書簡]	宮城島宇宙	吉永なつ子	大正9年9月26日	1920	封筒、1枚、一紙、2枚	写本		書簡類
M	475	[書簡]		宮城島信雄	大正9年9月23日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	476	[書簡]	宮城島宇宙	吉永夏子	大正9年8月10日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	477	[書簡]	狆	大	1月14日		一紙、1枚	写本	狆 = 宮城島信雄。	書簡類
M	478	[書簡]	中	大	4日		一紙、2枚	写本		書簡類
M	479	[書簡]	横田トミ	吉永なつ子	大正10年9月26日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	480	[書簡]	宮城島宇宙	吉永夏子	大正10年1月2日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	481	[書簡]	狆	大			一括	写本		書簡類
M	482	[書簡]	中	大			一括	写本		書簡類
M	483	[書簡]	中	大	4月23日		一括	写本		書簡類
M	484	[書簡]	中	大	1月12日		一括	写本		書簡類
M	485	[書簡]	狆	大	4月20日		一紙、1枚	写本		書簡類
M	486	[書簡]	宮城島宇宙	宮城島綾子	6月12日		封筒一括	写本		書簡類
M	487	[書簡]	中	大			一括	写本		書簡類
M	488	[書簡]	中	大			一括	写本		書簡類
M	489	[書簡]	中	大	4月23日		一括	写本		書簡類
M	490	[書簡]	中	大	9月14日		一括	写本		書簡類
M	491	[書簡]	阿也	吉永なつ子	大正9年2月8日	1920	封筒一括	写本		書簡類
M	492	[書簡]	狆	大	2月14日		一括	写本		書簡類
M	493	[書簡]					一括	写本		書簡類
M	494	[書簡]					一括	写本		書簡類
M	495	[書簡]					一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	496	[書簡]					一括	写本		書簡類
M	497	[書簡]					一括	写本		書簡類
M	498	[書簡]	共実	吉永	7月25日		一括	写本		書簡類
M	499	[書簡]	アヤコ	吉永南都子	大正10年9月7日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	500	[書簡]	蒔田順三	吉永なつ子			一括	写本		書簡類
M	501	[書簡]	宮城島宇宙	宮城島信雄	大正8年3月7日	1919	封筒一括	写本		書簡類
M	502	[書簡]	アヤ	吉永なつ子	大正7年10月3日	1918	封筒一括	写本		書簡類
M	503	[書簡]			大正8年1月6日	1919	封筒一括	写本		書簡類
M	504	[書簡]	狆	大			一括	写本		書簡類

M	505	〔書簡〕	中狹	大狹	28日		一括	写本		書簡類
M	506	〔書簡〕	宇宙	吉永	2月14日		一紙、巻紙、一括	写本		書簡類
M	507	〔書簡〕	乙村恒三	吉永奈津	大正6年4月19日	1917	封筒一括	写本		書簡類
M	508	〔書簡〕	綾子	吉永なつ子	大正10年11月17日	1921	封筒一括	写本		書簡類
M	509	〔書簡〕	中狹	大狹			一紙、巻紙、一括	写本		書簡類
M	510	〔書簡〕					一括	写本		書簡類
M	511	〔書簡綴〕					仮綴、横丁、1冊、173枚	写本	中（宮城島信雄）と大（吉永夏子）の書簡綴。	書簡類
M	512	〔書簡〕	中狹				一紙、9枚	写本		書簡類
M	513	〔書簡〕	中	大			一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	514	〔書簡〕	旅の子	大			一紙、1枚	写本	旅の子＝宮城島信雄。	書簡類
M	515	〔書簡〕	中狹	大狹	5月31日		一紙、6枚	写本		書簡類
M	516	〔書簡〕	妹	姉			一紙、1枚	写本	妹＝宮城島綾子、姉＝吉永夏子。	書簡類
M	517	〔書簡〕					一紙、6枚	写本		書簡類
M	518	〔書簡〕	淋しみの子	大			一紙、1枚	写本	淋しみの子＝宮城島信雄。	書簡類
M	519	〔書簡〕	中	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	520	〔書簡〕	ちん	大狹	11月4日		一紙、巻紙、1枚	写本	ちん＝宮城島信雄。静岡帰省について。	書簡類
M	521	〔書簡〕	中狹	大狹	不明		一紙、6枚	写本		書簡類
M	523	〔書簡〕	中狹	大狹			一紙、1枚	写本		書簡類
M	524	〔書簡〕					一紙、4枚	写本		書簡類
M	525	〔書簡〕	中狹	大狹			一紙、1枚	写本	526の続き。後半部。	書簡類
M	526	〔書簡〕					一紙、1枚	写本	525へ続く。前半部。	書簡類
M	527	〔書簡〕			2月14日		一紙、1枚	写本		書簡類
M	528	〔書簡〕	のぶ	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	529	〔書簡〕					1冊、8頁	写本	ノートをちぎったものを便箋として使用。	書簡類
M	530	〔書簡〕	水草	大狹	14日		1冊、8頁	写本	ノートをちぎったものを便箋として使用。	書簡類
M	531	〔書簡〕	信雄	吉永	6月20日		一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	532	〔書簡〕	中狹	大狹			一紙、1枚	写本		書簡類
M	533	〔書簡〕	中	大狹	3月18日		一紙、1枚	写本		書簡類
M	534	〔書簡〕	狹	大	2月24日		一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	535	〔書簡〕	のぶ	姉			一紙、5枚	写本		書簡類
M	536	〔書簡〕	弟	大			一紙、2枚	写本		書簡類
M	537	〔書簡〕	狹		2月7日		一紙、1枚	写本		書簡類
M	538	〔書簡〕					一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類
M	539	〔書簡〕	狹	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	540	〔書簡〕	お雪		30日		一紙、1枚	写本		書簡類
M	541	〔書簡〕			29日		一紙、1枚	写本		書簡類
M	542	〔書簡〕	淋しみの子	大狹			一紙、1枚	写本	淋しみの子＝宮城島信雄。	書簡類
M	543	〔書簡〕	淋しみの子 中	大			一紙、1枚	写本	淋しみの子＝宮城島信雄。	書簡類
M	544	〔書簡〕	中	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	546	〔書簡〕	貧しい人の児		10日		一紙、1枚	写本		書簡類

M	547	[書簡]	仲	よし永なつ子	4月24日		三折葉書、1枚	写本	なつ子は当時、 下魚町三穂教会 にて、金作を看 護するために教 会滞 在 し て い た。	書簡類
M	548	[書簡]	淋しい子	大	7月14日		一紙、1枚	写本		書簡類
M	549	[書簡]	中	大	8月12日		一紙、1枚	写本		書簡類
M	550	[書簡]	歎びの子	情けの君	6月9日		一紙、1枚	写本		書簡類
M	551	[書簡]	中	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	552	[書簡]	中	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	553	[書簡]	ちむ	大			一紙、2枚	写本		書簡類
M	554	[書簡]	淋しい中の子	大狹			一紙、1枚	写本		書簡類
M	555	[書簡]	淋しい狹	大	2月19日		一紙、1枚	写本		書簡類
M	556	[書簡]	中	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	557	[書簡]	のぶ	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	558	[書簡]	ちむ	大狹			一紙、1枚	写本		書簡類
M	559	[書簡]	中の子	大	5月7日		一紙、巻紙、1 枚	写本	花びらが挟み込 まれている。	書簡類
M	560	[書簡]	中狹	大狹			一紙、6枚	写本		書簡類
M	561	[書簡]	淋しい者	大狹			一紙、6枚	写本	淋しい者＝宮城 島信雄。	書簡類
M	562	[書簡]	中	吉永なつ子	3月31日		封筒一括	写本		書簡類
M	563	[書簡]	奈都子	信雄			一紙、1枚	写本		書簡類
M	564	[書簡]	中	大			一紙、4枚	写本	564 、 565 、 566、567、568 は同じ紙。近い 時期にやり取り された書簡と考 えられる。	書簡類
M	565	[書簡]	中	大			一紙、3枚	写本	564 、 565 、 566、567、568 は同じ紙。近い 時期にやり取り された書簡と考 えられる。	書簡類
M	566	[書簡]	中	大			一紙、4枚	写本	564 、 565 、 566、567、568 は同じ紙。近い 時期にやり取り された書簡と考 えられる。	書簡類
M	567	[書簡]	中	大			一紙、4枚	写本	564 、 565 、 566、567、568 は同じ紙。近い 時期にやり取り された書簡と考 えられる。	書簡類
M	568	[書簡]	中	大	10月17日		一紙、3枚	写本	564 、 565 、 566、567、568 は同じ紙。近い 時期にやり取り された書簡と考 えられる。	書簡類
M	569	[書簡]	中狹	大狹			一紙、3枚	写本		書簡類
M	570	[書簡]	中	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	571	[書簡]	病の子	吉永なつ子（大 狹）	大正8年4月18日	1919	三折葉書、1枚	写本	病の子＝宮城島 信雄。	書簡類
M	572	[書簡]					一紙、1枚	写本		書簡類
M	573	[書簡]	火の車をせをう たなまけ者	いじ悪るの大	6月5日		一紙、巻紙、1 枚	写本	火の車をせをう たなまけ者＝宮 城島信雄。	書簡類
M	574	[書簡]	中	大			一紙、2枚	写本		書簡類
M	575	[書簡]	中の子	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	576	[書簡]	中狹	大狹			一紙、1枚	写本		書簡類
M	577	[書簡]		なつかしい人			一紙、1枚	写本		書簡類

M	578	[書簡]	弟	姉上			一紙、1枚	写本	弟＝宮城島信雄。姉上＝吉永夏子。皇典講究所の要旨を使用。論語と君子道德の試験を終えたことを報告。	書簡類
M	579	[書簡]	の	大			一紙、1枚	写本		書簡類
M	580	[書簡]		大			一紙、2枚	写本		書簡類
M	581	[書簡]					一紙、4枚	写本		書簡類
M	582	[書簡]	悪口の子	美しい日本髪			一紙、巻紙、1枚	写本	悪口の子＝宮城島信雄、美しい日本髪＝吉永夏子。	書簡類
M	583	[書簡]					一紙、1枚	写本		書簡類
M	584	[書簡]	置村伊久子	吉永なつ子	4月30日		封筒、1枚、一紙、巻紙、1枚	写本		書簡類

※その他

M	59	[姓名書上]			3月8日、9日		一紙、巻紙、1枚	写本		その他
M	301	静岡県伊東町湯川字前磯部並二字櫻ヶ洞所在土地田地図					一紙、大判型、1枚			その他
M	389	松坂屋いとう呉服店ご案内					針金綴、1冊、16頁	刊本		その他
M	390	[葉書]			明治39年10月10日	1906	葉書、1枚	写本	明治37年沙河会戦にちなんだ沙河大会戦記念スタンプ付き絵葉書。	その他
M	394	大石紙店広告					一紙、1枚	刊本		その他
M	424	証	不二之舎歌會	宮城島信彦	明治38年5月	1905年	一紙、小型、2枚	写本	宮城島信彦は金作のこと。入会金、金25銭の領収書。	その他
M	545	産婆試験問題					一紙、3枚	刊本	M599（13枚目）に夏子が産婆の受験勉強をしていたことが記されている。	その他
M	597	[心形刀流伝授目録]					卷子本、1冊	写本	心形刀流は天和2年（1682）年に伊庭秀明を始祖とする剣術流派。	その他

※欠番

M	393	欠番								
M	399	欠番								
M	400	欠番								



## 参考文献

### 第一次資料

青木和夫、石母田正、小林芳規、佐伯有清校注『古事記』日本思想大系 1、岩波書店、1982 年。

跡部良顕、石田一良編『垂加翁神説』『神道思想集』日本の思想 14、筑摩書房、1970 年。

井上円了『哲窓茶話』『井上円了選集』第二卷、東洋大学、1987 年。

同『靈魂不滅論』図書刊行会 1999 年。

大畑（藤原）春国『亀卜伝雑記』第一卷、鈴木重道編『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『亀卜伝雑記』第二卷、鈴木重道編『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

鹿児島県立図書館所蔵『母智丘神社由緒書御届申上候扣』1871 年。

鹿児島県歴史資料センター黎明館編「正統本田氏并ニ庶流」「諸家系圖一」

『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺伊知地季安著作資料集三』1-23 頁、鹿児島県、2001 年。

上東三郎編『加世田士族明細帳』加世田市史談会、1985 年。

倉野憲司校注『古事記』岩波文庫 48、岩波書店、1991 年。

黒板勝美編『日本三代実録』『新增補國史大系』第四卷、國史大系刊行會、1876 年。

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書記』卷一、岩波書店、1994 年。

神道大系編纂会編『神事伝授之事』『神道大系 論説編第十一 伯家神道』  
神道大系編纂会 1989 年。

神道大系編纂会編『事相方内傳草案』『神道大系 論説編第九 卜部神道

(下)』神道大系編纂会 1991 年。

静岡県史編纂委員会編『駿河国赤心隊姓名書』『静岡県史』史料編 14、

近世 6 静岡県、1989 年。

鈴木重胤『延喜式祝詞講義十二之下卷』『鈴木重胤全集』第十一卷、鈴木重胤先

生学徳顕揚会、1939 年。

副島種臣、鈴木重道編『滄海問答』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

副島種臣「與本田子書」『滄海全集』卷六『副島種臣全集』第 1 卷、慧文社、

2004 年。

長沢雄楯『惟神』顕神本会、1990 年。

同『大本教事件に対する意見』私家本、発行年不明。

同「神と神道」『神の国』Vol.13、Issue No.7、14-20 頁、大日本修斎会、1933 年。

白隠『夜船閑話』『日本哲學思想全書』第 16 卷、修養篇・茶道篇、平凡社、1956 年。

服部中庸、『三大考』田原嗣郎、関晃、佐伯有清、芳賀登編『平田篤胤、伴信友、大国隆正』日本思想体系 50、岩波書店、1973 年。

平田篤胤、『本教外篇』石田一良編『神道思想集』日本の思想 14、筑摩書房、1970 年。

同、子安宣邦校注『霊の真柱』岩波書店、1998 年。

同、『仙境異聞・勝五郎再生記聞』岩波書店、2001 年。

同、『誓詞帳』平田篤胤全集刊行会編『新修平田篤胤全集』別巻、名著出版、1981 年。

同、『門人姓名録』平田篤胤全集刊行会編『新修平田篤胤全集』別巻、名著出版、1981 年。

藤田東湖、菊池謙二郎編『続東湖随筆』『新訂 東湖全集』国書刊行会、  
1998 年。

本田親徳、鈴木重道編『産土神徳講義（上）・（下）』『本田親徳全集』  
山雅房、1978 年。

同『産土百首（上）・（下）』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『関係文書 鎮魂法・禁厭法』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『謹問平山大教正閣下』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『口伝抄』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『古事記神理解』卷一『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『古事記神理解』卷二『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『古事記神理解』卷三『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『書問』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『伝書』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同「鎮魂法」『関係文書』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『難古事記』卷一、『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『難古事記』卷二、『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『難古事記』卷三、『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『難古事記』卷四、『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『難古事記』卷五、『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『難古事記』卷六、『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『祝詞文』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『道之大原』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『靈学抄』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『靈魂百首』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

同『幽顕大兆全書』『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

本田瑞園『耶蘇教審判』海老屋專賣店、1887 年。

本居宣長、『古事記傳』大野晋編『本居宣長全集』第九卷、筑摩書房、1968 年。

六人部是香『産須那社古伝抄』芳賀登、松本三之介『国学運動の思想』

日本思想体系 51、岩波書店、1971 年。

同『産須那社古傳抄廣義』神道大系編纂会『神道大系』論説編二十七、  
神大系編纂会、1988 年。

### 『正統道蔵』所見文献

(道蔵“某号” は Kristofer Schipper and Franciscus Verellen eds., *The Taoist Canon: A Historical Companion to the Daozang* [Chicago: University of Chicago Press, 2004] に指定された經典番号 [“work number”] を示す。道蔵“某冊”は 1926 年上海影印版『正統道蔵』中の冊数を示す。)

「太上黄庭外景玉經」『道蔵』第 332 号 167 冊（洞玄部本文類）卷上 2A。

「黄帝陰符經經注」『道蔵』第 121 号 57 冊（洞真部玉訣類）卷上 1 B。

「重陽真人金關玉鎖訣」『道蔵』第 1156 号 796 冊（太平部）4A。

## 第二次資料

安蘇谷正彦『神道の生死観－神道思想と「死」の問題－』ぺりかん社、1996 年。

池上良正『民間巫者信仰の研究－宗教学の視点から』未来社、1999 年。

同『死者の救済史－供養と憑依の宗教学』角川書店、2003 年。

井上智勝『近世の神社と朝廷権威』吉川弘文館、2007 年。

石原和、吉永進一、並木英子編『月見里神社稲荷講社史料/宮城島家史料目録－近代清水の神職たちと鎮魂帰神－』科学研究費補助金基礎研究(B)18H00614「日本新宗教史像の再構築：アーカイブと研究者ネットワーク整備」、2020 年。

石原和「月見里神社・稲荷講社関係史料と明治期の民間宗教者の活動・公認」

石原和、吉永進一、並木英子編『月見里神社稲荷講社史料/宮城島家史料目録－近代清水の神職たちと鎮魂帰神－』、20－29 頁、科学研究費補助金基礎研究(B)18H00614「日本新宗教史像の再構築：アーカイブと研究者ネットワーク整備」、2020 年。



伊東聡「吉田神道」国学院大学日本文化研究所編『神道事典』445－447 頁、  
弘文堂、1999 年。

井上順考、阪本是丸編『日本型政教関係の誕生』第一書房、1987 年。

同「神道教派の境界線形成と二種類の認知プロセスの関与」『宗教研究』第 92 卷  
第二輯、第 392 号、3-29 頁、2018 年。

岩波書店『補訂版国書総目録』第三卷、岩波書店、1990 年。

遠藤潤「平田篤胤の他界観再考－霊能御柱を中心に－」『宗教研究』第 69 号  
363～387 頁、1995 年。

同『平田国学と近世社会』ぺりかん社、2008 年。

同『平田国学における＜霊的なもの＞－霊魂とコスモロジーの近代－』リトン  
社、2012 年。

大本竹田別院五十年誌編纂会編『大本竹田別院五十年誌』大本竹田別院五十年誌  
編纂会 1987 年。

大本教七十年史編纂会編『大本教七十年史』上巻、大本教七十年史編纂会 1963  
年。

同『大本教七十年史』下巻、大本教七十年史編纂会 1963 年。

表智之「橘守部」子安宣邦監修『日本思想史辞典』346 頁、ペリかん社、2001  
年。

鹿児島県姓氏家系大辞典編纂委員会編『鹿児島県姓氏家系大辞典』角川書店、  
1994 年。

鎌田正、米山寅太郎編『新漢語林』、大修館書房、2011 年。

加世田市史編纂委員会『加世田市史』上巻、加世田市 1986 年。

岸本芳雄「六人部是香と国学」『国学院大学紀要』第5号、71－91頁、1964年。

見城悌治『近代報徳思想と日本社会』ぺりかん社、2009年。

國學院大學日本文化研究所編『神道事典』弘文堂、1999年。

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第11巻、吉川弘文館、1990年。

小島康敬「幕末期津軽の民俗学者・平尾魯僊－平田篤胤と柳田国男の間－」

『市史ひろさき』年報10、10－11頁、弘前市、2000年。

小林健三『平田神道の研究』玉川大学出版、1973年。

子安宣邦「国学」『日本思想史辞典』、180－181頁、ぺりかん社、2001年。

鎌田東二『平田篤胤の神界フィールドワーク』作品社、2002年。

佐藤卿彦『改訂版顕神本田靈學法典』顕神本会、1997 年。

阪本健一『明治神道史の研究』国書刊行会、1983 年。

阪本是丸『明治維新と国学者』大明堂、1993 年。

同『近世・近代神道論考』弘文堂、2007 年。

坂本春吉『平田篤胤の復古神道とキリスト教: 本教外篇の研究』坂本イナ、  
1986 年。

佐々木聖使「キリスト教の受容と国学」『日本文化論への接近』研究叢書 2、  
日本大学精神文化研究所、創文社、1994 年。

同「明治における天之御中主神論」『明治聖徳』復刊第 22 号 25－68 頁、  
1997 年。

佐藤 孝敏「六人部是香の国学思想--顕幽思想と産須那信仰論を中心として」

『文芸研究』第 112 号、29－40 頁、文芸研究会、1986 年。

澤井啓一「近世国学と歴史意識－「擬古」と「復古」のはざま」、兵藤裕己編

『岩波講座 文学Ⅸフィクションか歴史か』岩波書店、2002 年。

相良亨「日本の思想史における平田篤胤」『相良亨著作集 4、死生観、国学、

本居宣長とその周辺』ペリカン社、1994 年。

静岡県史編纂委員会、『清水市史資料近代』、吉川弘文館 1973 年。

神道体系編纂会編、『復古神道（4）平田篤胤』『神道体系』論説編 26、

清興社、1986 年。

神保郁夫「平田篤胤天御中主神信仰の変遷と確立（上）」『神道宗教』

第 162 号、43－73 頁、1996 年。

鈴木重道『本田親徳研究』山雅房、1977 年。

鈴木重道「巻末記」鈴木重道編『本田親徳全集』山雅房、1978 年。

藺田稔、橋本政宣編『神道大辞典』吉川弘文館、2004 年。

高橋美由紀「吉田兼俱」、子安宣邦監修『日本思想史辞典』、2001 年。

同「吉田神道」子安宣邦監修『日本思想史辞典』、568－569 頁、2001 年。

田中初夫「神霊の系譜」『神道宗教』第 37 号、28－38 頁、1964 年。

谷省吾『鈴木重胤の研究』神道史学会、1968 年。

田原嗣郎、関晃、佐伯有清、芳賀登編『平田篤胤、伴信友、大国隆正』

日本思想体系 50、岩波書店、1973 年。

平重道、安部秋生編『近世神道論、前期国学』日本思想体系 39、岩波書店、  
1972 年。

竹中信常「禁厭」 藺田稔、橋本政宣編『神道大辞典』298 頁、吉川弘文館、2004 年。

津城寛文『鎮魂行法論：近代神道世界の靈魂論と身体論』春秋社、1990 年。

同『社会的宗教と他界的宗教のあいだ一見え隠れする死者一』世界思想社、2011 年。

藤堂明保、松本昭、竹田晃編『漢字源』学習研究社、1993 年。

友清九吾『鎮魂帰神の原理及応用』汲古書店、1910 年。

永田広志『日本封建制イデオロギー』伯揚社、1947 年。

中島重雄「長澤雄楯翁略歴」『惟神』第二号 14－17 頁、稻荷講社総本部、1940 年。

中野裕三「橘守部の神理解」『神道宗教』第 184 号、1－22 頁、2002 年。

同「顕生魂（あらみたま）説の原由－橘守部の神学」『明治聖徳記念学会紀要』第

38 号、1-36 頁、明治聖徳記念学会 2003 年。

永松敦「島津貴久の宗教政策－修験道を中心として－」『九州史学』第 106 号、  
1-20 頁、九州史学会 1993 年。

同「島津義久と修験道－合戦と作法」秀村選三編『西南地域史研究』  
第九輯、231-262 頁、文献出版 1994 年。

同『狩猟民俗と修験道』白水社 1993 年。

夏目隆文編『神社人異色鑑』中外日報社、1936 年。

並木英子「宮城島家史料にみる神道三穂教会と宮城島金作」石原和、吉永進一、  
並木英子編『月見里神社・稲荷講社史料/宮城島家史料目録－近代清水の神職たち  
と鎮魂帰神－』、30－36 頁、科学研究費補助金基礎研究（B）18H00614「日本  
新宗教史像の再構築：アーカイブと研究者ネットワーク整備」、2020 年。

新村出編『広辞苑』岩波書店、1998 年。



ジョン・グリーン「近代神道の創出―神仏判然令がめざしたもの」『儀礼と権力  
天皇の明治維新』平凡社、2011 年。

文化庁文化部宗務課『明治以降宗教制度百年史』文化庁、1970 年。

星川清民『鈴木重胤伝』1943 年、言霊書房。

本田親徳『古事記神理解及産土神徳講義』横山信行訳、大津暁、長峯正樹編、  
顕神本会、1988 年。

前田勉『近世神道と国学』ペリカン社、2002 年。

同「南里有隣『神理十要』におけるキリスト教の影響―『天道溯原』との関連  
―」、『愛知教育大学研究報告』第 57 号、83－92 頁、2008 年。

松村明編『大辞林』、三省堂、1995 年。

宮崎ふみ子「民衆宗教のコスモロジーと王権」網野善彦編『宗教と権威』「岩波講座天皇と王権を考える」第四巻、岩波書店、2002 年。

同「動乱の中の信仰」井上勲編『開国と幕末の動乱』吉川弘文館、2004 年。

宮田登『江戸のはやり神』筑摩書房 1993 年。

村岡典嗣『増訂日本思想史研究』岩波書店、1994 年。

同、前田勉編『新編日本思想史研究－村岡典嗣論文選－』平凡社、2004 年。

明治神社誌料編纂所編、『府縣郷社明治神社誌料』上巻、37－39 頁、  
明治神社誌料編纂所、1912 年。

安丸良夫、宮地正人編『宗教と国家』岩波書店、1988 年。

安丸良夫『神々の明治維新』岩波書店、1979 年。

同『日本の近代化と民衆思想』平凡社、1999 年。

同『安丸良夫集』第3巻、岩波書店、2013年。

山田万作『嶽陽名士録』私家本、1891年。

山中浩之「六人部是香における国学の宗教化」『待兼山論叢』第7号、  
大阪大学文学会、43－62頁、1974年。

山中芳和「六人部是香の国学学びにおける篤胤学の受容」

『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』151巻、1－11頁、岡山大学、  
2012年。

月見里神社付属稲荷講社編『惟神』第二号、月見里神社付属稲荷講社総本部、  
1940年。

山本英輔『真の光』善行会、1951年。

同『七転び八起きの智仁勇』山本英輔、1957年。

安原清輔『神社と宗教』弘道館、1919 年。

湯浅泰雄『神々の誕生』以文社、1972 年。

同『日本人の宗教意識－習俗と信仰の底を流れるもの－』講談社、1999 年。

横山信行『本田親徳の霊学思想と鎮魂法と帰神について』顕神本会、1992 年。

吉川敏子「六人部是香と「六人部連本系帳」」『ヒストリア』第 216 号、  
135～148 頁、大阪歴史学会、2009 年。

吉永進一「清水・静岡の宗教風景」石原和、吉永進一、並木英子編『月見里神  
社・稲荷講社史料/宮城島家史料目録－近代清水の神職たちと鎮魂帰神－』9－12  
頁、科学研究費補助金基礎研究（B）18H00614「日本新宗教史像の再構築：アー  
カイブと研究者ネットワーク整備」、2020 年。

吉田麻子『知の共鳴－平田篤胤をめぐる書物の社会史』ぺりかん社、2012 年。

吉水希枝「神社神道からみる月見里神社史料・宮城島家史料－静岡県下の神職団体と神社経営の視点から」石原和、吉永進一、並木英子編『月見里神社・稲荷講社史料/宮城島家史料目録－近代清水の神職たちと鎮魂帰神－』、13－19 頁、科学研究費補助金基礎研究（B）18H00614「日本新宗教史像の再構築：アーカイブと研究者ネットワーク整備」、2020 年。

立教大学日本史研究室編『大久保利通関係文書』第二巻、吉川弘文館、1966 年。

ハルトムート・オ・ローテルムンド『疱瘡神－江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』岩波書店、1995 年。

渡辺勝義『古神道の秘儀－鎮魂と帰神のメカニズム－』海鳥社、1993 年。

Bokenkamp, Stephen. *Early Daoist Scriptures*. Berkeley: University of California Press, 1997.

Eliade, Mircea. *The Myth of the Eternal Return: Cosmos and History*. Princeton:

Princeton University Press, 2005.

Eskildsen, Stephen. *The Teachings and Practices of the Early Quanzhen Taoist Masters*. Albany: State University of New York Press, 2004.

Hardacre, Helen. *Shinto A history*, Oxford: Oxford University Press, 2017.

Ketelaar, James Edward. *Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan: Buddhism and Its Persecution*. Princeton: Princeton University Press, 1990. 『邪教/殉教の明治－廃仏毀釈と近代仏教』 ぺりかん社、2006 年。

Namiki, Eiko. “Honda Chikaatsu’s Spiritual Learning as a Means of Bringing Blessings and Guiding the Nation.” *Journal of Religion in Japan*, Vol.7, Issue 3 (2019) 276-305.

Nosco, Peter. *Remembering Paradise: Nativism and Nostalgia in Eighteen Century Japan*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1990. 『江戸社会と国学』、ペリかん社、1999 年。

Robinet, Isabelle. *Taoist Meditation: The Mao-Shan Tradition of Great Purity*. Albany: State University of New York Press, 1993.

Schipper, Kristofer and Franciscus Verellen eds. *The Taoist Canon: A Historical Companion to the Daozang*. Chicago: University of Chicago Press, 2004.

Staemmler, Birgit. *Chinkon kishin: Mediated Spirit Possession in Japanese New Religions*, Berlin: Lit VerLag, 2009.

Stalker, Nancy K. *Prophet Motive: Deguchi Onisaburo, Omoto, and the rise of new religions in Imperial Japan*. Honolulu: University of Hawai'i Press 2008. 『出口王仁三郎帝国時代のカリスマ』原書房、2008 年。

STEINBOCK, Anthony J. *Phenomenology and Mysticism. The Verticality of Religious Experience*. Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press, 2007.